

---

# 魔法先生ネギま！ ～野生の力を持つ仮面の戦士～

ヴィランズ

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

魔法先生ネギま！ ～野生の力を持つ仮面の戦士～

### 【Nコード】

N4260M

### 【作者名】

ヴィランズ

### 【あらすじ】

ある日、主人公は交通事故により死んだ…

だが、変な服を着た自称神の、変なおっさんに転生させてやると言われる。…面倒くさいが…とりあえず、本能のまま暴れてみますか。

とりあえず、趣味丸出しの仮面ライダー×ネギま…お楽しみいただけたら、光栄です。

プロローグ～二十五話までを加筆&修正しました。

番外編はだいぶ増量。

## プロローグ

…俺が目覚めると、そこは何もない真っ白な空間だった。

「…何、ここ。」

俺がポツリと呟くと、目の前に「嫌いなのは小松菜」と書かれたTシャツを着た、バカみたいなおっさんがいた。

「まともな服着た方がいいですよ。」

「第一声がそれかい?!」

何だこのオッサン…バカか? 馬鹿だな。馬鹿だ。

「三段論法?!」

「地の分読むな。」

こんなまるで駄目なセンスのおっさん、通称マダオは無視するに限る。

「えっとな。お前は一度死にました。」

「…カラフル?」

「…え?」

「…死んだ？」

「うん。道に出てた不良を助けて、ミンチ。」

「…ああ、そうだったっけ。」

確か…信号無視してトラックにひかれそうだったモヒカンを助けて、そのままアウト…だったっけ。

どうせならば、可愛い女子高生を助けて逝きたかった。

「で。その心に免じて三つ能力をあげてネギま！世界に転生させてあげんで。」

「…マジで？」

「マジで。」

…こんなこと本当にあるんだな…。

「じゃ、仮面ライダーアマゾン、シン、響鬼ライダーズ、アーク、への変身能力を。あ、アマゾンの能力はチートで全ライダーの必殺技使えるってことで。…で、後は不老不死と糸使いの技能を。」

「…仮面ライダー中心やな。」

「大ファンなもので。あ、それと出来ればアマゾン口調がいいな。」

「それくらいなら、ええで。ほんじゃま…。」





## プロローグ（後書き）

どうも…

転生物は初めてなので、緊張しますね。

よければ皆様、どうぞお付き合いを…。



第一話・やっぱり、ネーミングセンスは大事。（前書き）

ちょっと、無理矢理な感じですが…よろしく願いします。



オレは、某ニャンパラリの動きで必死に着地する…ランディングは、着地って意味だったはず。

「…し、死ぬ、思った…。」

あ、ちゃんとアマゾン口調だ…あれ、服も。

髪は腰まであるけど…ま、いいか。腕輪もちゃんとあるし。

…で、問題がある訳だが…。

「…ここ、どこ？」

とりあえずあたりを見回すと、近くには何も見えないが、遠くの方には何か爆音や悲鳴の様なものが聞こえる。

「…………ガウ？戦場？」

アマゾンの視力で見ると、遠くには火や、煙が見える…。

……………よし、仮面ライダーの出番だな…！

「ジャングラー…！」

バイクの事は注文してなかったが…大丈夫か？

と、思ってる間にオレの目の前に、ジャングラーが到着する。

「ケケケーンッ！！」

仮面ライダー、初出番だ！！

ナギ      s i d e

くそっ、こりゃ面倒くさい数だな…

「アル、なんとかなるか?!」

「難しいですね…この数ですし。」

さすがに、俺、アル、詠春だけではこの数は厳しい。

ヘラス帝国も、面倒くさいことを！

ここを突破されれば、結構な被害が出る。それだけはまずい…！！

ケケケーンッ！！！！

その時、そんな声が聞こえて上空を見る……と、緑色のトカゲの獣人の様な奴が跳び上がる。

トカゲの前方ににカードの様な物が現れ、ヘラス帝国兵士達に向かってキックをする…と。





クレーターは出来てるし、モブキャラっぽい敵さんは全滅している……やり過ぎた???

「……アアアアツアマアアアアア、ゾオオオオオオン!!!」

…照れ隠しに、叫んでみました。

ああ、やっちゃまったZE……

と、恥ずかしがっていると、三人の中の一人、赤毛の男がこちらに近づいてくる……

ま、まさか報復!?オレ、なんかまずいことした?!

「おい、お前!!俺の仲間になれ!!!」

「……ガル?」

……ウエア?

第一話・やっぱり、ネーミングセンスは大事。

（後書き）

はいどうも…

一話目です。

…やっちなった感が、否めませんね…ああ、駄文。

ああ駄文、ああ駄文だな、ああ駄文。

…何これ。

それでは。ウイルスズでした。



第二話・アマゾンとシンは、怪人に見られることが多い。(前書き)

さて…第二話です。

タイトルに深い意味は……ないよ？

第二話：アマゾンとシンは、怪人に見られることが多い。

???

side

「ウウツ…!!」

オレは仮面ライダーシンに変身し、気配を限りなく消す。

相手は、こちらに気づいていない。好都合だ。

オレは足音を消し、ゆっくりと背後から忍び寄り…腕のある鋸状の器官、スパイン・カッターで一気に首を刈り取る!!

相手は、大量の血を首から噴水の様にし…絶命する。

「…ガウ…!! ご飯、取った!!」

オレは、その相手…熊の首を高らかにあげ、俺はそう叫んだ。

…ナギから誘いを受けて数年。

今オレは紅き翼アラルブラの一員として、生活している。

ナギやアルは兎も角、最初は警戒していた詠春とも仲良くなり、ちゃんとした仲間だ。

しかし…紅き翼、という名前以外でもよかった…。

例えば、ゲドンとか、バダンとか、クライシスとか……あれ？全部敵組織だ。

「縁起が悪そう」とかで却下されたのはそのせいか…。

あ、ナギやアルみたいにちゃんと二つ名だっけ付いている。

「バイラス・リザード 病毒なる竜人」は、アマゾン

「キリングホッパー 惨殺飛蝗」はシン

「サウンド・オーガ 響牙鬼神」は響鬼ライダーズ

「ダークネス・エンペラー 闇色魔皇」が、アーク。

…こうしてみると、全部中二病だ。

一応、本当の名前もあるにはあるんだがな。

「みんな、喜ぶ！熊、美味い！」

オレは意気揚々と、紅き翼のアジトへと戻る。

最近、ナギや詠春と組み手をしたり、アルの重力魔法の中でも動ける特訓…ま、所詮ドラゴンボールな修業をしている。

ゼクトとも会って、俺は魔法の射手サギタ・マキカぐらいなら使えるようになった…が、それ以外は全くできない。

…まあ、チートアマゾンで、戦いの歌でも使えば、恐ろしい事になるが…。

通常パンチ力で280tあるのは秘密。キックは…その2.5倍。

ま。それは兎も角、やっとオレの今の家…紅き翼のアジトに着く。

「みんな、帰った！ご飯、取ってきた！」

そういうと、外でゼクトと組み手していた詠春がこちらに寄ってきて、首がない熊を見てぎょっとする。

「…お、おお！よくやったな、ワイルド！」

「さすがじゃの。魔法も使わずに…」

「ガル オレ、強い！！！」

…そう。俺の今の名は、ワイルド。…ワイルド・シユタイナー。

アルがつけてくれた名前だが…案外気に言っている。

最初は、叫んでいた「アマゾン」で名前が決定だったらしいが…オレが、猛反対した。

アマゾンは、アマゾン！！それ以外の何物でもない！！

SPIRIT読め！アマゾンの素晴らしさが…ごめん、ちょっと

暑くなった。

「…おお、ワイルド、大変でしたね。」

「ワイルド、強いから、平気！」

「はは、流石ですね。」

…ナギがいて、アルがいて、ゼクトがいて、詠春がいて……………

今は、ここがオレの世界…。とても、楽しい。

今日は熊肉ですき焼きだ。

たくさん、食べるぞー！！

ナギ      s i d e

……俺は、昔仲間になった、ワイルドの事を考えていた。

数年前のあの戦場。あいつは何万人もの敵を殺し、それでも全く気にした様子も無く、笑顔でいた。

いまでは、俺の「千の魔法の男」サウザンド・マスターの様な二つ名まである。

だが…あいつには、敵わないかもしれない。

どんな魔法で傷つけても、瞬時に再生し、ただの楽器を使い、音だ

けで魔物を滅し、どんなに死にかけても、腕輪を光らせて、奇跡の様に復活する。

俺が、千の魔法の男、ならばあいつは千の奇跡の男だ。

何があるつと、変わることなく生き続ける…それが、あいつ。ワイルドだ。

「ナギ、大丈夫ですか？」

「アルかよ。」

後ろを向くと、いつもニヤニヤしているこいつ…アルビレオ・イマを見た。

「ワイルドの事なら、考えるだけ無駄ですよ。あれは、バグキャラなんですから。」

「…そーかいそーかい。」

俺は、頭をかいて窓の外を見る…。

「ワイルドってさあ…バカなんだよな。」

「…否定できませんね」

「だけど…だから、いいやつなんだよな。」

「…ええ。」

あいつは、何も感じずに人を殺せる。けれど、子供が泣いて困ったり、それをあやしたりする所を見ると、それが不思議に見えた。

あいつにとっては、鳥も、獣も、悪魔も、人も全部が等しく、優しくする対象で、か弱い存在なんだろう。

「みんな、帰った！ご飯、取ってきた！」

…そんな声が、外から聞こえてくる。

「飯か…今日はなんだっけか？」

「詠春が作ってくれるそうです。スキヤキ…だとか。」

「へえ。そりゃ楽しみだな。」

俺は、外に向かって歩いていく…。

第二話：アマゾンとシンは、怪人に見られることが多い。（後書き）

…こんなナギ、不自然ですかね？

とりあえず、二つ名紹介…です。

アマゾンはちょっと苛めっぽい名前ですかね……。見る人によっては、そう呼ぶと思ったですよ。

シンは……まあ、脊髄抜きですね。

響鬼は、そのままで、響く音と、鬼。

アークも、そのまま…魔皇と言うより、皇帝ですかね？

それでは。駄文にお付き合いいただき、ありがとうございました。



## 主人公紹介

名前：ワイルド・シュタイナー (アル命名)

年齢：23歳(肉体年齢17歳)

身長：183cm

外見：Spiritsのアマゾンそっくり。違いは髪が、腰まで伸びただけ。

性格：…アマゾンそのまま。

精々、騙し打ちや戦法を考えられる様になっただけ、セーフ。

地の文では、転生前の人格だが、行動するときはどうしてもアマゾンの様な性格で行動してしまう。

基本的には子供や動植物に優しい。

けれど、子供を傷つけたりするやつがいたら…脊髄抜き。

魔法の起動キーは『ワイルド・ワイルド・レジエンドル』

【パラメーター紹介】(Fate風)

筋力：E X 気 : A

魔力：A 耐久：E X

敏捷：E X 幸運：E X

宝具：E X (ランク 高い E X < A ~ E 低い)

### 保有スキル

インカの秘術：E X

古代インカ帝国の力によつて改造され、精霊の加護を受けた。

生命の危機にあつても、仮死状態となつて数年は生き続ける。

ジャングラー：A

古代インカ帝国に伝わる秘宝「太陽の石」を動力源としたアマゾン専用のバイク。この為、燃料補充は不要で永久に走行可能。

最高時速は700km。後部ウイングを倒し、100メートル程度

なら滑空飛行ができる。

若干ながら、意思を持っているので、自律行動も少なからず可能。

X - a 素子：A

傷を負っても通常の人間の約50倍の細胞増殖にて急速再生する。

腕程度なら0・03秒で再生、全身の87%以下を奪われない限り  
ほぼ際限なく0・1秒以内に全快する。また30分程度ならば無呼  
吸で水中活動も可能。

鬼幻術・鬼闘術：B

口から火を吐く鬼火や、それ以外の鬼爪、旋風刃、雷撃拳等を扱う。

## 【宝具】

秘術眠りし古代の腕環… EX  
ガガノウデワ

種別：装備宝具

レンジ：

瀕死状態や、毒に侵されたとしても、数秒で完治し、火山の噴火や落雷などの自然現象にまで影響を及ぼし、自分の身の安全を守る。

アークトライデント  
常闇の三叉槍：A

種別：対人宝具

レンジ：1～10

どんなに硬い物質でも、総て貫き、斬り落とすことができる。決して壊れずに、破壊し尽くすことのできる魔槍。

オンゲキシンゲン・レッザン  
師より託されし破邪弦：EX

種別：対人宝具

レンジ：1

清めの音を放ち、悪魔や式神、鬼などを一気に還す事の出来るギタ  
I型の剣。

普通の剣としても使え、刀身を振動させてどんなものでも斬ることが出来る。

名前：モーラ・シュタイナー（ゼクト命名）

年齢：15歳（肉体年齢20歳）

身長：197cm

外見：東方projectの星熊勇義そっくり。違いは、角があるかないか。

性格：気さくで、姉御肌。

ワイルドの親友であり、従者。

基本男にも女にも厳しいが……ちょっと、乙女。

ワイルドの事が好き。

魔法の起動キーは『モーラ・アークス・キババット』。

【パラメーター紹介】（Fate風）

筋力：A+ 気：A

魔力：A + 耐久：A

敏捷：B 幸運：C

保有スキル

感卦法：B

気と魔力を合成させる技能。

使うと身体能力がUPし、防御力も上がる。

モーラの場合は、素手で10m単位の地割れを起こせるほどに強化される。

ちなみに、ガトウ直伝。

鬼幻術・鬼闘術：B

口から火を吐く鬼火や、それ以外の鬼爪、旋風刃、雷撃拳等を扱う。

魔皇力制御：B

アークに変身するための魔皇力を自在に操る。

上位魔法の無詠唱、相手の魔法の無効化、自分の魔力の増加…等を行える。

魔力量は、強化すると木乃香と同じほどになる。

動物、植物との意思疎通：C

断片的に動物、植物との意思疎通を行える。

これは、モグラも混ぜて生み出されたため。

## 主人公紹介（後書き）

… ちょっと変ですかね。

それでは。次回でラカン登場、です。



第三話・お前は俺を、怒らせた。(前書き)

PV6000、ユニークアクセス1000、突破、ありがとうございます！

第三話…お前は俺を、怒らせた。

ワイルド      s i d e

「ウウ…もう、煮えたか？」

「おいおい、まだだろ…落ち着けて。」

「モーラの言うとおりですよ。ワイルド…って、ナギー！」

「いいじゃねえか。熊肉入れようぜ熊肉。」

「美味しいかのお…？」

さて。すき焼きの用意もできたので、今は6人で鍋を囲んでいる。

…あ、一人多いと思った人、正解です。

モーラ…本名、モーラ・シュタイナー。

なんでかというところ…実は、アークに変身するためにアークキバットを召喚した時…擬人化というのを思いついたんだ。

で、アークキバットを使い魔にして、従者にしようと考えたが…

使い魔にする魔方陣を書き、いざ発動すると。

………魔方阵の真下にいたらしい、強靱な爪と茶色の毛皮をもつ土の竜………ごめんなさい、見栄はりました。

土竜<sup>モグラ</sup>が出てきて、混ぜってしまったのだ。

アークに変身することは問題なく、ちゃんと従者として仕えてくれるからいいのだが………若干、口うるさい。

しかも、魔法の天才で……ナギレベル。しかも頭いいし。

武器は斧で、力任せかと思っただら高等魔法をポンポン使う……恐ろしく強い従者だ。

あ、見た目は……東方の星熊勇義の、角なしを想像してもらえれば。

……まあ。そんなことより……

「エイシュン。まだ喰えない？」

「ええ……あちよつと、肉より先に野菜を……！」

「いいじゃねえか。うるさいな……。」

肉を次々入れようとするナギを詠春が制する。

「ふふっ……知ってますよ。詠春、貴方の様な人を、鍋將軍……というのでしょっ？」

「ナベ・シヨーンゲン?!」

ナギがアルの一言で、驚いている。

「なら、ワイルド、鍋皇帝!」

「それはワイルドな鍋の皇帝っばいぞ?」

…楽しく、鍋を食べよう。

ナギ      s i d e

「…おお、美味しいな!」

「うむ。このソースがいいのお。」

「これは、日本の醤油と言ってですね…。」

…さっき、鍋將軍、という強そうな名前だから、詠春に鍋を取り仕切ってもらったが…美味しい。

さて、肉をもう一つ…と思った時。

空気を切り裂くような音がした瞬間、俺達の目の前にある鍋が宙を舞った。

中身自体は、ワイルドとモータがすべて回収し、喰らう。

「食事中失礼〜！！俺は放浪傭兵剣士ジャック・ラカン！！いつちよやるうぜー！！」

…とりあえず、鍋を台無しにした奴…ラカンが、そう叫んでいる。  
…だが、俺にはもつと重要な事がある…！！

「…ワイルド、落ち着け…。」

「フフフフワイルドオチツイテルナギヘンナコトイウ。サアアイツボコボコワイルドオコラセタニクナクスヤツユルサナイ…！！」

やばい、暴走しかけてるぞこいつ！！

モーラはなぜか肉をモグモグと堪能してるし、お師匠様も丸無視だ！！

詠春は…怒ってはいるが、ワイルドに圧倒されている。

アルも、ニヤニヤしてみてるだけだ！！

「お？なんだ、お前が戦うのか？よし、かかってこい…！！」

「…ウウウ…！！」

やばいな…こりゃ。

俺は、今日紅き翼アラルフロアの、ナギ・スプリングフィールド、とか言う奴と戦うためにここに来た…が。なんだこりゃ…?!

「モンキーアタック!!」

「気合い防御!!」

いきなり一人が、トカゲっぽい姿になったと思ったら、すげえスピードで攻撃してきやがる。

しかも、たまに魔法も使ってくるから夕チが悪い。

「羅漢適当に右パンチ!!」

「ワイル・ワイルド・レジエンドル!火の精霊11柱 集い来たりて敵を射て!!破壊者の射手!!」  
ディメンション・マギカ

変な、黄色の板見てえなのを出して、そこから魔法の射手を撃ってくるのなんて、地味に威力が大きい。

「エレクトロファイヤー!!」

「ぐあっ!!…ッ、テメー!!」

俺が前を睨むが……いない?!

「ケーーーーッ!!ケケケーーーーッ!!!!」



ーミングセンス？何ソレオイシイノ？）で、とどめ……だったのだが。

ラカンにはサンダーの感電も影響してか、白目向いて気絶しました。ポロポロの体で。

……うん。

「やりすぎ…た？」

「」「」「あぁ。」「」「」

…うわ…とりあえず、誰か回復を！！

「モーラ、治癒！」

「はいはい…モール・アークス・キババット。汝が為にユピテル王の恩寵あれ『治癒』。」

注…このあと、ラカンは一分で復活し、仲間になりました。



第三話・お前は俺を、怒らせた。(後書き)

はいどうも……………大丈夫ですかね、これ。

ディメンション・マジカとか……………うわぁ…。

そして、モーラ……………うん、これだけは言わせてくれ。

ヴィランズは…モグラ獣人が、大好きです。(真顔)

とりあえず…皆様方の批判が来ないことを祈って。

ヴィランズでした。

第四話：仮契約って、キス以外でもやれた…よね。

ワイルド      s i d e

ラカンが仲間になって数か月…色々な事があった。

いろいろな紛争を止めに行ったり。

ナギと仮契約バクティオーしたり。

武器の数が宝具化したり。

アデアットしたら恐ろしい物が出てきたり。

恐ろしい物については……ごめん、言いたくない位怖いんだ…ラカンでも、少し逃げたし。

…と、とにかく今紅き翼として俺達は、グレート＝ブリッジ奪還作戦に参加している。

「…守る。」

「ああ、そうさね…面倒だよ、全く。」

「そういうな。ここを取り返さぬ限りどうしようもないの」

「ええ。まあチート級が3人も居るのです。楽勝でしょう。」

「お前らの力は無茶苦茶だからな。頼もしい事は頼もしいが。」

…詠春、無茶苦茶とは何だ、無茶苦茶とは…まあいい。ここで、モ  
ーラのアーティファクトも初の実戦投入だ。

オレも、暴れようかな…

「グウルルルル…!!」

腕につけた変身鬼弦・音枷を掻き鳴らし、音波を発生させ、額の前  
にかざす。

「……はアツ!!」

そして、体の周りに落ちてきた雷を受け…人を守りし鬼の一人…仮  
面ライダー斬鬼に、変身する。

「オンゲキシンゲン・レッザン  
師より託されし破邪弦!!」

烈斬は、なぜかこの数カ月間に宝具化したものの一つだ。

威力は…折り紙つき。

「行くぞ、モーラ!!」

「あいあいさ!アテアット来たれ!!」

モーラが、カードを掲げ呪文を言う…すると、地面が割れ、水柱が

立ち、竜巻が起こる…

ピイイイイツイッツ！！

キイイイイツイッツ！！

シューウウウウウ…！！

ハガネタカ 鋼鷹、カフトオザル 兜大猿、ヨロイガニ 鎧蟹……三体の、巨大なアームドディスクアニマルが現れる…

これが、モーラのアーティファクト、＜ソウコウ・アニマル＞。

「お前ら、暴れてやんな！ほれ、ワイルドも！」

「当たり前だろう！！」

オレは、烈斬を構える。…あ、響鬼ライダーズになってるときは普通に喋れます。

顔だけ変身解除してら、そのライダーの顔になったり。

「音撃斬・雷電斬震！！」

オレは、清めの音を雷撃に乗せ、掻き鳴らす…！！！！

モーラ side

「ワイルド、そっちは平気か?!」

「ああ!数だけ多い、面倒くさいな!」

「さっさと潰すぞ!」

「もちろんさね!」

…あたしは、モーラ・シュタイナー。

元は、ただの機械だった。それを、今の主…ワイルドが、意思を持たせてくれた。

とても感謝しているし……うん、嫌いではない。

今では仮契約もして、ワイルドの従者として生きている。

今、こっやって何人も倒し、殺していくと、ワイルドは褒めてくれる。

だから、あたしは倒していく。

「モール・アークス・キババット!!おお、地の底に眠る死者の宮殿よ、我らの下に姿を現せ!!」『冥府の石柱』!!!!」

ワイルドの為に…!

結果…楽勝でした。

最後の方は、アークにも変身して、ウルティマデットエンドやった  
り…ダイナミックチョップ×大切断で、ダイナミック大切断とか…  
楽しめた。

そして、また新しい二つ名もついた… 「ホルティック・デコラハン稲妻の幽鬼」…なぜ。

後でゼクトに聞いたら、敵を電撃で倒しながら、楽しそうに演奏し  
ていたから…だと。

いや、ああやって電撃出すから仕方ないんだよ!!

モーラには、「クイン・レイカー破壊の女王」…それと合わせて、オレに「エンペラー・破滅の  
クライシス皇帝」の二つ名がついた。

更には二人合わせて「デット・デット・デュエット最悪最悪の恋人」、と…。

なぜか、聞いたときにモーラが大喜びしていた。

後は…タカミチとガトウが仲間になり、仲良くなった。

肉弾戦相手なので、居合い拳を覚えてもらい、こちらは赤心少林拳  
を教えた。

タカミチとも、『トモダチ』になり、結構幸先がいい。

だが…そろそろ「完全なる世界」とも関わってくる頃だな。

ま、なんとかなる！

第四話：仮契約って、キス以外でもやれた…よね。（後書き）

どうも、ヴィランズです。

いまさらですが…ちょっと、エヴァともからませたかったです。

この設定だと、麻帆良でしか会えなそう…ま、なんとかなりますか！



第五話：ガガの腕輪って、何気にチートだよな。（前書き）

PV12000、ユニークアクセス2000突破、ありがとうございます！

第五話：ガガの腕輪って、何気にチートだよな。

ワイルド           s i d e

どこの執政官が「完全なる世界」に参与している情報をつかみマクギル元老院議員のところへとやってきた。

確か、原作では…罨にはめられるはずだったな。

……………アマゾンの頭では、いい考えも浮かばない。へたに動くよりここは流れに身をまかせたほうがいいだろう。

偽マクギル元老院議員が何か言っているが……………いい加減、うざい。

「ガLLLLLLLL…!!!!」

「…ワイルドの反応で、分かったろう？ガトウ。」

「ああ…全くだな。」

「む？ワイルド君、モーラ君、いったいどうしたのかね？」

「お前、議員、違う。これで、すぐ分かる…!!」

俺はそう言い、宝具と化した道具の一つ…ガガの腕環に、魔力と気を込める。

「真名解放…ガガノウデワ秘術眠りし古代の腕環…！」

ガガの腕輪から、魔力と気が放たれる…と偽物の体がチリの様に吹き飛び…一人の青年が現れる。

「グルルル…！！」

「ばれてしまったなら…仕方ないな。」

青年が手を挙げると、周りに何人もの男が現れる…が。

「?! ジューシャ！」

それは、覆面をかぶったゲドンの戦闘員…ジューシャだった。

「ああ、知っていたのか。人形兵を改造したんだが…どうだい？」

「ガル…モーラ、ナギ、ガトウ、ラカン！」

「ああ…行くか。」

「モーラ！」

「ああ。どろろんどろろん、どろん！」

オレが言つと、モーラの姿がアークキバットへと変わる…

「変身！」

腰のベルトに逆様に装着されると、オレの体は浮き上がり、目の前には金色の魔方陣が現れ、砕け散る。

そしてその破片が体を覆い…変身する。

……悪魔の様な二本の角、二メートルを超える巨体、胸の醜悪な口をふさぐ鎖…カテナレジェンドルガの王、仮面ライダーアークが、そこにいた。

「アーク・トライデント  
常闇の三叉槍！」

そしてオレは、宝具化した三叉槍を構え、敵に突っ込む…！

結果から言つと…敵わなかった。

敵一人一人は倒せるのだが、いかんせん数が多すぎたので、俺のアーティファクトで逃げた。

…え？オレのアーティファクト？……………えっとね……………《マカイジョウノマジン》ってやつ。

分かりやすく言つと……………見た目、体長30mの三つ目のタコです。それが取りついたものが、何でも城の形になる…ということ。飛行も可能。

もっと分かりやすく言えば…魔界城の王で出てきた、月の一つ目が

ついた魔物を想像してもらえればOK。あれに更に目玉が二つ付いてるの。

……うん…ごめん、何も言わないで……どう見ても悪役なの…。

…と、とりあえず連合から逃げ切った俺達は、アリカ姫を救出するために「夜の迷宮」に来ていた。

何十匹ものディスクアニマルに探らせたおかげで、速攻でアリカ姫にまでたどり着いた。

「よう、助けに来たぜ。 姫さん」

「遅いぞ。 わが騎士。」

うん、この二人いい雰囲気だね。 後で嫉妬パワーで殴ろう。

そして…皆はもう行こうとしたが……うん、もう一人捕まっていたんだよね。 確か…テオドラ姫。

「ガル、ここ危ない。 お前も、逃げる！」

「…お主、誰じゃ？<sup>アラルブラ</sup>紅き翼ではある様じゃが…。」

「オレ、ワイルド！ワイルド・シュタイナー！」

「な、おまえが<sup>バイラス・リザード</sup>病毒なる竜人じゃと?!嘘をつけ!!」

「ああ? テメエ、なんて口をきいて……」

とたん、モーラがマサカリを構えたまますごむ。

…ヤツくんには見えないね…うん。あ、テオドラ姫半泣きだ。

「モーラ、落ち着く。…なら、これでいい?」

「な…なんじゃと?」

「アァーマァーゾォーン。」

目の前で、小声で変身する。

「これで、どつ?」

「……………マジか。」

「マジだよ。」

…とりあえず、信じてもらい、一緒に逃げることになった。

テオドラ      s i d e

…今日も妾が牢屋の中で暇を持て余していると…突然派手な音とともに壁が崩れ、数人の男どもと、一人の女が入ってきた。

確か…あれは紅き翼じゃったな。と、ということはあの「バイラス・リ病毒なる  
竜人」もいるということか?!

一度、会ってみたかったのじゃが……！………と、思っていたのじゃが。

どうやら、やつらの目的はアリカ姫の救出のようじゃな。妾に一声だけかけてすぐ行ってしまいおった。べ、別に寂しくなんかないのじゃが………

「ガル、ここ危ない。お前も、逃げる！」

そんなときに、妾に声をかけてきたやつがいた。声がした方を向くと、野性的というか……迷彩柄の服を着た、子供っぽい男が現れ、「ワイルド・シユタイナー」と名乗り追った。

まさか、そんなことはありえないと疑ったが……証明として、変身しおった。

しかし……いい奴の様じゃな。心から心配して妾を助けてくれた。

でも………半そで半ズボンは微妙だと思っつものじゃ。

ワイルド side

あの後、テオドラ姫をおんぶして（モーラがすごく睨んでいた）何とか逃げ出すと……

ちょうどナギが、アリカ姫の騎士となることを誓ったところだった。

うーん………彼女持ち、憎たらしい。







第六話：中二病だと？その通りさー！！

ワイルド      s i d e

「グルルルルルル…！！！」

「…ワイルド殿、大丈夫か？」

「こいつが戦う前は、いつもこうだからな…気にしない方がいい。」

「頼むぜワイルド？」

「ガウー！！」

「…では、再確認しますよ？ワイルド、モーラは外で敵の殲滅。私達は本丸を潰します。」

「分かった！」

「一丁、暴れるかね。」

オレは、モーラと同じように、仮契約カードを構える。

「アチアチ出でよー…！！」

そういつと、モーラの《ソウコウ・アニマル》、俺の《マカイジヨ  
ウノマジン》が、それぞれ現れる。

「マジン、行くー!!」

「お前らも、行けー!!」

ジュオオオオオオオオオオ!!!

ピッピッ!!

キィィィッ!!

シュウウウ!!!

オレ達のアーティファクトが、大きな声で叫び、応える……マジン、  
完全に敵っばいよな。

そして、変身音叉・音角をモーラに投げ、オレは両腕を振り上げる。

「変身!」

モーラは鳴らした音叉を、額の前にかざす。

…すると、その身が紫色の炎に包まれ、最強とも名高い鬼の一人…  
…仮面ライダー響鬼に、変身する。

…モーラに、試しに鬼の修行をやらせてみた結果がこれだ…今のと  
ころ、【撥】の戦士にしか変身できないが。

「…グルウウウ…!!」

オレは、うなり声をあげ、この世界に来てから編み出した、ある方法を使う。

「アアアアアア…!!」

右手に魔力、左手に気。それを…合成。 《感卦法》

「マアアアアア…!!!!」

右手に魔皇力、左手に鬼の力。それを…合成。 《感卦法・弍式》

「ゾオオオオオオンツツツ…!!!!!!!!!!」

その二つを更に合成。 《感卦法・参式》

左腕のギギの腕輪が光り、体を包み込む…すると。

「…………ケケケエエエエエエエエッ！！！」

腕は足元に付きそうなほど長くなり、爪もヒレカッターも硬質になり、巨大化。

顔も、トカゲの様な形から変化し、生えていた角は捻じれながら肥大化し、サイか麒麟の角の様になる。

それと同時に上顎もゴキゴキと音を立てて変化し、ゴツゴツとした頑丈そうな、サイにも似た顔に変わる。

これが…この世界だからこそ生まれた、アマゾンの可能性…………ギガギフォーム。

ギギの腕輪の力を体中になじませ、《破壊》と《殲滅》を最大にまで特化させた姿だ。

「ギヤギイイ…！！！」

オレは、うなり声と共に、敵陣に突っ込む…！

モーラ      s i d e

「ガア！！ケケエツ！！」

「う、うわああああ？！」

「に、逃げる！！殺され…！！」

全員が、ワイルドに怯え、恐怖しながら逃げまどっている。

だがワイルドは追おうとせず、ただ自分の周りの全てを破壊しつくしている。

昔、あの姿についてワイルドが教えてくれたことは、二つ。

一つ目は、その姿になると、破壊衝動が抑えられないこと。

二つ目は、もう、仲間も敵も判断できない、狂戦士ヘルセルクに変わってしまったこと。

……ワイルドは、少し怯えていたのかも入れない。

こんな自分でも、あたしが…みんなが、受け入れてくれるかどうか。

確かに…死ぬのは、少し怖い。それに、消えたくない。



私はそこで近くにいた子爵級の悪魔に音撃鼓を張り付ける。

「音撃打……爆熱連打の型!!」

全てを…総てを、破壊せよ。



第七話・やっぱり、挨拶しなかったからこうなった？（前書き）

PV20000、ユニークアクセス3000突破、ありがとうございます！

これもひとえに皆様のおかげです…

…そして、今回から、一週間、募集をさせていただきます。  
麻帆良に行ってから、仮契約をする生徒とそのオリジナルアーティ  
ファクトを、募集しようと思います。

詳しい事は、あとがきで。

第七話・やっぱり、挨拶しなかったからこうなった？

ワイルド side

墓守り人の宮殿攻略作戦が終わり、オレ達、アラルプラ紅き翼は表彰されることとなった。

そして、オレは、敵の殲滅と、圧倒的な破壊力が認められ、早くも立派な魔法使いの称号をもらい、褒め称えられることになった。

しかし、ゼクトという犠牲があったことで、俺はどうしても明るい気持ちにはなれなかった。

今、紅き翼は一時的に解散となり、今俺はモーラと一緒に各地を放浪している……。

……………そして、今はルーマニア南部にいる。

「ガルウ……。」

「……はあ、面倒な事になってるねえ……。」

……今、目の前には変な格好したおっさんと、その真ん中には金髪の少女が……。

これ、どうみても魔女狩りです。本当にありがとございました。

「…助ける…！」

「このお人よしが…ああ、いくよいくよ。」

面倒くさそうなモーラを一睨みし、そのまま構える。

まずは、おっさんどもを片付ける…よし。

「ガオオオオツオオウツ…！」

「な、なんだ?!」

「魔獣?…まさかお前が…！」

「ふん…その通りだ…！」

つておい。オレが吠えたんだよ。

「ワイル・ワイルド・レジエンドル…!火の精霊11柱 集い来たりて敵を射て…!破壊者の射手…!」  
ディメンション・マキカ

「モール・アークス・キババット…!小さき王、八つ足の蜥蜴 邪眼の主よ。時を奪う毒の吐息を。『石の息吹』…！」

オレの破壊者ディメンション・マキカの射手で牽制した所を、モーラの石化魔法で一撃…チ

ヨロいな。

「…ガル、お前、平気か？」

少女の前に着地し、聞くが……………

「…ふん、お前も私を退治してきたのだろっ…？相手になってやる  
！！！」

何を勘違いしたか、その少女は敵意をむき出しにこちらに向かってくる。

「ギャウ？退治、違う！」

「うるさい！リク・ラク・ラ・ラック・ライラック 氷の精霊17  
頭。集い来たりて敵を切り裂け『魔法の射手・連弾・氷の17矢』  
！！！」

「ガウウ……………」

どうやら、誤解は解けないらしい……………

よし、逃げるか。

「<sup>アウトマッシュ</sup>出でよ、マジン……………」

ジヨオウオオオオオウオオ！！！！

オレがカードを構えてそう言うところ…地面を突き破り、マジンが元気よく出てくる。

ちょっと怖いんだけどね。

「な、こんな高位のアーティファクトだと?!」

…なんだが、オレとは違う方で驚いている少女八無視。

「逃げる!?!」

ジヨウオ!?!

マジンは、俺の呼びかけに答え、俺とモーラを触手でつかみ、空に跳んでいく。(誤字にあらず)

「あ、待て貴様!?!」

「モール・アークス・キババット。汝が為にユピテル王の恩寵あれ『治癒』。」

「オレ、逃亡!」

最後に、モーラが治癒をかけて、逃げるオレ達。

……最後のセリフ、モモタロスっぽくない?…ないよね。

「ふっふっふ…真祖よ、これでお前も終わりだな…？」

「チツ…………。」

しくじったな…「立派な魔法使い」が私を追っているのは分かって  
いたが…魔力が枯渇するまで、ずっと追いかけてくるとは。

私も、誇りある悪として、覚悟を決めた。しかし……

「ガオオオオオウツ！！！」

何だ…今の声は。まさか…こちら辺に住む魔獣でもいたのか？

「な、なんだ?!」

「魔獣?…まさかお前が!!」

「ふん…その通りだ!!」

相手は、私が密かに召喚していた魔獣だと思っただけ…ふん、好都合だな。これで隙を見て逃げ出せば…

「ワイル・ワイルド・レジエンドル!!!火の精霊11柱 集い来た

りて敵を射て！！破壊者の射手！！！！」

ディメンション・マキカ

「モール・アークス・キババット！！小さき王、八つ足の蜥蜴 邪  
眼の主よ。時を奪う毒の吐息を。『石の息吹』！！」

と知っている、上から呪文を言う声が聞こえる。

とつさに、氷遁を張り、身構える…だが、目を開けたときには、私  
を襲おうとしていたやつらは全員石になり、倒れていた。

「…ガル、お前、平気か？」

目の前に、迷彩柄の変な服を着た男が現れる…そうか。

「…ふん、お前も私を退治しにきたのだろうか…？相手になってやる  
！！」

「ギャウ？退治、違う！」

「うるさい！リク・ラク・ラ・ラック・ライラック 氷の精霊17  
頭。集い来たりて敵を切り裂け『魔法の射手・連弾・氷の17矢』  
！！」

「ガウウ…」

こいつは、懸賞金を自分一人でとるために他の魔法使いを石にした  
…きつとそつだ！！





第七話：やっぱり、挨拶しなかったからこうなった？（後書き）

えー。前書きで言っていた募集の、詳しい内容です。

生徒名：（例外として、魔法先生でもOKです。）

アーティファクト名：（出来ればよいのですが、仮面ライダーに関するもので…）

カードの絵柄：（こちらは、あっても無くてもかまいませんが、あった方がこちらとしては、嬉しいです。）

これを、感想の「一言」の所に付け加えてください。直接、メッセージでも構いません。

…それでは。一件でも応募が来ることを祈って。ウイルスズでした。

**第八話：美人と美男子の物語の結末は…ハッピーエンドしか、認めない。**

**(前書**

募集に付いて、質問がありましたので、ここでも報告させていただきます。

キャラにある程度あっていたら、何でも大歓迎です。

クーフェイに、ドラグクローとか、シスターの誰かで、イクサナツ  
クルとか、さよに音撃三角・烈節(西鬼のトリアングル)とか、  
楓にZXの装備など……

どしどし、募集していきます。

人数制限は…四人です。

第八話：美人と美男子の物語の結末は…ハッピーエンドしか、認めない。

ワイルド      s i d e

オレは、各地を放浪していたが、アルから、「大変なことになった。」と渡しておいたディスクアニマルで通信があり、一度帰ってきていた。

「ガウ?!アリカ、捕まった?!」

「はい……どうやら、そのようです。」

アルが言った大変な事とは、これだった…原作をあまり読み込んでいないつけが回ったか。

「なんでさ!あいつ、悪いこと何にもしてないだろ?」

「…ですが、父王殺しを始め「完全なる世界」との関与、そして自らの手でオスティアを滅ぼした罪で大罪人として幽閉されています。」

「全部嘘!!!アリカ、そんなことしてない!!!」

オレ達はアリカがどれほど世界のために戦ってきたか、頑張ってきたか、知っている。

それなのに……

「アル。」

「なんででしょうか。詠春」

オレが考えていると、詠春が厳しい顔になる。

「誰がそのことを決めた？」

「……メガロメセンブリア元老院。おそらくは戦争の全ての責任をアリカ姫になすり付けるつもりなのでしょう。」

そこで、オレは苛立ちを抑えきれず外に出る。

「……………グルルルルルウウウ……………ガアアアアアアアウウツ  
……………」

オレは言いようもない怒りを抑えようと、空に向かって吠え叫ぶ。

だが、それでも怒りは収まらなくて……………

アリカ姫が処刑されるその日まで、俺は鍛えることにした。



「な、なんだ?!」

三下臭が半端ないカツパ頭の役人を見下しつつ、オレは叫ぶ。

「お前ら、アリカ馬鹿にした! あいつ、『英雄』! あいつ、いい奴! なのに、お前ら殺そうとした! 俺、お前ら許さない!」

「まったくです。もつとも私達の誰よりも『英雄』と呼ばれるに相応しい人が、この薄ら馬鹿なボケどもより上の存在なのは、当たり前のことですがね。」

「まったく、あの崖の下は魔力も気も使えんのだぞ。無茶苦茶だ。」

「ヤツなら何とかするだろう。…力づくでな。」

オレの言葉に、アルや詠春達が同意する。

「ぬふふふ。囚われの姫さんを助け出すなんてニクイ演出だねえ、おい。」

「そういうので、あいつらが結ばれたりするんだろ。かーっ、いいねえお熱いのは…。」

オレ達紅き翼アラルブラが全員集まっていると分かる…

「なっ、き、貴様らは『紅き翼』! ? な、何故ここに!」

「正義は遅れてやってくるのさ!」

「ああ！俺ら相手に敵うかどうか…試してみるか？」

さつきからモーラとラカン、結構息があっている。

「ふ…だがいくら貴様らが最強といってもこちらの戦力に勝るはずがない！！諦める、紅き翼アラルブラ！！！」

「…そんなので、敵うと思ってる？」

オレは、ギチリと音が出そうなほど口角を釣り上げて、笑いながらそういう。

「な、なんだと?！」

「オレ達相手に、お前ら、敵う訳無い！！全部、潰せる！！！」

「ヒッ……………うわああああああつ！！！！！」

そう言った時に全力で殺気を放つと…カップ頭は叫び、そのまま四つん這いになって、どたどたと逃げていく。

「…さ、全部消し飛ばしてやる！！！」

「その意気ですよ、モーラ。」

「…ッ、ガアアアアアアアアアアア！！！！！」

俺は、断末魔の様な叫び声をあげ、飛蝗の遺伝子を注射された、【仮面ライダーになってしまった男】の一人…局地戦用ゲリラコマンド・改造兵士レベル3…またの名を、仮面ライダーシンに、変身す

る。

「シイイイイイツ……!!」

「…何度見ても、不気味ですね。」

「そついつてやるなつての……変身!」

モーラも、音角を額にかざし、仮面ライダー響鬼に変身する。

「はああああアああ……はアツ!!」

そして、その体の真紅の炎が包みこみ……響鬼のもう一つの形態、響鬼・紅に、強化変身する。

「行くぞ!!!!」

「」「」「おつ!!!!」「」「」

俺が、最後の一人の敵の脊椎を抜き、ふと顔を見上げると……そこには真つ赤に染まった夕日を背景にナギとアリカの二人がキスをしていた。

「…ハッピーエンドデ、ヨカッタ。」

「ああ…その喋り方、なんかなたらもつといい景色だったろう



な。」

「ラカン、ソレハイウナ…ズット見テルモノジヤナイダロウ。ミンナ、サツサトイクゾ。」

「ええ。そうしましょうか。」

……そして、その出来事から数日…俺は、紅き翼の皆と分かれて、各地の戦場をまわっている。

確か…スクナでのイベントがあったはずなので、モーラを連れていかせた。何かあったらすぐ呼ぶそうだし、問題はないだろう。

そして、最近になって新しい二つ名もついたが……………。

「何あいつ顔怖すぎ」と「ポーンクラインシス脊髄破壊」。

……………シン……………ごめんね……………。

ともかく、今俺は紛争地帯に来ている。

聞いた話によると、原住民をほとんど殺して、奴隷にして飼ってい

るテロリストがいるそうで…

その原住民が反乱をおこし、戦場になっているらしい。

今回は、原住民側にいる協力者に会えばいいらしいが…

と、探していると、褐色の肌に、拳銃を持った一人の女の子が一人いた。

…まさか、あれって…？

オレは、他のテロリストにも気づかれないよう、こっそりと近づく。

「ガル、お前、協力者か？」

「?!…いつから…」

話しかけたら、すぐに銃を向けられました…ああ、隠密行動してたからか。

「オレ、ワイルド！お前、手伝いに来た！」

「…なるほど。貴方がバイラス・リザード病毒なる竜人か。私はマナ・アルカナという。よろしく。」

……原作キャラ遭遇、二人目……。



第八話：美人と美男子の物語の結末は…ハッピーエンドしか、認めない。(後書

シンの喋り方は……おかしいですかね？

第九話・アマソンのトモダチって、ある意味フラグ乱立させるよね。(前書き)

ユニークアクセス4000、ありがとうございます！

第九話：アマソンのトモダチって、ある意味フラグ乱立させるよね。

マナ      s i d e

私は、原住民をほとんど殺して、奴隷にして飼っているテロリスト  
…その原住民が反乱をおこし、戦場になっているとの情報を受け、  
この旧世界の紛争地帯に来ていた。

そして協力者：あの紅き翼アラルブラの一人、ワイルド・シュタイナーが来る  
との情報もあり、期待していた。

だが……………

「音撃砲・旋風乱舞！！！」

…正直言って、強すぎる。

敵をほとんど傷つけることなく無力化し、召喚された悪魔や鬼も、  
一瞬のうちに還していく。

これが……………アラルブラ紅き翼、ワイルド・シュタイナーか……………！！

と、そこでワイルドは一息ついた様に持っていた大砲を肩にかけ、顔を人間に戻す。

「…ふう。これで、粗方片付きましたかね？」

「ああ…というより。」

「ん？なんですか？」

「喋り方…それに、顔も変わってないかい？」

「ああ、これは仕方ないですよ。アハハハ…。」

そう笑っていると、彼は急に顔色を変え、どこからかカードを取り出す。

「…ああ、そうだったんですか…はい、はい。アイテムセイバー装甲声刃はありますね？なら、自力で頑張ってください。これも、修行ですよ？」

「…ワイルド、どうかしたのかい？」

「なに、少し友達に何かあったらしくてね…ああそうだ、これをあげよう。」

そういうとワイルドは私に、大きなフルートにも見える、槍の様な銃を渡す。

「……………今、どこから出した…？」

「これは、なんだい？」

「音撃吹道・烈空……ま、悪魔とか鬼とかに滅法相性のいい武器だよ。」

「…ありがとう。」

私はゆっくりとその笛を抱きしめ、笑顔でワイルドの顔を見る。

「何、気にしないで。…それより、これで終わりかな？」

「ああ。そのはずなんだが…。」

そうやって、私達が話していると…前から、何体もの悪魔が襲ってきた。

「っ?! 危ない!!」

「キヤ……?!」

私は最後に、ワイルドに殴りかかろうとする悪魔と、私に笑いかけていたワイルド、それだけを見て…意識を、手放した。

ワイルド      s i d e

オレは、紛争地帯で存分に暴れていた。

威吹鬼の装甲体アームドに変身するための武器、装甲鬼火銃アームドシューターを使い、「汚物は消毒だ    !!」の如く暴れ回っていたが…



途中、モーラからの連絡があり、スクナが復活した、との報告を受けた。

ここで滅してもいいが、原作を大きく変えない方が平和かと考え、モーラに音撃を叩きこみ、限りなく無力化させて、封印しろと命令を出しておいた。

これで、アマゾンキック一回でも倒せる、スクナの完成だ。

せっかくだから、プレゼントに音撃吹道・烈空を渡しておいた。

あれでいろいろトラブルがあっても何とかなればよいが…

そして、マナと話しこんでいると…後ろから、いきなり殴り飛ばされた。

吹き飛ばされながら確認すると、数体の上位悪魔がいた。…ヘルマン級ではあるだろう。

こんな大物が出るということは…敵は基本死んだな。

「自身を生贄にする上位召喚魔法ですか…」

「ほう？なかなか知っている様ですね…私は、蠅の王、ベルゼブブ……」

「七つの大罪?!」

「…の、分身の一つですよ。」

一回、オレはこける…何だこいつ。

「この子たちは、私の分身たちです。…召喚主も死にましたし、一度あなたの様な戦士と戦ってみたいのですが…よいですか？」

「…まあいい。今の攻撃で、マナも気絶してしまったし…少し位、無茶な事が出来るかな。」

「分かりましたよ…では、本気で行かせてもらいます。」

「ほお…それは、なによりですね。」

「さっさと、決めましょう。」

「……アアアアアアアアア……ゾオオオオオオオオオッ……！！！！！！」

「さあ、虐殺を始めよう。」

マナ      s i d e

「……っ………」

「ガル、マナ、目、覚めた？」

「……ああ、ワイルドか…問題ないよ。」

私の目が覚めると、焚火の横でワイルドが座っていた。

「…そうだ、悪魔がいたはず!!」

気を失う寸前、一瞬だが魔眼で悪魔の姿を見た。

「ガル、大丈夫！オレ、倒した!!」

「……そうか。なら、よかった…。」

「マナ、トモダチ。だから守る！」

「…トモダチ……。」

私がうつむきながらそう言つと、笑顔のワイルドは私に近づき、また笑つた。

「ガウ！トモダチ！」

とういうと、ワイルドは両手を合わせ、不思議な形に組む。

「これ、トモダチ言う意味。俺とマナ一緒に戦った。だから、トモダチ！」

「…そうだね。ワイルド兄イ。」

「ガウ…兄イ？」

「いいだろう？トモダチ、なんだから。」

「…ガウ。確かに。」

そういつて、私は笑った。

久々に…なんの、気兼ねも無く、笑えた。

ワイルド      s i d e

悪魔は、アマゾンの新たなフォーム……………ガギギガフォームで一撃だった。

…あれ、さすが分身。かませ犬だったね、かませ犬。

…まあ、こんな感じでいろいろあった後、マナとは数回戦場をまわったが…最後には、別れた。

別れるとき、マナは抱きついてきて、「ありがとう。」と言い、去って行った。

…何だろう、これでフラグ建てた？……………まさかね。

若気の至り、ってやつだよ…ね？

はあ……………何にもなければいいんだけどね。

第九話・アマソンのトモダチって、ある意味フラグ乱立させるよね。(後書き)

まだまだ、募集はしています。

番外編：強襲のD／海東はそれを我慢できない。（前書き）

PV40000、ユニークアクセス4800突破、ありがとうございます！！

番外編：強襲のD／海東はそれを我慢できない。

ワイルド side

…さて。そろそろ時系列的には、原作開始時期だ。

念のためにモーラはネギのところに、ナギの友達として送っておいたし、学園にも来てくれるだろう。

オレも、麻帆良学園に行つた方がいいかな…。

ということだ。オレは最近、麻帆良がある、日本に向かって旅をしていた。

そんなある日…。

「いやん、いやん、すごいやん」

どこの金色の熊の歌を歌いながら、アルプス山脈あたりを歩いていると…突如目の前に、銀色のオーロラが現れる。

「ガル?!」

一度オーロラから離れて、オレが身構えると…中から青い不思議な形をした銃を持った、一人の青年が現れる。

その青年は、銃を持っていな方の手を銃の形にし、こちらをうつ仕草をする。

「やあ…初めまして 君がこの世界の仮面ライダー。アマゾンだね？」

「カイトウ…ダイキー!!」

オレが警戒して唸ると、その青年…ディエンド海東大樹は、楽しそうに笑う。

「…ああ、知っていたのかい。ワイルド君。」

「狙いは…何!?!」

「それはもちろん…君のガガの腕輪さ。」

笑顔で言う海東を睨むが、海東は全くに気にした様子がない。

「…グルウウウウ…!!」

「前のアマゾンの世界では、土に邪魔されてしまったからね…一度こそ、手に入れる。」

そういうと、海東は手の銃…ディエンドライバーに、カードを装填





って変身した仮面ライダー、アマゾンに、変身する。

そしてオレはそのまま、ディエンドに跳びかかる。

「ケケーツ!!」

「おっと…喰らいたまえ!」

《ATTACKRIDE…BLAST!》

「ジャガーネイル!!」

ディエンドブラストによる誘導エネルギー弾を、ディケイドブラストをアマゾン用に発展させた技、ジャガーネイルを使って、ほとんど撃ち落とす。

「ふふっ、なかなかやる様だね…いいだろう、ここは、いったん引こうかな?」

「っ、マテ、ディエンド!!」

「安心したまえ。お土産は、置いていくよ。」

《KAMENRIDE…OUJA!GILSU!NISHIKI  
!》

ディエンドが引き金を引くと、赤、青、緑の三つの光の像が現れる。その三つの像が重なる…

「イライラすんだよ…！」

紫色のコブラをモチーフにし、全てを破壊しようとする、狂った殺人ライダー…王蛇。

「お前らも…俺を、化け物扱いするのか…?!」

緑色のカミクリムシをモチーフにした、【仮面ライダーになってしまった者】…不完全なアギト…ギルス。

「さあ、お宝はどこや?!」

黄色の虎をモチーフにした、盗みを働き続けたお調子者であり、戦国時代に生きた鬼…西鬼。

それぞれが、召喚される。

「獣には獣を、ってね…それじゃ。」

《ATTACKRIDE…INVISIBLE!》

そしてディエンドは、透明化のカードを使い、逃走する…

くそっ…こいつが、この世界に来るとは…予想外だった。

というか、会話的にまだライダー大戦前？

「俺を楽しませろお!!！」

「ケケ…ジャガーシヨック!!！」

オレが噛みつきこうとすると、西鬼の三棍節がそれを邪魔する。

「さあ、行くで!!！」

「ケケエエーッ!!！」

「ああああああああああああ!!！」

「ケケエエーッ!!！」

ギルスに大切断を喰らわせると、オレはそのまま腰を深く落とし、構えをとる。

「ハアアアアアアアアアア……!!！」

目の前に水色のぼんやりとした《AGITO》の紋章クレストが浮かび上がり、オレは、炎を纏った足でそのままライダーキックの体勢に入り、跳ぶ。



「んなっ?!ぐああああああっ!」

オレは鬼火を吐き、王蛇と距離をとる。

……さて、仕上げだ。

「ガアアアアアアッ!」

オレが吠えると…どこからともなく、デストワイルダーが現れる。

そして西鬼に爪をつきたて、そのまま引きずり、オレの方へと連れてくる。

オレの手には、デストワイルダーとのファイナルベント…クリスタルクラッシュを発動するため、タイガのストライクベントの武器であるデストクローが装備されている。

「…ケケエーッ!」

オレの目の前に来た西鬼に、デストクローを突き刺し、そのまま上へと突き上げる!

「ギャッ…!!……………くっそおおおお!!」

西鬼は断末魔をあげ、そのまま爆散する……………。

「はっはあ!!」

《Strikevent》

「ガッ!!」

だが、その隙に王蛇がオレの懐に潜り込み…メタルホーンで鳩尾を一撃。

「…ジャガーショック!!」

「ギャアアアアッ?!」

しかしオレは、近づいた王蛇の頭頂部に噛みつく。

「は、離せエ!!」

「ガヴ…………ケケーツ!!」

「だあああああつ?!」

そのまま首を動かし、王蛇を投げ飛ばす。

吹き飛んだ王蛇の落下地点にクロックアップで移動し……………構えをとる。

王蛇も何をされるか分かったのだろう、必死にあがこうとしているが…無駄だ。

「…大切断!!」

「畜生…チクシヨオオオおお!!」

その言葉を最後に、王蛇は爆散する……………

「…はア、ハア、ハア…」

しかし…だいぶ疲れた。

さすがに、三人のライダーとはキツイ…。

ディエンドに狙われているという事は……………はあ、なにかに付け込んで介入してこなければいいけど…あ、フラグ建てたか、オレ？

…とにかく、麻帆良に向かって、レッツ、ゴー……………



番外編：強襲のD／海東はそれを我慢できない。（後書き）

どうも…ヴィランズです。

次から、麻帆良学園に向けて…行くはず。

第十話：タカミチって、結構苦労してるからあんなに老けてるんだと思う。

ワイルド      s i d e

…原作開始1年前。俺は、ついに麻帆良学園に来ていた……

「長かった…長かった…！」

ここに来るまでに、魔物に襲われたり、シンに変身してたら、魔物と間違われていきなり攻撃されたり……散々だった。

とにかく、麻帆良に着いた俺は、校長室へと、侵入する……。

タカミチには、手紙を送っておいたので大丈夫だろう。

と、そういう言っている間に、校長室の前まで到着する…うん、礼儀としてノックは必要だね。

ノックはいいものだ。いいものは決してなくなるらない。

コンコン、と叩くと、中からタカミチの声が聞こえてくる。好都合だな…。

「タカミチ、入る!!」

オレがドアを開けると、そこにはとても驚いた顔のタカミチと、ぬらりひよ…いや学園長が。

「ワイルドさん?!いつ来たんですか…?」

「ガウ?手紙、出した!!」

「あんな、記号みたいなの、読めませんよ…。」

ひどい事を言う。まあ…保育園の子供の絵、と言われてもおかしくない字だったが。

…それにしても、ダンディになったものだ…あの頃とは、同じ所は髪の色ぐらいだ。

「ふむ、君が紅き翼アラルツラの戦士、ワイルド・シユタイナー君…かね。」

「ガル!オレ、ワイルド!」

ちゃんと自己紹介をする。妖怪相手でも、それ位はしないと。

「…何しに来たんじゃね?」

「ガル…ナギの子供、ここくる聞いた。だから俺、手助けする!」

「…それは、一年後の話じゃぞ?」

「ウウ?!」

…あ、ここ演技ですよ？

ここで行動するには、いろいろ、下地作りが必要かな…?と

さすがにネギと一緒に、なじんでいくのは大変だろうし。

やりたいこともあるし。

さよちゃんの開放とか、エヴァの開放とか。

「…ガル、どうしょ。」

「…では、ここで先生でもやるかの?」

「ちよ、学園長?!」

タカミチが、焦った様な声を出す。

「いいのか?!お前、いい奴!」

タカミチが何か言っているが、無視だ。

「お前呼ばわりかの…うむ。広域指導員も微妙に少なかったんじや。しかもあの紅き翼の一名。これは願ったりかなったりじゃろう。」

「正気ですか?!ワイルドさんですよ?!まともな勉強してないこ

の人に、何ができますか!？」

「タカミチ…ひどい。」

そこまで力説しなくても…否定はしないが。

「しかし、先生でもないこの学園には居づらいじゃろう? ワイルド君は見た目はもう、20代前半の様じゃし、ぴったりじゃ。」

「オレ、外国語、話せる!」

「おお、それはよかった。では、タカミチ君と共に3・Aの担当と、英語の教師、それと指導員を頼めるかの? 家は…後で連絡する。」

「ガル、任せて! タカミチ、行くぞ!」

「…はいはい、分かりましたよ…。」

「あ、今日のHRで、報告しておくのじゃぞ。」

「ガル!」

「…はあ、あの人ときたら…。」

「タカミチ…大丈夫か?」

「ええ…何とか、大丈夫ですよ、ワイルドさん。」

そういうタカミチの目には、疲労の色が原油流出事故の如く、どっぴりと浮かんでいた…

タカミチ

side

…今日、この学園にワイルドさんがきた。

同じ紅き翼のメンバーで、仲もよかったけれど……先生になるとは、思っていなかった。

「タカミチ、遊ぶー!!」

昔は、そういつて一緒によく遊びという名の修行をした…。

かくれんぼで、一日見つからなかったり、鬼ごっこで、半日追いか  
けまわされたり…

けれど……この人が、教師とは…思いもしなかった。

「ガル？タカミチ、どうかしたか？」

「…いえ。何でもありませんよ。」

ワイルドさんも、基本的には善人ですし……

なんとかか…なるのかなあ…？

「とりあえず、スーツとかないんですか？」

「ガル…持ってない。」

……とりあえず、この問題から、解決していこう。

第十話：タカミチって、結構苦労してるからあんなに老けてるんだと思う。(後

どうも、ヴィランズです。

募集…最近少なくなってきたので、期限早送りしようかな…と思います。

今のところ、候補は真名・さや・春日の三人。

他にちょうどいい感じで、ライダーともかみ合わせれるのは…あるかなあ？



第十一話：スーツ×アマゾン＝違和感だけ。

ワイルド      s i d e

さて…今日から、麻帆良で先生をすることになりました。ワイルド・シュタイナーです。

…アマゾンの口調で、ちゃんと出来る自信がねえ…。

……………ま、なんとかなる…よね？

「ワイルドさん？行きますよー。」

「ガウ、分かった！」

…響鬼系に変身して、顔だけ変身解除して顔を変えても、無駄そうだし…諦めるか。

真名      s i d e

「……………ふう。」

私は、窓の外を向いてため息をつく。

今日も…平和すぎるほど、平和だ。

数年前は、戦場を走り、数えきれない人や人外を討ってきたのだが…こんな風に、普通に授業を受ける様な日々が来るとは……

「大丈夫でござるか？真名。」

「楓…か。」

クラスメイトの、長瀬楓が心配してくれたのか、近づいてきた。

「何でもないよ…昔を思い出してね。」

「昔…で、ござるか。」

「ああ…昔、会った男を思い出して…ね。」

そういうと、早乙女ハルナが、機敏に反応する。

「なに、なに、ラブ臭?!」

「あんまり、そこまでの関係でも無かったけどね…。」

私が苦笑しながら言うと、残念そうな顔をしてハルナは自分の席に戻っていく。

「ほら、楓も自分の席に戻ったらどうだ？」

「ふむ…そうするでござるかな。」



何とか、スーツを着て教室に入ると…真名ちゃんがいた。

いきなり叫ばれたのはびっくりしたが…また会えて何よりだ。

…あ、よく見たらさよちゃんも、興味があるようだ。とりあえず笑いかけると…驚いた様に、隠れる。

「えー、先生に質問があります!!」

入ってからのざわめきが少なくなると、一人の生徒がそういう。

えっと…浅倉和美…だったかな？

「ガル？なに？」

「先生に質問いいですかー？」

「うん、いい!」

さすが、元気がいい…これが、3-Aか。

「なら…何歳ですか？」

「23。」

「国籍は？」

「一応、イギリス。」

「趣味と好きな物はなんですか？」

「楽器と、軽業！好きなのは…トモダチ！」

「ほほう…例えば、どんなのがいけるんですか？」

「えと…ギター、三味線、ラッパ、尺八、フルート、太鼓、トライアングル、シンバル…だけ。」

ちなみに、全部鬼の武器。

「…なるほど、ありがとうございます。では最後に…好きなタイプは？！」

「ガル…マナ…！」

そういつて、オレは真名を指差す。

教室中の視線が、一気にそちらへと向かう。

「な、何ですか…？」

「トモダチ、だから。」

「……一応、言っておくとだな…その人に恋愛感情を分かれ、という方が無茶だぞ。」

真名が、こめかみを押さえながら言う。あ、耳赤い。

「…ええ…その通り…だね。」

タカミチも、なんだか遠い目をしてる。

何だよ…オレ、悪いことしたか？

第十二話：「トモダチ」と「友達」は、少し違う。(前書き)

PV52000…

ユニクアクセス6900…

評価150突破…

誠に、ありがとうございます！

…あ、募集もうこなさそうなので…締めきります。  
15日の21時までが、最後の締め切りです。

第十二話：「トモダチ」と「友達」は、少し違う。

ワイルド      s i d e

あの話からひと悶着あったが、そのまま何とか普通のHRに戻り。

片言も、「長く外国にいたから日本語には不得手」とタカミチが説明してくれたし。

…不得手、の意味を知らない人が何人もいたのはご愛敬。

今は…放課後、生徒たちが開いてくれた歓迎パーティーにいる。

「ガール…はアツ！」

烈斬を構えて、とりあえず一曲弾く。（注：轟鬼が倒した後に行っている演奏）

「おー、上手上手！！次、これお願い！」

そういつて、仲良くなった朝倉から、次はラツパを手渡される。

「ガル…何個目？」

「えっとねー…六個目。」



「…疲れた。」

ちなみに、今まで演奏したのは…フルート・ギター・シンバル・三味線・トライアングル。

「ウウ…カズミ、休んで、いい？」

「んー…ま、いつか。せつかくの先生の歓迎会だもんねー。」

「ガウ！料理、食べる！」

オレはとりあえず料理に突撃する。

「旨い！ワイルド、これ好き！！」

そう食べていると、なんだかみんなからの視線が生温かいというか…なんというか。

ま、気にせず食べ続ける。しかし…美味い。

「…すいません、先生。少々よろしいですか？」

「ガウ？」

オレが肉まんを口に入れながら振り向くと…そこには、茶々丸がいた。えーっと…エヴァンジェリオンとか言う子の従者だっけ。

「何か、用？」

「マスターが呼びびです。少し来てもらえませんか？」

「…分かった。」

オレは、エヴァンジェリオン…失礼、エヴァンジェリンのところへ、茶々丸の先導で向かう。

…そういえば、もう茶々丸出来てたんだ…。

そんなことを考えながら歩くと…

「ククク…待っていたぞ、紅き翼。」

そこには、金髪の少女…そして、悪の魔法使いである、

ダーク・エヴァンジェリ  
【闇の福音】

…エヴァンジェエリン・A・K・マグクダウエルがいた。

「ガル……こんばんは。」

「あ、こんばんは……って違う…！私は貴様に聞く事があるのだ…！」

…テンションの移り変わり激しい子だな…。

「まず一つ…お前は、ナギ・スプリングフィールドの行方を知っているか？」

「…ガル。」

「やつは、前に死んだと言われた…だが、私はどうしても奴が死んだとは思えん。」

「…ナギの子供、数年前、村で悪魔、襲われた。」

「なに？」

「そこに、ナギ、いた。」

「……なるほどな。」

そういって、エヴァンジェリンはため息をつく。

「全く…私を忘れて、何をやってるんだ、あいつは…」

「ガル…ナギ、そういう奴。」

「……ふん。もう一つ聞こう。…お前は、私を退治しに来たのか？」

「違う。」

「…即答か。…お前は、立派な魔法使いマキステル・マキなのだろう？それなのに、悪の魔法使いを倒さないのか？」

「…オレ、悪、よくわからない。ただ、トモダチ傷つける奴だけは…倒す。」

そういって、俺は一瞬だけ、レジエンドルガの力を発する。

それに反応して、エヴァンジェリンはビクリ、と身を引く。

「オレは…ただそれだけだ。貴様も、俺の壊す対象になるかも知れ

んぞ…？」

アークの意識が入り、つい高圧的な態度になる…。

内心、慌てて意識をアマゾンの物に戻す。

「…ガル。お前は…オレの、トモダチになるか？」

「ふん…さあて、それは…お前次第だろう。それに…私は、友情は信じないんだ。」

エヴァンジェリンも、態度を元に戻して対応する。

「オレ、まだ食べ足りない。だから行く。」

オレは、振り向いて、元の会場へ向かう。

オレは、ゆっくりと会場へと向かって歩いていく。

「…ワイルド兄ィ？いったいどこにいたんだい…心配したよ。」

「…マナ。」

いなくなった俺を心配してくれたのは、ちょっと嬉しい。  
けれど…

「……マナ…聞きたいこと、ある。」

「何だい？改まって……。」

先ほどのエヴァンジェリンの言葉が、少し突き刺さっている。

「まだ…オレの、トモダチ？」

絞り出すような声で、俺は言う……。

エヴァンジェリンの言ったことは、間違っていない。

それも、戦いに身を置く真名ならば、尚更だ。

「……何言ってるんだい？当たり前だろう。」

だが…オレが心配した事とは反対に、真名は呆れ顔でそういう。

「何年たってようが…トモダチ。そう言ったのはワイルド兄ィだろ？」

「………マナ。」

オレは、肩を震わせながら真名の正面に立つ。

「なんだい？」

「…大好きー！……！」

感極まり、飛びついて抱きつく。

ああもう…お兄さん、嬉しい…!!…!!

「わ、ちょ、やめ…!!」

「マナ、マナー…!!」

そうだよな…年月なんかで消えない。

それが…トモダチ。

このあと…抱き合っているオレと真名が朝倉に見つかり、次の日の学級新聞に載ったのは、また別の話…。

第十三話：シンって意外とチート性能だよね。(前書き)

ユニークアクセス・8000突破、ありがとうございます！

募集の結果は……後書きで。

第十三話：シソって意外とチート性能だよな。

ワイルド      s i d e

パーティーのあった日の深夜…夜の仕事をするための、確認の戦いの様な物をやらなくてはいけなくなった。

「ガウウウウ…」

「…ワイルドさん、そんなに唸らなくても平気ですよ。相手…僕ですじ。」

「タカミチ、殺さないよう、頑張る。」

「…ワイルドさんの技、一撃必殺ばかりですもんね…頑張ります。」

半泣きでタカミチが言った。

…まあ、遠くからこの戦いを見てる生徒や先生も何人かいるし、殺す気はさらさらなのだが。

近くで見ているのは…真名、刹那、刀子さん、高音・D・グッドマン、佐倉 愛衣、夏目 萌、式集院 光、神多羅木、シスター シヤークテイ……





「まあ、そつでしようね……では、始めますか。」

そついうと……タカミチは一瞬の隙も与えずに、居合い拳を数発撃つ。

「……ジャアアアアアッ！」

だがオレはその攻撃を見切り、ジャンプして避ける。

シンのジャンプ力は垂直跳び1.4 m……避けるぐらい、軽い。

しかし、それを読んでいたのが、タカミチは咸卦法を発動する。

ならば……こちらも。

「真……ライダーキック……！」

「豪殺居合い拳……！」

蹴りと拳が、互いに拮抗する。

「ガ……アアアア……！」

「……シッ……！」

だが、一瞬の隙をついてタカミチは離脱。そのまま距離を取り、豪殺・居合い拳を数発撃ちこむ。

「……フン。強クナツタナ……タカミチ。」

「アハハ……まあ、腕吹き飛ばせたのはいいですが……すぐ復活しては

…ねえ。」

…シンの体は全身がセラミックの5倍の強度を持つ甲殻細胞に覆われており、皮膚は攻撃に対する衝撃の75%を吸収でき、打撃・斬撃に関わらず、肉体本来の25%以上のダメージを与えることは不可能である。

傷を負っても通常の人間の約50倍の細胞増殖にて急速再生するため、腕程度なら0.03秒で再生…というらしい、と聞いた事があるので、そりゃあなあ…。

というか、これで腕を吹き飛ばしたタカミチがすごい。

「…デ、ドウスル？」

「もう…降参しますよ。これで僕は打ち止めです。」

「前二赤心少林拳教エタダロウ。」

「梅花の型で精一杯ですよ……」

オレは、そこまで言っただけでスーツを着、変身を解除する。

「タカミチ、成長した！さすが、さすが！」

「…毎回思いますが、キャラ違いますよね…それ。」

タカミチも苦笑いだ…。ま、本人でもそう思うから仕方ないが。

「ガール…これで、いい？」

「いいですよ。僕に勝ったら、それでいい訳ですし。」  
「…という訳で、なんとか戦いは終わった…ああ、面倒くさかった。  
もう、帰って寝よう…あ、家買おうかな…？  
今夜は野宿して。」

魔法生徒      s i d e

「ハあ…はアツ…！」

何だ、さっきの魔物は…あれが紅アラルフラき翼の一人だと？！

そんな訳無い…今すぐ…今すぐ、殺さないと…！！

僕は闇打ちするために、あいつよりも先回りし、仕留めようとする。

「せ、正義の為に…死ぬ……化け物！！！！！」

そこで、僕は魔法サキタ・マギカの射手を撃った…だが。

「…なんでだ…？何で、死なない?!」

それどころか、傷一つ負っていない。

やはりあいつは化け物殺さないと早く殺さないと殺さないと殺さな



第十三話：シソって意外とチート性能だよね。（後書き）

はい、どうも…今回で、募集が決まりました。

結果は…こちらです。

真名…ロストドライバー【SKULL】

朝倉…メモリガジェット&ギジメモリ多数

さよ…幽霊列車&幽汽ベルト

夕映…ラウズカード

……と、なりました。

若干、アレンジを加えてとなりますが…  
バルパレ パ様、シグマ様、ノフィ様、ご応募ありがとうございました！

第十四話：幽霊でも、怪人よりはずっといい。女の子なら、尚更。(前書き)

PV67000

ユニクアクセス9000

突破、ありがとうございます、皆様のおかげです!!

第十四話：幽霊でも、怪人よりはずっといい。女の子なら、尚更。

ワイルド      s i d e

さて…夜の仕事の試験も終わり、オレはやっと普通の教師の仕事を  
している、が。

…問題が一つ。

「……………いいなあ……………」

「ガウ……………」

そう、この娘……………相坂さよだ。

正直、鬼の力がアークの力が知らないが、どうしてもさよが見え、  
はっきりと声も聞こえる。

しかも、全部「いいなあ……………」などだ。

何とかしてあげたいと思う。…昼寝も、おちおち出来ないし。

たまにこつちを見てくる（多分笑いかけたせい）ので寝てるわけに  
もいかず……………

なので……………とりあえず、行動を起こしてみる。



という訳で…はい、放課後・現在午後8時。

教室の前です。

「…あ…先生…私の事、見えますか？」

「ガル。お前に、会いにきた。」

「…ふえ？」

最初のは…やっぱり、独り言だったんだろう。

オレが反応したので、ポカンとした顔をしている。

「…ガウ、サヨウ？」

「……ふえ…ふえ…ええええええええんツ！！！」

オレが手を振って反応を確かめる。

すると、さよがオレに飛びつき、泣き始める。

「ガルル…よしよし。」

何とか、宥めようとして頭を撫でる…が、さらに泣き出してしまっ。

「ガ、ガウー!!」

↳数十分後↳

「すいませんでした、先生…。」

「ガル…泣きやんでくれて、よかった。」

あの後、なんとか宥めすかし、泣きやませることに成功した。

「あの…そういえば、なんでここに来たんですか？」

「サヨ、トモダチになり、来た。」

「…え…私の…ですか？」

「ガウ。」

「……………うう…。」

「な、泣かない!」

また泣かれるのは、地味に困る…。

「でも…私、幽霊ですし…死んでますし…。」

…そこが、この娘のネックだ。確か、1940年に15歳で他界し、

「学園内で起きた密室連続殺人事件の被害者」…となっていたはずだ。

原作では、ネギと仮契約し、実体化していたが…俺は、それとは別で行ってみようと思う。

「サヨ…生き返りたい？」

「…はい。でも、出来ないし…。」

「…オレ、頑張ればできる。」

「ふえ？」

オレがそういうと、さよはピクリと肩を揺らし、反応する。

「けど、サヨ苦しい。それでも…いい？」

そういうと、さよは泣いていた顔をあげ、はつきりとした目でこちらを見る。

「本当に…出来るんですか？」

「絶対に。」

さよは、一瞬躊躇したが…拳をギュッと握っている。

「……………私は…生き返り、たいです……………」

「…ガウ」

よし…ならば、行動開始だ。

「あれ…何ですか、それ。」

「魔方陣シートと、ディスクアニマル。」

魔方陣シートは、オレがギギの腕輪の力を使って生み出した、特殊な道具。

わざわざ書かなくても、魔方陣の効果を得られ、永遠にその魔方陣は消えない…というもの。

魔法世界で、一枚1000ドラクマで売り出していたものだ。

懐かしい…売上金、紅き翼の宴会で全て消えたけど。

「わー、可愛いですねー」

さよはディスクアニマルを突っついて遊んでいる。ちなみに、ルリオオカミ。

「ガル…サヨ、上、乗って。」

「あ、はい。」

ふよふよとさよが移動して、魔方陣の真上に立つ……浮く？ま、ど  
つちでもいい。

「じゃ、やる。」

「……はい！」

そういうと、オレはディスクアニマルをさよの下に置き、魔力と魔  
皇力を流す。

「……真名解放……秘術眠りし古代の腕輪……」  
ガガノウテウ

インカの力を魔方陣に流し込む……と、魔方陣が光り始める。

「……ウウウウウウ……！！！」

……さよを生き返らせる方法は、正直無理をしている。

キバ本編で、ビショップが使っていた、大量のライフエネルギーを使  
う蘇生法……

それに、不老不死であるオレのライフエネルギー、鬼の力、インカの  
力を感卦法で合成し、流し込んだ。

ディスクアニマルで全ての力を共鳴させることで、なんとか肉体を

作りだす…これが、オレの考えた蘇生法だ。

バクティオー  
仮契約とかして生き返るからと言って…乙女の唇奪うのは…なあ。  
向こうの同意も無いし。

「……………ッー！」

と、そうこう言っている間に、術は終盤に向かっている。

さよも苦しそつにながらも、耐えている。

「ガアアアあるルウウ…！」

オレは、最後まで力を注ぎこみ…術を、完全に発動させる

「禁忌……………サイキヘンゴ彩鬼返魂の法。」

術を発動すると、魔方陣から光があふれる……………！

「グルルルル…サヨ？」

…数分して、光が収まると、俺は目を開けてさよを探す。

「…せ、先生……………」

「……………サ、ヨ？」

声のした方を見ると……………蒼色の尻尾と、犬の耳が生えた、さよがいた。

「あの…この耳、どうしたらいいでしょう？」

「…ガル…多分、大丈夫…。」

…共鳴させていた、ルリオオカミを媒体として体を作ったせいで…  
とりあえず…大丈夫だろう。その前に問題は…

…翌日…

「今日、新しい生徒、来る！病気で、学校これなかった、でも、今日から来る！！」

皆が、ざわめく。その声を遮り、オレは大きく言う。

「入る！！」

そういつと、ドアが開いて、一人の生徒が入ってくる…。

「あ、相坂さよです！よろしく願いします！」

さて…これで、トモダチができると…いいけどね。



第十四話：幽霊でも、怪人よりはずっといい。女の子なら、尚更。（後書き）

犬耳って…いいよね。

第十五話：鬼って、服なくなるのが一番のデメリットだよな。

ワイルド side

さて…さよも生き返り、なんとかオレの心配事は一つ消えたわけだが……まだ、大変な事が。

耳や尻尾は本人の意思で出し入れ可能らしいし、さよの戸籍は、学園長を説得して何とかもぎ取った……

家は、なぜか買ったばかりのオレの家に住むことになったが。

まあ…何か体に不都合があるかもしれないので、仕方ないけども。

さよは喜んでくれたが……その話を真名にすると、ちょっと睨まれた。

そして…問題は、もう一つ。

「ねー、せんせー？相坂さんとの関係について、一つー!」

「ガル…なにも、無い。」

「…同じ家に住んでるのにな?」

「話すようなこと、無い。」

「…なんかおどるからさー。」

そつ……………この、「麻帆良のパパラッチ」の異名を持つ、朝倉和美だ……………。

なにかと、真名との関係や、さよとの関係を聞いてくる。

「だってさあ…龍宮さんとはただの昔の友達で、相坂さんとはただの親戚って…つまないんですよ。」

「本音、言ったな。」

このパパラッチめ……………！！

と、オレが内心睨んでると…ちょうど、休み時間終了のチャイムが鳴り響く。

「ほら、授業始めるー！」

「ちえ…はいはい、分かったよー…。」

朝倉はしびしびと自分の席に戻る。

隣の席のさよが宥めている…さよ、やっぱりいい子…。

「授業、始める、39ページ…」

これで、なんとか諦めてほしいが……………

「…はあー…ワイルド先生、いい加減取材受けてくれないかなあ…」

私は、このところ毎日ワイルド先生に取材を頼んでいる…が、全く取り合ってくれない。

龍宮さんや、相坂さんとの関係も、本人は全くない、っていつてるけど…経験上、絶対嘘だろうし。

「あー…なんか、特ダネないかなあ…。」

そう歩いていると………いきなり、目の前に、大きな壁に、ナメクジの頭がついた様な化け物が、現れる。

「……っへ？」

私は、一瞬呆ける…

見た目からして、大きさは8m。顔からは、生臭い臭いと、鉄臭い血の臭いが漂っている…。

「なに…こ、れ…？」

足がすくむ。なにかの撮影という考えも、全く浮かんでこないほど、殺気と純粹な食欲に満ち溢れた目で、こちらを見ている…

「あ…あ……！」

腰が抜け、倒れる。逃げるという考えも浮かばないほど、怯えていた。

それを見て化け物はクワチヨ、クワチヨ、と音を立ててゆっくりとこちらへ歩いてくる…

「……………!!」

声も出ないまま、私の眼と鼻の先まで近づき、ゆっくりと体の殻を開ける…

だが、その寸前で、化け物が吹き飛ばされる…そして、そこにいたのは…

「せ、んせ……………?」

そこで、私の意識は途切れる…。

ワイルド      s i d e

オレが、今日の夜の仕事で、学園内を歩いていると、巨大な魔化魍…ヌリカベを見つける。

「ガル…!?!」

慌てて追いかける…が、見つけたときには、そのヌリカベの目の前には、朝倉がいた。

「カズミ…!!」

すぐに飛び出そうとするど…

「待て、シュタイナー。」

「ッ…ガンドルフィーニ。」

目の前に、眼鏡をかけた黒人の魔法先生…ガンドルフィーニが立つ。

「彼女を…助ける気か？」

「当たり前!!」

「…本当に、それが正しいのか…？」

「ガウ…？」

ガンドルフィーニは、こちらを強い視線で睨んでくる。

「彼女はパラッチだ。もしも…魔法で記憶が消せなかった場合、魔法使いと魔物などの事が世間に出まわってしまつかもしれないぞ？」

「…見殺し、する気？」

「正義の為の…犠牲だ。助けるというのなら…容赦はしない。」

そういうとガンドルフィーニは右手に拳銃、左手にナイフを持ち、

こちらを睨んでくる…。

「そんなの、正義違う!!」

「なに？」

「十人殺して、百人助かるなら、百十人、一人殺して、一万人助かるなら、一万人救う!それ、オレの正義!」

何より…相手は、女の子だしね。

「行かせん!!」

と、意気込んだガンドルフィーニの顔に、拳を叩きこむ。

オレは朝倉のもとへ駆け寄り、ヌリカベに蹴りを入れて吹き飛ばす…!

「カズミ、無事!？」

そう聞くと、すでに意識がないらしく、倒れたまま反応しない。

「…グルウルル…!!」

オレは、銀色の変身音叉を取り出して鳴らす。そしてそれを額の前にかざす…

「煌鬼…!!」

体を金色の光が包みこみ、足元から金色の煙の様な物が吹きあがる。それを払うと…シャチホコをモチーフとした金色の武装を持つ、戦国時代の鬼…仮面ライダー<sup>キラメキ</sup>煌鬼に、変身する。

「はアツ、セイツ…！」

GYAAAAAAA!!

「魔化魍のくせに、そんな叫びか！だらあっ！」

煌鬼の武器、音撃震張・烈盤を両手に持ち、又リカベを何度も斬り付ける。

「音撃拍・軽佻訃爆…!!…！」

二枚の烈盤をシンバルのように打ちならし、又リカベに向かって清めの音を放つ…！

GIXYEEEEEEEEEE!!…!

最後の断末魔を叫び、又リカベは爆発する……

「…ふう。」

オレは変身を解き、朝倉を抱きあげる。…変身しても服が消えないのが、戦国の鬼のいい所。

ま、そんなことはさておき…



「ガル…どうしよ。」

草むらには、鼻血を垂らして気絶したガンドルフィーニ、手には気絶した朝倉…

さて、どうしたものか……

…この時、オレがまだ変身していたら、気づいていただろう。

朝倉の荷物からカメラが偶然落ちて、シャッターが地面とぶつかり押されたことを…

第十六話・マスコミは、話していることと悪いことを心得てる。(前書き)

PV79000

ユニクアクセス10000突破

ありがとうございます！

第十六話：マスコミは、話していることと悪いことを心得てる。

ワイルド side

さて…朝倉が魔化魍に襲われた次の日。

オレは…結構なピンチに陥っていた。

「ね、これ先生でしょ？…私のカメラ、暗視機能あるからばっちりなんだよ。」

「ガル…なんで、そんな改造してある。」

今現在、朝倉に問い詰められている状況だ…ああ…記憶消去、オレできないんだよ…。

「そんなことはいいから！！昨日のこと、きっちり説明してもらおうよ…？」

「ウウ……分かった…。」

「よっし決まりー！！」

パチン、と指を鳴らして朝倉は陽気に席に戻る。

「ガLLLLL…。」

とりあえず、大変な事になりそうだ…あ、念話で報告しと。」

『あー、マナ？聞こえる？』

『聞こえるけど…どうしたんだい？』

『朝倉に、ばれた。』

と、そこで真名がぶつと噴き出す。…あ、周りの席の子、ちょっと混乱してる。

…桜咲と春日…後、エヴァも聞こえてたらしい。

オレ、この念話制御苦手なんだよね…。

「HR、始める。」

〈放課後〉

「ガルウ……………」

「せんせー…大変ですね…」

とりあえず、オレは家でゆっくりしている…あとで、朝倉が来るのだが。

(なぜか)メイドの恰好をしたさよも、同情の視線で見ってくる。

と、オレがゆっくりとお茶を飲んでいると……

《ATTACKRIDE…CHIME!》

その電子音声が響き、その後にディケイドの変身音の様なチャイムが鳴る。

…はい、オレの趣味でこうしましたよ。

ちなみに、最初に聞いたさよは吃驚してこけてました。

「ガウ、入る!!」

「じゃ、お邪魔するよー…って、相坂さん?!」

あ、さよメイド服だったっけ。

入ってきた朝倉は、驚いた顔になり…すぐにニヤニヤした顔になって、こちらを向く。

「先生…こういう趣味?」

「違う!」

「……ま、いつか…で、昨日の事説明してもらおうよ。」

「ガウ……昨日のあれ…魔化魍。」

「マカモウ？」

朝倉は、もちろん知らないようだ。

……というか、オレもこの世界に魔化魍がいるとは思ってなかった  
しなあ……。

環境で生まれるから、自然的にごくわずかなら生まれるけど。

「自然から生まれる、人喰いの化け物。あれは…ヌリカベ。」

「……ふうん。」

朝倉は、少しだけ笑い、こちらを見据える。

「とりあえず…証拠って、ある？」

「ガウ……。」

証拠、か……仕方ないか。

俺は、懐から赤い変身音叉を取り出し、鳴らす。

「西鬼……。」

そして、金色の光が体を帯の様にまわり、包み込むと…黄色の虎を  
模した…というか、虎そのままの戦国の鬼、仮面ライダー西鬼に、

変身する。

「これで、信用する気になったか？」

聞くと…朝倉は、ポカーン…、としている。

口調も変化してるから、判断しにくいよね。

「先生……すごいですねー。」

「さよ…お前、前に教えとったやろ。」

「でも…鬼への変身見るのは初めてですから…。」

うっ…ちょっと悲しい。

「…わー……すごい…ねー。」

「やるやる？…で、やな。もう一個教えとかんといかん。これは、さよにも言つとらへんことやが…あ、さよもこっち来い。」

さよを呼んでから、顔だけオレは変身解除する。

「…こんな俺みたいなの以外にも、もう一個この世界には変なのがあるんや…それが、魔法。」

「魔法…？」

混乱した様子の朝倉。

無理も無いよな……………

「ああ。ちよつと待ちい…………えっと…………ワイル・ワイルド・レジェンド  
ル…………火よ灯れ。」

その呪文を唱えると、指の先に火が灯る。

「わ…………。」

「すごいですね…………。」

その後、とりあえずオレの知る全ての魔法の事を二人に話す…………。

「…………なるほど…………ねえ…………。」

「…………で…………なんやけど………………………………この事は他の人には言わんと  
…………いてくれんか…………?…………。」

「…………もし言ったら…………?…………。」

「…………めんどくさいんやが…………お前の記憶…………消させてもらうことなるで…………。」

オレがそういうと、朝倉は肩をすくめてこちらを見る。

「…………はいはい…………了解了解…………大丈夫…………誰にも言わないよ…………。」

「…………なら…………ええんやけど…………?…………。」

「…………その代わり…………?…………。」



朝倉は、ニンマリと笑ってこちらに体を寄せてくる。

「私に、魔法教えてくれる？」

「……………いやって言っても、構わへんのやろ？」

「大正解」

ニンマリと笑う朝倉…はあ。面倒臭い事に…。

「あの、私も教えてほしいです！」

「はいはい…あー、一気に二人も弟子ができたんか…へんな感じやなア。」

しかもさよも言ってきた……………オレ、魔法より戦闘が得意なんだけどな。

「ま、細かい事は気にしないで…これから、よろしくね」

「よろしくですー」

……………はあ…一気に二人の師匠、か…頑張ってみるか…な。

第十七話：仮契約も、結構大変。（前書き）

…えー。

募集して、決まりはしましたが…綾瀬の仮契約は、もうちょっと先になります…。

第十七話：仮契約も、結構大変。

ワイルド      s i d e

さて……………朝倉には、放課後か休日におれの家へ来れば魔法を教える、と約束したし…

朝倉に魔法をばらした事をタカミチと学園長にも言ったし……………まあ、結構驚いてたが。

とりあえず落ち着いた……………

と、思っていました。

「だからな…ワイルド兄ィ。あっさりと魔法関係者を作るのはどうかと…」

「ガウウ…。」

「何というか、毎回毎回ワイルド兄ィは…。」

相手は、真名。

ただいま、放課後のおれの自宅で、説教しています…。

扉の向こうで、さよと朝倉が同情の視線で見ている。…助けてくれ

ない?!

「……聞ってるのかい? だいたい、昔っからいつもそつで……」

「ガウウウウウ……」

ああ、長くなりそう……

↳数時間後↳

「……はあ、今日はこの辺に、しておこうかな……」

た、助かった……今日は、碌な目にあっていない……

「ガウウウ……」

……腹も減ったな……えーと、説教開始が午後4時で、今は……午後9時。

……5時間の説教でしたか……。

「……先生、大丈夫でしたか? ご飯、一応温めてありますけど……」

エプロンのまま、こちらを心配そうに見るさよちゃん……ええ娘や。

「……あ、ワイルド兄ィ。お仕置きとして……あとで、言う事聞いてもらっからな?」

「ガウウ……」

「はい、先生よしよし。ドンマイ！」

朝倉も慰めてくれるが……ドンマイと言つなら、最初から出てこい。

「はあい、シチュー温めましたよー。」

「ガル！サヨ、さすがー！」

鍋つかみで、大きな鍋とスプーンを持ってきたさよを歓迎し、テーブルに置かせる。

とりあえず……ご飯だ。

この日は、ぐったりとしたので、泥の様に眠った……ああ、明日が怖い……。

～翌日～

「ガウ……真名、言う事聞く……なに？」

「……あ、ああ……私と、だな……私と、バクティオ仮契約してくれ。」

顔を赤くしながら、真名がそついう。

「分かった……けど、ちょっと問題。」

「なんだい？」

「オレ…魔方阵、書けない。」

…魔方阵シートでは、仮契約の陣は無いのだ。正直、あんまり使わないものだし、オコジョ妖精に頼んだ方が早い。

それに、方位なども書かなければいけないのだ。正直、面倒くさい。なので、それは無いのだが…

「それなら…私がお用意できるよ。」

なんでだよ。……まあいいけど。

「なら、今日の放課後。」

という訳で、また俺の家に来る事に……俺の家、人の出入り結構激しくない？

「…「女生徒を連れ込む先生、本命は誰だ?!」…ってどうかな？」

「やめて。」

朝倉、マジ怖い…浅倉、思い出したよ。

OREジャーナルにでも就職してろ…

「…あ、龍宮さん、これでいいですかー？」

「ああ、それでいいぞ。」

家に帰ると…真名と、仮契約の陣を書いていたさよがいた。

「ニヒヒー…先生、モテモテだねー」

「女難な、だけ…。」

オレがため息をつくとき、その時ちょうど陣を書き終わったらしい。

「…で、では行くぞ…ワイルド兄ィ。」

「ガウ。」

オレがゆっくりと魔方陣の上に乗る、真名も魔方陣の上に乗る…。

「グル…。」

「んう…ツ…!!」

俺と真名の唇が重なり…そして、魔方陣からは光があふれる…!

………  
バクティオ  
仮契約!!!

「……あれ、まだやってるの？」

「ん…いや、ちょっと…な。」

顔を赤くしながら真名はやっと唇を放す。

その手にはオレとの契約で出来た仮契約カードが…。

「えっと…称号は、SNIPER・COVERED・SKULL…  
《骸骨被りし狙撃手》だつて。」

カードには白色のスーツを着、腕と体には肋骨の様な鎧、腰には頭蓋骨の横顔の様な形のSのマークのUSBメモリが刺さったS字型のベルト。

手には黒色の銃を両手に構え、狙いをつけている仕草をしている。

そして、顔は口元が銀色の装甲で隠され、髪型はポニーテイルにして銀色のS字型の髪飾りをつけて、頭には白色の帽子をかぶっている。

「…なんだか、結構ハードボイルドじゃない？」

「ガール…」

というより、まんま仮面ライダースカルの擬人化…。



「……………ねー、先生。ちょっと、こっち向いてくれない…?」

「ガウ……………っ?!」

その声に振り向くと…ニヤニヤとした顔の朝倉がオレに抱きつき、その唇を重ねる…。

バクティオー  
仮契約!

「…んーっ。御馳走さまー。」

キスしたまま数十秒が立つと、朝倉はゆっくりと唇を放す。

……………舌、入ってきたのは秘密。

「朝倉!お前何を…」

「いいじゃんいいじゃん。面白そうだったんだし…。」

朝倉の手には、一枚のカードが握られている。

「称号はー…TRUTH・UNCOVER・STOOL・PIGE  
ON…《真実暴きし情報通》…だって。」

カードの絵は、メモリガジェット達と遊び、カメラを何個も首から下げ、手にはガイアメモリを持った朝倉の絵が…。

「ふーん…いい感じかな …… って… あれ… せんせ… い？」

「…………… ガ… ウ。」

…………… 一日に、二人の生徒の唇奪った俺って……………

と、オレが膝を抱えて落ち込んでいる後ろでは、なにか声が聞こえる。

いいじゃん、やっちゃいなよ？

え、ええ？！

…こんなチャンス、滅多にないんだよ…？

うっ………………。

なんだか危ない気もするが、一度無視する。

「…あのー…先生？」

「サヨ…なに？」

呼びかけられた声に反応して振り向くと、そこには少しだけ顔を赤くしたさよが…

「えっと…失礼しますっ！」

「ウ……!!」

…次は、さよがオレにキスしてくる…そして。

バクティオー  
仮契約……!!

「…あー、出ましたー!」

「ガ……ルウ……」

オレは、放心状態になり、その場に倒れる……。

…つて、あー!先生?!大丈夫ですか?!

多分大丈夫でしょ。…ま、一応部屋には運んどこうか。

…ワイルド兄ィの……馬鹿。

なんか、いろいろ聞こえる気がするが…気のせいだろうな。

…ああ……明日の、図書館探検部に付いていく約束、守れるかなあ  
…?

・龍宮真名

・朝倉和美

・相坂さよ

三名とも、ワイルド・シュタイナーとの仮契約・成立。

第十七話：仮契約も、結構大変。(後書き)

↓パクティオカード説明↓

主 ワイルド・シュタイナー

名前表記 ASACURA CAZUMI

称号 TRUTH・UNCOVER・STOOL・PIGGEON  
《**真実暴きし情報通**》

色調 CAERULUM (青)

徳性 SAPIENTIA (知恵)

方位 ORIENS (東)

星辰性 NEPTUNUS (海王星)

アーティファクト シンジツミツケルテツノトモたち…《**真実見つける鉄の友達**》

チキユウノキオクノマネ…《**地球の記憶の真似**》

主 ワイルド・シュタイナー

名前表記 ARCANAMANA

称号 SNIPER・COVERED・SKULL…《骸骨被りし  
狙撃手》

色調 NIGROR (黒)

徳性 TEMPERANTIA (節制)

方位 CENTRUM (中央)

星辰性 CRUX SEPTENTRIONALIS (北十字星)

アーティファクト アクウチヌクガイコツノマジユウ…《悪撃ち抜  
く骸骨の魔銃》

ガイコツトシュウエンノキオク…《骸骨と終焉の記憶》

主 ワイルド・シュタイナー

名前表記 SAYO AISAKA

称号 DEATH・OR・LIFE・TIME・PASS・TEN  
DER・GHOST 《生死の時間渡る優しき幽霊》

色調 ALBUM (白)

徳性 CARITAS (愛)

方位 SEPTENTRIO (北)

星辰性 NEPTUNUS (海王星)

アーティファクト オンネンモチシセンシノオビ 《怨念持ちし戦士の帯》

トキワタルユウレイレッシヤ 《時渡る幽霊列車》

「アーティファクト設定」(前書き)

ここでなんですが…

PV90000あしがういじらま…



「アーティファクト設定」

朝倉和美

主 ワイルド・シュタイナー

名前表記 ASACURA CAZUMI

称号 TRUTH・UNCOVER・STOOL・PIGGEON  
《真実暴きし情報通》

色調 CAERULUM (青)

徳性 SAPIENTIA (知恵)

方位 ORIENS (東)

星辰性 NEPTUNUS (海王星)

アーティファクト シンジツミツケルテツノトモたち…《真実見つける鉄の友達》  
…メモリガジェット。

スタッグフォン&amp;ピートルフォン：高速移動による、音速の攻撃。

バッドショット：ストークモードと、ピクチャーモードの二つに分

けた写真を撮れる。

ストークモードは、撮った相手を半永久的にライブで映し、ピクチャーモードは、撮った景色を半永久的にライブで映し続ける。

スパイダーショック：蜘蛛の巣型のネットを発射できる。

デندنセンサー：魔力・気、等の力や、結界なども視ることができる。

フロッグポッド：超音波や、震動波を出すことができる。

ファンクメモリ：尻尾や牙で硬質の物も切断できる。リスクなしにドーパント化もできる。

エクストリームメモリ：亜音速での飛行と、魔法や気の強化、リスクなしのドーパント化が出来る。

…等を召喚し、密偵を行える。

ガジェットが見た景色は映像化でき、操作に役立つ。さらに、オリジナルとしてスネークケーブル、シケーダーパソコン、の二つのガジェットがある。

チキウウノキオクノマネ…《地球の記憶の真似》

【CYCLONE】 【HEAT】 【LUNA】 【TRIGGER】

【LIAR】 【ICEAGE】 【VIRUS】の7つのガイアメモリ。

【STAG】 【BEETLE】 【BAT】 【SPIDER】 【DE

【N】 【D】 【E】 【N】 【F】 【R】 【O】 【G】 【F】 【A】 【N】 【G】 【X】 【T】 【R】 【E】 【M】 【E】 【S】 【N】 【A】 【K】  
【E】 【C】 【I】 【C】 【A】 【D】 【A】 …… の十のギジメモリ。

龍宮真名

主 ワイルド・シュタイナー

名前表記 A R C A N A M A N A

称号 S N I P E R ・ C O V E R E D ・ S K U L L …… 《骸骨被りし  
狙撃手》

色調 N I G R O R (黒)

徳性 T E M P E R A N T I A (節制)

方位 C E N T R U M (中央)

星辰性 C R U X S E P T E N T R I O N A L I S (北十字星)

アーティファクト アクウチヌクガイコツノマジユウ…… 《悪撃ち抜く骸骨の魔銃》  
…… スカルマグナム。

自動追尾弾を撃ち、狙った獲物は決して外さない。

撃つ時には音が無く、一秒間に1000発まで連発できる。

ガイコツトシユウエンノキオク…《骸骨と終焉の記憶》  
…スカルメモリ。

腰に装備したロストドライバーにセットされており、身体能力を数十倍、特に視力をUPさせる。

終焉の記憶を持っており、マキシマムドライブした相手を活動停止させることができる。

相坂さよ

主 ワイルド・シユタイナー

名前表記 SAYO AISA KA

称号 DEATH・OR・LIFE・TIME・PASS・TEN  
DER・GHOST 《生死の時間渡る優しき幽霊》

色調 ALBUM (白)

徳性 CARITAS (愛)

方位 SEPTENTRIO (北)

星辰性 NEPTUNUS (海王星)

アーティファクト オンネンモチシセンシノオビ 《怨念持ちし戦

士の帯》

…幽汽ベルト。

仮面ライダー幽汽に変身するためのベルト…だが、さよが使った、擬人化した幽汽の様な姿となる。

身体能力がUPするが、さよは幽霊でもあるので、重力を完全に無視した戦法を行う事ができる。

トキワタルユウレイレッシャ 《時渡る幽霊列車》

…幽霊列車。

幽汽や、死郎が乗っていた幽霊列車。時間移動と、瞬間移動の動きスピードで移動することも出来る。

くアーティファクト設定く（後書き）

………生徒以外で、あと一人と仮契約させようかな、と  
考えてたり……。

某戦闘狂……かもね？

第十八話：図書館探検隊…前編…（前書き）

ユニークアクセス12000突破、ありがとうございます！

第十八話：図書館探検隊…前編…

ワイルド side

「……………オレ……………最低……………」

オレは、昨日一日にして、生徒三人の唇を奪った事に絶望していた…。

「気にしないでくださいよ、先生……………あの、嫌じゃなかったですし……………」

「ガアアアアアアアウウウウウウ！！！！！！」

さよが頬を染めてそういうのも聞こえず、オレは床を転がりまわる。

「そうそう、いいじゃん、若い果実一人占めだよー？」

「それ、先生、問題ある…！！」

「…というより…ワイルド兄ィ、図書館探検部に付いていくとか…  
言っただけでいいかい？」

ちなみに、今日は日曜日で昨日から朝倉と真名は一緒にいる。

「ガ…！！急いで、行く！！」



確か……あ、後、五分?!

「間に合わない……………あ、さよ!!アーティファクト!」

「あ、分かりました!出でよ<sup>アデアット</sup>…幽霊列車!」

さよがカードを掲げて言うと、庭に…先頭車両が骸骨になった、S  
Lの列車が現れる…

「これ、乗っていく!」

「はい、行きますよ。」

オレが列車に飛び乗ると、なぜか車掌の恰好をしたさよが、一緒に  
付いてくる。

ブロオオオオン……………!

汽笛が鳴ると、ゆっくりと列車は発信する…。

「目的地、図書館島、図書館島」

「急ぐ!!」

そういつて、列車は走っていく……………

「ふう…大変そうだねえ。」

「しかし…アーティファクトをあんな風に使つとは…。」

龍宮さんが、軽く頭を抱えてそういう。

「そう？結構楽しそうだったけど…あ、せつかくだし…見ない？」

「なにをだ？」

「図書館探検を…よ。」

【BAT】

私はそういって、 Gizメモリをバットショットに差し込み、ライブモードにする。

「先生を撮ってきてねー。」

Pippi!

そう反応すると、バットショットは飛んでいく…。

「さ、映像家のTVで見よ？」

「全くお前と言う奴は…。」

そういつて、龍宮さんは家に入っていく。

「いいじゃない。だって……」

お互い、好きな人の事はずっと見ておきたいもの……でしょ？

ワイルド      s i d e

「…ごめん、遅れた!!」

ギリギリで、なんとか図書館島にたどり着いたオレだが……視線が、ちよつと痛い。

「遅かったですね、先生。いえ、私は、気にしてないです、よ……?」

主に、綾瀬の視線が。

「私は……気にしてないですからね?」

「うちも、ちよつとぐらい平気やでー。」

「そうそう……ゆえっちも、一分ぐらいいいでしょ?」

ちなみに、上から、宮崎・近衛・早乙女……である。

ええ娘たちや……。

「全く……お詫びに、なにかおごつてください。」

「あ、なら…これ、あげる。」

来る途中…というか、幽霊列車に付いていた自販機で売っていた缶ジュース…

「おお…これは…?!」

「【蟹ソーダ・刑事味】。飲むと、自業自得になる、聞いた。」

「…あとで、ありがたく頂きます。では、行きましょう。」

「ガル」

気分が治ってくれてよかった。

……………ちなみに、あれ以外にもジュースはあった。

【ノリダーサイダー】

【ゆるさん汁】

【コレ、ノンデモイイカナ】

【虎太郎ミルク】

【藻コーラ】

【イクサイダー・753味】

【ナオミコーヒー】

【渡製・バイオリンのニスジュース】

【笑いのツボ茶】

【テラーの搾り汁】…等があった。

何だ、このネタライダージュース祭りは……

それは兎も角、オレ達は図書館探検に向かう……。

第十八話：図書館探検隊…前編…（後書き）

ネタライダージュース……個人的には、あったら買いたい。

他に、ネタジュースの案ある人！。

第十九話：図書館探検隊…中編…（前書き）

PV10万ありがとうございました！！

第十九話：図書館探検隊…中編…

ワイルド side

現在、地下三階。

「さ…ここからは、結構トラップがあるですよ。気をつけてください。」

「…一応、ここから、入る、駄目。」

「先生、言わへんやろ?」

「言わない…ガウ。」

「………まあ、いいか。」

「危ないの、ない?」

「あ、そこは大丈夫です。先生と一緒に、いつもいけない階層までいけるので、装備はばっちりです。」

「おー、さすが。なら、安心していけるな………」。



……それならと 思っていた時 ありました。

あ、思わず一句読んでしまった。

…正直言うと、ここから先はきつかったです。

俗に言う、「絵にもかけない」とか言う奴ですね。これ、挿絵なしの小説だけだ。

試験的に、いろいろあった騒動の一部をお見せしよう。

「…先生、そこから竹やりが!」

「が、ガウツ?!」

「おお、マトリクス!」

「次は矢です!」

「ウウツ?!」

「今度は口でキャッチ…さすが先生!!」

「わー。次は十字架、いっぱい落ちてきたでー。」

『俺は名護だ!』『俺は名護だ!』『俺は名護だ!』『俺は名護だ!』『俺こそは名護だ!』『俺だけが名護だ!』

『俺は名護だ！』 『なら俺は名護だ！』 『ナズエミテルンデイズカ、  
ダディーナズアン！』

「イクサアアアア！！」

「先生が変な感じで叫んだ！！って言うか、最後の何？！」

「キヤー！次は…蛇ですつ！！」

『イライラスンダヨ。』 『イライラスンダヨ。』 『イライラスンダヨ。』

『イライラスンダヨ。』 『ザヨゴー！』

『イライラスンダヨ。』 『イライラスンダヨ。』 『コレクツテモイ  
イカナ？』

「アサクラアア！！」

「え、朝倉？！」

…以上、あったことでした。

大変だった…というか、ギャレンと王蛇とイクサとブレイド…どっ  
から出てきたよ。

「ガルウウ……………」

「あー、先生が、たれ先生やー」

「可愛い…かもです。」

あー、その二人、俺を突っついて遊ぶな……。

「しっかし……ここ、今何階？」

「ガル……結構深いところ。」

「地下……六階あたりのはずです。」

早乙女が、若干疲れたのか、ウイダーンゼリーを飲みながら言い、綾瀬は特に疲れた様子も無く、先ほどあげた【蟹ソーダ・刑事味】を飲みながらそういう。

結構、美味しそうに飲んでいるが……。

「それ……本当に美味しい？」

「ええ。口の中がカオスですが。」

「カオス。」

「カオスです。」

……まあ、いい。

とりあえず、もう少しだけ休憩したら、行くか……

「わー、なんやろ、これ……」

「面白そうですけど……」

「ウウ？コノカ、ノドカ、なにか見つけた？」

俺が近づくと、二人は本棚に挟まった一冊の本を見せる。

「この本の背表紙な、日本語になんやよう分からん字で振り仮名ふってあるんや。」

「で、見たことも無いので読んでみたくて…。」

「ガル…タイトルは…」

【名護啓介自伝・バウンティ―ハンター名護】。

「読みたい。」

思わず、その本を本棚から引き抜く…すると。

…カチッ

「」「…あ。」「」

俺、宮崎、近衛が、「やっちゃった…な。」という顔をする。

「……どうしたの？」

「ま、まさか…。」

早乙女が不思議そうにこちらを見て、綾瀬は俺達が何をしたのか気づいたようだ…。

そして、パカリと俺達の足元が開く。

「…ゴメンナサイ。」

「……先生の馬鹿アアアあ!!!!」

俺が落ちながら一度謝ると全員がシャウトする。

朝倉 side

「アツハハハハハハハハ……!!!!!!」

「大爆笑だな…朝倉。」

私が、大爆笑していると龍宮もクスクスと笑いながらそういう。

「いやー…だって、面白いじゃん。」

「だからと言ってだな…。というか、今ワイルド兄イ落ちてるぞ。」

「それはそれで面白いじゃない…。」

「面白いじゃない!」「面白いじゃない!」

机の上に置いていたフロッグポッドが、先生と、さよちゃんの声で  
そういう。

「……あ、そういえば相坂さんは…?」

「あ、帰ってないね…。」

…ま、いいか。と考えに終わりをつける。

「ま、これ見てようよ。面白そうだし…え？」

TVを見ると……そこには、図書館探検部と一緒にいる先生…そして一匹のドラゴンが…。

「……………麻帆良って、いろいろあるんだねー。」

第二十話：図書館探検隊…後篇…（前書き）

ジュースのアイデア、出来るだけ採用して、本編に出していきま  
す。

第二十話：図書館探検隊…後篇…

ワイルド      s i d e

オレ達は、先ほどの罫により、一気に最下層まで落ちていた…。

そして。

「ワイルド・ワイルド・レジェンドル！火の精霊11柱 集い来たり  
て敵を射て！！破壊者の射手！！」  
デイモン・マギカ

ギヤオオオオオオオオオオ！！！！

目の前には……巨大な体を持つ、魔法世界最強の種のひとつ…ドラ  
ゴンが、いた。

今打った魔法も、ドラゴンブレス竜の吐息で、軽く阻まれる。

「グルルルルル…！！」

幸い、図書館探検部の皆は眠っている…というか、落ちたショック  
で気絶している。



…ちゃんと、全員キャッチしたし…無事…だよ。

グオオオオオオオオオオ！！！！

ドラゴンも、完全に敵対反応だし…やるか。

「アアアアマアアア…「せんせーっ！！！！」…さよっ！！」

ギャオオオ…！！！！？？

オレが叫ぼうとした…そのときに、いきなりドラゴンの頭上から、幽霊列車が現れて頭に突進する。

「だ、大丈夫ですか?!」

「お前こそ…。」

「わ、私がこの子を倒しますから、皆さんをお願いします!!」

さよは片手に、海賊の船長が被る様な帽子をずらして被り、列車のレールの様な赤色のマフラーをつけ、全身には黒色の鱗を象った鎧。

腰には、黒色の丸の中に丁字がはまった様な形をしたバックルと、

横にはサヴェジガツシャーをつけた幽汽ベルト…。

そして、幽霊列車に笑顔で乗ったさよの絵が描かれた仮契約カードを構える。

「ガ…サヨ?!」

「アテアット  
出でよー!」

そついうと、腰には幽汽ベルトが現れ、さよの手にはパスが握られる。

「変身!」

《HIJACK FORM》

その音が響くと、さよの姿が、仮契約カードに描かれていたものと同時に、変身する…。

「行きます…!」

幽汽になったさよは、ドラゴンに拳を振り上げて走る…

「っ、サヨ!駄目…!」

慌てて、俺が止めようとするも、さよは止まらない。

「らいだぁ…ばんち!」

さよが、ドラゴンの腹を思いきり殴ると…ドラゴンの腹が、陥没する。

「…ガ、ウ？」

グギヤアアアア！！

「らいだぁ…叩き！」

サヴェジガツシャーハルバードモードを両手に持ち、苦しんでいるドラゴンの頭に思い切り峰打ちで振り落とす。

グオ…?!

「最後の技…行きます！」

《Full Charge》

ベルトから、黒色のフリーエネルギーが、さよの脚に伝わっていく…。

「らいだぁ…きつく！」



「トモダチ…ですか？」

「ガル。じゃ、よろしく！」

「…はい、分かりましたよう…あ、晩御飯は焼き魚か煮魚のどっちがいいですか？」

「煮魚。よかつたら、サバ。」

「分かりましたー。じゃ、門限は6時ですよ？」

そついうと、さよは列車に乗って帰っていく…。

「…ガル。いい加減、出てくる。」

オレがそう声を投げかける…と、奥の扉をすりぬけて、フードをつけた一人の男が出てくる。

「見てみたかったんですよ、貴方の従者の戦闘。…ま、最初は貴方の戦闘でしたが。」

「…さつさと、最初から出てくる。面倒臭い…。」

オレが呆れて言うと、相手の男もフードをとって、こちらに笑いかける。

「それにしても…お久しぶりですね、ワイルド。」

「ガウ。久しぶり…アル。」



と、そのドラゴンの前にワイルド先生が立ち…手から不思議な矢の様な物を飛ばしたです。

あれは…まさか……………

さよさんも関係しているようですし…と、思っていたらドラゴンは、その間に倒れていました。

その後私達は抱えられて、幽霊列車の様な物に乗せられました。

「……………ワイルド先生…貴方はいつたい……………」

そう呟きましたが、誰も答える人は…いなかったです…。

第二十一話・図書館探検隊…おまけ…（前書き）

ジューズ案、ありがとうございました！



第二十一話：図書館探検隊…おまけ…

ワイルド            s i d e

オレは、列車の中で売っていた缶ジュースを飲みながら、クウネルと談笑している。

「しかし…久しぶりですね、ワイルド。何年ぶりでしょうか？」

「多分、10年ぶり？」

「あなたは老けませんから、違いが良く分かりませんよ…あ、老けたと言えば、やっぱりタカミチですかね。見ましたか？」

「見た見た！あれ、ガトウそっくり！」

「ええ…リスペクトって、すごいですよね…。」

「確か、煙草最初はすって無かった気、する。」

子供の事は、小さいネギみたいな子だった。

「はい。貴方と別れてから姫御子に頼まれて、吸い始めたんですよ。」

「ガル…モーラから聞いてた、あの子？」

「その通りですよ。モーラさん、貴方の事となると、一生懸命ですから。」

「トモダチ、だから！」

「…貴方は、もうちょっと乙女心を勉強しましょう。」

「クウネル…お前、言う？」

「…多分、「お前が言うか？」という意味なのでしょうが…ええ、言いますよ。というか私は、分かった上でいじったり無視したりするのですよ。」

「タチ悪い。」

…と、そこでいったん話に区切りをつける。

一度、飲むと地獄をみるという地獄飛蝗茶・兄（抹茶）をオレが、地獄飛蝗茶・弟（烏龍茶）はクウネルが飲む。

「しかし…これ、案外美味しいお茶ですね。口の中は地獄ですけど。」

「…いいよなあ…お前は…普通に、烏龍茶で…。」

抹茶をグビリと飲むのはきつかったので、他に持っていたブレイドジュースを飲む。…あ、ソーダだ、これ。

「デイモ、ナンディコンナトコロニヒメガイルンディズガ、カウネ

ル！」

「口の中がオンドウルですね…えっと、「でも、なんでこんなところに姫がいるんですか、クウネル！」…ということですか？」

「ガウウ。」

あ、うなり声すら軽くオンドウル。

…地獄飛蝗茶のノフィ様、ブレイドジュースの十六夜セレナ様、アイデアありがとう！

…空気読んでない気がするし、メタ発言、控えようかな…。

と、オレが思っていると、クウネルは俺があげたもう一本のジュース【スイーツの極彩色クリームソーダ】を飲んでからため息をつく。

ジュース好きだな、クウネル。

「ちょっといろいろありまして…全部、聞きますか？」

「…聞く。」

「実は、ですね…。」

そして、クウネルは話し始める…

大戦後はしばらく「紅き翼」と行動を共にした後、麻帆良学園に預

けられてタカミチの庇護の下で普通の少女として生活していたということ。

過去の記憶をタカミチに封印されているため、魔法世界との直接的な関わりはナギ、ラカン達「紅き翼」の面々の昔話や明日菜の過去夢として断片的に描かれる程度…ということ。

「…ということなのですよ。分かっていただけでした？」

「大戦後…オレ、基本、世界ブラついてた。」

そういえば、そんなイベントも無しに、紛争地帯で大暴れしてたな…懐かしい。

「だから、知らなかったんですね…。あ、知らないと言えば…詠春、結婚したって知ってました？」

「ガウ?!あいつ、結婚できた!？」

「ええ。婿入りしたんですよ。確か、娘もこの学校にいましたよ。コノカ…とか言う名前でしたね。」

「……………」

…まさか……………ねえ。

オレ、原作のキャラの事は基本覚えてないんだよ…。

「…どうしました?まるで、「絶望したっ!」って顔してますよ?」

「さっき落とした子…」コノカ。

「……………」

「……………」

「骨は、拾いますよ…。」

「言わないで!!」

詠春、怒ると変な迫力があるんだよ…。

「…あ、ところで。先ほどから気になってたんですが…。」

「なに?」

「それ、貴方の使い魔ですか?」

クウネルがオレの背後を指差す。

使い魔はモーラしかないが…と思いつつも、指差した方を見る  
と……………」

P i p p i p i

…バットショットがいた。

「…まさか。」

オレは、そのままバットショットを素手でつかむ。

B i b i !

「…帰ったら、覚えてる…。」

レンズ部分にそういうと、オレはバットショットを放す。

「…オレ、そろそろ行く。」

「ああ…ちなみに、今6時ちょうどですよ。」

「門限が…！」

オレは、慌ててダッシュで帰る！！

遅れるとな…遅れるとなあ…！！！！

さよが…涙目で説教してくるんだよ！！

「頑張つて下さいね。」

クウネルは、キャベツジュースを飲みながら手を振る…。

注：その後、帰るときよが半泣きで怒り、必死に謝り倒した。

真名と朝倉は、説教した後に寮に返した。…なんか、説教された相手に説教するって変な感じだった。

番外編：修行するA達ノガジェットにはご用心。(前書き)

PV145000とユニークアクセス12000、ありがとうございます！



番外編：修行するA達ノガジェットにはご用心。

ワイルド side

さて…今日は、さよと朝倉に魔法を教える日だ。

「ガウ、とりあえず、この杖持つ。」

二人に、初心者用の杖を渡す。

「へー…まずは、形から入るタイプ？」

「かっこいいですねー。」

二人が何か言っているが、気にせず説明を続ける。

「それ持って、呪文言う。最初は、「プラクテ・ビギ・ナル 火よ灯れ」、言う。」

「えっと…プラクテ・ビギ・ナル 火よ灯れ。」

「プラクテ・ビギ・ナル…火よ灯れ。」

二人がそういうと…一瞬、プスリと音がして、うっすらと煙が出る。

「ありゃりゃ…出来ないね。」

「残念、です…。」

二人が、ちょっと悔しそうに言うが…。

「煙出ただけ、すごい。これできる、普通一年かかる。」

「お。なら、私達有望株？」

「なら…頑張ってみます！」

そういつて、二人はまた、呪文を唱え始める…。

〈一ヶ月後〉

「先生、見てみて！」

「ガウ？」

今日は、魔法生徒が誰かについて話していると…朝倉が、杖を持って話しかけてくる。

「話、聞く…。」

「いくよ？プラクテ・ビギ・ナル 火よ灯れ！」

そうあさくらが唱えると…杖の先端に、火が灯る。

「…ガル。」

「ね？ね？すごいでしょ？」

「…すごい。」

正直、ここまでできるとは…すごい。

「わ、私もできましたよ！プラクテ・ビギ・ナル…火よ灯れ！」

さよも唱えると、杖の先端から…鬼火並の大きさの蒼い炎が出る。

「ガルウツ！？」

「すごくないですかー？」

さよが誇らしげに言うが…これもっ、攻撃呪文だよな？

「すごい…。」

「なんで…こんなにいけるの？」

「多分……幽霊時代、長かったから。」

暇な時間が長かったからか、ああいう事を習得するのは早いのだろ  
う。

というより……あのアーティファクトの戦闘力と、魔法の力があれ  
ば……鬼の様に強い。

「…あ、今思い出した…カズミ、アーティファクト、どんな？」

「あ、私の？えっとね…<sup>アテアレット</sup>出でよ。」

朝倉がカードを掲げてそういうと…何体もの、メモリガジェットが現れる。

「ガル…数だけ、多い。」

「結構強いんだよ？えっと…これだね。」

朝倉はフロッグポッドに、一本のガイアメモリを差し込む。

《LIE!MaximumDrive!》

「一発、どうぞー！」

「ワールド・シュタイナーは、相坂さよの事を愛している。」

その音声がフロッグポッドから聞こえる、と…。

「……………サヨ。」

「？先生…？」

オレは、ゆっくりとさよに近づき...

「愛してるー!ー!」

「ひゃ...キヤアアアア?」

オレは、衝動的にさよに抱きつく。

さよは、顔を真っ赤にして驚く。

「愛してる愛してる愛してるー!」

「せ、先生...私、心の準備が...」

さよに頬を磨りよせて抱きついていると、さよは照れながらそうつ  
う...ああ、そんなところも愛してる!

「...いい加減、ストップ。」

《LUNA! Maximum Drive!》

P i p p i p i ! ! !

「ギヤアアア!」

「せ、せんせー!ー!」

バットショットから、ガイアメモリの力を無効化する光線が放たれ、オレは正気に戻る。

「ガル…？オレ、何してた？」

「いやぁ…まさか、ここまで効果があるとは思ってなかったよ。」

「ウウ？」

オレが首をかしげると、朝倉は軽く睨んできて…

「…とりあえず、さよちゃん離そうか？」

「…あ、ゴメン。」

なぜか抱きしめていた、さよを離す。

…何だろう、ちょっと残念そうな顔をしていた気が…気のせいだな。

俺達はいったん、家の中に戻り、紫蛇のエキス（オレ）、タイガージューズ（朝倉）、手塚のおいしい水（さよ）を飲みながら、話し始める。

「さっきのが、私のアーティファクトの能力の一つ…数十秒間、相手を催眠状態にする、って感じかな？ま、ライアーメモリ以外にも

バイラス、アイスエイジ、ヒート、サイクロン、トリガー…とかいろいろあるけどね。」

「…実は最強、カズミ?」

「どっちかっていうと、遊撃タイプだけどねー。」

「…こう考えると、バランス取れてますよね、私達…。」

「ガウ?」

おいしい水を飲みながら、唐突にさよが呟く。

「だって、前衛の私と先生、遊撃の朝倉さん、後衛で銃売ってくれる龍宮さん…ほら、ゲームのパーティーみたいじゃないですか。」

「…確かに。」

「オレ、頑張れば後衛も遊撃もいける。」

「それで、頑張らなくてもいいのがいいんですけどねえ…あ、もう一人後方支援とか、そういう人が入ったら、便利じゃないですか?」

「ガル。本当に。これで、戦闘訓練もできる。」

「あ、いざとなったら私、ファングとエクストリームでドーパントになるよ?」

「ガル、それ便利そう…。」

…と、そんな会話をしながら、今日はゆっくりと過ごした…。

ああ…原作開始って…もう少しだったっけ？



番外編：修行するA達ノガジェットにはご用心。(後書き)

ちなみに、ジュースの好みは

ワイルド：スイーツの極彩色クリームソーダ

さよ：手塚のおいしい水

朝倉：電波ドリンク・タツクル

真名：吾郎ちゃん特製ジュース

…それでは。

番外編：修行するA達／野獣VS弟子

ワイルド side

突然だが…明日から、いよいよナギの息子…ネギが、学園に来る日だ。

だいたい数カ月の間、時間を短くするために、時の砂漠で訓練をしたので、朝倉もさよもなかなか強くなった。

という訳で…今日は、三対一の模擬選をすることになった。

「ガル…オレ、アマゾンにしか変身しないから、安心。」

「私達は、魔法も変身もありなんですね？」

「ガウ。」

そういうと、三人は少し笑い、それぞれ、一度距離をとる。

ちなみに、ここはキャツスルドランの一部。

「よし…じゃ、いくよ?」

「ガウ。」

「」「」変身!!」「」

《HIJACK FORM》

《SKULL》

《FANG》

「アアーマアゾオンツ!!」

オレはアマゾン、さよは幽汽、真名はスカル、朝倉はファング・ド  
ーパントに変身する。

「じゃ…いくぞ。」

その瞬間、オレはスカルに向かって走り出す…

「やっぱり、後衛はうざいよね…っど。」

《TRIGGER!MaximumDrive!》

「トリガーソニックシュート!」

フロッグポッドから、トリガーメモリによって音の振動派が放たれ

る。

「ケケッ！」

オレはそれを鬼火で消しさり、朝倉にジャガーネイルを飛ばす。

「らいだぁ…撃ち！」

打った瞬間を狙って、さよがサヴェジガッシャーでワイルドショットを撃ってくる。

「大切断！」

「そこで隙有り…だよ。」

《SKULL! Maximum Drive!》

オレが飛んできたエネルギー弾を切断すると、後ろから真名の声と、ガイアメモリの音声が聞こえてくる。

「ドラゴンライダー…ガウ?!」

オレが垂直に跳び、半回転して後ろにドラゴンライダーキックを決めようとするが…そこにいたのは、フロッグポッドだけだった。

「ガジェル・メモリア・ジャナリラウ。契約に従い我に従え、炎の霸王。来たれ浄化の炎、燃え盛る大剣。ほとばしれよ、ソドムを焼きし火と硫黄…」



一瞬で、オレの体に雷撃が落ち、動きが止まってしまつう。

「逝つてくれ。」

《SKULL! Maximum Drive!》

「スカルパニツシュメント…!!」

「グ…ガアアアアア…!!」

オレは、雷撃と終焉の記憶を持つ銃弾を喰らい、爆散する…!!

「…ガウ、皆、強くなつた…!!」

「そりゃ…あれだけ修行すればね…。」

オレが寝めると、朝倉はげんなりした様子で答える。

……………え？さっきのですか？ジェミニゼブラのカードですが。

「…あ、そういえば…明日からだっけ？ワイルド兄ィの親友が面倒みてた…その、子供教師が来るのは。」

「ガル。ネギ・スプリングフィールド言う。」

「ネギですか……あ、今晚、冷ややつこでいいですか？」

「楽しみ」

さよ…最近は完全な主婦である。

さよはオレの嫁…!

「じゃ…明日から、楽しみだね。」

「ガル…あ、そういえば、二人にプレゼント。」

そういつて、オレは朝倉とさよに、二本のペンを渡す。

「あれ？これ…万年筆、だよな？」

「私のは…ペン回ししやすそうなのですね。」

「それ、魔法の発動体。それ、杖の代わり。免許皆伝。」

「…おお。ちょっと、感動…かなあ」

「大事にしますね！」

二人は、軽く頬を染めながら、喜んでくれる。

喜んでもらえたなら、作った甲斐がある…あ、ライダーマンのオペレーションアームで作りました。

「そういえば…ワイルド兄イの使い魔も一緒に来るんだって？」

「ガウ。モグラの使い魔。」

「名前は…モーラさんとか言いましたっけ？」

「ガウ…久々に、シンユウ、会える。」

「おや？トモダチじゃ…無いのかい？」

「あいつとオレ、すごい友達。それ、シンユウ、言っらしい。」

久々に会えるのは、正直楽しみだ。

モーラにも、連絡しとかないとな…。



**番外編：修行するA達／野獣VS弟子（後書き）**

朝倉の発動キー「ガジエル・メモリア・ジャーナリラウ」

さよの発動キー「ゴストル・アライブ・リガイスト」

正直、パツと思いついたのを書きました。

第二十二話：久々に会うと、印象変わる人と、全く変わらない人の二種類がある

ネギ            s i d e

僕の名前は、ネギ・スプリングフィールド。

今日から、メルディアナ魔法学校の最終課題として、日本の麻帆良学園で先生をやる事になりました！

でも……………なんで、こんな事に……………。

「ここは子供ガキは入って来ちゃいけないの、分かった？」

僕が来るはずの学校について、せっかくアドバイスしてあげたのに…

気づいたら、頭をわしづかみにされて、持ち上げられてたんだ。

日本の女の人は親切で優しいって聞いてたのに    っ！

「いや、あのボクは…」

と、そこで後ろから来た人が、ボクの頭をつかむ女の人の腕をつかむ。

「あつちやあ…すまないねえ、嬢ちゃん達。この子、変に知識持ってるわりには、思ったことペラペラ言うもんだから…」

「な…何よ、あなた…。」

「お姉ちゃん…！」

そこには、長い金髪と、体操服の様な不思議な服を着る、僕のお姉ちゃん…モーラ・シユタイナーがいた。

「あ、私はこの子の保護者さね。今日から、いろいろここであるもんだから、ちょっとね…。」

「…って言うか、貴方も女子中等部じゃないでしょ？早く、自分が行くべき場所に行ったら…。」

「いや！その子はここであってるよ…アスナ君。」

「ガウ。アスナ、離す。」

と、その声の方を見ると…そこには、二人の男の人が。

片方の人は知ってるけど…と、そこでボクの頭をつかんでいた手が放されて、地面に落ちる。

「タ、タカミチ先生?!」

「あ、ワイルド先生やー。」

「タカミチ！久しぶり!!」

「…ワイルド。」

そこにいたのは、ボクの知り合いの、タカミチ。

…あれ、今、お姉ちゃんも何か言った…？

「ようこそ、麻帆良学園へ。いいところでしょう？」ネギ先生。「」

「え……せ、先生？」

「あ、ハイ、そうです。」

ボクは、一度咳払いをして、まっすぐに立つ。

「この度、この学校で英語の教師をすることになりました。ネギ・スプリングフィールドです……」

「え…ええーっ?!」

二人の女の人は、声をあげて驚く。

「ちょ、ちょっと待ってよ、先生ってどういうこと?! あんたみた  
いなガキンチョが…」

「それに、英語の先生は、もうおるでー?」

「ええ?! ちょっと…お姉ちゃんもなんとか言って…。」

そういつて、後ろを向いたら…

「え…お姉ちゃん？」

そこには、もうお姉ちゃんはいなかった。

「ちょっと、聞いてるの?!」

「うわああっ!」

と、みているといきなり頭をつかまれて、無理やりそちらを向かされる。

「だいたいアタシはガキがキライなのよ!!それに………」

お姉ちゃん…?」

ワイルド      s i d e

「久々…モーラ。」

「全くさ…数年ぶりだね?」

オレとモーラは、まるで恋人の様に連れ添って、歩いている。

数年ぶりだが、モーラは全く変わっていない。

まあ、元が機械では仕方ないが…。

「ちょっと失礼な事考えてないか？」

「全然。」

…まあいいや。

それからオレとモーラは、今までの事を話し合う…

「悪魔に襲撃された時、ソウコウアニマルでぶつとばしてさー。あれは気持ちよかった！」

「ガル…最近、マジン使ってないな…。」

「そついやさ…こつちは、いろいろあったんだが、そつちはなんか変な事あったかい？」

「ガル…。…あ。三人と、仮契約した。」

オレがそついうと、モーラはピキッ、と額に青筋を立てる。

「…まさか、この学校の…？」

「ガウ。」

それが肯定の声だと分かると、モーラはいきなり肩を組んでくる。

「へえ…私じゃ、満足できないってか？」

「そんなこと、無い…。」

「昔は、夜も一緒に寝た仲だろっくに…寂しいねえ。」

そういうと、モーラはオレに唇を重ねてくる。

「久々なんだ。やらないか…?」

「ガル…もちろん。」

ゆっくりと、抱きあう様にして俺はモーラに近づく。

そして……………

一瞬で、お互いを殴り飛ばす。

「殺し合い…!」

オレ達は殴った反動で距離をとり、お互いに変身音叉を取り出し、構える。

「歌舞鬼…!」

「響鬼…!」

オレの体を桜の花びら、モーラの体を炎が包むと…………俺は、非対称

の二本の角を持つ戦国の鬼、歌舞鬼カブキ、そしてモーラは響鬼ヒビキに、変身する。

「さあ…殺りあおうか!!主様!!」



第二十二話：久々に会つと、印象変わる人と、全く変わらない人の二種類がある

部活も終了し、頑張つて書いていきますよ。

そして…生徒はもうしませんか、あと一人…仮契約する予定の人がいます。

月詠Or千草…どっちがいいですかね？イメージは、決まりかけてますが…

どちらのアーティファクトも、イメージできてるので、よかったらどちらがいいか教えて下さい。

多かった方を、採用していきますよ…？

第二十三話：喧嘩をやり終わったらスッキリする人ってヤバイ人じゃないか？

PV15万、ユニークアクセス17000、ありがとうございます！

月詠：2票

千草：1票

第二十三話：喧嘩をやり終わったらスッキリする人ってヤバイ人じゃないか？

ワイルド side

「はアツ！…鬼火！！」

「甘い甘いつ！！障壁突破…石の槍！！」

響鬼が口から火を吐くと、モーラは音撃棒を杖代わりに、魔法で攻撃してくる。

「ガア…ッ！」

「へへん、あたしだって、成長してんだぜ？」

「へん…胸とか？」

「どこ見てんだ、お前はっ！！」

適当な軽口なのに…鬼爪、痛いです。

「あたしの魅力に悩殺ってか？お前、そういうタマじゃねえだろ…」

「その姿（響鬼）でセクシーポーズはやめろ…なんか、絶望する。」

「うるせえ。」

「おいおい…お前が誘ったんだろ…っと!!」

響鬼は、音撃棒から火炎弾を放つ。

響鬼はそれを右腕から延びる触手で撃ち落とす。

「さて…そろそろ、本気で来いよ。」

「おう。」

そういうと、二人は同時に、アームドセイバー装甲鬼刃を構える。

「響鬼、装甲。」

「歌舞鬼、装甲。」

そういうと、二人は同時に炎に包まれ…

響鬼は、金色の武者の様な装甲と二本の角、「甲」の字の額当てを  
持つ戦士…アームドヒビキ装甲響鬼。

歌舞鬼は、緑と赤色、銀色の左右非対称な騎士の装甲。二本の角は  
大きく巨大化し、「甲」の字の額当てを持つ、正史では有り得な  
つた戦士…アームドカブキ装甲歌舞鬼。



そして……音撃が破裂し、二人が吹き飛ばされる。

モーラ side

…あたしは今、地面にぶっ倒れている…。

「ワイルド…お前、強くなったなあ…。」

「ガウ…モーラも、強くなった。」

「何言ってるんだよ…最終的にや、お前が峰打ちしたさろ?」

「ガウウ…正直言うと、一瞬だけ、意識飛んだ。」

「ああ…なるほどねえ。」

そこで、二人は笑いあう。

「あー…楽しかった。」

あたしは、体を伸ばして、ぐったりとそういう。

「久々に、全力出した…こんなの、モーラにしか、できない!」

「そりゃあ…ね。ああ、いい気分…こんなときに、酒があったら、最高だね…。」

「…その前に、服着る。」

そう言われて、自分の体を見ると、戦いの余波か、それとも変身の副作用か、真っ裸の姿だった。

「ありやりや…こりゃあ、外行きたくないね…ワイルド、服貸せ。」

「ガウ…はい。」

と、ワイルドが投げてきたのは…よくワイルドが着ていた、迷彩柄の上着と短パン。

「女にこれ、着させるか？」

「ガウ…モーラだから、平気。」

「どーという意味だ、おい。」

言いながら、あたしは服を着る…なんかこれ、水着みたいだな。

「せめて、上着貸せよ…それでお前は、ちょうどいいだろ？」

「…注文、多い。」

そういつても、ワイルドはあたしにスーツの上着を投げってくる。

「つつーかさー。お前、スーツ似合わなさすぎだろ。」

「…自覚してる。でも、一応先生だから…。」

「全く…しゃあないねえ。」

そして、あたしは立ち上がる。

「んじゃ、さつさと立ちな。もう、ネギの坊主は教室にいるころさ…。」

「ガ…先生が、遅れる。」

「ああ…あんたも先生だったねえ。」

「ガウウ…。」

「はいはい、さつさと行くよっ。」

あたしは、唸るワイルドを担ぎ、そのままネギのいる教室へと歩いていく…。

朝倉 side

「……………ふううん。」

「朝倉さん…ネギ先生の事ですか？」

「うん、そう…全く、ワイルド先生形無しじゃん。」

今日、ワイルド先生が言っていたように、新しい子供の先生がきた



…が。英語教師とは…

ちなみに今は、HRの後。

「そうよ！タカミチ先生もいなくなっちゃっし…最悪よ！」

「アスナく落ちつきい。おじいちゃんも変やったけど、年やからしやあないって〜。」

「でも…ワイルド先生、英語教師じゃなくなったら、どうするんだろ？」

「体育教師…？」

「いや、あの先生だと、体育って言うより、サバイバルになっちゃっと思う。」

いろいろとクラスでは言われ放題だけど…先生、ニートになっちゃっかな？

「…ふう。とりあえず、次の授業、始まるね…。」

「あ…そうだったわね。」

そしてまた、授業が始まる…。

「全く…今日から、先生どうするんだらうね？」

「先生、ニートになっちゃいますよ…。」

「本当に、困ったことだよ…一応あの先生、魔法の秘匿とか忘れて  
いるみたいだしね。」

私達三人は、今日もワイルド先生の家へと、修行の為に向かってい  
る…。

「私の情報収集力も、あまり役に立たないしね…。」

バットショットで、ネギ先生を撮ってあるので、監視は大丈夫だが。

「とりあえず、帰りましょう？ワイルド先生、学校じゃなくて、家  
みたいですし。」

と、そんな事を放していると、やっとワイルド先生の家に付く。

「せんせー、ただ今戻り…。」

さよちゃんがそいつってドアを開けると、一瞬固まる。

「あれ？さよちゃん…どうかしたの？」

「なんだか…お酒臭いんです。」

「お酒？」

私達も後に続いて家に入ると…確かに、お酒臭い。あと、奥の方が



私達は、啞然とするしかなかった……。

第二十四話：男女同居って、夢よりも世知辛い現実の方が多い。（前書き）

今回は出ませんが、ネギ達に介入するのは、次回から…。

第二十四話・男女同居って、夢よりも世知辛い現実の方が多い。

ワイルド      s i d e

あの後、オレは酒に酔っていたので覚えていないが…色々あったらしい。

説明によると、だいたいこの四つの出来事があったらしい。

- ・モーラとオレの関係を根掘り穴掘り聞かれた。
- ・全員で酒を飲み、宴会になった。
- ・その途中、タカミチが来て、教師を正式にクビになったということを報告された。
- ・その件でブチ切れたモーラが、タカミチをモザイクのミンチにした。（生きてるはず）

……………あれ、クビ？

「ガウウウ……………!!」

「教師でなくなっただけじゃ…頼むから、槍持って臨戦態勢は、やめてくれ…」

「んじゃ、ワイルドはどーなんだよ…あゝあ？！」

「そうですよ！近右衛門君…見損ないました！」

というわけで……………モーラ達と一緒に学園長に直談判の最中だ。

というか、モーラはすでにヤクザの域だ。

「だ、大丈夫じゃ！ちゃんと、別の仕事を用意しとる！」

「へー……………それが適当な仕事だったら…魔法使いの事、私の情報網使って全世界に発信するよ？」

「それと、その頭に風穴があく事になるよ？」

皆が皆、脅す勢いで直談判している。

ありがたいことだ……………皆、アーティファクトを出しているのが気になるが。

「大丈夫じゃ！ワイルド君には警備員の仕事をしてもらおう！広域指導員との両立じゃが、同じような仕事じゃから、なんとかなるじやろっ！」

「……………ふん、それならいいが。」

「ふう……。」

モーラが納得して、ソウコウ・アニマルをしまつと、学園長も安堵の声を漏らす。

「助かったわい……。」

「あ、そついや聞きたい事があつただけど。」

「なんじゃ？」

「あたしの家とかは、どーなつてんだ？」

そついえば確かに。一緒に来ていた薬味小僧ネギはアスナとコノカの部屋に泊まるらしいが、そこにモーラは無理だろうし……。

「その件に関しては問題ない。ワイルド君の家に住めばいいじゃろ  
う。」

「よし、それならいいな。」

「」「ちよつと待つて……！」」「」

話がまとまりそつになると、さよ達が全員で反論する。



「一緒に住むって…食費とか大変なんだよ?!」

「しかもさあ…なんでわざわざワイルド先生の家?!」

「落ち着いて考えた方がいいぞ、学園長…。」

「落ち着いて考えとるわい!」

あ、ひどい言われよこの学園長が反論を始めた。がんばれ!。

「そもそもモーラ君はワイルド君の使い魔じゃし、一緒に住んでもいいと思っただんじゃもん。」

「もん、って……」

「見た目、考える。」

「このぬらりひょんが……」

…今思っただけど、コノカってまさに『ぬらりひょんの孫』なんだよな…

……あ、百鬼夜行で闊歩する姿、似合いそうだな。

「…じゃ、私達も一緒に住んでいい?」

「……What?」

「なんで、英語、使う。」

「いや、あまりに驚いたもんじゃから…。」

「だってさあ。私と真名さん、ワイルド先生に修行つけてもらった立場だし、一緒にいた方が都合いいでしょ？」

「ふむ。どうせなら、という事が…私は、賛成だな。」

「あたしも、特に問題ないぜ。ワイルドは？」

…なんだか、響鬼の家の話なのに、家主とは違うところで話が進んでいる…。

「問題、ない。」

「ふむ………ならば、それでいいじゃろう。今日から、朝倉和美、龍宮真名、モーラ・シュタイナーは、ワイルド・シュタイナー宅に住むこととする。」

そういうと、学園長は机から出した書類に、ポンとハンコを押す。

「これで…いいんだな？」

「一件落着ですなー。」

…さっき、死ぬほど脅してたのにか…？

まあ、そんなことはさておき…授業に、もどるか………。

……さて。いろいろあった。

…薬味小僧<sup>ネキ</sup>が来てから数日がたった。

ほれ薬事件（薬は、本来性別の無かったモーラが飲み、無効化した）。  
ドッジボール事件（俺が出ていって、大切断の要領でボールを打つたら、向こうが戦意喪失した。ちなみに、クレーターが出来ました）。

魔法の本事件（こっそりついていって、俺がインジビブルの力と、糸使いの技能で本を奪取した。）…等も終わり、薬味小僧は正式な教師となった。

しかし…

さて………もうそろそろ、あのイベントがあるはずだが……

ちなみに現在丑三つ時。そんなとき、響鬼が桜通りのあたりで散歩している。

「エヴァ…ドコニイルノヤラ。」

そう…そろそろ、《桜通りの吸血鬼事件》が起きる頃なのだ。

まだ噂の域を出ないらしい（朝倉調べ）ので、今のうちに会う事が出来れば、問題ないのだが……。

ちなみに今はシンに変身中。

キャアアアアアアッ！！

「ヨウヤク、出タカ。」

オレは、声が聞こえる方へ走りだす…！！

第二十五話・シン……お前は、悪くないよ。悪いのは見た目だけだって。

(前書き

……シンって、不遇なライダーですよ……。

第二十五話：シン…お前は、悪くないよ。悪いのは見た目だけだつて。

ワイルド      side

「キヤアアアッ…！」

闇夜を切り裂くような叫び声。

たつぷりと恐怖を吸い込んだそれは、オレの耳には痛いほど響く。

響く悲鳴は、助けを求める最期の言葉。

「まてーっ…！」

予想していた少年…いや子供の声。

ノドカは恐怖からか気絶し、ノドカへの興味を失った吸血鬼…エ  
ヴァは声の主を見ながら、大きく背後に跳ぶ。

杖に足をかけ、『ラス・テル・マ・スキル…』と魔法の始動キーを  
唱える少年を見据える。

溢れ出る魔力に、潜在能力自体は高いと思っていたが予想以上の高  
さを見せてくれる。

しかし、まだまだ…甘い。

「魔法の射手……戒めの風矢!!」

ネギは、ノド力を庇うように着地をすると同時に、唱えていた魔法を解き放つ。

風のイメージの象徴である薄い緑色の光を帯びた魔力の光弾が、僅かに闇に軌跡を刻み向かい飛び、エヴァへと放たれる。

さて……。解説も、飽きたな。

「……ジャアアアアアアアアアアツ!!!」

オレは吠え声をあげ、空中から急降下し、ライダーキックの容量で光弾を踏みつぶす。

「え?! 僕の魔法を…?!」

「……フン、貴様が…キリングホッパー惨殺飛蝗。」

オレがゆっくりと立ち上がると、ネギは一瞬怯えたように身を引く。

「あ…悪魔?!」

「残念ダガ、悪魔デハナイ…。」

ネギの方を一瞥すると、俺はエヴァの方を向く。

「ココハ、オレノ名ニ免ジテ、オ互イ引イテモラオウカ……？」

オレが言つと、エヴァはばさりとフードを取り、怒った顔で言つ。

「何を言つ！そいつは私が何年も待っていた千の魔法使いの息子だ  
サウザンド・マスター  
！そうそう逃がせるとでも……？」

そういうと、エヴァは魔法薬の入ったフラスコを構える。

「えっ?! き、君は……、エヴァンジェリンさん?!」

「気付イテナカッタノカ。」

「ぼ、ボクと同じ魔法使いなのに何故こんなことを?!」

「この世には良い魔法使いと悪い魔法使いがいるんだよ。……………  
正邪があつてこそその世界だぞ?」

それ以上の問いは必要ない。

そういわんとばかりに、エヴァはフラスコと試験管を引き抜くと、  
その動作のまま投げつける。

二つの魔法薬は空中でぶつかり交じり合つと、新たな力を生み出す  
準備を終える。

「氷結…武装解除!」



発動し合った二つの魔法薬は、吹雪のように指向性を持ってネギに向かう。

敵の装備を解除するための魔法である、武装解除の一種。

……ネギにとって発動媒体である杖を手放すことは、戦えず、すぐさま殺されてしまうことを意味する。

「落ちツケ…二人トモ。」

しかし、オレが間に入り、その吹雪を魔法障壁と、この体で阻止する。

「チツ……あくまで邪魔をする気が、飛蝗<sup>ホッパー</sup>！」

「略スナ……オレハ、タダココデハ戦ッテホシクナイダケダ。」

と、そこで一度言葉を切り、エヴァを睨みつける。

「折角咲イタ桜ヲ、散ラス気力…？」

オレがそういうが…エヴァは気にした様子も無く、舌打ちをして飛び上がる。

無詠唱での飛行……さすが、「不死<sup>マガ・ノスフェラトゥ</sup>の魔法使い」。

「サテ……デハ、オレモイクか…。」

そうして、俺が跳んでいこうとすると…

「ラス・テル・マ・スキル・マギステル……………」

「…狙イハエヴァ…。」

オレがその声に反応し、後ろを向くと…

「光の精霊11柱 集い来たりて敵を射て！！」魔法の射手サギタ・マキカ「！！」

詠唱を終わらせたネギが、腕を向けて……………オレに向けて、魔法の射手を放つ。

「……………デハナクオレカ。……………フン。マアマア…効イタナ。」

「な…?!」

オレの体には魔法の射手は全段命中した…が、その姿は変わらずそこに立っている。

「オレノ皮膚ニハソノ程度ノ魔法ハ効カンゾ…?」

「このっ……………悪魔は、僕が倒す!!」

…ああ、オレを悪魔だと思った訳か…面倒くさい。

と、そこで……………

「何や、今の音?!」

「あっ、ネギ!」

街頭のある校舎の影からコノカとアスナが駆け寄ってくる。

桜吹雪が眼くらましとなって、オレのことは正確に見えてはいないようだ。

「デハナ。若スギル魔法使い…。ナギノ息子ヨ。」

俺はそう言い放つと、シンのジャンプ力で、近くの建物の屋根に飛び乗り、そのままジャンプして跳び去っていく……

ネギ      s i d e

なんだっただらう…今の悪魔は。

まるで…飛蝗の様な。

「ちょっとネギ!!なにしてたのよあんたは!!…って、本屋ちゃん?!」

「ネギ君が、吸血鬼やったん…?」

二人がそういつてくるが…

「スイマセン!二人とも、宮崎さんをお願いします!ボクは、あの吸血鬼を追いますから!」

ネギはそう言うと、すごい速さで駆け出して行ってしまふ。

ネギは周囲に人がいないことを簡単に確認すると、杖に乗って後を追う。

そして、吸血鬼を捕まえるために呪文を紡ぎだす……

「ラス・テル・マ・スキル・マギステル……風精召喚！剣を執る戦友！！」

精霊を、ネギと同じ姿を模して召喚する。

その数は8体。

「……………タッタ、8体力。」

そういうと、その悪魔は立ち止り、腰を深く構え、パンチの体制を取る……

「…真・ライダー……居合いパンチ。」

そして、その吸血鬼はボクに向かって拳を出す……！

第二十五話・シン……お前は、悪くないよ。悪いのは見た目だけだって。

（後書き

一応言っておくと、エヴァはシンが誰か知っているので、あの反応です。

もし知らなかったら……DEATHでしょうね。

第二十六話：女の子を襲った時点で、人間失格だろJK。

ワイルド side

俺は、現れた精霊に向かって、居合い拳の要領で、連続してライダーパンチを放ち、全ての精霊を撃墜する。

「え…精霊が…！」

「コレクライデオレハ倒サレンヨ。」

そついうと、俺は駆け出し、ネギの目の前に立つ。

「…あ…あ…！！！」

「少し、眠ッテイロ。」

首に軽くチョップを決め、ネギを気絶させる。

…ゴキーン、って音出たけど、大丈夫だよね…あれ、泡吹いてる。

「……………マア、イイカ。」

俺はそのままネギを抱えて、アスナ達がいたところに走る。

（ライダー移動中）

「……………気付イテナイナ。」

こっそり見ると、アスナとコノカはあわあわとノドカを運ぼうとしている。

「……………コレデ、ヨシト……………」

ギリギリ見えそうな場所にネギを置き、俺はそのまま逃げる……！

「……………ガル。これで、終わり。」

「あー…それは災難だったね。先生、ドンマイ。」

「シンは…まあ、仕方ないっちゃ仕方ないかね？」

「シン、いい奴なのに……………」

「いや、その時点では、ただ子供先生を倒しただけだろうっ？」

現在、家に帰って今回の顛末を話している。

まあ…エヴァはまた、別の形でネギにアプローチするだろうが。

今回飲んでいるジュースは、

ワイルド：三味一体トリニティジュース

モーラ：電波ドリンク・タツクル

朝倉：2000の味を持つジュース

真名：光太郎のブラックコーヒー

…である。アイデアありがとうね！

ちなみにさよは奥で晩御飯を作ってます。

「メタ発言はやめとけ。」

「あの…先生、そういうのはやめといた方がいいって。ねえ？」

「全く。気にしない方がいいよ。別次元の話さ。」

モーラからの扱いがひどい…あ、ミックスジュースマジ美味い。

「で、さー。これからあんたはどうするんだ？」

「ガル？」

「介入したんだ、エヴァもウザがってんだろ？お前も排除したがるだろうしな…。」

「ウウ…面倒くさいけど、邪魔しに行く。」

「おう…頑張れよ、ワイルド。」



「お前も手伝う。」

「えー。」

露骨に嫌そうな顔をするモーラ……………こいつ、本当に俺の使い魔か？

「んじゃ、私が行こうか？」

と、手を挙げて朝倉が言う。

「カズミ？…平気か？」

「平気平気。私だって結構強いんだよ？」

「ガウウ……………」

なら、仕方ない、かな…。

「……………はい。晩御飯出来ましたよー。今日はビーフシチューです」

「ガウウ」

「はい、皿用意してくれ。」

「今日、パンだっけ？ご飯だっけ？」

「昨日焼いたのが残ってたから、パンだろう。」

……あー。なんか、こづいづのって平和…。

ネギ      s i d e

あの吸血鬼に逃げられてから、エヴァンジェリンさんに呼び出され、決闘を申し込まれた…。

でも、自分の生徒と戦うなんて…

そう思っているとき、オコジヨ妖精のカモ君が麻帆良学園に来てくれたんだ。

「でも、自分の生徒を襲うのかい？」

「何言ってるんだ兄貴！向こうは600万ドルの賞金首だぜ！！まずは、戦力をそぐんだ！！」

そして…茶々丸さんを、襲う事になってしまったんだ。

「ボクを襲う事を、やめてもらうことはできないんですか？」

「……………すみません、ネギ先生。マスターの言う事は絶対ですの  
で…。」

今まで見ていたら、町に人気者で、しかもいい人だった。

出来れば襲いたくはないんだけど……

そこで、説得は無理だと判断したのか、一瞬の間をおいて猫達が逃げ出す。

「それなら……………」

「あなたがネギ先生のパートナーですね？神楽坂明日菜さん……いいパートナーを見つけましたね。」

「茶々丸さん……………」

アスナさんも褒められたが、とても複雑そうな顔をしている。

それでも、前を見つめて、ボクを守る様に立つ。

「行きます！契約執行10秒間！ネギの従者『神楽坂明日菜』！！」

「っ！！」

仮契約の効果の一つ…ボクの魔力の供給で明日菜さんは身体の軽さに驚いたようだ。

そのまま茶々丸さんへと突進し、驚きの速さに対応に隙が出てしまう。

その間に攻撃呪文の詠唱をしていたボクが迷いを振り払い、攻撃する。

ここで倒さないと……また、被害者が出てしまうんだ！



「ネギ…アンタ、やっちゃいけない事しちゃったねえ…?」

「ワイルドさん…お姉ちゃん…?」

そこには、スーツに身を包み、獣の様な体制で唸るワイルドさんと、いつもの体操服の様な服を着て、ボクを睨みつけている…モーラお姉ちゃんが、いた。

「さあ。お前の罪を数えろ……ってね。」

第二十六話：女の子を襲った時点で、人間失格だろJK。（後書き）

さ、次回は修羅場ですよ。

第二十七話：機械でも、無機物でも、そんなの関係ねえ。

ワイルド      s i d e

正直なところ、俺はネギに会ったことはある。

何回か俺の家に来て、自分のせいで俺が先生をクビになったことを申し訳なく思っただろう。

その時に、俺は言った。

「誰かが言ったことは気にするな。自分が最高だと思っ事をしろ」

と。だが…こいつは…。

「お前…チャチャマル、殺す？」

俺が殺気を込めた目で睨みつけると、ネギは悲しそうな顔をしていった。

「ぼ、ボクは…ただ…やめてほしくて…。」

「そんなんで理屈が通ると思ってんのかい…？」

俺の視線と、モーラの言葉。その二つに浴びせられ、ネギはすでに泣き出しそうな顔だった。

「ネギ……お前、覚悟、あるか？」

「か、く」……？」

俺は睨みつつ、ゆっくりと仁王立ちになる。

「お前、チャチャマル殺そうとした。…なら、殺される覚悟も、ある？」

「ちょ、ちょっと待ってよ！！」

と、そこでアスナが割り込んでくる。

「茶々丸さんはロボットでしょ?! なら、そんなの…」

「体が機械、それで、傷つけていい？」

「……それは………」

「機械でも、もし意思があっても、傷つけていい？」

……これは、一号や二号、V3、X…アマゾン達、昭和ライダー改造人間達にも  
言えることだ。

体は確かに人間の物ではなく、ZXなどは脳以外はすべて機械だ。

それでも…人間として、生きようとしている。



人間として生き、人間として戦い、人間として生活し……人間として、死のうとしている。

「チャチャマル、最後に言った。「すみません」って…機械、そんなこと言わない。」

「そんなの、そうやってプログラミングすりゃあ…」

カモミール淫獣野郎がそういうが、俺が一瞥すると、一気に震えあがる。

「そんなこと、なんですか？」

「全くさね。ネギみたいな甘っちょろい坊主は平気だが…それ以外の奴が、そんなことで心動く訳ねえだろ。」

悪の魔法使いであるエヴァンジェリンの従者である茶々丸。

本人はただ存在意義を実行しているだけでも、マキステル・マキ偉大な魔法使いの反感を買うかもしれない。

その対策として最後の言葉をプログラミングしていたとしても、全くの無駄だ。

偉大な魔法使いは、そんなことは全く気にしないのだから。

ただ…自分が正義だという妄執に取りつかれ、壊すだけだろう。

「ネギ坊主。お前はただ殺そうとしただけだ…自分の為に、茶々丸

を…な。」

そこまで言うと、ネギも涙を流し、俯く。

と、そこでモーラはすつと前に出…

「教えてやるよ……人を殺すつてのはなあ…。」

高く拳を振り上げ……そして、一気に地面を殴る。

「こういうことだ……!!!!」

「う、うわあああああああつ……!!!!」

モーラの剛力により、地面はひび割れ、若干クレーターもできる…。

ネギ達も、足を取られてこけてしまう。…あ、淫獣は吹き飛んでいった。

「……………こういう力を振るうのも、また魔法…それをよく覚えときな。ネギ。」

「チャチャマル、行く。」

「…はい。」

俺はチャチャマルを抱え、そのままジャンプして跳び上がる。

モーラは土煙に紛れて、そのまま走り去ってしまう。

「……………ここまでくれば、平気。」

「…ありがとうございます。ワイルド先生。」

俺は、ネギ達から逃げた後、エヴァンジェリン邸の前までチャチャマルを連れてきた。

「ガル、気にしない。悪いの、ネギ。」

「…そうでしょうか、」

「ガウ。後は…エヴァ。」

俺がこくりと頷いてそういうと、茶々丸はクスリと笑う。

「まあ…マスターも、原因の一つではありませんかね。」

「全く…。」

と、そんな事を放していると、茶々丸はすつとこちらを凝視する。

「…ウウ?」

「…ワイルド先生。貴方が先ほど仰った事ですが…。」

「……………」

「本当に…私にも、意思是…自我は、あるのでしょうか？」  
それは、縋りつくような声だった。

自分は、ただの機械人形なのか。それとも……。

「…チャチャマル。さっき、お前、笑った？」

「…はい。」

「なら、お前、意思ある。感情、ある！」

俺が笑ってそういうと…茶々丸は、安心したように笑う。

「…そう、ですか…。ありがとございます。ワイルド先生。」

「ガウウ」

「…貴方はこれから、どうしますか？」

「……………ただ、見る。ネギ、俺が言ったから、悩む。それで、どう考  
えるか…俺、知りたい。」

まだ、茶々丸を機械として見るか…それとも、人間として。自分の  
生徒として見るか…そこが、どうしても知りたい。

「…じゃ。また、明日。」

「…はい、先生。また明日…」

そして、俺は家へと戻る。

…さて。ネギは一体どうするのか…。

茶々丸     s i d e

先ほどのワイルド先生の言葉…なんだか、暖かくなるような言葉でした。

私は、機械なのに…。

「…何だ、茶々丸。いたのか。」

「マスター…遅くなつてすみません。」

私が考えていると、後ろから私のマスター…エヴァンジェリン・A・K・マクダウエル様がいた。

「ふん…あの野生児は兎も角、ぼーやとなにかあったか?」

野生児…ワイルド先生ですね。

「いえ…特にはなにもありませんでした。」

「フン、ならいいがな…。」

と、私はそこで聞いたかった事を思いつく。

「あの、マスター…。」

「なんだ。」

マスターが、家へと歩きながら答える。

「恋をするとは…どういった感じなのでしょうか。」

…あ、マスターが転びました。

「ちゃ、茶々丸?! お前、いったいどうした! なにかあった!」

「なにがというか…ああ…なんと言いましたか。」

「なんで、頬を染めるんだ!! おい、聞こえてるか? 茶々丸——」

「!——!」

ああ………ワイルド先生…。

第二十七話：機械でも、無機物でも、そんなの関係ねえ。（後書き）

…仮契約しないで、フラグは建てないと誰が言ったのだね！？

フハハハハハハハハハハ！！

…すみません。調子乗りましたね…。

第二十八話：라이어って、何気にチートじゃない？（前書き）

ユニークアクセス20000突破、ありがとうございます！



第二十八話：ライターって、何気にチートじゃない？

ワイルド side

あの後、吸血鬼事件も終わりに近づいていたので、俺は傍観に徹することにした。

しかし……

「ガウ…猫、いいなあ…。」

「全くですね。」

そろそろ、大停電の日だというのに…現在、茶々丸と一緒に、猫を愛でている。

「でも…大丈夫？」

「なにが…でしょうか。」

キョトンと首をかしげるチャチャマル。

…なんで、結構萌えるんだろう。

「停電、そろそろ。エヴァも…。」

「ああ…その件でしたら、なんとかかりますよ。ハカセや超<sup>チャオ</sup>にも手

伝ってもらおう予定ですじ。」

ああ…道理で、あんなに上手くいったわけだ…早く終わったのは兎も角。

「なら…いい。」

「ワイルド先生は…どうなされるんですか？」

「オレ？」

「ネギ先生の、選択を見るのでしょうか？」

「ガウ…それも、ただ見るだけ。」

「…そうですか。」

「ガル」

ネギの選択は、しっかり見させてもらうし…なにより、見てたら面白そうだからだ。

「それが…先生の選択なのですね。」

「ウウ。…あ、そういうば。エヴァ、言いたい事ある。」

「マスターに？なんででしょうか。」

ま、最初から考えてたことだし……実行しないと。初志貫徹。

「戦い終わったら、オレ、呪い解く。」

「……出来るのですか？」

「出来る！…あ、そういえば…チャチャマル、俺の力、知らない？」

「ええ。少し姿が変わるとか…。」

「見てる。」

俺は、両手を軽く上げ、変身の準備をする。

「アァーマァーゾォーン。」

そして、体が燃える様になり…アマゾンに変身する。

「どっ？」

「……なるほど。それがそうなのですか。」

「ガウウ。これの腕輪、エヴァの呪い、解け…イダッ…！」

下を見ると…猫が遊んで、噛みついてる。

「ガル…痛い。」

「トカゲですから、おもちゃと思っているのでは？」

俺が噛まれた手をぶらぶらさせていると…

「ん。」

「……………ガウ？」

パクリと怪我をした指を、チャチャマルが啜える。そして、少し指を舐めた後、口を放す。

「…これで、いい筈です。この前、実験的に私の口内から消毒液が分泌させる様な改造をしましたので。」

「ガ……………ガウ。」

び、吃驚した…吸血鬼の従者って、チャチャマルでも血を吸うのかと思った…。

「…あ、そろそろ帰らないと…それでは。ワイルド先生。」

「ガウ。また、明日。」

お土産に、ディスカビルジュース、オロナミンW・井坂味、秘密の3号ドリンク、天道家の紅茶を渡し、別れる…。

ところ変わって。現在、大停電数分前……………

「…用意、いい？」

「うんうん。まかせてね。」

「メッセンジャーは、一人で十分でしょうし…ね。」

大停電の時、風呂に入っていた数人が吸血鬼化し、操り人形になったが…さすがに、それはアウトだろ…。

と、言うことで。

朝倉とさよに頼み、風呂の四人を止めてもらうことにした。

その代わりに、バットショットで場所を教えることにしたし。

……………え？俺ですか？モーラ、真名と一緒に、エヴァVSネギを見に行きますよ。

インジビブル×FFRで、上空から見ると予定です。

「ガウ…モーラ、行く。」

「…本当にやるんだね？」

「ガル。」

俺が断言すると…響鬼に変身ながら、がっくりと肩を落とすモーラ。

「いいよ……来るなら来い！！」

「ガウ…ちょっと、くすぐりたい！！」

心の中で、《FINALFOAMRIDE…HI・HI・HI・HI・HI  
IBIKI!》と唱え、モーラの背中に手を差し込む。

「ん…ああ…っ…」

そんな声をあげ…モーラは、変形し…《ヒビキアカネタカ》に、  
FFRする。

「じゃ、行く。」

「分かったよ…あとさあ。これ、ソウコウ・アニマルでもよく  
ね?」

「……………行くぞ!」

「誤魔化すな、このやる!」

そう言い合いながら、俺は空に飛んでいく……………。

朝倉 side

「さて…私達も、行くかね?」

「はい…<sup>アテアット</sup>出でよ…」

さよちゃんがカードを構えてそういうと、彼女のアーティファクト  
の一つ…幽霊列車が現れる。

「出発、しんこー」

「おー！」

私とさよちゃんは乗り込み、空間移動で大浴場へと向かう……

「……………いいね？さよちゃん。」

「はい…。」

私達は、小声で会話しながら、こっそりと大浴場に入口に立つ。…  
そして、停電が始まり、ここも真っ暗になる。

そして…少しすると、中からは悲鳴の様な声が聞こえ、静かになる…。

「よし、レッツゴー！…！」

「はいー…！」

一気に中に突入し、ガジェットを構える…と、見ると全員が全裸で怪しく目を光らせながら、立っている。

「うわ…なんか、嫌な光景…。」

「が、頑張っていきましょう…！」

《LUNA! Maximum Drive!!》

「ま…っわけで、正気になれー!!」

私は、ルナメモリを差し込んだバットショットを構え、フラッシュを何度もたく。

「アツツ?!?!?!」

「やった、効いてます!!」

そして、あと数回フラッシュをたくと、一度バットショットを下し、みんなを見る…。

「…おい?」

頬をぺちぺち叩くと…どうやら、気絶しているらしく、反応がない。

「よっし…ライアーで催眠の必要もないかな?」

「はい。これで、みっしょんこんぷりいとですね!」

「アハハハ、私達にかかればこのくらい、軽い軽い!」

そう二人で笑いながら、私達は列車へと戻る…。

「……………さあ、後は先生に任せとこうか?」



第二十九話・ネギも、成長はするんだね。(前書き)

第二十九話…ネギも、成長はするんだね。

ワイルド      s i d e

……………現在、上空にてネギ達の戦いを観察中です。

「…ガウ。」

「…まあ、正直、あれは無いわな……………」

戦いの中での、ネギの戦法が…である。

魔法具を用意してきたのはいいけども…結界つてのはなあ…。

「なんで、対抗策、相手、してるの、やる?」

「馬鹿、なんだろ…しかもあいつ、攻撃魔法もあんまり知らないしな。」

マジックバリ してる相手い、マダ テ使う並の暴挙だよ…。

……………あ、下でなんか言ってる。

「ネギ先生……………貴方は、どうするおつもりですか?」

「え？」

下では、チャチャマルがネギに向かって問いかけている所だ。

「貴方は、私達を…悪と思って倒すのか、それとも……。」

バケモノ  
人でない者として、殺すのか。

エヴァは吸血鬼で、チャチャマルは機械人形。

セイギノミカタ  
魔法使いは、それを駆逐すべき存在だと考える者もいる。

だが…ネギは、どう考える。

「ボクは……。」

「貴方は、どうするおつもりですか？ネギ先生。」

「……ボクは、貴方達の先生です。」

「はい。」

そこで、ネギはまっすぐ前を見つめ、はっきりと言う。

「だから……ボクは、悪い事をしている貴方達を、先生として、お仕置きします……！」

「…それが、貴方の選択ですか。ネギ先生……。」

「はい。」

ネギの目は、迷いもなににも無い、ふっきれた…漢かんの、目だった。

「…茶々丸？なにを聞いている。さっさとやるぞ。」

「…はい、マスター。」

そしてチャチャマルは、また駆け出し、ネギに向かう……！！

「……………ガウ。」

「ネギも……………大きくなったねえ。」

モーラは、なんだか感慨深そうにしている。

「じゃ……………もう、行く。」

「お？これから見ないのか？」

「今、どこかの術師も、狙うところ。真名にだけ、任せられない。」

「お……そういやそうさね。さよ達は今家だったし。」

「ガウガウ。だから、行く。」

俺達は、観戦もそこそこに、帰っていく……。

「…ちいッ!!」

私は、スカルマグナムを使い、式達を撃ち抜いていく。

ギヤアアア!!

「…全く、数だけ多いのが取り柄か…?」

「龍宮…そういうな。お前はアーティファクトがあるだけましだろ  
う。」

後ろから、共闘している仲間…桜咲刹那が、その声をかけてくる。

「そうでもないんだぞ?これだとエネルギー大きすぎて、上手くない  
かないし…それに。」

私はそこで、後ろから襲いかかってきた2mほどの鬼を蹴り飛ばす。

ギヤアアアアアアアツ!!!

「……なんだか、相手がもろく感じて…やる気がでないというか。」

「…楽でいいじゃないか。…私も、アーティファクト欲しいな…」

「お前は、あの可愛らしい先生とやったらどうだい?」

「なんでだ…。」

「いいじゃないか、面白そうだ…っと。」

そこで、上から攻撃してきた烏天狗を、一気に撃墜する。

「じゃ…さつさと決めようか。いい加減、面倒くさい…。」

腰のベルトからスカルメモリを引き抜き、スカルマグナムにセットする。

《SKULL!MaximumDrive!!》

「スカルパニッシュメント…!!」

スカルメモリの力により増幅された力を、一気に銃口からはなつ…!!

グギエアアアアア!!

断末魔をあげ、鬼どもは四散し、還っていく…

「…これで、終わりか?」

「ああ。しかし…。」

「なんだ?…ああ、術者がいないこと…か?」

「ああ。また召喚する気も無いようだし…逃げられたか?」

「まあ、それはそれでいいだろう。一度戻って、報告するぞ。」

「…ああ、分かった。」

そういつて、私達は校舎の方へと、戻っていく……。

??? side

俺は、今必死に逃げていた…畜生、なんでこんな事に……！！

「ハア…！ハアツ……ハア…！！」

俺はただ金で雇われただけの、ただの術師だ。

式を殺されることはあっても…まさか、俺が殺されるなんて…そんな、そんなこと…！！

「アア。ソノ通り。勘ガイイナ。」

「ヒツ…?!」

俺が振り向くと、そこには飛蝗と人間を無理に混ぜ合わせたような姿の魔物が、立っていた…。

「な、なんだお前…?!」

「今カラ死ヌンダ。知ル必要ハナイ。」

そういうと、その魔物は俺の前に一瞬で立ち、頭を掴まれる。

「コノ殺シ方ハ好カンガ…贅沢言エンナ。」

「あ…ギい…ああ…!!」

俺の意識が飛ぶ前に感じたものは、千切れる音を立てる首、そして…何かが抜ける感覚と、背が伸びたような錯覚がした…頭である。

「脊髓抜き…ヤツパリ、出血ガ多スギルナ。」

その声を最後に、俺は……………死んだ。



第二十九話：ネギも、成長はするんだね。（後書き）

今のところ決定している、京都で仮契約するのは……………綾瀬  
と、月詠ですね。

第三十話・テンション高い人って、何するか分からない。(前書き)

PV20万、ありがとうございます……！

第三十話：テンション高い人って、何するか分からない。

ワイルド      s i d e

……………と、言う訳で。

前回、一人の術師を脊髄抜きし、吸血鬼事件も幕を閉じた……………のであるが。

「おい！私の呪いを解けるとは……………どういうことだ、答える！！」

「ガガガガッガアアアアアアアア！」

「落ち着いて下さいマスター。そんなにすると、首が閉まってしまいます。」

現在、エヴァから尋問受けております……………ちなみにエヴァ邸で、キバツト状態のモーラと一緒にいます。喋れないけどね。

「ガル……………俺の腕輪、不思議な力、ある。それで、解呪、する。」

「……………何だ、その腕輪は。魔力以外の、変な力があるぞ……………？」

お、見ただけで分かるか……………さすが、エヴァンジェリン。

「ガウ、これに、インカの力、ある。」

「……………まあいい。どんな力だろうと、私の封印を解いてくれるならな。」

「ガル。」

俺は、一度庭に出て、エヴァの目の前に立つ。

「…アァーマァーゾォーン!」

「…ほう。それも、お前の変身か。」

「ガウガウ。じゃ、行くぞ……………」

《DEN DEN》

「……………フン、来い!」

俺は、朝倉から借りたデンデンセンサーを使い、呪いの術式を見る。

「……………ナギ、どんな呪い、使った……………」

改めてみると、呆れる呪いだ。術が後ろの方で余っているし、なぜかエヴァの体を官能的に縛りあげているし。

これでなにをさせたかったんだ…ナギよ。

「……………ウウウウウウウ!」

「…ん……………」



「この働きに免じて、私の従者となることを許そうか!!」

「俺、従者なのか。」

「…ワイルド先生、ドンマイ…です。」

「チャチャマル…トモダチ。」

「……………」

茶々丸は、顔を真っ赤にして動きが止まる。

「ガウウ……………じゃ、俺、行く。」

「ハツハツハ……………ああ、そういえば…学園結界は解けたのか?」

「ウウ…解けてない。解けたの、登校地獄だけ。」

「む……………しかし、これで修学旅行には行けるのだな?!」

「ガウ。もちろん行ける。」

「…ツフツフ…ア…ハツハツハツハツハ!!!!」

「ガ…怖い。」

「心中お察しします。ワイルド先生…。」

茶々丸の後ろに隠れ、エヴァをちらりと見る…うわ、何この人…。

「…オレ、もう怖いから帰る。」

「賢明な判断ですね。それでは…。」

「ガウガウ。」

そして、オレとモーラはエヴァ邸を後にする……………。

「ガウウ……………エヴァ、怖かった。」

「あれはなあ…生きてると誰でも、おかしくなるところはあるんぞ…。」

「グウ…。でも、あれは、無い。」

「うん。あれは無い。」

「無い無い。」

「ナインティナ…。」

「それは、やめる。」

「ちえ…。」

なぜか不服そうなモーラを半目で睨み、家へと足を急ぐ……………と、その時。

）  
）  
）  
）

「ガウ……電話。」

「その着メロ、なんか変だな。」

「五月蠅い。」

俺はポケットからケータイ（ケータロス）を取り出し、電話を受ける。

「もしもし。……ガウ、コノエモン？何の用……」

……ガル？……マジ、か？……ウウ。了解。ちゃんと、行く。じゃ。

「………何だい？今の電話。コノエモンってのは……あ、学園長か。」

「ガルル。で、頼み事された。」

「なんて？」

「修学旅行、オレも、行く。」

「ふーん。………つてええ？！」

「反応、遅い。」

俺はケータイをしまいながら、そう答える。



まあ…その反応は、仕方ないかもしれないけど。

「な、なんでさね…?」

「オレも、コノカ、護衛、つく。」

「…あの爺、過保護だな…。」

「諦める。仕方ない…。」

軽くため息をつきながら、オレはそう答える。

……………ま、目下の問題は…。

「おやつ、いくらまでにする?」

「どうせなら、一万までにするさ!二人合わせて五千円!」

「ガウ!成程!」

「楽しみだなあ…。」

「モーラは、キバットで来る。」

「喋れないけど…仕方ないか。」

「仕方ない仕方ない。…じゃ、リュックとか、買いに行く!」

「おう!行こーぜ、行こーぜ!」

旅行の準備が、先だ！！

お小遣いは…いくら持っていていい…。

第三十一話：魔法の秘匿？ナニソレオイシイノ？（前書き）

展開急だとかは、言わないでくださいね！

— 自覚してるんで—！！

第三十一話：魔法の秘匿？ナニソレオイシイノ？

ワイルド      s i d e

さて……………なんと、今日から修学旅行！！！！同伴！！

「京都、京都」

という訳で、今オレは荷物をまとめて、駅にいます。

…展開が急だとかは、言わないで…。

「あ、ワイルド先生、お久しぶりです！」

「ガウ ネギも、久しぶり。」

俺がうきうきしていると、後ろから薬味…失礼、ネギが来て、挨拶してくる。

「…あー。ワイルド先生やー。」

「え？あ、本当ですね。」

「先生！私と勝負するアルよ！！」

「ガウ。ミンナ、久しぶり！！」

と、そこで久々に会った3-Aの生徒とも、出会う。

……さて。

そう話しているうちに、新幹線に生徒が班毎に入ってきた。

オレも、新幹線に乗り込み、自分の席へと行く…。

「ガウガウ」

「本当に…楽しそうですね、ワイルド先生…。」

「もちろん！初めて、京都、行く！」

前のリョウメンスクナノカミの時は、モーラにまかせっきりだったし、楽しみだ…！

「…そういえば、ワイルド先生…。」

「ンガ？ふあふいかふいつふあ？（訳：何か言った？）」

オレが口を肉まんていっばいにしながら答えると、ネギはポケットから、封筒を取り出す。

「ワイルド先生も、魔法関係者なんですよね？なら、この封筒の事…知ってますか？」

「グ…ム。」

オレは、いったん肉まんを飲み込み、一息ついてから答える。

「ガウ。一応、オレも、魔法先生。だから、その事、知ってる。」

「そ、そうなんですか…なら、安し」でも、オレ、それ守る気、あんまりない。」え…何ですか?!」

「……………オレの仕事、コノカの護衛。それだけ。」

「…でも、この親書は…。」

「大丈夫。」

「え…?」

「ネギだけでも、大丈夫。それに……………いざとなったら、助ける。」

「…分かりました。」

ネギは、少し安心したような顔でそういう。

…ま、いろいろと面倒なこともあるだろうし、やらなくちゃいけないことも多いんだけど…と、思っている。

「……………ああつ、親書が…!!!」

「ガ、ガウ?!」

いきなりどこからともなく飛んできた燕が、親書の入った封筒を加え、飛び去っていく…!

「追いかける！」

「あ、ハイ!!」

ネギ      s i d e

「ま、待てー!!」

ボクは大分焦っていた。

ほんの少しの気の緩みから親書を奪われてしまったなんて……

別に見せなくても、口頭だけでよかったはずなんだけど……

その手から新書は瞬く間に消えてしまった。

奪ったのは、一羽の燕。

外にいるのならおかしくはないが、新幹線の中を飛び回り尚且つ自動ドアを的確に潜り抜けていく燕なんて………少なくとも、ウエールズでは聞いたことはない。

「兄貴！アレは式神だ！」

「式神?!」

カモ君が言った、聞き慣れない言葉を問い返ししながら、懐に手を入れる。

通路を歩く人を不器用なステップで避けながら、指に掛かる簡易杖の柄を握る。

「おうよ！日本のファミリアー・マジック。でもアレは紙…無機物だから、ペーパーゴーレムって所だな！」

カモ君の魔法を見抜く目を褒めたいけど…こんな知識があっても今は役に立ってくれない。

というか、ボクも相手が日本の魔術を使うことは分かっていたのに、なんの対処もしなかったのも悪いけれど。

ボクは懐に収めた杖を迷うことなく抜き放つ。

突き出されたその切っ先を、空を滑るように飛ぶ式紙に向ける。

「近くに術者がいるはずだ、捕らえろっ！」

「ラス・テル・マ・スキル…！！」

カモ君の助言にボクは発動キ―を唱え始める。

唱えるのは得意の風の捕縛系魔法。

攻撃系を使つては親書もろともに吹き飛ばしかなないので、使いたくても使えない。

そして、唱え終わろうとしたその時…



「お弁当ー……キヤアツー!!」

扉が開くとそこにはワゴンを押したお姉さんが居た、

魔法の対象に巻き込むことも問題だったけど、避けきれずにそのワゴンとぶつかって詠唱が途切れてしまった。

「わわっ！すみません!!」

ボクは前につんのめりながら謝りその場を急いで立ち去る。

こんなの、英国紳士らしくないけど……今は、親書が先だ！

そう思いながら、ボクは走る……と、その先には。

「……あ、ネギ先生……。」

「さ……桜咲……さん？」

そこには、竹刀を入れる様な大きめの袋を持った、ボクの生徒……桜咲刹那さんがいた。

「あの……これ……落とし物です……。」

「え……あーっ！コレはボクの大切な親書！！あ、ありがとうございます！  
ます！大切なものなんです！」

「それは先生の物ですか？……では、気をつけた方がいいですよ。特に『向こう』に着いてからは……。それでは。」

「は、はい！」

忠告を残し、桜咲さんはその場を後にする。

「オイオイ兄貴……あの女、メチャメチャ怪しいじゃねーか！気をつけるよ！！」

「えっ？どづいうこと？」

「兄貴、見てみる！」

カモ君が指差した方を見ると……そこには、真つ二つに斬られた、鳥型の紙が落ちていた。

「こ、コレは？！」

「さっきの式神と同じ鳥の形……つまりヤツが術者だよー！」

カモ君は、自信満々にそう断言する。

「ええーっ？！じゃ、じゃあ……」

「そつだ！ヤツが西からのスパイかもしれねえぜ？！」

真つ二つになった式神を見て、カモ君の言つとおりには、ボクも判断してしまつ。

エヴァンジェリンさんに続いて、またクラスの生徒に敵が……？  
！

「ま…まじっしょっ。」

「兄貴…とりあえず、ワイルドの旦那に相談しようぜ。一緒にいる魔法先生は、旦那だけだ！」

「う…うん。」

ボクとカモ君は、そういつて自分たちの車両へと、もどっていく…

第三十二話・戦闘狂は、なにするか分からないから怖い。

ワイルド      s i d e

「ガ、ガウウウウ……！！！！」

オレは、目を輝かせてこの景色を見ている。

キヤーキヤー騒ぐ生徒達を抑えるべき立場にあるオレも、その絶景の前には身体を震わせる……！！

さつき薬味小僧から何か相談されたけど、その事も完璧に忘れたよ！！！！

生徒達は欄干まで行き恐る恐る身を乗り出したりしている。

「ここが有名な飛び降りるアレツ……！！」

「誰かつ……飛び降りれっ！」

「では、拙者が……」

「おやめなさいっ……！！」

……こんな感じで、良くあるやり取りをしている面々もいる。

まあ、良心的な生徒が飛び降りようと本当にしている生徒を制しているのだが。

…あ、モーラ。お前飛べるから落ちても何の問題も無いだろ……つて。落ちたよ。…キバットだし、大丈夫だよ…ねえ？

と、そこで……。

「……………！…ガウ。」

「…どうかしたかい、ワイルド兄ィ？」

なにかに反応したオレを見ていたのか、真名が近づいてくる。

「…………敵、いる。何かあったら、オレ、ケータイで、呼ぶ。」

「なるほど…了解したよ。こっちでごまかしておくから、安心してくれ。」

「いざとなったら、ライター使う。」

「ああ。朝倉達にもそういっておくよ…頑張つて。」

「ガル」

オレはそういうと、先ほど感じた殺気の方へと、走る…！！

それにしても…。真名、仕事人だなあ。

殺気を追って、オレは山の奥の方まで来た…。

クロックアップ使って追いつけないとは……どんだけ遠いところからさっき飛ばしたんだよ…。

「…いい加減、出てくる。お前、バレバレ。」

俺がその声をかけると…木の陰から、一人の少女が現れる。

「…どうも〜神鳴流です〜。おはつに〜。」

「グルルルルル…!!」

「あらら…そんなに唸らんといても、平気ですえ?」

「殺気そんなに出して、言うセリフ、ちがう。」

「まあ…そうかもしれんどすなあ〜」

そこまで言うと、その少女……月詠は、にっこりと笑って剣を構える。

「じゃあ……戦いまひよか?」

「ガウ!!アアアーマアアーゾオオーンツ!!」

オレがその声をあげて変身すると、それと同時に月詠が斬りかかってくる。

「ふふふ。強い人は、好きですよ？」

「ケケーツ!!!」

長刀の方をヒレカッターで防ぎ、短い方は殴り飛ばし、一度距離を取る。

「ガアアアア!!!」

「あら〜危ないどすなあ？」

オレは、体勢を立て直し、鬼火を吐く…が、斬空閃を使われ、逆にこちらに斬撃が飛んでくる。

「ガ……………跳切断!!!」

「ざんがんけ〜ん」

オレが跳ぶ大切断……………跳切断を使って斬撃を相殺すると、さらにまた斬撃が飛んでくる。

「ケケエ!!!」

「あらあら〜?」

オレは、今の斬撃出来られた木の枝をつかみ…クウガの能力で、それをライジングドラゴンロッドに変化させる。

「ケケツ、ケケエ、ケケツケー!!!」

「にとーれんげぎざんくうせ〜ん」

オレがライジングドラゴンロッドで何度も突く…が、それは全て防がれ、逆に斬空閃を喰らってしまっ。

「ガ…ガウア…！」

「あらら…？ずいぶん、タフなお方なんやな〜」

「ガ…アアア…！」

オレは、一度高く跳び上がり、スピニングダンスの体勢に入る…が、月詠はニコニコとしたままで、剣を構えている…。

正直、月詠は強い。久々に攻撃を喰らった…。だから、この技も…使って、損は無い。

「乱れ…跳切断…！」

スピニングダンスの回転力を使いながら、先ほども使った跳ぶ大切断…跳切断を、連発して放つ。

「秘剣…ひやつかりよーらあ〜ん」

「ケケ…ッ…！」

「あ…あ〜〜れ〜〜。」

跳切断自体は防がれる…が、もともと使っていたスピニングダンスは命中し、月詠を蹴り飛ばす。



「エレクトロファイヤー!!」

オレが月詠の飛んでいった方向へ、エレクトロファイヤーを使う…と、そこから、人影が飛びだし、こちらに斬撃を放ってくる…!

「ガァァ!!」

オレは咄嗟に、龍騎とシザースのガードベントを並行し、防ぐ。

「……………ガLLLLLLLL!!」

「…ほんまに、強いお人ですなあ〜」

「お前も、強い!!」

そういつと、月詠はにっこりと笑い、剣を収める。

「ふふ〜 今日、このへんにしときまひよ。」

「……………また、来る…?」

「ええ。きっと、ですえ」

「…来るなら、倒す!!」

その言葉に、月詠は笑ったまま答える。

「はい あんさん。名前は?」

「…ワイルド・シユタイナー！」

「うちは、月詠、いいます。以後、良しなに。」

月詠は、少し恍惚とした表情でいい、そのまま姿を消す……。

「……………ガウウウ……………」

つ、月詠強かったな…おい。

あそこで剣とか使ってたら、一回位死んでただろ、オレ…。

とりあえず、クラスのところへ、もどらないと……………よし。

「ハイパークロックアップ!!」

心の中で《HyperClockUp!!》と言いながら、オレは蝶…失礼、超高速移動で、3-Aの皆がいる清水寺に戻る…！

月詠     s i d e

「…ただいま、もどりましたえ？」

「ちょっと!!遅いやないか!何しとつたんや?」

うちがアジトに戻ると、雇い主の千草はんに、真っ先に怒られてしまいました。

「そんな気にすることじゃないです。あ、このかお嬢様の護衛に

会いました。」

「ほんまか？」

「はい。なかなかお強いお方が一人と、可愛らしい子供が一人ずつですえ。」

「強いって？」

「うちが、競り負けた…ぐらいでしゃるか。」

「…あんたが、か？」

「はい。」

うちは、さっきのお方…ワイルドはんを、思い出す。

うちとも互角以上に戦ってはりましたし…ああ……

「惚れましたわあ……」

「ん？なんか言ったか？」

「いえ、別に。」

次会うときは…もっと、アイシマイ殺し合いまひよ？

ワイルドはん……

### 第三十三話：バトル・バトル・バトル！！

ワイルド      s i d e

…月詠との激戦の後、オレはバスが出ていたが、必死にジャングラーで走り、なんとか旅館に付く…ああ、疲れた…もう、外が真っ暗…。

「ガ、ガルル…！！！」

ジャングラーを止め、旅館の中に入る…と、前からいきなり二人に人影が現れ、ぶつかってしまう。

「ガル?!」

ぶつかってきた人を見ると…それは、アスナとセツナだった。

「あたた…って、ワイルド先生?!なんで外に…」

「それ、こっちのセリフ。お前たちも、なんで、外行く?」

「そ、それはねえ…」

目を泳がし、視線をそらすアスナ。…ああ、そういえばアスナ、オレが関係者って知らなかったっけ…。

「ワイルド先生、お嬢様が誘拐されました。相手は、関西呪術教会

の手の者かと思われませす。」

「ガル…分かった。オレの、ジャングラーで行く。」

「ジャング…ああ、あのバイクですね？分かりました。」

「ちょ、ちょっと…まさか、先生も…魔法の方の？」

「…ちがったら、なんで、チャチャマル助けるとき、魔法、防げる。」

「あ…そりゃそうか。」

「それより、早くいく！」

納得早いな…おい。

…あ、そんなことはさておき、オレはジャングラーを呼び出し、三人で乗り込む。

「ケケーンツ！！！」

「……いた！あれ、ネギ！！！」

オレが数分ほど走っていると、近くにネギと、カモミールの姿が見える。

「ネギー！！！」

「ネギ先生ー!!」

式神を追い払うと、4人と一匹が再び追い掛ける。

「ワイルド先生?!なんでここに…」

「オレも、魔法使い!だから、行く!!」

「え、ええ?!」

「そんなことより!!!今は私達でお嬢様をお救いします!よろしいですか?」

「あ…はい!」

「もちろんよ!」

「合点でさー!」

「ガル!」

刹那の言葉に誰も異論はなく、さらにスピードを上げる。

その成果か…すぐにサル女を発見する。

彼女は駅に逃げ込むようで、オレ達も改札口を乗り越える。

「どうして誰もいないんでしょう?」

「人払いの呪符が貼ってあります。普通の人は近づけません。」

「計画的…用意周到に、やってる。」

「相手はおそらく…関西呪術協会の呪符使いでしょう！あの着ぐるみも何かあるはずです、皆さん、気をつけてください！」

無人なのに明かりが点いている電車が止まっており、サル女が乗り込む。

ドアが閉まるギリギリでオレ達も飛び込み、電車が走り出す。

ジャングラ―は一度乗り捨て、自分で帰ってもらった。

だが、そんな事は気にも止めず、オレ達はひたすらサル女…千草の後を追う。

あとは前の車両に追い詰めればいい。

刹那やネギはそう思っていただろう。

だが、敵もそれぐらいで済む訳はない。

「お札さん、お札さん。ウチを逃がしておくれやす…」

車両の繋ぎ目の扉を潜る前に、サル女は札を使って大量の水を呼び出す。

サル女は札の発動後、速攻で別の車両に避難しているので被害はない。

「わーっ!!」

「何、この水?!」

「ガウウ…!」

「うへー!!」

閉じ込められたネギ達はなす術もなく、溺れてしまう。

ネギは口を開く事は出来ず、明日菜は浴衣が乱れを直すので精一杯。

オレは、少しだけなら息が持つ、歌舞鬼の姿に変身し、扉に向かって鬼爪を叩きこみ、無理やり吹き飛ばす。

「ガアアアアアアア!!」

見事、扉をぶち破り水が流れ出す。

その先にいた千草が水流に巻き込まれる…が、その時にちょうど別の駅に着き、扉が開きホームへ全員が流れ出る。

「ゲホツ……デカザル女、嫌がらせは諦めてお嬢様を返せ!!」

「それは出来ん相談やで。木乃香お嬢様を返しませんえ」

「ま、待て!!」

再びコノカを抱いて逃げ出すサル女を追いかけるオレ達。



だが、サル女の言葉から推測すると…嫌がらせではなくコノカ一人を狙った事だと推測できる。

ネギとアスナがどうということだとセツナに問う。

「どうということなんですか、刹那さん?!」

「嫌がらせが目的じゃなかったの?!なんで木乃香一人を誘拐しようとするのよ?!」

二人がそう聞くと、刹那は少し言いづらそうに、言い始める。

「西には、お嬢様を麻帆良…東に送った事を快く思っていない連中もいます。おそらく…木乃香お嬢様の力を利用して、関西呪術協会を牛耳ろうと企んでいると思います。」

「ええーっ?!」

「な、何ですか、それはー?!」

ネギ達もそこまでは想像も出来なかったのか、声をあげて驚く。

そして、セツナの説明は続く。

「私や学園長、ワイルド先生も甘かったと言わざるを得ません。まさか修学旅行中にここまでするのは…関西呪術協会は元々裏の仕事も担う組織。予測するべきでした」

「フン…。俺も、今日狙われたぞ。」

「本当ですか…？」

「ああ。お前と同じ剣術の奴だったな。月詠とか言ったか…？」

「私と、同門の者ですか…。」

「ああ…。さて、いい加減返してもらおうか…？」

俺が睨むと…

「まったく、しつこい人は嫌われますえ？」

そう言いながら、サル女は三枚目のお札を用意する。

「食らいなはれ！！三枚呪符…京都大文字焼き！！」

放った符が、駆け上ろうとしていたセツナの前にひらひらと揺らめくと発火する。

そのまま文字通り、大の字の様に広がり炎の壁を作り出す…！！

生まれる熱風と炎に焙られて、セツナはよろめき、アスナは倒れかける彼女を支え引き戻す。

だが…正直、オレには効果が無い。

「鬼火…！！」

俺は鬼火を吐き、先ほどの炎にぶつける。

そして……

ドガアアアアアアアアンツ!!

「んなあああああ?!!」

「きゃあああああ?!!」

「ふん……どうぞでい。メリケンでは、くばっくふあいやあゝとか言っらしいな……。」

「め、滅茶苦茶やこいつ……!!」

「さあ、生徒を返してもらおうか?」

「こんのお……!!」

「ふっふふ……あだあっ!!」

俺がそういつていると……後ろから攻撃が来る。

「こ、殺す気か!!」

「殺しは死ねえよ。手加減しただろうが。」

「それでも、限度があるでしょう!!」

なぜだか、二人に怒られた……理不尽な。

「はっ！そや……おい、さつさと来いや！」

「……………はっい」

サル女がそういうと、何処からか人影が飛んでくる…それは。

「まあた、お前か……………こついうのを…くりべんじいとかいうんだっけな。」

「いえいえ　うちはまた会えてうれしいですえ？」

先ほど死合いをした戦士……………月詠が、そこにいた。

「お知り合いですか…ワイルド先生。」

「ああ。さっき言った剣士だ。」

そういうと、刹那は少し驚いたような反応をする。

「こんなのが神鳴流とは……………時代も、変わったな。」

「気をつけるよ…こいつ、出来るぞ。」

「……………はい。」

そして、月詠は襲いかかってくる……………！！

第三十四話：歌舞鬼さあぁぁんっ！！！！

ワイルド      side

「俺はサル女をやる。刹那！お前は月詠を頼む！」

「分かりました！！」

そう言っている間に、目の前では神鳴流同士の斬り合いが始まる。

セツナは野太刀を用いた純粹な神鳴流……一撃必殺の対巨大魔物用の剣。

一方月詠は長刀と短刀の二刀流……対人を想定し練り上げた邪道な神鳴流。

だが……小回りの利く剣と大振りな動きしか出来ない剣。

近接戦闘においてどちらが有利かは言うまでもなく……。

だが実際は一進一退、護衛をしていた相手の剣士の方が技量としては上ということだ。

その時、一つの声と合わせて人影が出てくる。

「契約執行180秒間…ネギの従者、『神楽坂明日菜』！！」

「お前の相手は、俺達だあっ！！」

「私もいるんだからねっ!!」

後ろから出てきたアスナとともに、音叉剣を構えてサル女目掛けて突撃する!

が……

ウキーンッ

クマーンッ

「チツ……!!」

いきなり現れた熊と、先ほどまでサル女が来ていた着ぐるみの様なサルが、それぞれの武器を受け止めてしまう。

「ウチの猿鬼と熊鬼は、ちょっとやそつとでは倒せまへんで!」

「な、なによこのサル!着ぐるみじゃなかったの?!」

「こつこつという輩が使う、護鬼と善鬼だ!邪魔くさいからさっさと潰すぞ!」

「りよ、了解!」

そういつてアスナがハリセンでサルを叩く…と、一撃で猿鬼は還されてしまう。

「んなっ?!」

「やるじゃねえか!なら、俺も…はアッ!」

俺は口から鬼火を吐き、怯んだ熊を蹴り倒す。

クマー…ッ?!

「さっさと帰れ…ケダモノが。」

そのまま倒れた熊の首を、音叉剣で一刀両断し…そのまま還す。

「ふん……どうでい。」

「な、なんやこいつら……!」

サル女がうるたえる……そこで、隙有りだ。

「今だ、小僧!」

「な、なんやて?!」

「はい!…!魔法の射手…戒めの風矢!」

サル女が驚いている隙に、ネギが捕縛用の風の魔法を使い、サル女を捕えようとする…が。

「あひいつ、お助け!」

サル女はコノカを盾にするように前に出し、蹲る。と…小僧は慌てて、矢の狙いをそらすようにする。

「あつ……！曲がれ！！」

矢はコノカに当たる直前で目標を逸れた。

サル女は一瞬呆然とした。…が、すぐに表情を変え、ニヤリとする。

「は……はは……ん、なるほど……。読めましたえ？」

サル女は小僧を嘲笑った。サル女は続けて言う。

「甘ちゃんやな……。人質が多少怪我するくらい、気にせず打ち抜けばえーのに。」

「こ、このかさんを離して下さいっ！卑怯ですよっ！」

小僧はそう言うが…サル女は、楽しそうに笑い続ける。

「ホーホホホホ！まったくこの娘は役に立ちますなあ！この調子でこの後も利用させてもらうわ！」

「貴様！！！！」

「おーっと、そっちの嬢ちゃん達も、動くんやないえ！お嬢様の顔に傷でもつけとうないやろ！」

「くっ……。」



「このかをどーするつもりなのよっ!」

「せやな!。まずは呪薬と呪符でも使って、口を利けんよにして……  
上手いことウチらの言うコト聞く操り人形にするのがえーな。くっ  
くっくっ……」

そういつて、サル女は笑うが……正直、洒落にならない。

「やってみるよ……俺がテメエを焼き殺してやる。」

そういつと、空気が凍った。

歌舞鬼から発せられる怒気が周囲を満たす。

今のサル女の台詞に切れそうになっていたネギ、アスナ、そして誰よりも怒り心頭に達していたはずのセツナさえ、強制的に冷静さを取り戻させられた様だ。

数秒、オレの意識は歌舞鬼の怒りに染まる。

歌舞鬼……子供以外の総てを殺すために、魔化魍とまで手を組んだ鬼。

その意識が、子供を盾にするということに激高し、一気に燃え上がる。

その怒りは、溶岩の様に熱く、そして氷の様にどこまでも冷たい……  
…まさに、鬼の怒りだ。

オレがそのまま睨むと、サル女は泣き出しそうにしながらも、強がっている様にコノ力を抱きかかえる。

「な、なんや…お嬢様がどうなってもええんか?!」

「んな訳あるか…!!!!」

オレは腕から触手を伸ばし、一瞬のうちにコノ力を取り戻す。

「ああっ、卑怯者!」

「テメエが言うな!」

そのまま触手を使い、サル女をつかむ。

「な、なににする気や!」

「決まってるんだろ?」

オレは触手をぐるぐると回し……そして。

「たあ~~~~まやあああ~~~~!!!!!!!!」

「ああああああ~~~~れええええ~~~~!!

!!!!!!!!」

思いきり…投げ飛ばす。

「だっはっはっはっは!おととい来いつてんだ!」

「ちょ、ワイルド先生！！あれ、大丈夫なんですか！？」

小僧が慌てて言うてくるが…オレはコノ力を渡し、そのまま笑う。

「へん！子供を盾にするような奴は、吹っ飛んで正解だ！」

「それにしても、やりすぎでしょーが！」

「あだあつー！！」

また、アスナにハリセンで叩かれる。

「なんだよ。俺、結構活躍したぞ？」

「そういう問題じゃなくて………って、そういうば桜咲さんは？」

そう言われて思い出し、そちらを見ると…。

「ほな、さいなら〜」

「くっ………！！」

傷だらけのセツナと、ちょうど逃げていく月詠がいた。

「逃げんのか、月詠！！」

「いえいえ。雇い主さんも守らなあかんのです〜」

そついい、月詠はさつさと逃げてしまつ。

「ちつ……俺達も、いったん戻るぞ。」

「でも、桜咲さんの怪我が……」

「戻ったらモーラがいる。あいつなら治癒魔法も使えた。」

「ええつ、モーラお姉ちゃんか!？」

「そついうことだ。さつさと行くぞ……。ジャングラー!！」

「あ、待って下さいよ!！」

オレはジャングラーを呼び出し、ネギ達を乗せて走り出す……。

第三十四話・歌舞鬼さあぁぁんっ！！！！！（後書き）

…最近、駄文らしさが増えてきた気がします。

第三十五話・ばれてないと思ってる事はばれるよ、ものすくすくろたえるよね。…

ワイルド side

さて……………昨日の夜に戦ったので、正直俺はへっとなのであ  
る……………。

と、言う訳で…熟睡中です。

「んがああああああ……………」。

も、寝ることしかできない……………って感じで眠ってます。

だが……………そうして眠っていると。

起きろ、起きろ、起きろ、起きろ…！

「んガアっ?!」

耳元で、大きな声がし…見ると、そこにはフロッグポッドがいた。

「う、五月蠅い……………!」

「…というか、さっさと起きろよ。」

「モーラ……………」。

見上げると、そこにはキバツト状態から、人間状態に戻ったモーラがいて、こちらを呆れた顔で見ている。

「オレ、眠い……。」

「朝飯どーすんだよ？」

……。布団で惰眠をむさぼるく美味しい朝ごはん

「……………起きる。」

「それでよし。」

「……………ガウウ……。」

なんだろう……損した気分だ。

「ほれ、さっさと着替えな！」

「ガウ。」

オレは、シャツとパンツ一枚の姿から、てきぱきと着替える……。

「……あ、起きたんですか、ワイルド先生。」

「ガウ……ネギ、おはよう。」

「はい、おはようございますー!」

あー……若いつて、いいねえ……オレ、不老不死だけど。

「あ、ワイルド先生。これ、朝食ですー!」

「ガル……サヨ、ありがとう。」

さよちゃん……ええ娘や。修学旅行も初めてだろうし、楽しそっだなあ……。

……オレ、おっさんっぽい事言った気がするね。

「……うん、まだ、体は18歳……。」

「?先生、どうかしましたか?」

「何でも、無い。」

とりあえず、何も考えないでおこう……。

と、そんな事を思いながら朝食を食べている……と。

「……すみませんです、ワイルド先生。」

「ムガウ?」

オレが振り向くと……そこには5班の一人、綾瀬夕映がいた。



確か、5班はネギと一緒にいくはずだが……

「なにか、用？」

「今日の自由行動、私達と一緒に回ってほしいんです。」

「……………ガウ？」

「駄目ですか？」

かくん、と首をかしげて聞いてくる。

「いいけど……………ノドカ、平気か？」

「…ええ。ネギ先生との事なら、なんとかなるです。」

「ガル…なら、いいけど。」

「では、よろしく願います。」

「ガウ……………あ、そういえば京都で見つけたジュース、あげる。」

そういつて、俺は一本の紙パック入りのジュースを渡す。

「こ、これは…?!」

「京都限定、《イナゴ佃煮ジュース》。飲むと佃煮を人に進めるよ  
うになる。」

「……………あとで、ありがたく頂きます。」

結構、喜んでるな。よかったよかった。

…というか、イナゴ女がなぜ…そのうち、「食べるう？」とか言うんだらうか…。

「じゃ、後でよろしくです。」

「ガルガル。」

しかし…何なんだらう。

「ガウウウ……………」

オレは、現在ユエ達と一緒に京都をまわっている…。

「のどか…頑張るです。」

「ガル、青春…。」

「うんうん いい感じじゃない？」

ま、現在はノドカの告白のデバガメをしているが。

「……………まだ、告白できそうにもないですね……………あ、そういえば。」

「ガウ？」

ユエはこちらを少し見て、そのままハルナを見据える。

「私は…少し、ワイルド先生と話があるので、のどかの方をよろしくです。」

「え？………いいよ。のどかの事はしっかり見てるから」

ユエはハルナに向かってそういうと、オレを連れていく……。

そして、そのまま歩いていく。

〈青年少女移動中〉

「………話、なに？」

「…今から話すことは、荒唐無稽な事です。」

「ガウ？」

「私は、前に先生とともに図書館探検に行ったとき、あるモノを見ました。…ドラゴンです。」

「………。」

起きてたのか…ユエ。

「そして…その後、相坂さんが現れ、ドラゴンを倒しました。…その時、ワイルド先生も、手から炎の矢の様なモノを出しましたね？」  
ユエは、さらに続けて言う。

「さらに最後…ドラゴンを倒した貴方は、私達を髑髏の意匠がついた、列車に乗せました。」

「ガ…………ウ…………。」

…………ま、まさか…ねえ。こんな早くばれるはずが…………。

「ワイルド先生。貴方、魔法使いじゃないですか？」

「ギクッ…！」

あ、口に出しちゃったよ…！

ヤベ、どうする…！どうすんの、オレ…！

「…………やはり、そうでしたか…。後、ネギ先生もそうなのでしょう？それ以外では…桜咲さんや、神楽坂さんも関係していると思います。」

「…………。」

す…い…な…の子…………。ピタリの中じゃん。

「さ…ら…に…………この事実を、貴方と一緒に住んでいる相坂さん

は兎も角…貴方とよく一緒にいる朝倉さんも関係者なのでは？そして、魔法使いという事をばらしたくはないため、朝倉さんには緘口令をしいて、協力してもらっている…そうでしょうか？」

「……………大正解。」

ユエ…やっぱり、すごいな。

「…それを知って、どうする？」

オレがそういうと、ユエは少しため息をつく。

「…のどかが好きになったのはネギ先生です。でも、ネギ先生は魔法の事を隠そうとしている…それで、本当に仲良くなれると思いますか？」

「…なれない。」

「…でしょう？だから…私は、のどかの為にも、そして私自身の好奇心のためにも…魔法に関する事を、教えていただきたいのです。」

ユエは、まっすぐな瞳で俺を見る。その瞳は、はっきりとオレを映している……………。

「……………一つ、聞いていい？」

「はい。何でもどうぞです。」

「…魔法は、人を助ける力…けど、人を殺せる力。」

「…はい。」

「オレ、護るけど…それでも、ユエ、ノドカ、戦つかもしれない。」

「……………」

ユエは、言葉も無い様に、そこに立ちすくむ。

「それでも…………魔法、知りたい？」

「……………はい！」

ユエがこちらを、先ほどのはっきりとした目でこちらを見つめ、決心した表情でそう言い放つ。

「……………なら、いい。」

そういって俺は手を差し出し、ニッコリと笑う。

「ようこそ！魔法の、世界へ！」

笑いかけると、ユエもつられた様に笑い…

「はい。よろしく、お願いです。」

ユエは、俺の手をつかみ、笑顔で言う…………。

第三十五話・ばれてないと思ってる事はばれるよ、ものすごくうるたえるよね。…

夕映、頭良すぎましたかね？

さすがに、ここまでは無いか…？

ついでに、下にランキング付けました。

イメージは、そっという感じのガイアメモリ音声。

第三十六話：カオスでも、楽しい事は楽しい。

ワイルド      s i d e

さて……………ユエに魔法がばれ、ネギも無事、告白された  
様で…何とか、今日一日も平和に終わった。

と思いながら、俺は旅館でゆっくりと露天風呂に浸かっていた…。

「ガウウ… いい湯。」

と、オレが風呂に入っていると…。

「…邪魔するよ、ワイルド。」

「ガウウ？」

脱衣所から、一人の女性…というか、モーラが入ってくる。

「…オレ、入ってる。」

「固い事言っくなったの…ふう。」

オレの声に耳も貸さずに、モーラは風呂に入る。

「ま、一杯飲め。」



「……………なに、この酒……。」

なぜか樽でモーラは持つてきているが……これ、純米大吟醸つて書いてあるし……銘は……「幻想殺し」……飲むと、不幸に見舞われそう  
だ。

「ああ、淹でちょっと……まあ、飲むさ。」

「ガウ……？」

まあ、気にせず飲むがな………美味いつ！！

「ガルルウ………美味い。」

「だろ？ま、飲め飲め！」

「ガウウウウ！！！！」

オレ達は、その場で酒盛りを始める………。

「ガウウウウ……。」

「……………さて、と。ちょっと話があるんだが……な。」

「……………なに？」

モーラはいきなり真剣な顔になり、こちらを向く。

「これまで、魔法がばれてるのは、朝倉・さよ・夕映…三人もだ。」

まあ、ネギはそれ以上だが。と続けてモーラは言う。

「あいつらを戦闘に巻き込むかもしれないさ…お前は、それを守れるのか？」

「……………」

「あたしは、あなたのおかげで生まれた、半分機械で半分獣の人間さ。だから、あなたの言うことは絶対だが…。」

モーラは、こちらに向き直り、オレを見据えてそう言う。

「今一度、聞きたい。アンタは、あの子たちを守れるのか？」

「……………」

「もし守れないってんなら…」

そういうと、モーラはオレの頭をつかみ、みしみしと力を込める。

「あなたは、どうするんさ？ワイルド・シユタイナー…。」

「……………オレ、守る。」

「出来るのかい？」

「出来ない訳無い。……………オレ、トモダチ、絶対、守る。何があつても。」

たとえ…それ以外の全てが、消え去ろうとも。

トモダチのためなら、その比類なき力をどこまでも奮つ……………

……………それが、アマゾンであり…今の、オレだ。

「……………よっし。それでこそ…だ。」

「ガ…？ムガツ?!」

「さすがあたしの主さ!」

オレが言った後、いきなりモーラは抱き締めてくる。

今、風呂だからな!今の俺とモーラ、バスタオル一枚だからな!!  
???

「あーもう…よし、いい子いい子してやるぞ。」

「一回…離れる!」

「わっど。」

なんとかモーラを振り払い、風呂からあがる。

……………一応、オレも男だよ?

「さあて……そろそろ始めようか……」

私は、新田先生に怒られていたほかの生徒を見つめて、ボソツとそ  
ういう。

私が始めるそのゲーム…とは！

「くちびる争奪！！修学旅行でネギ先生&ワイルド先生とラブラブ  
キッス大作戦…スタート！！」

『くちびる争奪！！修学旅行でネギ先生&ワイルド先生とラブラブ  
キッス大作戦』とは？！

各班から二名ずつを選手に選び、新田先生方の監視を掻い潜り、

旅館内のどこかにいるネギスプリングフィールド、ワイルド・シ  
ユタイナーの唇をGETするという、何というか名前の通りそのま  
んまのゲームの事である。

妨害は可能！ただし武器は両手の枕投げのみ！！

上位入賞者には豪華商品プレゼント

ただし、新田先生に見つかった者は他言無用：朝まで正座！！死して屍拾うものなし！！！！

……何だかペナルティの方が大きい気がしないでもないが、それでもイベントに飢えた我らが3-Aにはかなり受け入れられていた。とゆうか、いいんちょが率先していた気がしないでもない。

だが、脳天気な彼女らの知らない裏では恐ろしい陰謀が蠢いていたりする。

既に彼女らが宿泊をしているホテル嵐山の周囲には魔法陣が描かれており、これにより当旅館内でネギやワイルドとキスをすれば即仮契約が成立してしまうのである。

つまりこれは、ゲームイベントの名を借りた仮契約者大量GET作戦だったのだ！！

おまけに班&個人の連勝複式トトカルチヨまで実施するので、どう転んでも企画をぶったてた私とかもっちはウハウハなのである！

しかし

「いやー、お疲れお疲れ。よく頑張ったね！」

私は、自分の胸元を見ながらそういう。

その胸元から顔を出しているのは今回の相方であるオコジヨ妖精力モノのだが……なんとというか、白い体毛を灰色にしてぐったりとう

な垂れていたのだ。何だか白いウナギの様でもある。

「いや……………理不尽な仕事だったぜ…ブンヤの姉さん……………」

「まあ、いいじゃない。こっちの方が面白そうだし」

「……………まあいいけどよ。上手くいけば丸儲けになる訳だし、結果的には良い方向に行くかも……………」

しかし、それでも美少女の胸の間にいる所為か何とか気力が回復してきてヨロヨロと身体を起こし始めるカモ。

疲労困憊とはこの事だろう。

何せ脅しに脅され（ファング&エクストリームでフルボッコ）、魔方阵の契約対象者の式の中にもう一名の名前を追加させられたのだから精神的にもかなりキている様だ。

しかも、半ばムリヤリ書き込んだのだから折角の仮契約式が崩れたりしない様するのは大変だったらしい。ま、関係無いけども。

「結構大変だったが…その分、見返りはでかいぜ…？」

「うんうん、頑張っっていこうー！」

…さて、ここで全チームを紹介しておこう。

3班代表選手

・雪広 あやか

・長谷川 千雨

「うぐぐ……なんで私がこんな事を……」

「つべこべ言わず援護してくださいな！ネギ先生の唇は私が死守しますー！」

2班代表選手

・古菲

・長瀬 楓

「一位になってしまったらどーしよアルかねー?!」

「んー……」

4班代表選手

・明石 祐奈

・佐々木 まき絵

「よし、絶対勝つよお　っ!」

「エへへ……　ネギ君とキスカあ……んふふ……」

1班代表選手

・鳴滝 風香

・鳴滝 史伽

「あぶぶぶ……お姉ちゃん……正座はいやです」

「大丈夫だって！僕らはかえで姉から教わっている秘密の術がある  
だろ」

「そのかえで姉と当たったらどうするんですか っ！」

5班代表選手

・綾瀬 夕映

・宮崎 のどか

「絶対勝つてのどかにキスさせてあげます！さ、行くですよー！」

「う、うん」

「いい感じいい感じ……トトカルチョもなかなかの倍率！」

「じゃ……改めて。」



「くちびる争奪！！修学旅行でネギ先生&ワイルド先生とラブラブキッス大作戦！！」

さあ、ここからが楽しみよねー

第三十七話：人の勘って、案外当たるもんだよね。（前書き）

PV25万、ユニークアクセス25000、ありがとうございました！！

第三十七話：人の勘って、案外当たるもんだよね。

ワイルド side

オレが部屋に戻って寛いでいると…いきなりネギが、震えだす。

「うつつ…?」

「ネギ、どうした?」

「いえ、なんだか、ぞくぞくって…。」

「ガウ…?風邪引いた?」

「いえ、そんなことは無いと思うんですが…。」

ちなみに、今、アスナとセツナは入浴に行っており、今担任の部屋にいるのは、ネギとオレだけだ。

「何だろ?この寒気は…。」

やっぱり不安は拭い去れないらしい。

…ああ、原作で何かあった気がする…。忘れたけど。

「ガル…一度、見回り、行く?気分転換にも、いい。」

「そ、そうしましょうか…。」

と、そこで俺は一枚の紙をネギに渡す。

関西呪術協会などでポピュラーに使用されている『身代わりの紙型』  
といわれているもので、ネギの様な西洋魔術師風に言えば簡易ペー  
パーゴーレムを生み出すマジックアイテムである。

その紙に名前（本名）を書けば、札はその名前の人物そっくりの人  
型をとるのだそうだ。

「へえ、すごいですね！」

「ガル。とりあえず、名前、書く。」

「はい！ええ」と……」

ネギ「スプリングフィールド……と口で言うのは簡単だが、ネギは  
元々イギリス人。」

日本語会話と“読み”に関しては兎も角、“書く”方はまだ完璧で  
はなかった様だ。

それに、筆で書いた事も手伝ったのか、だいぶ変な字になってしま  
った。

ぬぎ

「あ、間違えた。」

「落ちつく。」

みぎ

「あ……カタカナの方がいいかな？」

「その方が、いいかも。」

ホギ「ヌプリングフィールド

「あれ……？何かちがうぞ？」

「いろいろ、ちがう。」

何枚か失敗し、それでも何とか自分の名前であるネギ「ヌプリングフィールドと書き終えた。

「それで、呪文、言う。」

「はい！ええつと……。」

ネギは、先ほど刹那に教えてもらった言霊を唱える。

「お札さん、お札さん、僕の代わりになってください。」

呪符に込められた式が発動し、光が溢れ出す。

…そして、書かれた真の名を触媒にしてその力は人の形を取り、一瞬後にはネギのそっくりさんが彼の前に立っていた。

「こんにちはネギです。」

「わースゴイヤー！ボクそっくり。西洋魔法にはこーゆーのは無いなー……」

「ガル。すごい、これ…そっくり。」

何だか目の焦点合っていないよーな気がしないでもないが…。

それでも見たこともない魔法（正確には術であるが）にネギは喜んでいる。

…正直、オレもここまでとは…と驚いてるけど。

これを上手く使えば敵の目を眩ませる事も可能であるし、これから行おうとする見回りの身代わりも務めてくれる。

これさえあればとりあえずの誤魔化しにはなるだろうし。

何せネギの代わりに布団の中で寝てくれていたら良い“だけ”なのだから。

「ここで僕の代わりに寝ててね？」

「ネギです。」

……何だか返事がかなり心もとない。

「大丈夫…それ？」

「はい、大丈夫ですよ！では、行ってきます！」

だが、それでもネギは気にしていないのか気付いていないのか、はたまた身代わりができた事に安心したのか、杖を片手に元気に窓から見回りに飛び出して行ってしまおうネギ。

これで目に入れられねばネギが怒られたりする事はあるまい。

「ガル……………オレ、寝る……………」

オレも、なにかあった時のために寝始める。

…その時、まだ起きていたら気づいていただろう…

先ほど、式を捨てた屑かごから、光が出ていた事を……………。

「こんにちは ぬぎです。」

「みぎです。」

「ホギニ又プリングフィールドです。」

「それです〜〜。」

…さらなる、騒動の種である…。



第三十七話：人の勘って、案外当たるもんだよね。（後書き）

今回、短かったですかね？

第三十八話：普段大人しい子って、なにかあった時ギャップ大きいよね。

夕映 side

「ゆ…ゆえ〜。」

「なんですか。急ぎますよ?」

口にペンライトを喰らえながら、私はおぎなりに聞き返しました。

私とのどかは、今ホテルの屋根近くの通路(?)を通り、ネギ先生たちの部屋まで向かっているです。

「なんでネギ先生のところ行くのに、こんなところ通ってるの〜?」

部活みたい…と、のどかは言うのですが…そんな部活、あってたまりますか。

「私の見立てでは、このルートが最も安全かつ早いのです。」

そういつて、私はのどかにホテルの地図を見せます。

「ネギ先生の部屋は端っこですので、どうやっても必ず敵や新田先生に当たってしまいます…。」

そこまで言うと、のどかは納得したようです。

「そつか、だから裏手の非常階段からすぐ中に入れば……。」

と、そこで屋根近くから、そのまま屋根瓦の上に立つ。

「でも非常口にはカギが掛かってるかも……。」

「こんなこともあるうかと、あらかじめカギを開けておいたですよ。」

正直、何の意味も無く開けたカギでしたが……役に立ちましたです。

「ゆ……ゆえ、すごいー さすが……。」

「コラのどか！お礼は目的を達成した後ですよ。」

そういつて、私達は非常口からそろそろと入っていく……。

「まだ誰もいませんね……チャンスです。」

そういつと、のどかから一度枕を受け取り、近くの部屋を指差す。

「その304がネギ先生達の部屋です。さ、のどか今のうちに。」

「う……うん。」

のどかは顔を真っ赤にして答えます……。

………。のどかが初めて好きになった男性がネギ先生です。私は、友人としてそれを応援しなければ……！！

「さ、早くいくです。」

「う…うん。」

そのまま、のどかは部屋に入って行きました。

「上手くいくといいですけど…。」

と、そう言いながら水筒に入っていたジュースを飲み始めます。

ちなみに、そのころの1班と2班は……………。

「こら…！お前ら、何をしとるか…！」

「わ　っ…！…！鬼の新田だ…！」

「何か声…って、新田先生!？」

「あ、お前らまでか…！」

「う…う…ちや…ぱり、正座いやですう…」

「いいから、ほらロビーに行くぞっ。」

「「「うわぁぁぁん…！…！」「」「」

捕まっていた……。

「……………遅いです。」

のどかが入ってから、五分は立ちますが…全く、出てきません。

水筒の中身も、飲み干してしまいました……そして、なんだかポカポカしてきまひ…た。

いい加減、のどかはどうしたんでしょうか…？

「うにゆ…のどか、どうしましたかあ…？」

いい加減痺れを切らし、私は中に入って行きました…。

「あ…ゆ、ゆえ…。」

「…何やってるんですか？」

そこには、泣きそうな顔で、布団の横に座りこんでいるのどかが。

「う…やっぱり、無理だよ…。」

「いまさら…何言ってるんですか。」

「でも……………。」

……ここまで来て、まだ怯えてるんですか。

「ええい…なら、私が先にやるですよ？」

「…え…？つて、ゆえ、なんだかお酒の匂い…」

「のどかが先にやらないなら、もう私がやるです…！」

「ちょ、ちよつとゆえー？！」

「いただきます…！」

私は、そういつて布団を引っぺがし、枕の場所にある口めがけて、キスをする…！

「ん……ふぁ……ちゅ……ん……」

「あ、あわわわわ………つて、あれ………？」

私が、いろいろと自主規制な感じで、キスをする…のどかが、変な声を出します。

「ん…プはぁ……。どうか、しましたか？」

「ゆ、え…それ、ワイルド先生……。」

「…へ？」

私が、そんな声をあげ、布団を見ると…それは確かに、十歳の子供

先生ではなく、大人のワイルド先生でした……………。

「……………きゆう。」

「つて、ゆえー?!」

そこで、なんだか目の前が白く見えて、私の意識は、そこで途絶えました……………。

綾瀬夕映… 仮契約・成立。

ワイルド side

… なんだか、寝ていると、口というか、どことというか… 大変な事になった気がするので、目覚める… じ。

「キスですか。」

「チュー」

「了解しましたー。」

「いただきまーす」

「……………きゆう。」

「ネギ先生があ……………いっぱい。」

「…何この、カオス…。」

四体の失敗作式、酒で酔ったユエ、顔を真っ赤にして倒れているノドカ…。

「チューー」

と、思っている間に式が飛びかかってきたので…とりあえず、蹴り飛ばす。

「チューー!!」

「死にらさす…。」

蹴り飛ばして倒れると、式は倒れる。

「そ…それでは。ホギ＝ヌプリングフィールドでした。」

そういうと、音を立てて式は紙にもどる…。

「……………。」

「ひ、避難ですー。」

「はいー。」

「逃げる逃げるー。」



オレが睨むと、式達は窓から逃げる…。

「逃がさない。」

オレはそう呟いて、式達を追う…！

朝倉 side

私達が映像を見つめている、と…いきなり、目の前が光り、カードが現れる。

「……………おつと？なあ、ブンヤの姉さん。これって…」

「……………うん。多分…ワイルド先生の。」

「さ、早く実況実況！」

「あ…うん。」

『現在、ネギ先生は無事ですが…ワイルド先生とのキスが成功したようです！映像は見えないところにいる様なのですが……相手は…5班、綾瀬夕映！おめでとございます！』

……………でも、ワイルド先生が……………まさか、だね。

「さ、これからさらに面白くなってくるよ…？」

「おう！さ、楽しくなってくるぜー！」

ま、これからが面白いんだから…ね

第三十九話・戦わないと、分からないこともある。(前書き)

PV27万突破、ありがとうございます！

第三十九話・戦わないと、分からないこともある。

ワイルド      s i d e

オレは、先ほど逃がした式を見つけてDEATHするために、追いかけている。

「待て、式!!」

「いやですー。」

「チューしますよー。」

「たくさん、やりまーす。」

全員、ふぬけた顔でそう返してくるが…正直、腹立たしい。

「…殺すか。」

ボソリ、とそう呟くと、式達はさっさか逃げていく。

「まて……っ!……!」

俺が更に追おうとすると、足元にいきなり斬撃が降ってくる。

「ガールルルル……!……!……!」

「うぶぶぶ……お久しぶりどす〜」。

「あんさんは面倒な相手やから、ここで潰させてもらいますえ〜?」  
その声が聞こえた方を見ると…そこには、二人の女が、屋根の上に立っていた。

「ツクヨミ! チクサ!」

「じゃ、行きますえ〜!」

そういうと、チクサは札を構えて猿鬼と熊鬼を召喚し、ツクヨミは剣を構える。

「アアア—マアア—ゾオ—ンツ! ! !」

俺もそれに合わせて、アマゾンライダーに変身する。

「いくんや、熊鬼、猿鬼!」

「うちも行きますえ〜?」

「ガウウウウ! !」

オレはそのまま走りだし、両手を構える……!

「ケケ—ツ! !」

「にとーれんげぎざんくうせーん」

クマーッ！

俺が両腕で大切断をすると、それは斬空閃で防がれ、そしてその後から熊鬼が現れ、攻撃を仕掛けてくる。

「エレキハンド！！」

クママママーッ！！

「ケケエーッ！！」

クマママ……！！

「大・切・断……！！！！」

スーパー1のエレキハンドで熊鬼を攻撃し、牽制たところで大切断で還す。

「セイリングジャンプ！！」

「あらら？」

俺はそのまま、スカイライダーの力で、数十mジャンプする。

「ケケケ………ガアアアアアアッ！！！！」

ウキキキキキーッ!!!

そしてそのまま、大量に鬼火を吐いて攻撃する…が。

「うわわわわっと!!」

「ざんくうせーん」

猿鬼は還せたのだが……チクサは式を着ぐるみにして回避し、ツクヨミはそのまま斬空閃で目の前の炎を消し飛ばす。

「グウウウ…！」

「こ……この人、強いわ……。」

「ええ。さすがやわ〜」

チクサは顔をひきつらせているが、ツクヨミはニコニコと嬉しそうにしている。

「ガLLLLLLLL…!!」

「うふふふ〜 最高ですえ〜」

「……今帰るなら、追わない。」

オレが睨みながら言うと、チクサは一度安心したようにする。

「なら、そうさせてもらいますが…アンタは消しときたいです。月

詠はん、頼みましたえ？」

「はい、任せて下さい。」

「倒されそうなら、無理せんで逃げとくんやで？ほな。」

そういつて、チクサはサルの着ぐるみのまま、走って逃げていく……。

「……………容赦、しない。」

「容赦されたくないですえ？真剣勝負なんですから……」

そういつと、月詠は剣を構え、オレも両手を構え、お互いに臨戦態勢に入る。

「ガアアアアアアア……………！！！」

「うふふふ……………」

拮抗状態になり、お互いに一度睨みあう形になる。

「……………」

「……………」

その時、遠くで光が生まれ……それが、きっかけとなる。

「ガアッ……！！！」



「滅殺斬空斬魔閃！！」

ツクヨミの剣先から膨大なエネルギーが発せられ、オレの周りの地面が 土が 植物が 消滅していく。

そして、そのエネルギーが収まると…お互いの元いた場所に入れ替わり、立っている。

オレの体はぼろぼろだが…ツクヨミの体は、傷一つない。

「……………さすが、ですわ……………」

「…マッハ、大切断…！！」

オレがそういうと、ツクヨミは全身から血を噴き出し、ゆっくりと倒れる…。

「…ガウ。」

…実を言うと、本気で危なかった。

あのエネルギーを出す技は、喰らったら不老不死でも回復には時間がかかりそうだったし、必死だったのだが…あ、今の技はクロックアップ×大切断だけだね。

「……………ツクヨミ、大丈夫か？」

「あー…無理、ですえ…。」

地へ倒れ伏しているツクヨミに聞くと、血を吐きながらそう答えてくる。

「もう、死ぬかもしれへんなあ…。」

ゴボツ、とまたツクヨミは血を吐く。

「……………助ける。」

「へ…?」

ツクヨミが不思議そうな声をあげるが、そのままオレは変身を解き、抱きあげて歩き出す。

「ど、どうする気ですえ…?」

「オレの使い魔、治癒魔法、使える。」

「……………甘いどすなあ。うちが、治ってあんさんを襲ったらどうするつもりです?」

少し楽しそうに、ツクヨミは笑う。

「ダイジョウブ。治癒魔法、得意じゃないから、命平気でも、動けない。動ける、修学旅行、終わった後。」

「…そしたら、うち契約終わってまいりますわ」

「だから、平気。」

「……………ふふっ。変なお人どすなあ……………」

そういつと、ツクヨミはせき込む。

「ダイジョウブ……………?!」

と、俺が顔を近づけると…………

「隙有り」

「ガ……………ムツ!?!」

ツクヨミは、オレと唇を重ね……………そして、地面が光る。

バクティオー  
仮契約!!

「……………ふう。」

「ツ、ツクヨミ?!…しっかりする!」

ツクヨミは唇を放すと、安心したように笑い、そのまま気を失う……………。

そして、その場には一枚のカードが現れる。

カードには、峰部分が赤色の鋸のようになった両刃の日本刀と鉄で出来ている様な無骨な鞘を持ち、どこか狸々を彷彿とさせる仮面を顔

の横に付け、動きやすく改造した様な死に装束を着る、月詠が書か  
れていた…。

月詠…仮契約・成立。

「アーティファクト設定」…（前書き）

追加しました。

「アーティファクト設定：2」

主 ワイルド・シユタイナー

名前表記 AJASE JUE

称号 PHILLOSOPHER・ACCOMPANIED・BY・  
IMMORTALITY (不死従える哲学者)

色調 NIGROR(黒)

徳性 SAPIENTIA(知恵)

方位 OCCIDENS(西)

星辰性 MERCURIUS(水星)

アーティファクト フシタチノエフダ 《不死達の絵札》……ラウ  
ズカード

スペード、ダイヤ、クラブ、ハートの全てのラウズカード。  
そのままのカードとしても、手裏剣の様な武器としても扱える。  
コンボも自由自在。

フシノアルジタルキモノ 《不死の主たる着物》……不思議な服

スピードマークのトンがり帽子…思考力を高め、五感をUPさせる。

ダイヤモンドのガントレット…怪力を発揮し、身体能力がUPする。

ハート型のベルト…カードをラウズすることで、そのカードの効果  
を使える。オートで魔法障壁（5tの衝撃まで防ぐ）を発動する。

クラブマークの服と一体化したマント…フロートとリフレクトの力  
が込められており、物理攻撃、魔法攻撃などを跳ね返し、さらに高  
速飛行能力も持つ。

この四つ。効果は、着なくては発動しない。

主 ワイルド・シュタイナー

名前表記 CHUCUJOMI

称号 DEVIL・BLADE・BAREARK（魔刃持ちし  
狂戦士）

色調 AURUM ET NIGROR (金と黒)

徳性 AUDACIA (勇気)

方位 ORIENS (東)

星辰性 NIGRUM FORAMEN (黒い穴)

アーティファクト スベテキリサクゲドウノヨウトウ 《総て斬り裂く外道の妖刀》……裏正。

外道衆の一人、腑破十蔵が持っていた妖刀。両刃の刀であり、峰部分ならば、どんな存在を切り裂く力を持つ。狂化するというデメリットがあるが…使用者は月詠なので、そこまですべて問題はない。

スベテノツルギノカエルバシヨ 《総ての剣の帰る場所》…鞘。

総てのライダーが使った剣等の武器を取り出せる鞘。見た目はただの鉄で出来た無骨な鞘だが、防御力が強く、盾や木刀代わりにも使える。

主 ナギ・スプリングフィールド



名前表記 WILD STEINER

称号 WILD POWER MASK'D RIDER (野生  
の力持つ仮面の戦士)

色調 AURUM (金)

徳性 AUDACIA (勇気)

方位 CENTRUM (中央)

星辰性 SOL (太陽)

アーティファクト マカイジョウノマジン 《魔界城の魔神》

全長30mはある、巨大な三つ目のタコの姿をしている。

意思を持っているので、単独行動も可能。超絶的な回復力を持つ。

喰らったモノを核に、城に変形する能力を持つが、喰らったモノの種別により、城は変化する。

生物：全てを乗っ取って、人間大のサイズの体に変換する。ワイルドの意思で着脱が可能。

武器：それを数十倍に強化した物に変化する。剣や銃であろうと、たこの足の様に曲げること、そして八つに分離させることができる。

無生物：それを核とした城に変化する。城のイメージは西洋の物。

足が生えて動く事もできる。ぶつちやけ、ハル。

主 ワイルド・シュタイナー

名前表記 MOLA STEINER

称号 STRENGTH A MACHINE BAT TO D  
EMAND (強さ求めし機械蝙蝠)

色調 AURUM ET CAERULUM (金と青)

徳性 AUDACIA (勇気)

方位 CENTRUM (中央)

星辰性 JUPITER (木星)

アーティファクト ソウコウ・アニマル 《装甲・アニマル》：ア  
ームドディスクアニマル。

一体一体が、魔力と巨大な体躯(体長4mほど)をもつハガネタカ、  
カブトオオザル、ヨロイガニ。

それぞれに幼い子供並みの理性と知能がある。(一番賢いのはヨロ  
イガニ)

ハガネタカは炎、カブトオオザルは岩、ヨロイガニは水の攻撃がで

きる。

主 ワイルド・シユタイナー

名前表記 AMAGASA CIRCUSA

称号 BELIEVE FATE PRINCESS OF THE  
MIRROR (運命信じる鏡面の姫君)

色調 AURUM ET CYANEUM (金と藍色)

徳性 CARITAS (愛)

方位 CENTRUM (中央)

星辰性 FAX (流星)

アーティファクト カガミノケモノシタガエルチカラ 《鏡の獣従  
える力》……ゴルドバイザー

仮面ライダーオーデインが使っていた杖。  
式や、獣などの理性があまりない生物を全て操る事ができ、ミラー  
ワールドに入れ、時間制限なしでいられる。

キョウメンセカイノセンシノフダ 《鏡面世界の戦士の札》……ア  
ドベントカード。

全ミラーライダーが持っていたカード。

もちろんサバイブやユナイトベントもあり、サバイブを使うと召喚したモンスターなどを強化できる。ユナイトベントは全モンスターを融合させ、ジェノサバイバーを召喚することもできる。リンクベントも…一応使える。

尚、スライム達を契約モンスターとしたので、龍騎本編では使われていないカードを数枚持っている。

くアーティファクト設定…く（後書き）

…え、称号が英語な理由？

ラテン語分らないからですが、なにか？

第四十話：パクティオーカードって、材質何なんだろう。

ワイルド side

…さて、昨日のラブラブキッス大作戦から一夜明けた今日。

翌朝は賑やかな面々と重苦しい面々と両極端であった

前者は昨日の夜の見学者達…後者は参加者の一部等である。

ちなみに、ユエはずっとオレ達の部屋で寝ていたなので、正座はなしだった。オレも窓から部屋に戻ったので、おとがめなし。

賑やかな面々は英気も十分といった様子で昨日の勝者たる二人に、豪華賞品を見せてもらっている。

「へえ、それが豪華賞品なんだ」

「あゝ、見せて見せて〜！」

女子中学生ならではの賑やかさが、ノドカとユエを囲む面々はそのカードに目を落とす。

ノドカのカードを見た面々は次々に感想を言っていく。

「本屋の絵が描いてあるー」

「あーっ、スゴイ！コレは欲しかったなー！」

「ラブラブキッズ大作戦の優勝者にふさわしいねー。」

カードに描かれているのは、制服姿に、周りに何冊もの本を持つノドカの絵。

その描かれた表情もどことなく嬉しそうである。

ユエのカードを見た面々も、感想を言っていく。

「あー、こっちもいいなー」

「なんだか、魔法少女っぽくない？」

「確かに確かに！なんか、杖とか持ってそうだよねー」

カードに描かれているのは、スペードマークのトンがり帽子、ダイヤモンドのガントレット、ハート型のベルト、クラブマークの服と一体化したマントをそれぞれつけ、周りにはトランプが何枚も舞い、その中心にユエが立っている絵。

顔はどことなく気難しそうにしており、拗ねているようにも怒っているようにも見える。

そして、当の本人は…。

「…なんだか、頭が…。」

……………昨日は、匂いからして酒に酔ったの行動だったらしい。

それも、結構上質の酒。モーラが持ってた、樽の酒と同じ匂いがしたけども……。

ま。それも兎も角の問題として、今の問題は……。

「ワイルドはーん」

「ガルル……」

この、娘である。

昨日、あの後カードを回収してから、モーラのところへ連れて行き、治癒魔法を何回も重ねがけした。

ちなみにその間オレは朝倉とカモをシメていたが。（クロックアップでくすぐり続けた。）

そして何とか命は取り留めたが……。

「一生ついていきますえ〜」

「ウウウ……モーラ、助けて。」

「無理無理。そいつ近づくと斬りかかってくるし。」

……なぜかパクティオーした事を知ると、ものすごくなついて甘えてくるようになったし……まだ、自分の足ではよちよちとしか歩けないのに。



「しかし…よく動けるよなあ。見ただけでも、骨折、内臓破裂、筋肉痛etc…とあったのに。」

「頑張れば、歩けますえ〜」

「すごい…。」

……………あ、そういえば…。

「ツクヨミ、ネギ、話す。」

「…ああ。言わないといけねえよな…。」

ああ、ちょっと憂鬱だ…。

ネギ      s i d e

昨日のラブラブキツス大作戦から一夜明けた今日…とりあえず、ボクは理不尽に怒られていた。

「まったくもー…!!ちょっと、どーすんのよネギ!こーんなにいっぱいカード作っちゃって一体どう責任取るつもりなの?!」

「えうつ?!僕ですか?!」

昨夜のゲームの事を楽しげに話しているボクの生徒達を向こうに置き、全然全く知らない内にその中心に置かれていたボクは、何だか不条理に責められていました。

見回りを行っている隙に勝手に仮契約の陣を仕掛けられて勝手に女の子と契約を結ぶ策を講じられたのに……。ボク、ワルクナイ。

まあ、主犯格のカモ君はボクの使い魔の様な物なので監督不行き届きと言えなくも無いけど…。

「まあまあ、姉さん。」

「そーだよアスナ。もーかったってことでいいじゃん」

「朝倉とエロガモは黙ってて!!」

そういつた朝倉さんとカモ君に、アスナさんはくわっと目を見開いて怒る。

初めから裏にいたセツナさんは当然として、やっと裏の事を理解し始めているアスナさんですら裏の危険な事に気付いているんだ。

「でも、正直言っていていいことした気だったんだけど？」

「なんでよ!？」

「だって、この場にいる戦力って、精々モーラさん、さよちゃん、龍宮さん、私、先生…で、ここにいる三人。しかも、後衛がネギ先生と私ぐらいだよ？それにモーラさんは魔法戦士だし、私は遊撃タイプだしねえ。」

…あ、そういえば、朝倉さんに魔法を見られた時、その辺のことを説明してもらったっけ…。

「だから…?」

「もう一人後衛が増えたら、安心感が半端ないわよ?」

「だからって、いい訳無いでしょーがアア!!!」

そういつて、アスナさんは鬼みたいな顔をして起こる…怖いっ!

ボクが怯えていると…

「ネギー。」

「…あ、ワイルド先生!助け…」

助けを求めようと、ワイルド先生の方を見ると…

「うふふふ、お久しぶりどす、坊や」

「…え?」

そこには、前に駅で戦った女の人が、ワイルド先生に背負われて、こちらにあいさつしていた…。

ワイルド side

「っ、月詠?!なぜここに!」

「ちょ、ちょっと、待つ!」

「ワイルド先生、早く離れて下さい！」

オレの制止の声も聞かずに、セツナは夕凧を、ネギは杖を構えようと…する…が。

「落ちつけてんだ、お前ら。」

「「痛アツ!?!」」

後ろからやってきたモーラの拳骨により、二人は止まる。

「な、何するんですか…!!」

「その人、敵なんですよ?!」

「いいんだよ。そいつはもともと傭兵だし、今は戦える体じゃねえ。」

そう言われてネギ達がツクヨミを見…少し表情を暗くさせる。

「……………一応、やったの、オレって、言いくい…。」

「まあ、仕方ねえだろ。大変だったんだし…。」

「…って、こんな体にしたのワイルド先生ですか?!この強い人を…?!」

「ガウ。これでも、治癒魔法何回も、かけた。」

「……………ワイルド先生、お強いんですね。」

「ガル…。」

ネギ達が、尊敬したような顔で見ってくるが…そこまですごいか？

「よっし、これで敵の戦力は削げたし、有利だぜ、兄貴！」

「…あ、そういえば、カモ、頼む事あった。」

「なんですか、ワイルドの旦那。」

「カードのコピー、頼む。」

そういつて、俺は一枚のカードを淫じゆ…カモに渡す。

「いいですけど…って、このカード?!」

「ガウウウ…。」

「はい、うちのカードどす」

「いつの間にキスしてたんだよ!」

「…倒れたツクヨミ抱っこして治療しようとしたら…。」

「こいつ、今回被害者だな。」

ポンポンとオレの肩を叩いてモーラが、慰めてくれる…。

「…まあいいや。ほれ、カードの複製だ。アーティファクトはなんだ？」

「多分、この刀。」

「うふふ、切れ味よさそうですええ」

……………というか、完璧に裏正だろこれ。

十蔵…お寿司好きだったなあ。

「このカードで、戦えまへんがお話はさせてもらいますわ」

「ガルル…。」

とりあえず…また大変な事に、なりそうだ…。

## 第四十一話：朝倉にプライバシーという言葉は無い。

ワイルド            s i d e

……我が3 - A生徒等の京都・奈良での修学旅行三日目は完全自由行動である。

得てして女の子と言うものは、そういった遊びが関わる時のみ綿密な計画を立てて行動するものらしい。

修学旅行に出る前には何時にどこへ行き、何を買うなどまで計画は煮詰められていたらしい。（朝倉談）

新田先生のような真面目な教師などは問題が起こさないか、或いは問題に巻き込まれないかとハラハラしてたりする。

が……事前に計画表の提出が義務付けられているらしいので、そんな無茶な行動に出る事は余り無い。

彼女達も案外正直に行き先を記入するし。

…そして、魔法先生の端くれであるネギ小僧はというと……

昨夜のカードの話をしたあと、すぐに私服に着替え、何だか弾むように旅館の外へ駆け出していた。

どうしようもなく目立つ魔法の杖を背中に背負い、大切な親書を鞆に携え、パートナーであるアスナと待ち合わせている大堰川を目指している。

子供とは言えイギリス紳士の端くれ。

女性を待たせてはいけないし、早すぎて気を使わせる訳にもいかない。

…ということで時間よりやや早い程度で待ち合わせの場所に着いている。

尚、この情報は全てバットショットによって朝倉から送られた情報である。

朝倉、個人情報保護法というものを完全に忘れていると思う。

コノカはセツナに任せてあるし、ネギの任務は親書を届けるだけ。

根が真つ直ぐ過ぎる上、ついこの間まで悪い魔法使いの存在にさえ気付けずにいたネギであるからこそその思考の流れだ。

魔法に関わるという事は危険に近くなると言う事。その所為で故郷の一つを失っているというのに……

…まあ、そのフォローなどのために、オレはいる訳だが。

「ネーギ先生」

「え？」



何だか親しげな声で背後から呼びかけられ、ネギが振り返ってみると……

そこには、アスナ、ノドカ、コノカ、ユエ、ハルナ。

それと

ニヤニヤと笑っているモーラ、カメラを肩にかけた朝倉。

そして……オレである。

それを見たネギは、一度女子たちの服を褒めたあと……

「……え？…なな、なんでアスナさん以外の人がいるんですか……  
っ！！」

直に小声でアスナにツッコミを入れていた。

「ゴメン。パルに見つかっちゃったのよー。」

さっきから謝っていたのはその事なのだろう。

何せ人の恋愛感情の気配をラブ臭と称して感じているハルナだ。

ひょっとしたら魔法使い並の勘を持っているのかもしれない。

「ネギ先生。そんな地図もってどっか行くんでしょー？私達も連れてってよー。」

まあ、当ねハルナはお気楽極楽であるが。

「え〜と……5班の自由行動の予定が無いのは聞きましたけど、その……朝倉さんの方は……」

基本的にユ工達図書館組は、ノドカとネギの仲を取り持つ事に集中しているので取り立てた予定は入れていない。

……実を言うと、元々古都に詳しいユ工に京都を案内してもらおうとは思っていらしいのであるが…

ノドカが勇気を振り絞って告白に成功なんかしたもんだから予定を全てキャンセルしてネギの行動に合わせているらしいのだ。

ちなみに、ユ工から聞きました。

「私は基本情報のあるところに行くからね〜。いいんちょ達も諦めてるし。」

「オレ、暇だから、ついていく。」

「あたしもー。」

「そ、それならいいですけど…って、なんでモーラお姉ちゃんまでいるんですかっ?!」

あ、さすがにそこはつつこんできたか。

「観光に決まってるんだろ。暇だから旅行でも行くことと思ってさ〜。んで、京都に来たらお前らがいた…ってわけだ。」

…正直、苦しいかもしれないいい訳だな。

ちなみに、モーラはネギの保護者ということに通っている。

「ま、いいじゃんいいじゃん」

「全く……仕方ないわね。」

「姐さん…でも、どうするんですか？」

諦めたような声を出しアスナに、カモが不安そうに言う。

…まあ、魔法がばれてネギがオコジョになったら、こいつも逮捕されるので当然と言えば…当然だが。

「一応途中でまけばいいでしょ？いざとなったらハルナと夕映と本屋ちゃんだけ置いていけばいいんだし…。」

「あ、ユエ、関係者。」

「…え？」

オレがそういうと…ポカーンとした顔になるアスナ。

「ああ。あいつすげえよな。自力で魔法にまでたどり着くんだぜ？」

「ガウガウ。」

「私だって、魔化魍に襲われるまでは夢物語だったしね。」

「しかも、昨日仮契約しちゃったし。」

「諦めな、ってことだよー。」

「ガウガウ。」

「そ…そうだったんですか。」

ネギは驚きながらも、何とか納得したようだ。

「さ、行く！親書、届ける。」

最後はぼそりと小さな声で言いながら、オレは歩きだす…。

「……………桜咲さんもないのに、大丈夫かな？」

「大丈夫だぜ姐さん。ブンヤの姉さんも魔法はなかなかだし、モラの姉さんはなかなかの魔法戦士だ。」

「前に、素手でドラゴン倒した、とかもいつてましたよ。」

「それはさすがにうそでしょ…。」

「ま、それとかを抜きにしてもワイルドの旦那はすげえ戦士だ！あの敵の剣士だって半殺しの目にあわせたんだしな。」

「うん…そうだね。」

そんな会話をしているネギ達は放っておき…。

「早く来ないと、おいてく。」

「ああっ、ちょっと、待って下さーい！」

「ほらほら、早く来ないと置いてくぜ？」

オレ達はそのまま歩いていく…。

ま、最初は…ハルナ達の好きにさせていいか。

第四十一話：朝倉にプライバシーという言葉は無い。（後書き）

ちなみに、真名とさよは月詠の看病。

刹那はエヴァや茶々丸と一緒に京都散策に拉致…ゲフンゲフン、連れていかれましたよ。

月詠がないので、原作からは大きく外れていきますが、ご容赦を……。

第四十二話：チート見ると、途中で慣れてくるよね？

ワイルド      s i d e

「よっしや、三勝目！」

「朝倉、すごいじゃん！」

今オレ達がいるのは、嵯峨野のゲームセンター。

何ではるばる京都に来てまでゲーセンなのかという気がしないでもないが、そこには何だかご機嫌の眼鏡少女と、カメラを肩にかけた少女、ぼーっと画面を見つめながら紙パックのジュースを啜る少女。そして……

「…よっし、ぬいぐるみゲット!!！」

「次あれ！あの、モグラ人形、取る!!！」

「任せとけ!!！」

……………クレインゲームに熱中する俺とモーラ。

何故にここに皆が寄り集まっていたのかというと…実はハルナに引っ張って来られたからだ。

彼女が言うには、ここにあるカードゲームの筐体でゲームを行い、

上手くいけば関西限定版レアカードが手に入る……かもしれないの事。

まあ、実際にはレアというだけあって早々簡単に入手はできなかったりするのであるが。

それにしてもチャレンジしなければ確率は何時まで経ってもゼロだ。

だからハルナ達は件のカードゲームのゲーセンバージョンを遊びに来たと言う訳である。

そのゲームは巷でけっこう流行っており、プレイヤーは魔法使いとなつて、さまざまなカードを使用して戦術戦略を駆使して戦うというシステムらしい。

…まあ、ぶっちゃけていうと、なぜか遊戯王だ。

若干設定は変わっているが、基本は前世でやったことのある遊戯王と大差ない。

関西限定レアカードも、話を聞くとところによるとガンドラらしい。

新幹線内でハルナ達が行っていたのをネギも見て興味を引かれていたし、何より魔法で戦うという内容にも何やらやってみたい気が湧いてきていたそうだ。

だからユエの勧めもあつてネギも最初はやっていたのであるが、途中でハルナに勧められて朝倉が参戦し…。

「あははは、みんな手加減してくれるのか、弱いねー」



…伝説を作っている。

正直言うと、朝倉の戦法はメタモルポッド・ニードルワーム・皆既日蝕の書…等の俗に言う「デッキ破壊1キル」である。

それが功を奏したのか、次々と相手を倒していく。

…と、説明している場合じゃなかった。

見れば、ネギ達の姿も無い……ん？

……。

現在いる生徒：コノカ・ハルナ・朝倉。

つまりいない!!ネギ・アスナ・ノドカ・ユエ。

……まずい気がする。

「モーラ、モーラ。」

「なんだよ。いまちょうどあの関西限定ジュース詰め合わせのどっちかが……」

なんだそれ。

良く見ると……一つは

・リポビタンA・T

・イカジュース・ビール風味

・麻婆ジュース・矢車風

・照井のコーヒー

の詰め合わせ、「地獄のイカに質問するな!」セット。

もうひとつは

・ブレンドコーヒー・ミルクディッパ

・電王ジュース

ピーチ味

ソーダ味

グレープフルーツ味

グレープ味

ミックス味

リンゴ味

の詰め合わせの「オレ、参上!」セットである。

……電王は気になるが……と、そんな事を言ってる場合じゃない。

「ネギ達、追う！」

「あー、必要ねえよ。」

「ガウ？」

モーラは、まだクレーンゲームに集中しながら言う。

「一応、アーティファクトの使い方、ゆえっちに教えといた。あいつ頭いいし、どうとでもなるって。」

「……………なら、いいけど……………」

正直、ラウズカードだけでどう戦うのか…？

夕映 side

…私は今、とんでもない物を見ているです。

いつのまにか、ネギ先生とアスナさん、それにのどかがいなくなっていたので、探していると…

「ハハハ！護衛のパートナーが行動不能なら西洋魔術師なんてカスみたいなもんやなあ？！」

私が見つけたときには、狗神使いを名乗る少年が、影から呼び出した犬の様なもの達に命じ、アスナさんとちっちゃん桜咲さん、そし

てオコジヨを押さえつけてネギ先生をいのように殴りつづけていました。

多少耐えてはいるようですが、相手も子供とはいえ…ネギ先生本人の耐久力はやはり外見年齢の通りなので喰らうダメージは大きそうです。

「遠距離攻撃をしのぎ、呪文を唱える間をやらんかったら怖くもなるともない！」

調子に乗っているのか、わざわざ教えてやりながら殴り飛ばし、蹴り飛ばす。

身体の軽さからか、ネギ先生は紙の様に吹き飛び、岩に叩きつけられて動けなくなります。

「どうやチビ助!!！」

そんな少年の挑発にも、意識を混濁化させてしまったのか、ぼんやりと瞼を開けている様な顔で、ネギ先生は動きませんでした。

「勝ったで!!!とどめ!!!！」

死に体となっているネギ先生は動けまい。と踏んでの行動だったのでしょうか。

「ネ、ネギーツ!!！」

無防備に拳を受けようとしているネギ先生を見て、アスナさんは悲鳴を上げました。

しかしそんな声など耳に入れず、少年は練り上げた氣を右腕に込め、眼前に見えているネギの顔を捉え

「いい加減、やめるです。」

《METAL》

カードをベルトにラウズすると、その音声がして、ネギ先生を殴ろうとした少年の拳は、弾き返されました。

「え…？」

先生や、アスナさんまで不思議そうな顔をして……そして、私を発見します。

「あ…綾瀬さん?!」

「なんやお前?!俺は女は殴らんのだ。さっさとどっか行けや!」

「…いいえ。残念ながらそれは無理です。」

「ああ?!」

私が言い返していると、いい加減怒ったような顔をしてその少年は聞き返します。

「そこにいる人は、私の親友が好きな人なのです。だから、今傷つけてもらっては…心配します。」

「それだけで俺の相手すんのか?!」

「ええ。だって…」

貴方ぐらいになら、勝てますから。

そう私が言つと……向こうはプルプルと震え、いきなり顔をガバツとあげます。

「ええ根性や…ブツ潰す！」

「無理でしょう。」

そういつたのをきっかけに、少年は私に跳びかかって来ました…。

「青いですね。」

「黙らんかいッ!?!」

《MACH》 《UPPER》

「では。」

「ぐばっ??!…!?!」

私の戦いは、なかなか有利に進んでいました。

正直言ってこの子は単純なところがあるので、フェイントなどを仕

掛ければ、ちよろいです。

「嘘…強いじゃない。」

「吃驚だぜ…。」

…オコジヨが喋ってる事の方が驚く事では？

「この…オラアアアあ…！」

「だから、貴方は動きが単調なんです。」

《CHANGE》《SHUFFLE》…《MINIMUM・WAR

P

「んぶげっ!?!」

「ほら、鈍いです。」

《BULLET》

「喰らっつです。」

「うがっ!?!」

私は、コンボ技で少年と自分の位置を入れ替え、自滅させた所を銃弾で追撃します。

「い、いつっ…?!」

「いい加減、とどめです。」

私はそこで、さらに4枚のカードを取り出し、ベルトにラウズします。

《MAGNET》《THUNDER》《BULLET》《EVOLUTION》∴《KING'S RAILGANG》

その音がすると、私の掌に砲丸投げの弾ほどの物体が生まれ、それを中心に電撃が走ります。

「どーん。」

「ガアアアアアアッ?!」

私の声を合図に、その球が有り得ないスピードで少年にぶつかり…少年は、くの字型に折れ曲がって吹き飛びます。

「…まだまだ、ですね…。」

そう呟いてから、私はネギ先生達の方を向きます。

「皆さん、大丈夫ですか？」



第四十二話：チート見ると、途中で慣れてくるよね？（後書き）

…ラウズカードのコンボ、思いつかない…。

誰か思いつく人がいたら、感想まで。

ちなみにカードとしては。

CHANGEが《変わる・変換》の意味

アブソープは《吸収・合体》

フュージョンは《融合・合成》

エボリューションは《進化・増強》

という感じですよ。

上手くいったら、本編出します。きっと。

第四十三話：久々に会うトモたちって、結構見た目変わってるよね。（前書き）

PV30万、ありがとうございます！

第四十三話：久々に会うトモダチって、結構見た目変わってるよね。

夕映 side

「ネギ先生、今治療しますよ。ほら、アスナさんも。」

「あ…すみません。」

二人の前にしゃがみこみ、カードを3枚ラウズします。

《RECOVER》《GEL》《EVOLUTION》…《NEO・  
PORTION》

その音声が響くと、私の手に一本のフラスコが現れます。

「…さ、どうぞ。傷口にかけて下さい。」

「すみません。」

そういつて、ネギ先生は薬を受け取り、傷口に塗っていきます。

塗ったところから、急速に氷が溶ける様な音がし、傷が消えていく  
です。

…ここまでとは。驚きです。

「治ったらすぐ行きませんか？本山とやらに届け物なのでしょっ？」

「ええっ、夕映さん、なんでそこまで知ってるんですか?!」

「……ワイルド先生と仮契約した後、いろいろと教えてもらったんです。」

「な、なるほど……。」

ネギ先生は、外国人特有なのか大きめのリアクションを取りました。……ま、私は「アベアット。」と呟き、そのまま立ちあがります。

「では早くいきませんか？朝倉さんは関係してるらしいので心配ありませんが、ハルナがついてくるかもしれないと……。」

「あ、はい！行きましょう！」

ネギ先生達をせかすと……後ろから、声が聞こえてきました。

「あー、ネギ先生発見！」

「ここにいたんやなー？」

「のどかもはぐれてたし、何やってんのさー。」

「ガウ……ごめん。」

そこには、ハルナ、このかさん、桜咲さん、朝倉さん……そして、すまなそうな顔をする、ワイルド先生がいました。

オレはとりあえず、クレインゲームでモーラがジュースを取るまで動かなかったので、取った後に急いで本山へと走った。

ちなみに、結局取ったのは。

・ギャレンコーラ・ジェミニゼブラ味

・電王ジュース・俺、参上！味

・栄次郎の特製コーヒー

・753のスポーツドリンク、イクササイズ後用

の四つのセットである。

…電王ジュース、かぶってない？

ま、そんなことは兎も角。

途中でセツナと会い、合流した後、ネギ達のところまで走った。

そして、ハルナとコノカもついてきていたが何とかネギ達に合流し、全員で一緒に向かう。

その場所は………

関西呪術協会総本山

そこは、コノカ…いや、近衛木乃香にとっては実家である。

門をくぐり、中に入ると……大勢の巫女さんに出迎えられる。

一部はしゃぐ面々を除き、その空気は重苦しいものだった。

少し不安そうなネギを、アスナとノドカは心配し、オコジヨは一人で唸っている。

夕映、ハルナ、朝倉の三人は気楽に珍しい周囲を見回ってははしゃいでいる。

モーラは懐かしそうな顔をして、先ほど巫女さんに渡されていた瓢箪で、塩を舐めながら酒を飲んでいる。

そうこうしているうちに、ギシリと音を立て階段を降りてくる人影が目に入る。

直垂姿の男は顔色が悪く痩せてはいたが、それでも滲み出す貫禄や力強さは一般人とは格が違っていた…

関西呪術協会会長 近衛詠春。

サウザンド・マスターの仲間、紅き翼アラブルブラの一員であり、サムライマスターと言われたこともある、最強の剣士。

ゆっくりとこちらに歩いていくにつれ、周囲がざわめく。

「アレがこのかのお父さん!?!」

「渋い…いいかも!」

言うまでも無く、後者のセリフはアスナだが。

その中で、コノカは久方ぶりの父の胸の中に飛び込んでいった。

嬉しいというのもあるだろうが、強い不安から安心できる人の側にいきたいという思いもあったのだろう。

セツナに抱きつけば、向こうも素直になって、いいと思うのだが…。

娘を諭し座らせたエイシュンは、改めて大使たるネギと向かい合う。

「担任のネギ先生ですね？何時も娘がお世話になっております。」

「いえ、こちらこそ……長さん、東の長・近衛近右衛門様より預かりました親書です。どうぞお受け取りください。」

顔色の悪いネギは懐から出した親書を恭しく差し出す。

それを受け取り封を開いたエイシュンは、中の手紙に目を通し薄い苦笑を浮かべる。

どうせ、学園長からのお叱りの言葉でも書いてあったのだろう。

その手紙を丁寧に折り畳んでから懐にしまいこみ、エイシュンにはっこりと微笑を浮かべる。

「確かに、手紙は拝見しました。東の長の意を汲み、私たちも東西の仲違いの解消に尽力するとお伝えください。」

そう、返答をする。

ここで、ネギの背負っていた親善大使の任は完了する。

そこで、エイシユンはこちらを向き、にこりと笑ってくる。

「お久しぶりですね、ワイルド、モーラ。何年ぶりでしょうか？」

「エイシユン、久しぶり！多分、15年ぶり？」

「あたしはせいぜい10年位だな。しっかしお前…老けたな。」

「貴方が老けないんですよ。」

「エイシユン、トモダチ！」

「ふふっ…いつも通りなんですな、ワイルド。」

「ちょ、ちょっとワイルド先生?! いいんですか?!」

「なにが？」

オレはただエイシユンに飛びついて、背中をばしばし叩いているだけなのに。

モーラは肩を組んで酒を飲み続けている。タチの悪い酔っ払いに絡まれているようだ。

「アハハ…この二人に関しては、そういうことはいつでも無駄なんですよ。」





「「おおー！！！」」

宴が始まり、数時間…

「いいか、夕映。魔法つてのはイメージ中心だ。周りにエネルギーがあるから、それ吸って杖から魔法として吐き出す…って感じた、ほれ練習！」

「は、はいでしゅ！」

なぜかモーラは魔法を教えたりするし（宴会の余興としている）…

平和だからいいが…。

ネギとセツナのところにエイシュンが行き、なにか話している。

「ガウウ…。」

とりあえずのところ…一度、寝るか。

そう思うがはやく、オレは倒れてその場で寝始める。抱き枕は酒瓶。

あ、チクサの事とか、忘れてた…なあ。

…今日も日が暮れ、夜になるとうちは新入りと一緒に大樹の枝に立っていた。

そこからは総本山が見渡せる。

「コラ、新入り！！あんたが追わんでえーゆーから放つといたら、本山に入られ手だし出来んやんか！！親書も渡ってしもうたし！！」  
月詠はやられ、小太郎もダメージがある状況だ。

こちらの戦力が減っている中、これでもし手荒なまねをすることになったら、たまったものではない。

こちらの目的は、あくまでスクナなのだから。

「大丈夫ですよ。僕に任せてください。」

新入りはそういって、本山まで歩いていく。

…さあ。ここからが、反撃や。

第四十四話・怒ったら、どんな奴でも容赦するな。(前書き)

ユニークアクセス30000、ありがとうございます！

第四十四話：怒ったら、どんな奴でも容赦するな。

ネギ            s i d e

…宴が終わってから数十分たったころ、この悲劇は起こった。

桜の木々から零れ落ちる花びら。

大きく欠けた月の下。

屋敷の内外を舞う花はキラキラと地面に落ち、はかない雪の様だ。

しかし

「こんな……」

手に握り締めているボクの父…サウザンド・マスターの杖。

その手に籠る力は怒りか、自分に感じる無力さからか。

倒れ付す二人の我が生徒…腹に一撃を喰らって苦しそうにしている桜咲さんと、全裸で倒れこんでいるアスナさんとを庇うようにボクは杖を構え、目の前に立つ“敵”

「こんな酷い事をするなんて……僕は許さないぞ!!」

目の前の、銀髪の少年の凶行を強く否定していた。

あんなに美しかった筈の花弁の舞いは、本山で行われた凶行を彩る材料にしかなくていい。

親書を何とか届ける事に成功したボクは、木乃香さんのお父さん…関西呪術協会の長である詠春に歓迎の宴（実際はモーラお姉ちゃん）の強要だが、）を受けた。

そして何故か付いて来ていたハルナさん達と共に楽しい一時を過ごしていた。

しかし、その夜

自分の生徒らの悲鳴を聞き、彼女らの部屋に駆けつけたボクが目にしたものは、動かなくなっている自分の生徒……石に変えられたのどかさん達の姿だった。

そして桜咲さんと合流したボクの目の前で、長までもが魔法によって石に変えられてしまった。

狙いは木乃香さん。

何と敵はその木乃香さんを奪取する為に、邪魔にならないようこの本山にいる人間全員に石化魔法を使用したんだ。

敵が如何なる手段を用いて守護結界内に侵入してきたかはまだ分からないけれど…

それに気が付いたボクと桜咲さんは慌ててアスナさんと共にいるで

あろう木乃香さんを探し始めた。

だけど……既に十分に動けるような人は本山に残っておらず、木乃香さんの守りはアスナさんただ一人。

幾ら強力なアーティファクトを所持していようとアスナさんは戦いの素人。敢え無く倒されたのか、見つけたときには理由は不明であるが全裸で横たわっていた。

そして桜咲さんですら不意を突かれて一撃で倒されてしまった。

「許さない？それでどうするんだい…ネギ…スプリングフィールド。

」

白髪の少年は、ボクを見据えたままそういう。

ボクを真っ直ぐ見据える少年。

その眼差しには嘲りや侮りも無く、やはり感情は感じられない。

「僕を倒すのかい？……止めた方がいいよ。今の君では無理だ。」

少年は客観的な事実を淡々と述べる。

ボクだけではなく、桜咲さんや長、この本山の関係者らもこの少年の話はちゃんと聞いていたし、念の為にと結界も強化されていた。

だが………それをあざ笑うかのようにあっさりと侵入を許し、尚

且つ本山で務めている術師を含む巫女達全員を石化されて、あまつさえ木乃香さんまでも攫われるという大失態を犯している。

いや、“これ”は単純に油断だったという訳ではないのだろう。

この少年の術が違っていただけなのだ。

「この…！ラス・テル・マ・スキル・マギステル…！！」

「遅いよ。」

そう言われた瞬間、少年はボクの目の前に移動していた。

慌てて防御の体勢に入るが、間に合わない。

「眠っていてくれ。」

そういつて拳を振り上げたところを、スローモーションで見ているかのように、なぜか動けない。

「兄貴ツ?!」

カモ君がそういう声も、どこか遠くで聞いているような感覚になり…そして、その拳が目の前に来ると…

「URYYYYYYYYYYYYY!!!」

「ぐっ?!」



その叫び声と、少年のうめく声が生、急に少年は吹き飛んでしまう。

「え…？」

ボクがその叫び声の方を向くと…そこには、二mほどの悪魔の様な魔物が、いた。

ワイルド side

今蹴り飛ばした餓鬼を見るが…特に問題はなさそうに、ピンピンしている。

「君は…バイラス・リザード病毒なる竜人か。その姿では、ダークエンペラー闇色皇帝の方が正しいかな？」

「黙れ、無機物。いつ皇帝が喋っていいといった。」

こいつか……エイシユン達を石にしたのは。

カードで確認したが、夕映は片腕が石になったが、無事らしいし、朝倉も逃げ切ったらしい。

「貴様は、殺す。」

「無理だよ。」

そういうと、餓鬼が水を使い、瞬間移動の魔法を使う。

「チツ……おい、その人間。」

「な、なんですか？」

若干、怯える様な、警戒するような態度で小僧は答える。

「そこのを助けたら、お前も来い。」

「え……？」

「……っあー！もう、面倒くさい……おらネギ、さっさとそいつら治して来い！」

「え、モーラお姉ちゃん?!」

ベルトのキバツトが怒り、そう叫ぶと、小僧は驚く。

「……早く、来いよ。」

そういつて、外へと飛び出していく。

「モーラ。」

「了解……《戦いの旋律》！」

肉体強化の魔法を使い、そのまま走りながら、カードを取り出す。

「召喚、ワイルドの従者【マナ・アルカナ】、【朝倉和美】、【相坂さよ】……！」

カードの効果の一つ、召喚の力によって三人を召喚する。

「…ずいぶん急だね。どうしたんだい？」

「何とか逃げ切れた…セーフ。」

「え、え?!ここ、どこですか?!」

状況を理解している様な真名、一安心している朝倉、そして全く状況が分かっていない様なさよ。

それぞれを一瞥した後、軽い事情説明をする。

「…ということ、さつさと潰すぞ。いいな?」

「了解。」

「あ、私とさよちゃん初陣じゃない?」

「そういえばそうですねー。」

「…さつさと行くぞ。」

従者の三人を担ぎあげ、走り出す…と、そこで後ろから小僧たちが来る。

「ま、待って下さいよ…って、皆さん?」

「あ、ネギ先生、ども。」

「なんでここにいますか?!」

「なんでって……従者としてはね。」

「従者って…?」

「おいネギ。お前まだ気づいてなかったのか?」

不思議そうな顔をする小僧を見て、モーラが呆れた声をだす。

「こいつらが仮契約してんのはワイルドだ。で、従者としてってことは…?」

「……………ええっ、この人、ワイルド先生ですか?!」

「気付くの、遅いですねー。」

ま、気づくタイミングが少なかったと言えば少なかったし…仕方ないが。

「で、でも大きさとか口調とか全然違うわよ?!」

「これがデフォルトだ。気にするな。」

「話はそこくらいにしておいた方がいい。…いたよ。」

そういわれ、真名の指さした方を見ると、そこには確かにあの餓鬼と、サル女の二人がいた……。



第四十五話：ヒーロー勢ぞろいって、テンションあがるよね。

千草      s i d e

小太郎はんが西洋魔術師を足止めしていた鳥居の結界の近くで、新入りが木乃香を連れて来て思わず高笑いしてしまった。

「良くやったで、新入り！！これやったら、最初からお前に任せておけばよかつたわ。」

「英雄の息子もまだまだだったしね。思ったより簡単だった」

「んー！！」

お嬢様は手足は縛られ口も封じられ、『猿鬼』に抱きかかえられている。

「ま、今のところはあの男を要注意せなあかな。しかし、お嬢様を手に入れたらこつちのもんや。後はお嬢様を連れて『あの場所』まで連れて行ったら、ウチ等の勝ちや。」

「んー！！！！」

「…安心しなはれ、何も酷いことはしまへんから。」

怯えるお嬢様の頬を突付き、その指で『ある場所』を指し示す。

「さあ、『祭壇』へ向かいますえ？」

「待て！！」

「ん？なんや？」

いざ移動しようとするとな何者かに呼び止められる。

声の方へ視線を向けると、あの西洋魔術師達と、大きめの人の形をした悪魔が構えていた。

「そこまでだ！！お嬢様を離せ！！」

「後、その餓鬼を殴らせろ。」

「また、あんたらか…」

「むー！！んんーっ！！」

ひよっこ達の姿を確認して、さすがに呆れる。

お嬢様は西洋魔術師達の姿を見て、口を塞がれつつも何か言おうと  
していた。

「天ヶ崎千草！！明日の朝にはお前を捕らえに応援が来る！！無駄な抵抗を止めて降伏するがいい！」

「はっ！そう簡単に降伏するなら、最初から動かへんわ。応援が何ぼのもんや。」









「アアー―マアー―ゾオオーンッ!?!?!」

《SKULL》

《HIJACK FORM》

《EXTREME》

「…はアッ!?!」

「ケケ―ッ!?!?!」

俺たちはそれぞれ、

真名はスカル。

さよは幽汽。

朝倉はエクストリーム・ドーパント。

モーラは響鬼・紅。

そしてオレは、仮面ライダーアマゾンに、変身する。

「ほら、さっさと行って来い、先生?」

「……はい、お願いします!!」

そういうと、ネギは飛び立って行く……が。

「…アスナ、刹那、行かない？」

「うん。私のアーティファクト、こついうのに相性いいみたいだし。」

「私も残ります。神鳴流は、もともと妖怪退治が基本です。」

「なら、とつととやってネギのそこ行くかね……。」

そういつて、真名はスカルマグナム、さよはサヴェジガツシャー、朝倉は体から出した刀、モーラは音撃棒、アスナはハマノツルギ、セツナは夕凧を、それぞれ構える。

「一人も残さず……殺す。」

「ああ。全くだな。」

そういつて、モーラは一足前に出て、大声で叫ぶ。

「テメエエエら、全部、殺して解<sup>バラ</sup>して並べて揃えて晒してやんよお  
おお……!!……!!」

言葉とともに、モーラは走り出す。

「……どこの、零崎。」

「ま、じつじつのも悪くないでしょ？」

朝倉はそういって、背中にある緑と黒の翼で飛ぶ。

「…いぐぞ。」

その言葉を皮切りに、俺達は式に襲いかかる…！

第四十五話・ヒーロー勢ぞろいって、テンションあがるよね。(後書き)

エクストリーム・ドーパント

右手足が緑色、左手足が黒色、胴体が水晶の様な色をした、鳥型のドーパント。

胴体から黒色の盾と緑色の剣を召喚し、武器とできる。

背中の二色の羽によって亜音速での飛行が可能。

第四十六話：バトルジャンキーって、要するにバカだよな？

ネギ           s i d e

「兄貴！！感じるかこの魔力！！奴ら何かおっ始めやがったぜ！！  
急げ！！」

湖を遮るように広がっている森の上空を、杖にまたがって飛行していた。

勝率なんか考えず、ただひたすら木乃香さんの無事を願って杖に魔力を込めて。

そんな自分達の前方で、唐突に光の柱が立ちあがった。

まだまだ淡く、強さも圧力もほとんどないが、それでも高まってくる魔力の感触はただ事ではない。

だから肩の上でカモも焦りを見せていた。

「わかってる。加速！！」

空気が撓る

ボクから送り込まれていく魔力を糧に、杖は今現在出す事ができる  
最大速度を出して見せた。

飛行魔法の使用中は周囲にフィールドが張られて術者を守る。

そのフィールドが無ければカモ君は即座にひき肉になっていたかもしれない。

それほどの加速度だった。

「見えたぜ！！あそこだ！！！」

空中に遮るものはない。

だから思っていた以上に移動力を上げられ、ついにネギ達は肉眼でそこを目にする事ができた。

巨大な湖。

中央にはしめ縄が巻かれた大きな岩。

その前には祭壇のようなものがあり、そして

「むうつ？！こ、この強力な魔力は……？！儀式召喚魔法だ！！何か だけえモンを呼び出す気だぜ！！！」

普通、召喚は契約が終わっている対象を呼び出す事が多いので、よほどのモノでない限りそんなに時間が掛かったりしない。

だがネギ達が想像している巨大な魔力のタンクと、具現化を続けて



いる気配の大きさ、そして呪式の大きさからとんでもないものを呼び出すようにしている事が理解できてしまう。

しかし、それより何より目に見えているものがあつた。

その召喚の儀式に使われているのだらう祭殿。

そこに横たわらせているのは……

「このかさん！！」

召喚の、そして呼び出すようにしている“何か”の制御用の核にされようとしている少女。

現在、日本最高クラスの魔力量を誇る近衛 木乃香、その人である。

いける！！ まだ間に合う！！

彼女のすぐそばに人影があり、その中にあの少年が居るであろうがそんなことは気にしない。

目には、視線の先で喘いでいるこのかさんだけしか入っていない。

このかさんを……助けるんだ！！

その高めた意志を杖に込め、更に加速してその場を目指す。

もう魔力は尽きかけようとしているのに、

昼間の一件で大量消費し、まだ回復し切れていないというのに魔力はさらに溢れてくる。

大切な友達である木乃香、そして言うのはおこがましいが刹那や明日菜も守りたいと願っているのだから。

もう二度と…………… “あの日”のように失いたくないのだから。

「ッ?!」

そんなネギの背後。

後方の森の中に魔力を感じ、慌てて顔を後ろに向けた。

迫り来るは四匹の獣。

ボクのような、西洋魔法使いが召喚する精霊に近い、実態を持たない黒い魔の獣。

狗神?!

昼間戦った少年……………コタローが攻撃に使っていた狗神が放たれたのである。

「風遁……………っ!」

認識して、即座に慌てて魔法の盾を唱えようとするが一瞬遅い。

一瞬のうちに近づき、狗神が体に命中する。

「!……!」

幸い避けるモーションを行ったおかげか、直撃しても然程のダメージはなかった。

それでも杖を弾き飛ばされ、小さな体は宙を舞う。

「わあぁっ!?!」

流石に空高くからの自由落下には悲鳴をあげてしまっが、それでも多少なりとも戦闘経験のある少年だ。

直ぐに冷静さを取り戻し、

「く……っ杖よ!……風よ!」

杖を呼び、風を呼んで墜落を逃れる。

ギリギリではあるが体勢を整え、ちゃんと足から地面に着地。その衝撃もほとんどない。

「よお、ネギ。」

そんな能力に喜びを再燃させたのか、茂みの中から影が一つ姿を現す。

予想はできていた。

狗神を見た瞬間に解ってはいた。

だが、何もこんなタイミングで……

「へへっ 嬉しいぜ。まさか……こんなに早く再戦の機会がめぐってくるたあな……」

同じくらいの身長黒髪の少年。

その眼差しからも戦いへの期待が湧いている事がつかがい知れる。

「コ……コタロー……君!?!?」

目の前にいるのに。

助けたい相手が見えているというのに。

目の前には、昼間戦ったあの少年。

小太郎が立ち塞がっていた。

「こ、こいつは……マズイ!?!?!」

ワイルド side

「ケケケツ!?!」

「おらあっ」

「らいだあ……ぱんち!?!」

『んギヤアツ!?!?!』

『グアワああ!!』

『キキーンッ!!!?』

オレ達は、今のところ式達を絶賛リンチ中である。

鬼火と凍鬼の冷凍ガスを両方吐いて、鬼達を凍らせ、焼いて。

モーラは烈火弾と鬼爪でぶちのめして。

さよは可愛らしくパンチをして3mほどの巨人の式の腹をぶち抜いたり。

《SKULL!MaximumDrive!!》

「スカルダンシング…!!」

「エックスト、リィッィイム…」

『『『ギヤアアアアアアアッ!!』』』

『グア……無念…!!』

真名はマキシマムドライブにより、足に《SKULL》の力を込めてブレイクダンスの要領で周囲にいる式を還していき。

朝倉は体から取り出した剣を使って周囲の式を瞬時に切り裂く。

「…ちよ、ちよっと、なんでみんな、こんなに強いのー?!」

「龍宮とはよく夜の仕事を共にしましたが…今、ここまで強くなっているとは。」

二人が驚いているが、まあ、強くなるだろう。

オレがエヴァに別荘をたまに借りて、何日分も修行したのだから。

鬼の修行も含め、魔法についても様々な修業をしてきた。

『後ろが空いてるでえ〜？』

「きゃあっ?!」

『ぶ…ギヤアッ!』

今もさよが、後ろから来た式を驚いてサヴェジガツシャーで斬る。

「ケケケケ〜!」

『ガアアアアッ!』

「大・切・断…!」

オレも、周りにいた式をまとめて手足のヒレカッターで切り殺す。

「……………もう、だいたい終わった?」

「いんちゃ……………一番面倒くさいのが、残ってるぜえ?」

響鬼<sup>モーラ</sup>が指差すと……………そこには、増殖を続けるバケネコと、巨大なオトロシがいた。

「…なんで、この世界魔化魍いる……………」

「別に、条件そろったら生まれるんだしな。童子と姫はいねえが。」

「でも、オトロシ、どうする?」

「音撃でしか倒せないからねえ…いつそ、音撃以外で痛めつけて、再生する前に音撃しようぜ。」

「ガール……………あ。そういえば。」

「ん?どうしたよ。」

「…カズミ!」

「ん、どうかした?」

「実は……………」

オレは、朝倉の耳元でここによこによと、作戦を話す。

「……………いいけどさ。それで…いけるの?」

「ダイジョウブ!」

「…ふうん。なら、やってみるかな…っ。」

さあ……オレ達の、作戦が始まる。



第四十七話：子供は、すぐ周りが見えなくなる。

ワイルド      s i d e

「カズミ、いいな？」

「だいじょぶだいじょぶ。じゃ、いつくよー……………」

オレ達は大物魔化魍、オトロシを倒すために構えている。

アスナの使うハマノツルギは、確かに式を問答無用で還す能力を持つが、この魔化魍を倒しておかないと、オトロシに食われる人間が増えてしまうかもしれない。それだけは避けなければ。

「アスナ、セツナ、サヨ。バケネコ、頼む。」

「任せて」

「必ず、倒しますよ。」

「増殖するらしいですけど、平気ですー。」

頼もしい返事をしてくれる三人を見て、オレ、モーラ、真名、朝倉が、オトロシに立ち向かう。

「マナー！」

「了解したよ。」

そういうと、真名はスカルマグナムにメモリを差し込む。

《SKULL!MaximumDrive!!》

「スカル……スナイピング。」

スカルマグナムから、指向性のあるエネルギー弾が、オトロシの前に集中砲火される。

ノオオオオオオオツ!!

「モーラ!!」

「よおおおっ………しゃあああつああ!!!!!!」

のけぞったオトロシの下に入り込み、モーラは音撃鼓を張り付ける。

「音撃打…爆裂真紅の型!!」

オトロシの首の下に当たる部位を何回も何回も叩き、音撃を響かせる。

「カズミ!!」

「あいあいっ!!さて…とっておきの技、どっぞっ!!」

《VIRUS!MaximumDrive!!》



「ケケエエーッ！！！」

「うっじゃあー！！！」

モーラが、ガッツポーズをとった。……………その時。

遠くの方から、天に向かって巨大な光の柱が伸びる。

「んおっ?!」

「あれ…まさか！」

そして、その光が収まると……………そこには、二つの顔と、四つの手足を持つ巨大な鬼神……………リョウメンスクナの姿があった。

「ネギあのやるお…！！間に合わなかったのかよ！！！」

「オレ、行ってくる！」

そういつてオレは、クロックアップを使い、走り出す……………！

ネギ      s i d e

「戦いなんてそんな……………意味ないよ！！試合だったらこれが終わったらいくらでも……………」

ボクは今、狗神使いである少年…小太郎くと、戦っている。

だけど、いまは…このかさんの危機。友達の、自分の生徒危機なのだから付き合っている暇はないんだ。

「ざけんなあ…！」

しかしテンションが上がっている所為か小太郎くんは納得しない。してくれない。

「俺にはわかるで。コトが終わったらお前は本気で戦うような奴やない。」

小太郎くんの目は、まさに獣の目…ただ、戦いたいと思つて戦っている、狂戦士の目だ。

「俺は本気のお前と戦いたいんや。今ここで…この場所で…！」

血が滾る。

滾り続けている。

戦いを期待してか、ずくんずくと心音に合わせてその身が疼き、小太郎くんのその手も細かく震えている。

「ここを通るには俺を倒すしかない！俺は譲らへんで…！」

逃がす気を全く感じないその気迫に思わず身構えてしまう。

「挑発に乗るな兄貴！！何とかして出し抜く手を考えるんだ！！」  
小太郎くんにも、そしてボクにも余裕がない事をカモ君も理解しているから、肩の上で必死になって止めようとするが……………。

それにこんな事している場合ではないというのに、勝ちたい、という自分の中の子供な部分が首を擡げかかっているのも感じられる。

「全力で俺を倒せば間に合うかもしれんで？！来いや、ネギ！！男やろ！！！！」

グツ……………と体を一瞬緊張が走り…ボクは、ゆっくりと前に歩きだす。  
その足取りを見、小太郎くんは二つと唇の端を歪めて僅かに腰を落として身構えた。

「えっ！？ち、ちよ、兄貴！？」

慌てる様な声を出すカモ君を地面に下ろす。

「うおいつ！兄貴！！」

「大丈夫だよカモ君……………1分で終わらせるから。」

「ぐあ……………あ！マ……………マズいぜ。兄貴の頑固と子供っぽさが悪い方向に出ちまった……………！ここで戦ったらどう転んでもこのか姉さんは……………！！」







そこには、紅い目を怒りの色に光らせ、こちらを鋭く睨む……竜人  
がいた。

第四十七話・子供は、すぐ周りが見えなくなる。(後書き)

ネギと小太郎、火傷はしてるけど………多分、大丈夫。

第四十八話：タイトル、もう思いつかなくなってきた。(前書き)

PV335万、ありがとうございます！

第四十八話：タイトル、もう思いつかなくなってきた。

ワイルド      s i d e

「グルルルルル……!!」

「な、なんやこいつ!」

「わ、ワイルド先生……?」

オレが唸りながら見ると、二人は委縮する。

ネギは兎も角……狗小僧は野生の本能という奴だろうか。

「ネギ……コノカ、どうした?」

「そ、それは……」

「今、鬼神、封印、解いた。」

「え?!」

「お前が、ここで、戦ってなければ……!!」

オレが言つと、しどろもどろになるネギ。

どうせ、「こいつを倒したらすぐ行く。」などと思っていたんだろ  
う。

「……………この馬鹿が。」

そういつて、オレはネギと狗小僧の周りにある草木や地面を、クウ  
ガの力…超自然発火能力を使い、燃やす。

「う、おわつと?!」

「先生?!」

「…そこで、ずっと、戦ってる。」

そう言い残し、オレはクロックアップでその場から離脱し、コノカ  
の元へと向かう…!

千草     s i d e

「アツハハハハハハハハ!!」

「楽しそうですね。天ヶ崎さん。」

「当たり前や!!お嬢様のおかげでスクナを召喚できたんやで?嬉  
しくない訳があるかい!」

うちの目の前には、飛驒の大鬼神…リョウメンスクナがいる。

「で？これから、どうするつもりなんですか？」

「決まるとるやろ、新入り……………」

と、そこで言葉を切り、懐から札を取り出す。

「スクナを、還してやるんや。」

「……………今、なんと？」

「言った通りや、新入り。うちの目的は……………」

札を両手に持ち、一言呪文を唱える。

「…オン。」

その言葉とともに、札はその姿を変え…ハーブにも見える、豎琴へと、変化する。

「うちの親を殺したこのスクナを…うちの手で、還すことや。」

「……………そうですね。」

豎琴に変化したこの札は、天ヶ崎一族に伝わる秘伝の札……………古代にいたという、正義の鬼の力を込められた、退魔の豎琴だ。

「さあ…！行くで…！」

猿鬼を身にまとい、そのままスクナの肩の上の方まで跳び上がる。



そのまま、うちは落ちていく。

式も先ほどの魔法の衝撃で札ごと消え去ってしまった。

なので…助かる方法は、無い。

「父様、母様…!!」

脳裏に、二人の両親の事が浮かぶ。

そして、今からくるであろう衝撃を恐れて、目を固く瞑る……!

「……………ケケエーッ!!」

「…っへ……………?」

だが、全く来ない衝撃と、なぜか抱きかかえられているような感覚…

そして、スタットと、どこかに着地した様な、軽い衝撃。

不思議に思い、目を開け、上を見上げると…そこには、先日戦った、マダラ模様の竜人の顔があった。

「チクサ、ダイジヨウブ?」

「あ…ああ……………」

思わず、マジマジとその顔を見る。



最初は恐ろしく見えたが…よく見ると垂れ目だったり、丸めの角が生えていたり…可愛いのかも知れない。

「ガウ?どうか、した?」

「いや…なんでも、あらへんよ。」

……………なんやる。これが、萌えってやつか?

…あ、違う違う…。

「……………なんで、うちを助けたんや?」

「グル?」

こいつにとっては、うちは仲間をさらっていった敵…なのに。

「あんさんに助ける理由なんかないやろ?何で、助けるんや…?」

「……………理由なくちゃ、助ける、だめ?」

本当に不思議そうに、そいつは首をかしげる。

「……………お前、悪くない。」

「…さっきの話、聞いたったんか?」

そいつは、すまなそうに、目をそらす。

「お前、家族のため、やった。だから、悪くない。」

「……………」

そこでいったん言葉を区切り、うちを降ろす。

「スクナ、倒す。」

「…やれるんかいな。」

「やる。」

それだけ言うと、そいつはスクナの方を強く睨む。

……………もしかしたら、こいつなら……………。

ワイルド side

…あー吃驚したね。

急いできたら、千草が墜落してるんだもの…しかも、はだけ気味の着物で。

……………見たわけじゃ…ないよ？。

あ、後は鬼太樂キタラ持ってた。話聞く限り、昔々に朱鬼がいたってことになるけども……………。

まあ、自然発生の魔化魍もいるぐらいだし、ただ音撃出す武器を使  
つてる人がいた、つてだけかも。

「でも…どないして、スクナ倒すんや？」

「…オレが、一撃決める。チクサ、それから、倒せ。」

その言葉で、千草はきよとんとした様な顔になる。

…こつ見ると、美人さんではあるんだよな…。

つて、違う違う。

「うちが…やつてもええんか？」

「…チクサ、カタキ、討つ。それで、いい。」

「……………ま、ええやる。やってやるわ……………!!」

千草は、鬼太樂を構え、ぎろりとスクナを…そして、フェイトを睨  
む。

「あ、その前にあの新入りは殴らせてほしいな。」

「オレも、殴りたい。」

……………ま、とりあえず…

「本能のまま、暴れる……………!!!!」

第四十八話：タイトル、もう思いつかなくなってきた。(後書き)

鬼とか魔化魍の設定については………ちょっと、無理やりだと  
自覚します。

第四十九話・最後はやっぱり、あの技でしょう。

ワイルド      side

「まず、あそこまで、行く。」

「分かったえ。」

オレはまた、千草を抱きかかえて走り出す。

飛ぶ事が出来ないのが残念………あ、セイリングジャンプ使えばいいかも。

と、考えているうちに、フェイトがいる、『祭壇』近くまでたどり着く。

「コラアアアアア、新入り!!!!!!!!!!!!」

「…まだ生きてたんですか……。」

「よくもうちを落としてくれたのお?!」

「お、落ち着く……。」

ああもつ、抱きかかえてるのに暴れないでくれ……。

と、見ている間にフェイトが俺に気づく。

「…ああ、キミがいたからか。病バイラス・リザード毒なる竜人。」

「なんで、チクサ、狙った？」

「……………決まっているだろう。スクナを還そうとしたから。」

「はあ?!と、千草がまたヤクザっぽく怒るが…それを気にせず、フ  
エイトは続ける。」

「…正直言うと、天ヶ崎さんはスクナを使って、西洋魔術師達を蹴  
散らしたいんだろうな…当たりの考えだと思っていたのに……………まさ  
か還すためだとは思わなくてね。」

「当たり前やろ!!西洋魔術師たちのために、そんなことするか!  
!おってもおらんくても、一緒なやつらやで!!」

「少し、落ち着く。」

「いったん千草を降ろす。」

「…意外とヒステリックだね、この人。」

「そう思っていると、フエイトはスクナの肩の上に移動し、コノ力を  
も一緒に連れていく。」

「…竜人。リザード今から僕はこいつ…スクナで、魔術師たちを殺すつもり  
なんだ。邪魔しないでくれ。」

「…それが、お前の、目的?」

「ああ、そうさ。もともと天ヶ崎さんがそれをやってくれると思っ  
てたから、スクナ解放を手伝おうとしたんだけど、ね。」

「んなこと、させてたまるかいっ!!」

なお叫ぶ千草さん……女性って、怖いもんだね。

「敵うと思ってるのかい……？君達だけで。」

勝が決まっている、と言わんばかりに見下した態度でそういつフエ  
イト。

…腹立つな、この餓鬼。

「当たり前。」

「絶対、こいつ殴る!!」

「オレも、殴る。」

そういつて、オレはスクナに向かって襲いかかる……!!

「WAKE・UPッ!!」

CAAAAAAAAAAAAAAAAAAAAAAAAAAAAAAAAA

A!!!!

「ケケーンッ!!」

…ただいま、スクナと激戦中。

…というか、こいつ化け物だ…。

ヒレカッターでのファイナルザンバット斬で腕斬り落としても再生するし、しかも剣を体から生み出すし、今だってダークネスムーンブレイク、パンチで相殺したし…。

「ちょ、ちょっと?!大丈夫なんか?!」

「ガウ…強さ、だいたい分かった。次は、いける…!」

オレがそう言うのと、その声が聞こえたのが、フェイトは無表情で言う。

「…本気でそういつてるのかい?」

「当たり前!」

「……………今だって、なかなかの魔力を込めた蹴りだったけど…それでも、効かなかったじゃないか。」

「五月蠅いわ!!これからやるんや!!」

…なぜか、弁護してくれる千草さん。

…ちょっと嬉しい。







水蒸気爆発を、起こす。

「なっ……しま……！」

フェイトはバランスを崩して肩の上から落ちるが、その場で浮遊する。

しかし……一緒にいたコノカはどうにもならず、そのまま落ちる。

「……ほいっと！お嬢様確保……！」

落ちたコノカは、そのまま干草が抱きかかえて離脱する。

「チッ……これじゃあ、スクナの操作が……っ?!」

隙が出来たフェイトは、思い出したようにこちらを見るが……手遅れだ。

「スーパー………大・切・断……!!!!」

オレはそのまま、フェイトごとヒレカッターでスクナを切り裂いていく……!!

「がっ………アあ……!!」

GYAAAAAAAAAAAAAAAAAAAAAAAAAAAAAAAA  
AA!!!!!!



巨大な爆音を立てて、スクナは還されていく…！

「よっしゃあ！！！！やった…やったで、竜人リザードはん…あれ？」

「…ボベ、ボボ。（訳：オレ、ここ。）」

その声にこたえるためにゆっくりと湖からあがるオレ。

「わ、わわっ?!なんで沈んどるんや?!」

「さっき、やった後に衝撃殺しきれなくて…落ちた。」

……マジで、溺死するかと思ったね…。

「オレ…も、無理……………寝る。」

ばたりと、その場にオレは倒れる。

「え?!ちよ、ちよっと……………」

沈んでいく意識の中、千草のその声だけが、やけにはっきり聞こえ  
……オレは、意識を失う。

モーラ side

「おい、スクナが消えたぞ?!」

「おそらく、ワイルド兄ィだろうが…」

あたし達は、ワイルドの後をおって湖まで走っている。

途中火に撒かれているネギがいたが……何をしたんだ、あいつは。

それは兎も角。…先ほどから見えていたスクナが、たった今消え去ったのを見て、さらに足を急ぐ。

「早く、急ぐよ!!」

「ま、待って下さい!!」

羽撃鬼に変身したあたしと、飛行できる朝倉は兎も角、飛行ができない相坂と龍宮は幽霊列車に乗って移動している。

「……っ、いたよ!!」

「マジか、朝倉?!」

「うん、なんか、倒れてるんだけど……?!」

「ッ?!」

あいつが負けたのか…?

……まさか。

そう考えていると、やっと湖のほとりまでたどり着く。

「………よっし、着いた!!」

慌ててワイルドの姿を探し、見つける……………が。

「ワイルド!!無、事……………か。」

「……………へ?」

「……………はあ。」

「ありゃりゃ……………。」

そこにいたのは……………。

「ちょっとく、しっかりしておくねやす!!」

「ガウウウウ……………。」

なぜか、先ほどまで敵だったはずの女の膝枕で眠る、ワイルドの姿だった。

第五十話：罪には、罰だよね。（前書き）

ユニークアクセス35000、ありがとうございます！



第五十話：罪には、罰だよな。

ワイルド side

…夢を見た。

なにも無い虚空の空間で、オレ…そして、周りには何人も男がいる。

一人は、髪を短くした野生児の様な男。

一人は、ライダージャケットを着た一人の男。

一人は、引き締まった肉体を持つ、中年の様な男。

一人は、寝巻の上にジャケットを羽織り、眼鏡をかけた、さえない男。

男達は、笑って俺に話しかけている…が、その声は所々にしか聞こえない。

「ま、オ……、因子持つ……だか……気。」

「君……りは……、友……る。」

「青ね……。鍛……いば……かるぞ。」

「頼……。……与え……で……お……。……《ワイルド》。」

「

最後の言葉だけが聞こえ……そして、オレの意識は……消えて……いく……。

「ン、ガ……。」

……ああ、変な夢見た気がする……何の夢か忘れたけど。

「……ムが？」

眼を開けるが……真っ暗だ。

……なんだか、甘い感じの香りがするし、顔を圧迫されてる感じで……。

息苦しいし……何だ、これ。

「……!……!……!」

と、言うか……もう……息が……っ!

「ガ……ブバツ……!」

「あ……ん……。」

必死に顔の前に合った何かをはぎ取り、飛び起きる。

はぎ取った物は……

「……いけずう……もうちょっと、ええやないですかあ……。」

「ツクヨミ……。」

………月詠でした。

とりあえず、隣に置いて、周りを見る。

「よっ。起きたか、ワイルド。」

「……モーラ。」

周りは、純和室といった一部屋。そこにいるのはオレと月詠、モーラだけだった。

「……ど……ど……?」

「詠春ン家。昨日お前がスクナ倒して、熟睡してたからここに連れ

てきた。」

「ガウ……。」「

…ああ。思い出してきた…。

なんか、大事なこともあったんだけど…えっと……。

「……………あ。」「

「…どした？」「

「チクサ、どうなった?!」「

忘れていた…千草の事。

「あいつ、どうした?!」「

「あゝ。確か、お嬢様誘拐しようとした、罰を受ける、いってましたえ?」「

「あいつ、いい奴!」「

オレが軽く叫ぶと…モーラは、やれやれといったようにこちらを見る。

「まあ…それは分かってたけどさ。お前の記憶見て、あのサル女が詠春の子助けたのは分かった。」「

「だったら……。」「

「け・ど・な。」

喋ろうとしたが、それをモーターは手で押さえる。

「あいつは、やってないにしろいろいろまずいことしたぜ？誘拐やつてるし、本山の奴らだって石にした。ま、ユエっちが治したが。」

「…ユエが？」

「ああ。RECOVER×EVOLUTION×THUNDERで大量回復大盤振る舞いだ。すごいなあね。」

「ガール…。」

ああ…それなら、確かにいけそうだな。EVOLUTIONすごい便利。

「…………サル女は、列記とした罪を犯したんだ。サル女もそれを納得してる。」

「……………」

「だから、止めるのはやめとけ。」

「ガ、ウ……………」

オレは、その場で立ち尽くす…。

被告：天ヶ崎千草

罪状：誘拐・本山を強襲し、ほとんどの人間を石にする・スクナの復活。

尚、誘拐されたお嬢様については、天ヶ崎千草を利用に、裏切ったフェイト・アーウエルンクスによって利用されそうになったところを救出したため、情状酌量の措置を求めらる。

追記：被告も、罰をしっかりと受けようとしている。

「……………以上、被告人、天ヶ崎千草の報告書です。長、ご判断を。」

「……………分かりました。」

「……………。」

うちは今、本山での罰を受けるところや。

いくら敵を討ちたいといつても、お嬢様を誘拐して、利用したのは事実や。

だから、罰を受けなあかん。

周りには、教会の腐った上層部：そして、長様がある。

「…初めに。天ヶ崎千草。君は何故リヨウメンスクナを復活させた？」

「自己満足のためです。うちの両親を殺した、リヨウメンスクナを復活させ、還してやろうと思いました。」

間違っていない、確かに自己満足のためだけに自分はリヨウメンスクナを復活させた。

敵討と言っては聞こえはいいが、ただの仕返しだ。

……その原因を作った教会の上層部の奴らが顔色を若干悪くしつつこつちを睨むように見ていたとしても、それは平然と応えられるほどしつかりと判っている。

後半部分は『事前に』打ち合わせをしておいた理由である。

「では、復活の際に使った技術は？」

「古文書や文献を調べ、独力で行いました。」

短い言葉だけで済ませる。

何も自分が利用される可能性を上げる情報を自分からヤツラに渡す必要も無い。

どんな秘匿している技術でさえ時間さえかければ、使える使えない

は別として知ることは出来るのだから。

「そうですね……判りました。天ヶ崎千草。貴女への処罰を言い渡します。」

長…近衛詠春様はうちを見下ろしていた目線を一度伏せてから改めて口を開く。

「天ヶ崎千草。関西呪術協会の長として最後の命です…今後、関西呪術協会への接触を禁止します。」

…罰ならば、それぐらいは予想していた…それに、もうここにいる意味も無い。

「これよりのち、京都の地を踏むこともまかりなりません。加えて……」

続く言葉に周囲からは、おお…と声上がる。

暫しばかり厳粛な場は声で賑わう。

それ程にこの採択は異例中の異例といえるものであった…。

場が静まった場合、己に課せられた罰に、深々と頭を床に擦り付けんばかりに垂れ受け入れる。



「……………ワイルド、起きましたか？」

「……………エイシユン。」

オレが先ほど言われた事に不機嫌になったので、モーラと月詠を追い出して不貞寝していると…

そこにエイシユン…近衛詠春がやってくる。

「天ヶ崎千草の事ですが……………」

「……………どうなるっ？」

正直…今、一番気になっていたことだ。

「詳しくは言えないのですが……………一つだけ、貴方に言いたい事があります。」

「ガウ…?」

「よろしく、お願いしますね？」

そういうと、エイシユンは笑う。

まるで、いたずらが成功するのを楽しみにしている子供の様な笑顔だ。

「……………?」

「あ、そうそう。言つのを忘れるところでした。今からナギの隠れ

家に行くんですが…一緒に行きませんか？」

「ガウ、いくいく。」

そういつて、オレは立ち上がり、エイションについていく…。

第五十一話・ワイルドって、受けばかりじゃない？

ワイルド            s i d e

「ガール…。」

「…あ、ネギ君たちが来ましたよ。」

オレとエイシユンが待っていると、遠くの方からネギ達が歩いてくる。

一緒に、朝倉、夕映、エヴァ、茶々丸もいる。

「やあ、皆さん。休めましたか？」

「はい？あ…ワイルド先生、モーラお姉ちゃんも！」

「ガウ、おはよう！」

「よつす。ネギ。」

とりあえず、挨拶するが…みんなの視線は、後ろの建物に向いている。

何人か「おおお〜！」と驚いているが……正直、オレもここに来たこと無いんだよなあ……。

ここ使ってたのは、せいぜいモーラぐらいで。

その後、各自隠れ家の中を探索する。

…朝倉が写真をかシャカシャカシャと撮っていたが、カメラを没収しておいた。(バットショットでその後撮っていたが。)

それぞれがある程度見学が終わると写真のところに魔法関係者…ネギ、アスナ、セツナ、朝倉、夕映、エヴァ、茶々丸、モーラ達が集まった。

「この…写真は？」

「これは、私やナギ…アラルブラ紅き翼のメンバー写真ですよ。」

「長も、若々しいですね。」

セツナの言うとおりだが…ただ、今が老け過ぎてるんじゃないか？とも思っが。

「……………あの、この後ろにいる男性と女性は…まさか。」

ネギが写真を指差して言う…指のあるところには、迷彩柄の袖が無い上着と半ズボンを着た、長い黒髪の男と、体操服を改造したような服を着る、金髪の女が…。

「……………」

「……………」



「モーラ、知らない？」

「馬鹿言つな。6年以上会ってねえよ。」

「ガウウ……。」

「そ、そうなんですか……。」

ネギは、露骨に残念そうだ。

オレ、悪くないから気にしないけども。

「では……ワイルドとモーラが仲間になった時の話でもしましょうかね？」

「おおっ、聞きたい聞きたい……！」

「あれはそうですね……ざっと、10年以上前の事です……。」

「……エイシユン、話、長い。」

「まあ、あれは仕方ねえだろ。年取ると、だれでもああいう風になる。」

「……今の間、なに。」

「いや……学園長めらりひびよん思い出した。」

「……………」

オレは、隠れ家を後にして、今は関西呪術教会の本山へ向かっていく。

「しかし……お前も、チキンだなあ。」

「……………うるさい。」

……………まあ、気になってるんだよ……。千草の事。

「別に、お前関係ないだろ？何で会いに行くんだよ……。」

「…あいつ、いい奴。悪くない。」

「ふうん……なら、いいけどな。」

そういうと、モーラは黙って歩き続ける。

「……………つと。着いたぜ。」

「ガウ。」

歩いていると、目の前にはもう、本山の門がある。

入ろうとすると、巫女さんが案内してくれ……千草がいるという、  
独房へと入る。

独房には、手を縄で繋がれた千草が座っていた。

「…モーラ。」

「あいあい…分かってるさね。」

モーラは、そのまま出ていき…独房には、オレと千草の二人だけになる。

「…チクサ。」

「同情なら、やめておくれやす…。」

千草はきっぱりとそう言う。

「チクサ、いい奴！なのに…。」

「…英雄も、まあまだ子供なんどすな…。」

「ガ、ウ…。」

オレが肩を落とすと、千草はクスリと笑う。

「もう…。そんなしよげんでも、ええですやろ？」

「でも…。」

そういうとまた千草は笑いだす。



「ああもつ……ちよつとこつちにおいでやす。」

「ガウ……？」

言われたとおり、千草に近づくと……

「ガ……ンブツ?!……ん……ん!!」

「ん」

……ええ。いつも通りですよ。ええ!!……唇、奪われまし  
た。

これで……7人目?

そして、地面からは魔方陣が現れ光が……って、おい……。

バクティオー  
仮契約!!

「……よっしゃ、やったで!」

魔方陣から現れたカードを手にとり、

「……ち、チクサ……。」

「ま、こんぐらいはええやろ?長にも許可取ったで?」

詠春、コノヤロオオオオオオオ!!……!!……!!

あの時の笑いは、それかつ!

「ほんじゃ…また、会いまひよ。ワイルドはん。」

「……………オレ、いつもどうしてこうなる……………」

千草が何か言っている気がするが…気のせいだろう。うつ……………なん  
で、こんなのはっかり…。

とりあえず、詠春は覚えてろ…。

その後、失意の俺をモータが引きずっていき、新幹線に乗り、麻帆  
良へと帰る……………。

…なお、その日の夜遅くに詠春が黒焦げの状態で倒れており、指で  
「ワイル…」と書かれていたのは、余談である。

第五十二話・弟子って、いたら絶対面倒くさいよね。

ワイルド      side

「まだまだ動きが遅い！」

「は、はいっ！って、うわああっ?!」

「うふふ〜そんなにゆっくりやと、止まって見えますえ?」

「た、助けてええええ!!!」

……………あの波乱の修学旅行があった京都から、帰って数日後。今は、修行をしている所だ。

ちなみに、今いるのはエヴァの別荘内。

相手は、夕映、月詠……………そして、ネギだ。

月詠は、オレとの修行で、夕映はモーラとの座学でアーティファクトの使い方を練習している。

ネギは、モーラに鬼の修行をつけてもらったり、月詠の攻撃を避けたりしている。

…なぜ、ネギが弟子になったかというところ…。

それは約二日前……。

「はあ…チャチャマルのお茶、美味しい。」

「褒めてもらい、恐縮です。」

「ケケケ…カンペキヒヨツテルナ、ワイルド。」

修学旅行から帰って二日…。

今俺は、エヴァの家でゆっくりとくつろいでいる。

「…お前…どれだけ暇なんだ？仮にも警備員だろ？」

「夜に、やるから、平気…。」

教師つてのは昔の話で、今はクビになってるし…ああ平和。

と、チャチャゼロと茶々丸と談笑しながら寛いでいると……。

「…すみません！エヴァンジェリンさんー？」

遠くから、そんな声が聞こえる…。

「…ネギの声？」

「ぼーやだと？一体、何しに……。」

そう言っていると、扉が開いて、ネギが入ってくる。

「……あ！ここにいたんですか、お二人とも。……って、人形が立っている?!」

「ガウ。」

「なにか用か？ぼーや。」

エヴァがそう言っていると……後ろから、アスナもひょっこり現れる。

「ガル……？二人とも、どうした？」

「あ……そうでした。……少し、お願いがあつて。」

「ん？」

エヴァがネギの方を向くと、ネギはいきなり土下座する。

「お願いします、僕をエヴァンジェリンさんとワイルド先生の弟子にして下さい……!」

「……何？私の弟子にだと？」

「……オレ、も？」

「はい……!」

お願いされたエヴァはといえば、「正気か？こいつ…馬鹿だろ。」  
という目でネギを見ている。

一方、お願いした方のネギは真剣な表情で、椅子に座るエヴァを真  
っ直ぐ見る。

「戦いなど、モーラやタカミチに教えてもらえばよかるう？大体、  
私は弟子など取らん。」

「ガウガウ。俺も、教えるほど、頭、よくない。」

「……京都でのことは、色々考えさせられました。そして今の僕の  
力不足を痛感したんです。」

ネギは、続けて言う。

「モーラお姉ちゃんには戦いで忠告や心構えは昔に教えてもらい  
ましたが、魔法は…タカミチも学園にいないときも多いので。」

「……なるほどな。」

「それに…ボクの知っている中で、一番強い魔法使いは、エヴァン  
ジエリンさんだと思ったんです！」

「……………ほう。」

エヴァは、その言葉にニヤリと笑う。

…まあ、確かにそうだろう。

オレは、魔法は苦手だし、モーラはどちらかという魔法より戦闘を重視してるし…

「…つまり私の強さに憧れた…と？」

「ハイ!!」

ネギにその気はないのだろうが、煽ての言葉に気を良くする。

「そういうことなら、吝かではないが…先程も言ったが、私は弟子は取らん。もちろん優遇するつもりはない。それは分かるな？」

「…はい」

さすがにエヴァも魔法使いとしてはネギの立場も考慮にしない。しかしネギ自身も才能はあることも確か。

「ならば後日…今度の土曜にテストをしてやろう。その結果で弟子にするかどうか決める。それでいいな？」

「は、はい!!ありがとうございます!!」

エヴァなりの最大の妥協案に、断られると思っていたネギは喜びの声を上げる。

「…でも、やっぱり、オレ、教える、無理。」

「ええっ?!なんでですか?!」

「……ネギ。オレに、何、教えてほしい？」

「それは、魔法以外の戦闘とかを……。」

「……………はあ。」

ため息をひとつつく。こいつは……馬鹿か。

「オレの戦い方、獣の。ネギに、合わない。」

「……………ああ、なるほど。」

それだけ言うと、エヴァも納得した様な顔になる。

「……ど、どういことですか？」

「……つまり、だ。ぼーや。お前は頭が固い。」

「……？」

ネギは、まだ頭をひねっている。

「……ぼーや。お前は魔法以外の戦闘と言って、何を思い浮かべる？」

「例えば……剣とか、銃とか、拳とか……ですか？」

「うむ。大抵はそれでいいだろう。だが……ワイルドの戦いからは、それと180度違う。」

「例えば……？」



「こいつの攻撃方法の基本は、噛みつく、ひっかく、食い千切る、だ。」

「……………」

…ポカーンとした表情で、こちらを見るネギ。

「つ・ま・り…だ。ぼーやがこいつに教えるを請うということは無駄だ。」

「そんな…。」

「病弱な奴にプロレス教える様な感じだぞ。実際。」

結構ひどい扱いだな…オレ。

「せめて、モーラに教えてもらっ、いい。」

「ふむ…それがいいだろう。まだ実戦的だ。あいつはどんな武器を使ったか？」

「えつと…撥、剣、銃、槍。」

「まあ、妥当だろう…おいぼーや。次の土曜のテストで、ワイルドと戦え。」

「……………」  
「え？」

あ、シンクロニティ。

「ちょ、ちょっと、どういふことですか?!」

「お前へのテストだ。心配いらん、お前の従者も、助っ人も連れてきていい。ただ、相手はワイルド一人だ。」

「……なんで、オレ。」

「ぼーや一人なら茶々丸と戦わせる予定だったが……気が変わった。」

「オレ、巻き込むな……。」

「別に、減るものでもないだろ?」

「……………ガウ。」

オレが正直茫然としていると、後ろから茶々丸がポンと肩に手を置く。

「……ワイルド先生。諦めた方がよろしいかと。」

「オマエモ、ケツコウクロウニンタイシツダナ。」

「……………。」

……という訳で……ネギの、モーラとエヴァへの弟子入りをかけた、戦いが決まったのであった。

第五十三話・チャチャゼロの喋り方って、見にくいと思わない？（前書き）

PV40万、ありがとうございます……！

第五十三話・チャチャゼロの喋り方って、見にくいと思わない？

ワイルド side

「…という訳で、オレ、戦う。」

「……………なんつーかさあ……………」

「ガウ？」

「おまえ、巻き込まれ体質だよな。Mとも、受け体質、ともいえるがな。」

「言う、やめる。」

「…今日は、金曜日。明日がテストの日だが…今、自宅でコロコロとしている。」

「でさあ……………条件って、なんだったんだ？」

「……………蹴り技だけで戦うこと。」

「……………おい、滅茶苦茶有利じゃねえか……………」

「ガウ。」

……… オレが変身できるライダーで、蹴り技中心に戦う者はいないが…オレのスペックで行けば、たいてい勝てる。

「でも、助っ人、呼ばれる。」

「それぐらい別に関係ねえだろ。」

「………まあ。」

……… とりあえずは………。

「絶対、面倒くさいから、いや……。」

「ああ…お前、そういう奴だったか？」

「五月病……？」

「多分違つぞ。」

ああ………ま、頑張った方が…いいの…かな。

翌日…土曜日の今日、オレは、エヴァに連れられ（拉致され）て、世界樹の近くにある大広場に上るための階段、その中程にある少し開けた場所へと連れてこられた。

そこが、今回のステージ。

向こうに立つのは、拳を構え中国拳法の様な型を取る、ネギ。

ハリセンを構えてこちらを睨む、アスナ。

木刀を構えこちらを見る、セツナ。

それぞれの背後には応援団…というか、それぞれに組するものが立っていた。

ネギの背後には、カモと裏の事情を最近知ったコノカ。

オレの背後には、今回の首謀者である、エヴァ。そして、『頑張れ』のプラカードを持った茶々丸達。

ルールは簡単。

ネギがオレに一撃入れば、ネギの勝ち。

ネギが気絶すれば、オレの勝ち。

アスナ達助っ人は、気絶しても関係なし。

時間制限は無し。

時計の針が24時を指した時、戦いは女子中学生の応援の中で……  
…始まった。

「契約執行・90秒…ネギ!! スプリングフィールド、カグラザカ!!  
アスナ!!」

「いい。」

未完成な自己魔力供給により魔力を身に纏い身体能力を跳ね上げたネギは、手にしていた小さな杖を投げ捨て、殴りかかってくる。

そして、その横からは同じように身体能力アスナがハリセンを持って叩きに着、セツナも斬りかかってくる…が。

「遅い。」

「え…っ…!」

オレはその場でしゃがみ込んで、ブレイクダンスの様に背中で回転、ハリセンと木刀を蹴り飛ばす。

「ガ…ラアッ!」

そして、その体制から片手を地面につき体を支えて、両足を跳ね上げ、ネギの顎を蹴る。

「っ…!」

「ネギッ…!」

吹き飛んだネギを、慌ててキャッチするアスナ。

それを見ていると…徒手空拳でセツナが殴りかかってくる。

「はあああっ…!」

「ガア！」

だが…ミドルキックでその拳を払い、逆の脚でセツナのわき腹を蹴る。

「……………ふう。」

ゆっくり立ち上がり、服についた汚れを払う。

「……………な、なんだこりゃ……………」

「さすがです。ワイルド先生。」

「ケケケ…手加減シスギダロ。アイツナラ、最初ノ一撃デ、殺セテルト思ウゼ？」

「ふん…ぼーやも、期待外れだな。」

ギャラリーからは、思わずそんな声が出る。

……………だつてなあ…オレの力だと、素手で鋼鉄のシャッターを紙みたいに破れるし…

本気で蹴ると、殺しちゃうって。

「ね、ネギツ?!大丈夫なの?!」

「……………はあ。エヴァ…どう、思う?」



「ぼーやは…論外だな。そもそも体格差のある相手だ。魔法を使って動きを止め、そこを桜咲刹那と神楽坂明日菜に襲わせればよかったものを。」

そう、エヴァががっかりしたような声を出していると…後ろから、気配がする。

「ガウ。」

「はあっ！！」

後ろ蹴りで迎撃するが…それは、魔法サキタ・マギカの射手を合わせたパンチで跳ね返される。

「……はあっ……はあっ……敗北条件は、「ボクが気絶するまで」……でしたよね…?」

「……いい度胸。」

オレとネギが睨みあう……  
……が。

「はい、ネギ、勝ち〜。」

「………へ?」

ネギの腕を持ち、空に掲げると…ネギは兎も角、アスナやセツナもほかんとした顔になる。

「…エヴァ、これで、いい?」

「ふん……まだまだ甘いな、ワイルドよ。」

エヴァ達の方を見ると、チャチャゼロはニヤニヤとし、エヴァは憎々しげな表情になる。

「え……あの、何がなんだか……。」

「だぁーからさぁ……ネギ。お前今、ワイルドの足の裏に……一撃決めた  
だろ？」

「……………あ。」

……そう。先ほどの攻撃で、もう勝負は終わっていたのだ。

別に避けられたかって言えば、避けられたけど……………ま、ネギも根性あるみたいだし、サービスって事で。

「じゃ、モーラに、修行、頼む。」

「……ま、根性だけは合格だよ、ぼーや。」

「……………は、はい……！よろしく、お願いします！」

……ということ、ネギの弟子入りは決まったのである……………まる。

……そして、現在。

「も……………無理……………です…！」

「イケるイケる！どうしてそこで諦めるんだ…もっと、熱くなれよ！」

「修造力ヨ。」

「ガウ…ネギも、大変。」

目の前では、10キロの重りを手足につけたネギが、100mを3分以内で泳ぎきる…という訓練を見ながら、オレはチャチャゼ口と酒を飲んでいる。

「ケケ、ソウイェバアノ二人ハドウシテンダ？」

「ツクヨミ、ユエ、二人とも、アーティファクト、使いこなそう、頑張ってる。」

「成程…。一人ハ剣デ、モウ一人ハカードダツタケカ？」

「どっちも、強い。」

「ナラ…次戦ウトキガアツタラ、楽シミダゼ。」

「ガウガウ。」

オレは、目の前でおぼれていくネギを見ながら、ほのぼのと晩酌を楽しんでいた…。

予告……………にしたい。

〜ヘルマン編〜

…しとしとと…雨が降るその日、麻帆良に……………悪魔が、現れた。

「フフフ…。私の仕事は『ワイルド』シユタイナー、モーラ』シユタイナーがどれだけの脅威になるか。』だ。ネギ君にも私的な興味はあるが…残念だよ。」

悪魔に捕まる生徒たち……………。

「何これ……………魔法が、使えない?!」

「っ、杖も無いですし、どうしましょ〜??!」

怒りに身を任せ、暴走するネギ……………。



いよいよ始まるうとしていた麻帆良学園祭……………だが、そこでは。

「いよいよ…計画を始めるときネ。」

そして…始まる、格闘大会。

「おつとー！ー！デスメガネをも倒したと言われるワイルド〃シユ  
タイナー選手…通称、麻帆良の野生児、>ビースト<の登場だ  
ー！ー！」

「…いいな…お前……………褒められて。」

大会の最中…父と再会する、ネギ。

「よお……………我が息子。」

そして、超・鈴音の計画が始まる……………！

「ワタシは、ネギ坊主の子孫…というだけではなく、貴方の子孫で  
もあるのだヨ。ワイルド老師？」

《ETERNAL》

「貴方が残したものは…仮面ライダーだけではないのだヨ。」  
現れる仮面ライダー…エターナル。

《MAGUMA》

《SWEETS》

《QUETAZLCOATLUS》

《PUPPEETER》

《TRICERATOPS》

超が作り出したT2ガイアメモリにより、ドーパント化する田中さん軍団…！

鬼となる、魔法使い…！

「ボクだって、戦います…！だって…鬼だから…！」

そして、カシオペアの力により、現れる助っ人たち…！

「頼もしいね……一緒に行こうか。鳴海さん。」

「ああ、行こうか譲ちゃん。……さあ機械人形ども……お前の罪を、数える。」

骸骨の記憶を持つ銃士……

「さっさと壊れなさい……！そのメモリ達は、あつてはならないの！」

「というわけだからさあ……さっさとやられて？」

憎しみを抱き続ける女……

「どうした？戦わないのか？」

「皆さんのためにも……戦いますよっ！」

残忍なる心を持った、未来からの侵略者。

「人を守るのが……仮面ライダーだ！！ウエエエイツ！！！」



「剣崎さん…一緒に行きましょう。」

友のため、不死になる事を選んだ、愚かな剣士…

「俺には憎しみも何もない…。あるとしたら、このどろじよつもない渴きだけだ。」

「その渴き…こいつらの血で、潤しましょ？」

人をやめた、外道の侍…

「皆、戦わないで！！もう…こんなのは、嫌だよ…！！」

「…戦いなんて…無くても、ええのにな…。」

涙を流す、鏡面世界の姫君…

そして……………。

「ワイルド、立つ…！」



近日公開したい！！

予告……………にしたい。(後書き)

あ、ただの俺の妄想でーす(笑)

出来れば、こんな感じにしたいとは思ってるけど…!

番外編：修行するAとT／狂気の刃と不死の札（前書き）

久々に、感想からのアイデア乗せれた：なんか、嬉しいオレ。

…あ、またアイデア募集するかもしれませんが…詳しくは、あとがき。

この小説は、皆さんのおかげで成り立ってます！ありがとうございます！  
ます、いやホント！

番外編：修行するAとT／狂気の刃と不死の札

ワイルド side

今日も、エヴァの別荘で修業だ。

ネギはモーラにしごかれて、今は軽い重力魔法をかけられながら、大岩を持って1000回スクワットに挑戦している。

夕映は、エヴァと一緒に座学で魔法の事を習っている。今のところ、

『火よ灯れ』が確実に成功している。

そろそろ、魔法サキタ・マキカの射手も完成するだろう。

そして、月詠はというと……………。

「えっと……らいだくすらっしゅ〜！」

「カラミティ、タイタンー!!」

今、オレと模擬戦中です。

死に装束を翻らせ、狸々の仮面の下からしっかりとオレを見つめ、剣をふるってくる。

……………しっかし……月詠のアーティファクト、強い。

裏正と、全ての仮面ライダーが使った武器を取り出せる、チート級のアーティファクトだ。

ちなみに、今はその力で取り出した、タイタンソード（マジンに喰わせて、強化している）を使うオレと、サソードゼクター&電磁ナイフを使う月詠と、で戦っている。

「クロックアップ…！」

「ガウツ?!」

と、その時月詠がクロックアップ空間に入り、見えなくなる…!

「……もらいましたえ〜っ!!」

そしてオレの背後に月詠が現れ、斬りかかってくる………が。

「ガアツ!!」

「ひええええっ!?!」

タイタンソードから伸びた触手が、月詠を捕える。

「マジンの力、忘れてた？」

「……あちゃあ……さすがに、クロックアップでは捕えられへんやろ、と…。」

…マジンの能力は、喰らったモノを核に、城に変形する能力。それは、喰らったモノによって変化する。

そして、武器を喰らった場合の効果は…それを数十倍に強化した物に変化する。剣や銃であるうと、たこの足の様に曲げること、そしてそれを八つに分離させることができること。

「うづいづの、卑怯やわ〜?」

「戦い、そう言うの、無し。」

「……………はあい。」

しびしび、負けを認める月詠。

「……………じゃ、次、行く!」

「はい、アデアット。」

そういうと、月詠は剣を全て鞘に戻し、新たにオレにマチエーテイ、自分にはガルルセイバーとライドルポイツプを取り出す。

「じゃ、やりますひよ……………?」

「ガアアアツ!」

そして、また殺し合いという名の修行が始まる…!



……その後、何回か必殺技も使われたが、何とか生き延びて、訓練は終了。

次は、夕映との模擬戦だ。

今ネギは、月詠の攻撃を10キロの重りを手足につけた状態で避けられるかどうか、の訓練をしている。

……あ、今当たった。

「では、よろしく願いします。」

「ガウ！」

オレは手首につけていた変身鬼弦を掻き鳴らし、額の前にかざす。

「……………はアッ！！！」

そして、上空から落ちてきた雷を浴び…一本角の鬼、斬鬼に変身する。

「さあ…行くぞ！」

「はいです！」

そう言うが早く、夕映はオレに殴りかかってくる。

「ほう…アーティファクトの力か。なかなかだな…だがっ！」

拳を受け止め、そのまま放り投げるが…

「甘いです。」

アーティファクトの能力でそのまま飛んだ夕映は、カードをラウズする。

《GEL》 《FIRE》 《BULLET》 ∴ 《BURST・CAN  
NON》

「ぬうつ?! ∴ チイツ!!」

水と炎の水蒸気爆発の砲撃が目の前に迫る…が。

「雷電斬震!」

「きゃあっ?!」

雷電斬震を地面に向かって打ち、上に向けての雷撃で、なんとか砲撃をそらす。

「 ∴ ならば、これです。」

着地した夕映は、さらにカードをラウズする。

《KICK》 《RAPID》 《MACH》 ∴ 《MACHINEGU  
N・DANCE》

音が響くと、夕映の姿が一瞬ふれ ∴ 次の瞬間には、オレの目の前に移動していた。



「雷撃拳！」

「……ッがー！」

その前に、夕映の目の前まで移動し…腹を殴って、気絶させる…。

「……じゃ、今日の、反省。」

「はい。」

「はいです…。」

笑顔の月詠と、対照的に落ち込んでいる夕映。

「ツクヨミ、お前、自分から、危ない目、合う。」

「だって…。そっちの方が楽しいんですもん」

「……ヒット&アウェイで、戦う、いい。」

「…ちえ〜。」

拗ねたように、ほほを膨らませる月詠。子供っぽいな…

「…次、ユエ。」

「……はい。」

「ちょっと、体が、貧弱。」

「……………うう。」

… 自覚はあるのか、少し落ち込む夕映。

後で、たちはな特製ジュース・柏餅紅、歌舞鬼汁・業火絢爛、Wジューズ・サイクロン・ジョーカー、デイケイドジュース・コンプリート、ポレポレコーヒアのセット、あげておこつ…。

「…だから、ネギの修行、ちょっとだけ付き合つ。」

「はいです。」

「後は…コンボ、考える。」

「…あれはなかなか難しいんですが…。」

「上手くいけば、オレより、強い。だから、頑張る。」

「…分かりましたです。」

こちらを見て、決意した表情の夕映。

「ガウ じゃ、今日は、終わり！休む！」

「はいな じゃ、うちは寝ますわ。」

「私は、ちょっと自主練して寝るです。それでは。」

「お疲れ。」

……………以上。二人の修行風景でした。

…ちなみに、朝倉やさよ、真名の修行は、暇なときにエヴァやチャヤゼロにしてもらっていたりする。

……………そろそろ、なにかイベントあった気がするけど…何だったかなあ…？

番外編：修行するAとT／狂気の刃と不死の札（後書き）

…え。今回募集したいのは…

・修行によって変身する、ネギの鬼の姿。

………です。

オレの頭では、真鬼<sup>マキ</sup>とか駄作しか思い浮かばなくて…よければ、お願いします。

応募なかったら、真鬼に決定。

番外編：魔法薬C / 赤の大人と青の子供

真名      s i d e

今日は日曜日。

私は、友人の楓とともに、ある場所へ来ている。

「真名、準備は出来たでござるな？」

「ああ、バッチリだ…全部用意は整っているぞ。」

休日だというのに制服姿で、目を細めその建物を見上げる。

…私が住む学園都市・麻帆良にはさまざまなものがある。

鉄道路線もあればコンビニやデパートもあり、ボーリング場やゲームセンターなどの遊戯施設もある

私と楓に共通していることといえば、甘い物好きということだ。

だが…それ以外にも、共通している事はある。

「はい、1800円ね。」

「だから、私達は中学生だと…！」



「そういつてもねえ…貴女達、どうみても中学生じゃないでしょ？」

「だから、ほら。このように生徒証もあるではござらぬか？」

「見せられたって、偽物かもしれないしねえ…？」

「くっ…！」

チケット売り場での押し問答。

…仮にも戦闘では上の中クラスの私達が、売り場のおばさんに対して抗議する…のだが。全く歯が立たない。

そして、学生証を見せても、偽造扱いだ。

…私と楓に共通するもう一つのこと……………

それは、どうしても中学生に見えないことだった。

「…なかなか映画は良かったな…」

「だが、出費が約倍というのは困るでござるな…甘味代が削られるでござるよ」

オープンカフェで差し向かいに座り、あんみつとプリンをそれぞれつつく私達。

映画は良かった。

「ジェシカの彷徨と恍惚、傷だらけの乙女は何故西に行ったのか、漂流編」という映画で、監督も最近話題の、川相透のデビュー作ということ、評判もいい。

だが……やはり料金だけは納得いかない。

確かになかなかお目にかかれないような、大人顔負けの長身だという事は自覚している。

スタイルや顔立ちだって、悪くは無いと思う。

だけど……いくら大人な見た目でも、私達は中学生。

色々と困るのだ……出費が多いと。

暫し無言になってしまふ私達。

甘味に舌鼓を打っていることも事実だが、それでも頭の中にあるのは……いかにして正規料金で映画を楽しむかということ。

楓が何気なくパンフレットを開いているのを見ると……あるモノの事を思い出す。

「……ふむ、アレを取り寄せてみるか……」

私が呟くと、楓は不思議そうな顔でパンフレットから顔をあげ、こちらを見る。

首を傾げる楓に気付いた真名は、ふつと綺麗な笑みを浮かべると、悪戯でも楽しむような声で囁いた

「なに、ちょっとした道具を手に入れてみようと思ったのさ……」

ワイルド      s i d e

「次、行クゾ！」

「は、はいですー！」

《BEAT》 《MACH》 《BULLET》 ∴ 《IAI・KEN》

「はあっ……！」

「真・ライダーパンチ……！」

ラウズカードによって模倣された居合い拳と、ライダーパンチがぶつかり……相殺される。

「きゃんっ……！」

その時の衝撃波で、夕映は転んでしまう。

「……………模倣シテルトハイエ、仮二モ居合イ拳ダ。モウ少シデモ、威力ガ欲シイナ。」

「……EVOLUTION使いますしょうか？」

「アア、ソレモイイカモシレナイナ……。」

と、変身を解いて一度休憩を取ろうとすると……

「……おい、ワイルド兄ィ。」

「ガウ……？マナ。」

向こうの方から、真名が駆け寄ってくる。手にはペンにつまった、赤と青の飴の様な物が……。

「それ……なに？」

「これはちよつと裏ルートで購入してね……」

そう話していると、さらに別荘にモーラが入ってくる。

「よ……。……おつと。年齢詐称薬じゃねえか。また高いもんを……。」

「……年齢詐称薬ですか？」

「そう、赤いあめ玉・青いあめ玉年齢詐称薬っていうのが正式名称だけどね。」

「……メモ……」

「その発言はとても危ないです……。」

…そう、色々とおの方の作品は恐れ多い……………。

「赤で年齢が加算され、青で年齢が減算される……………まあ、肉体的影響じゃなくて幻術の一種だけだね。」

そういつて、真名は一つ青い飴玉をつまみあげると口に含む。

ポムツとどこか気が抜けた音と共に、一瞬真名の身体が煙の中に消える。

煙が消えるとそこに居たのは、10歳ほどの子供の姿の真名。

服もぶかぶかになっており、まるで子供が悪戯で親の服を着ているような感じだ。

「おおっ…!」

夕映も、それを見て驚きの声を出す。

流石に本当に変化がおきるとは思っていなかったのだろう。

「と、こんな風に一定時間効果がある。」

そういつていると、向こうから朝倉達もやってきて、見物する。

「ま、飴の効果は切れるかマジックキャンセルでも受けられない限りはこのままというの………便利なのか不便なのか好き嫌いが分かれるけどね。」

「すげえね〜…さすが魔法。」

……子供の真名を見ていて、つい昔の事を思い出す。

「オレ、マナ、会ったの、このくらい？」

そういつて、懐かしくなつてついつい真名の頭を撫でる。

「ちょ……ちょっと、ワイルド兄ィ……。」

顔を赤らめながらも、嫌そうにはせずに頭を撫でられる真名。

「……………よっし。」

それを見ていた朝倉が、何を思ったかピンを奪い取り、青い飴玉を月詠、夕映、さよ、そして自分の口に入れる。

ポムツという音とともに煙が体を包み……その煙がはれると、おおよそ10歳ほどの四人が現れる。

「……………つと。ね、ワイルドせんせ、この姿、どうよ？」

「わゝ、子供の時の姿です！」

「ガウ……これ、すごい！」

そのまま、可愛がりながら朝倉とさよを両手で高い高いし、月詠と夕映を両肩に乗せ、真名は頭の上に載せていると……モーラがピンを拾い、ニヤリと黒い笑みを浮かべる。

「……………おい、ワイルド……。」

「ガウ？…ンガッ！！」

振り向くと…いきなり、口に飴玉を押し込まれる。

そしてポムツと音がし……、煙がはれると、上半身裸の、ちびつこなワイルド（SPIRITSに出た昔のアマゾンを想像）がいた。

「ギャウウ……なに、これ……。」

オレが自分の体を見ていると……頭上から、荒い息遣いが聞こえ、そして、ポムツという音もする。

「……………ガル？」

頭上を見上げると、そこには大人に……というか、すごい美女に育った、真名達がいる。

全員が全員、ボンキュボン（古い）の美人ばかりだ……

「うふふふふ……ワイルド兄ィ。怖がらなくていいからね……？」

「ガ……ガ、ウ？」

光が無い目をした真名がそういつて近寄ってくる……怖い。

助けを求めようと、他を見るが……全員、同じ目をしている。

……その向こうでは、エヴァとチャチャゼロが大爆笑している……  
……覚えてる。

「ふふふふふ……さあ……逝くつか……？」

「ガ……………ギヤアアアアアアアアアアアアアアアッ！！」

……………これから丸一日、オレが人間不信になり、他の皆がツヤツヤシテいたのは……言うまでも無い。



番外編：機械人形T / 猫と教師と

ワイルド      s i d e

「ガウウウ…。」

今日は、月詠達の修行をエヴァ達に任せ、ネギはモーラの拷問という名の修行も休みなので、泣いて喜んでアスナ達といろいろ遊びに行くらしい…。

なので、オレもゆっくりと休みを取り、商店街の方をぶらぶらと歩いている…。

「一人、気楽……！」

最近、一人が大好きになってきた気がする。

主に、この前の飴のせいで。

……………オンナコワイオンナコワイオンナコワイオンナコワイ…。

「……………キャアツ…！」

「ギャツ…!?」

と、オレがトラウマスイッチ入りかけていると……………横合いから、い

きなり何かがあつ込んできた。

横合いから、思い切り殴りつける…か…？

そう思っていると…

「あ…すいません、ワイルド先生。」

「ちゃ…チャチャマル？」

そこにいたのは、茶々丸だった。

なんだか、お洒落しているのだが…。

「いきなり…どうか、した？」

「いえ…少しでいいですから、ちょっと私と逃げてもらえませんか？」

「ガウ？」

首をかしげると…茶々丸の後ろの方から、なんだかよく分からぬ機械の大群が、走ってくる。

「な…なに、アレ。」

「少しありまして…いいですか？」

この状況で、逃げる以外の選択肢がある訳無い！

ということ、茶々丸を抱き上げて、そのままオレは走る……！

茶々丸 side

「……こうなっちゃってすみません、ワイルド先生。」

「気にしない。」

どうして……こうなっちゃったんでしょうか。

体内の記憶ドライブにフォルダを作って保管していたワイルド先生の動画を見られた時……つい、暴走してしまい、逃げて……ワイルド先生まで、まきこんでしまうなんて。

「何処まで、逃げる？」

「……貴方とともに、いける所まで。」

そういうと、ワイルド先生は不思議そうな顔をして……すぐになつこりと笑い、私をしっかりと抱きしめて走り出しました。

ワイルド side

と、言う訳で。

茶々丸がなぜか戯言シリーズな事を言い始めたので、いろいろと麻

帆良をまわることになりました。

「ガル……………」

「いい子たちですね……………」

「ガウガウ。」

今は、猫達に餌をやりながら、ほのぼのとしている…というか、猫がオレを取り囲んで、甘えてくる…。

「可愛い子……………」

「ガウウウ。」

猫じゃらしを嵐の如く振り回すと、一匹の猫がその動きについてくる。

灰色の毛並みの、高級そうな猫だ。ノラとは思えない…。

「ああ、ミックもこんなに懐いていますね……………」

「ミック…負けない！」

何故だか、スミロドンのオーラをミックに見ながら、オレはクロックアップもさながらに、猫じゃらしを動かす…！

「……………今日は、すいませんでした。ワイルド先生。」

「ガル、気にしない。」

あの後、一緒に買い物をしたり、散歩したり…と、いろいろぶらぶらしながら遊び、もう5時になっている。

「でも……今日、デートみたい、だった。」

「デート…ですか？」

「ガウ。」

何となくそう言つと…ボンと茶々丸の顔が赤くなりふらつと倒れそうに…

「ガ、ガウツ?!」

「…デート…ト…デート……………」

「チャ、チャチャマル!!しっかりする!!」

何故だか、オーバーヒートした茶々丸をしっかり抱えながら、途方に暮れるオレだった……………まる。

余談であるが、この後ハカセのところに連れて行って、謎のオーバーヒートについていろいろ語られるのであるが……………本当に、余談だ。

「し、失礼します、<sup>マスター</sup>師匠！」

「うむ、入れ。」

…今日、アスナさん達と遊びに行き、茶々丸さんのこと（結局、ワイルド先生が見つけて、葉加瀬さんのところへ連れていったらしい）などがあつて、大変だったが楽しい一日を過ごした後。夜中に<sup>マスター</sup>師匠…エヴァンジェリンさんの別荘に呼ばれた。

返事を聞いて、入ると…。

「えっ?!も、モーラお姉ちゃん…?」

「よっす、ネギ。」

そこには、モーラお姉ちゃんもいて…手には、長い杖の様な物を持っている。

「今日は少し話があつてな…まあ、座れ。」

「は、はい。」

イスに座ると、茶々丸さんに似た自動人形<sup>オートマタ</sup>が紅茶を出してくれる。

「それで…話つて言うのは。」

「ああ…。実はなぼーや、お前の音撃武装を用意できたんだ。」

「え！本当ですか?!」

音撃武装というのは…響鬼で言う音撃棒、威吹鬼の音撃管、轟鬼でいう音撃弦…つまり、固有の武器の事。

ということとは……?!

「ボクも、鬼になれるんですか?!」

「馬鹿言うな。」

期待を込めて言った言葉は、マスターの一言で却下された。

「お前、前に音叉額にかざしたら、吹っ飛んだだろうが。」

「あう…そ、それは…。」

…ワイルド先生が言うところによると、音叉をかざしても鬼の力が足りない場合は、その力に負けて吹き飛んでしまつらしく…この前も、吹き飛んだ。

「で…だ。とりあえず、この武器を私から、この武器を中心にした戦い方しろ…て事。」

「はい!…で、武器って言うのは…?」

「ああ、これこれ。」

そう言ってモーラお姉ちゃんは、持っていた杖の様なものをボクに

見せる。しかし、よく見ると杖とは全く違うものだった。

ボクの持っている杖にも似ているけれど、持ち手の部分にはいくつも穴が開き、先端には歯を潰した刃が付いて、先端だけが刺さる様に杭の形になっている。

そして、杖の中心のところには弦が付いている…まるで、撥、管、弦の全てを合わせた様な武器だった。

「こ、これは…？」

「音撃雑刀、ハリイナズマ春稲妻。棍棒型の撥、長いフルート状の管、雑刀状の弦…と、全部の音撃武装を合わせた形だ。オールマイティに戦えるし、お前の魔法発動体としてもいけるぞ？」

「あ、ありがとうございます…！」

ボクが笑顔でお礼を言うと…マスターとお姉ちゃんが、ニヤリと黒い笑顔をする。

「という訳で……………明日から、修行が大変だ。」

「…へ？」

「全ての武器を扱おうとなると、今までの数倍の修行にしないと…。」

「うむうむ。私の魔法の修行も、それに見合った厳しさにせんと、ぼーやはだらけてしまっしな。」





番外編：機械人形T / 猫と教師と（後書き）

…と、言う訳でネギの武器が決まりました…チートっぽい気がする  
のは、気のせい。

ちなみに技は

音撃打・春火萩投  
シュンカシュウトウ

音撃射・小春緋和  
コハルビヨリ

音撃斬・春威地蛮  
ハルイチバン

…です。

第五十四話…どんなことでも、やり過ぎに注意。

ワイルド      s i d e

雨の中、オレは家路を辿っていた。

今日の天気予報では、夕方から雨だとは言ったのに……彼は雨の中を濡れながら帰る羽目になっていた。

少し物悲しく走っていると…ふと、妙な気配を感じた。

なんというか………ぶっちゃけ、シンのテレパシー能力で、うっすらと何か聞こえたのだ。

一度立ち止まり、その感覚が導く方へ歩いていく。

そして歩いていくと…そこには一匹のびしょ濡れの犬が倒れていた。

その犬は前足に怪我をして、体も冷えてだいぶ弱っている。

テレパシーは、確かにこの犬から反応があった。

それは、この犬がただの犬ではないという事だ。

「ハッハッハッ……。」

とりあえず、その犬を抱き上げ、服のポケットに半ば無理やり入れる。そして、そのまま自宅まで走る…。

ネギ           s i d e

「師匠、ドラゴンを倒せるようになるには、どれ位鍛えればいいですか？」

そう、ボクが師匠<sup>マスター</sup>…エヴァさんに聞くと、いきなりポカンとした顔になる。

それから一拍置いて。

「アホかー！ーッ！」

「へ。ぶあ？！ー！」

師匠<sup>マスター</sup>の鉄拳制裁を喰らった。師匠<sup>マスター</sup>は続けて言う。

「21世紀の日本で、ドラゴンなんかと戦うコトがあるかー！ー！アホなコト言ってるヒマがあれば呪文の1つでも覚えとけ！」

「あ、ううー…。」

「…ね、エヴァちゃんエヴァちゃん。」

今日はアスナさんやと他数名の3-A生徒達もまた、この別荘に付いてきていたのだ。

…ちなみにその女生徒の大半は、きゃいきゃい言いながらボクが渡した初心者用の練習用魔法の杖で遊んでいる。

彼女らは、教わった初心者用の魔法の呪文である、【火よ灯れ（アースデルカット）】の着火呪文を唱えては、だめだー、とか出ないー、とか騒いでいた。

朝倉さんとさよさんは完璧に呪文を唱えていたので、尊敬のまなざしだった。

「実はね、ネギのやつ先日図書館島の地下図書室の更に奥にいつてきたのよ。お父さんの手掛かりがそこにあるって…で、夕映ちゃんと本屋ちゃんが京都で手に入れてきた地図のコピーを解読してくれたのよ。」

「何！ナギの手掛かりだと?!」

「はい、その通りです。が、解読と言うほどのものではなく…」。京都で手に入れてきた地図とは…ボクのお父さん、ナギ・スプリングフィールドが残した地図のこと。

その地図には、この麻帆良学園都市の詳細が暗号で記されていた。

その暗号の中に、お父さんの手掛かりがあるのではないか、と地図を解読していた…が。

実際にお父さんの手掛かりを見つけたのは、暗号を詳細に分析していたボクではなく、そのコピーを渡された夕映さん、のどかさん達

図書館探検部員であった。

ぶっちゃけた話…その手掛かりは暗号でもなんでもなく、地図の中に手書きのカタカナででかかど「オレノ　テガカリ」と書き込んであったのだ。

アスナさんの台詞に、夕映さんとのどかさんが続ける。

「それで私達とネギ先生が図書館島の地下図書室最奥部へと挑んだわけですが……。」

「そこにいたんです！。大きなドラゴンさんが……。」

「何？」

ボクとのどかさん、夕映さんの3名が地下図書室の最奥部に至った時、そこには巨大なドラゴンが居たのである。

ボク達は、そのドラゴンに追い散らされ…夕映さんのLIGHTNING SMASHという技を使い、ドラゴンの方も自分たちも命からがら逃げ出して来たのであった。

その事を聞いた師匠は考え込む。

「むう。ナギの手掛かりのある場所の前に、ドラゴンが……。おそらくそれはガーディアンだな。番犬のような物だ。しかしここ麻帆良学園の地下深くに、そんなものが潜んでいたとは……。」

難しい顔をし、ぶつぶつと呟く師匠。

「むづ……。ナギの手掛かり、か……。」

「そ、それで師匠。ドラゴンを倒せるようになるには、どれ位修行すればいいでしょうか。」

「アホかー！ツ！」

「ほべぷっ！？」

再び鉄拳制裁を喰らう。師匠は吼える。

「お前はまだまだそんな事を論じられるレベルにもなっておらんわっ！というか、鬼にもなれん未熟者が言えるレベルではないわ！」

「あ……。あつう……。」

「……。ところで神楽坂明日菜。お前はそのとき付いていかなかったのか？お前ならばーやがどこかへ探検に行くとなれば、付いていきそっただがな。」

「う……。そ、それは……。」

「いやー、それなんだがよ。今回は兄貴達、兄貴の杖に乗って飛んでっただよな。」

口ごもるアスナさんにかわって、カモ君が説明をする。

「なんでかは知らねーけどよ、姐さんが乗ると、兄貴の杖、うまく飛ばねーんだよな！。だから今回は涙を飲んでお留守番ってわけ。」

「なるほど、神楽坂明日菜……。お前、体重が120Kgほどもあるのか。なるほどな。」

「なんでよー！ツ！！」

「ふげろっ！？」

アスナさんの突っ込みが、諧謔を飛ばした師匠に直撃する。

「き、貴様っ！いくら弱まっているからとは言え、真祖の魔法障壁をテキトーに無視するんじゃないっ！」

「ふんだ！」

「ああ、アスナさんも師匠も、やめてくださいよー。」

「……アホばっかです。」

「あつー。」

ポレポレコーヒーを飲みながら呆れて言う夕映さんに、困った顔ののどかさん……

今日の修行風景は、今の所平和一色だった。

「おい、ネギ。鬼の修行2倍の厳しさで始めるぜー。」

「う、うわああああああああっ？！？！？！？」

……いや、平和じゃなかった……。



???

side

ネギ達が、エヴァンジェリンの『別荘』の中で騒いでいる頃、外の世界で蠢動している者達がいた。

大粒の雨の降りしきる中、その者達は麻帆良学園都市の路地裏に、密かにうごめいていた。

路地裏の路面にできた水溜りが、ぐつつと盛り上がる。それはまるで海月か何かのようにも見えた。その物体には、二つの光る目が有った。その目は、明らかに知性を感じさせる。

「……ネ、ギ……スプリン……グファイ、ルド……。」

その物体は2つ、3つと数を増やすと、くすくすと笑い声を立てる。だがやがて再び、それらの物体は、とぶん、とぶん、と水溜りの中へと姿を消していった。やがて、その路地裏からは全ての気配が消えてしまう。

そこにはただ、雨がゆっくりと降り注ぎ続けるだけだった。

ワイルド

side

「ガウ……。」

犬を家へ連れ帰り、多少看病していると……途中で、シユウ  
シユウと音を立てて、犬が人間へと姿を変える。

「……………コタロー？」

名前はホンワカとしか覚えていないが…確か、そんな名前だった。

ネギと戦って、コノカを放っておく原因を作った獣人だ。…いや、  
ウェアウルフ人狼といった方がかつこいいかな？

なんとなく、次狼さんの事を思い出しながら、小太郎をふと見ると、  
右腕に怪我をしている。

更に額に手を当てると、相当高い熱を出していた。

「ガウ……………」

部屋の奥へ行き、滅多に使わない救急箱を持ち出してくる。

と…その時、突然小太郎が立ち上がる。

そのまま立ちあがり、小太郎はオレに飛び掛ってくる。その指先に  
光る鋭い爪は、しっかりと喉笛を狙っている。

ま、全然大丈夫だが。

体を躲し、手刀を小太郎の首筋に入れる。…ボキツと音がして糸が  
切れた様にクタクツと倒れ込む。

「やりすぎ………た？」

口から泡を吐いて倒れる小太郎を見て、とりあえず反省する俺であつた……まる。

第五十五話：封魔の瓶とラウズカード、効果が似てるよね。（前書き）

PV45万、ありがとうございます！

今のところ、ネギの鬼名は春鬼シュンキに決定しました。

コスモ様、ユーリル様、アイデアありがとうございます！

第五十五話：封魔の瓶とラウズカード、効果が似てるよね。

ワイルド side

首を骨折してないか確かめ小太郎の手当てを手早く行つと、客間へと運ぶ。

そして、一度ソファにねかせると小太郎がうなされるように言葉を発する。

「う…………ネギ……。あいつに…………伝えな…………。危険が…………狙われ…………。」

「…………ガウ。」

…………ネギが狙いか……。なら、今はまだ別荘だから安心か……？

すると、小太郎は眼を開け、こちらを焦点の合っていない目で見つめる。

「あ……あ……？」

「無理、しない。」

「…………すみんな…………ど…………？」

「オレの家。…どうして、倒れてた？」

「あ…？俺、倒れてたんか…？」

「…一時的、記憶喪失？」

と、そう思っていると、玄関の方からノックの音が聞こえる。

「ガル…？」

家にはオレと小太郎しかいないので、玄関まで行き扉を開けると…。

「やあ。病毒バイラス・リザードなる竜人君だね？」

そこには、黒色のコートを身にまとった、一人の初老の男が立っていた…。

「よくその少年を見つけてくれたね。ここはもう良いから、仲間と合流して作戦通り事を運びたまえ。」

「了解だぜー。」

男が少女型生物にそう言うのが早く、その生物は再び姿を海月のように崩すと、水溜りの中へ消えていった。

初老の男性は、小太郎に向き直る。そして彼はゆっくりと言葉を發した。

「やあ、狼男の少年。元気だったかね？」

「お……お前は?!」

小太郎が驚いた顔になり、構える。

「……………さて少年。『瓶』を渡してもらおうかな? 君は我々の仕事の目的とは違うが……………。その瓶に再度封印されては元も子もないのでね。」

そういうと、その男はいきなり小太郎に殴りかかってきた。

だが、オレが割って二人の間に入り、殴りかかってきた男の腕を取ると、小手返しに投げ飛ばす。

男はびしょ濡れの地面を転がって衝撃を受け流すと、離れた場所で立ち上がった。

「ほう……………。やるね。さすが紅き翼アラルブラの一人だ。」

「……………誰だ、お前……………」

「これは失礼したね。私はヴィルヘルム・ヨーゼフ・フォン・ヘルマン伯爵。伯爵などと言っているが、没落貴族でね。今はしがない雇われの身だよ。…ああ、そう言えば。君はその少年を守るのかね。」

初老の男……………ヘルマンは不思議そうに訊ねる。

「お前、襲ったから。」

「それだけで戦うのかね?」

「正当防衛。それに、子供襲う、外道。」

「ふむ……それもそうかもしれないね。だがこれも仕事の一環でね。やむを得ない仕儀なのだよ。」

…オレは諦め、もはや語る口は無しと、黙って構えを取る。

ヘルマンもまた、オレに向かって構える。だがそこに、割り込んだ者がいた。小太郎だ。

「何やっとおねん！おっさんの狙いは俺やる?!」

「コタロー、やめる！」

小太郎はいきなりヘルマン目掛けて突っ込んだ。オレの制止する声にも聞く耳を持っていない。

突っ込んだ勢いそのままヘルマンに向かって拳を放つ。ヘルマンは左腕でそれを捌くと、正拳の連打を小太郎に見舞う。

小太郎は最初の数発は受け流し、全ては裁こうとするが…直撃をくらう。

そのまま吹き飛んで雨に濡れた路面を転がっていき、四つん這いに近い姿勢で体勢を立て直す。

一度距離を取り、オレはヘルマンと小太郎が離れたのを見ると、ヘルマンに向かって飛びかかり、モンキーアタックを放つ。



ヘルマンはそれを中腰になり、腕をクロスさせて受ける。そして今度はヘルマンが正拳突き of 連打をオレに浴びせる。

冷静に、そして綺麗にその拳を捌くが、実のところ……多少苦勞している。

威力も一発一発が重いし、まるでアクセルトライアルのような連打だ。(分かりにくい例え)

「ガ…ラツアツ…!」

「ぬうつ?!」

だがそんな中、機を捉えてヘルマンの腕を捕らえた。その腕を捻りながらヘルマンの身体を投げ落とす。

そこへ小太郎が飛び込んで来た。上手くヘルマンが立ち上がるうとした隙に、その懐に飛び込むことに成功したらしい。

見た目よりなかなか戦えるな…。

そして…小太郎はそこで勝負をかけんだろう。少なくとも、そのつもりだったはずだ。

「これで……決まりや! 狗神!」

だがその構えた右手からは、狗神は出なかった。本来であれば、黒い影の様な狗神が彼の手から出て、ヘルマンを打ち据えるはずだったのだ。だが小太郎の手からは何も出現する様子が無い。

「……………へ？」

ヘルマンは小太郎のその右腕をがっしと掴んだ。ヘルマンは言う。

「……………残念ながら、術が使えないことは、忘れたままだったようだね。おっと、動かないでくれたまえ竜人君<sup>リザード</sup>。」

「ガ……………」

「は、放さんかいつー!!」

小太郎を助けようとしたオレを、ヘルマンは牽制する。

「何、私はこの少年が持っているはずの『瓶』さえ手に入れば、それでいいのね。」

「瓶…？」

「それ以上君に手出しはせんよ。ま…その竜人君<sup>リザード</sup>には仕方がないがね。」

オレが不思議そうに聞くと、ヘルマンは小太郎の髪の中をまさぐり、中から小さな何かを取り出す。

「うむ。ああ、これだね。あつた、あつた。」

よくみると、それは一つの小瓶だった。

その瓶には、五芒星が描かれている。……………確か、封魔の瓶という名前だった。魔族などを封じ込める、ラウズカードの様なものだ。

「ああっ！何しよるんや！返さんかい！」

「ふむ、これで再封印されてしまう危険は無くなったわけだ。」

ヘルマンは小太郎を放り出すが、小太郎はうまく受身を取って起き上がって、すかさずヘルマンに襲いかかるつとめる…が。

「てめえこの……。」

ヘルマンは、すつと体を躲す。そしてロングコートをマントの様に広げると、空中へと浮かんだ。

「ふははははは！楽しかったよ小太郎君、竜人君<sup>リザード</sup>。もしよかったら、また後日にも遊ぼうじゃないか！はっはっはっはっはっはっは！」

「くそっ！」

そのまま笑いながら、ヘルマンは飛び去っていく……。

「ど、どうするんや…?」

「ガ、ガウ……とりあえず、追う。」

オレはジャングレーを呼び、さっそく乗り込む。

「コタロー、乗る？」

「…当たり前や！」

小太郎は、ジャングラーの後ろに乗り込む。そして、オレはそのままジャングラーを走らせる…！

第五十六話：スパルタは、愛の裏返し。

ネギ      side

「よし…次行くぞ！」

「は、はい！」

目の前には、いくつも鉄球を構えた、モーラお姉ちゃんがいて、ボクは春稲妻を構えている。

「いいな！魔力供給は禁止だかな！」

「お願いします！」

「行くぞ…疑似シュートベント！」

連続して、鉄球がこちらに投げられる…けど。

「ツ…！はああああああっ…！」

春稲妻を振り回し一個一個の鉄球を弾き返していく。

その弾いた鉄球も、さらにお姉ちゃんが弾いて、ボクに打ち返してくる。

「ああああああああっ…！」

「オラオラオラオラオラオラオラオラアッ!!」

…だけど、そんな拮抗も長くは続かなくて…

「そらあっ!!」

「…わアッ!! あだだだだだだだだだだだっ?!」

一球を取り損ねると、全部の鉄球が僕に命中する…。

「い、痛いです…。」

「痛いつてことは死んでないな。よし、続きやるぞ。」

「ヒイイイイイイイツ!!」

某赤白縞々の漫画家の絵の様な顔でボクが後ずさると…お姉ちゃん  
はニヤツと笑い、鉄球を降ろす。

「だ・け・ど……………とりあえず、今回はこれで終わりな。」

「へ…?! た、助かった!!」

「アスナ達ももう帰ったし、お前もそろそろ戻れ。」

「わ、分かりました!!」

「じゃ、お疲れ…。」

そう言われるが早く、ボクは出口へと脱兎のごとく走り出す。

「はい、それではっ！！お疲れさまでしたあっ！！！！」

そしてボクは、入り口に滑り込み、すぐに外に出る……………！！

モーラ side

「…あいつ、逃げるのはええなー……………」

そう、あたしがぼーっとネギの走り去った方を見ていると…。

「……………やっと修行は終わったか。モーラ。」

「おうよ、エヴァっちゃん。」

「その呼び方をやめんか！！」

後ろを向くと…チャチャゼロを連れた、幼女吸血鬼…エヴァっちゃん  
んがいた。

「地の文でもそれか?!」

「メタ発言気ヲツケヨウゼ、ゴ主人。」

「…って、冗談だったんだけど…なんか、用さ?」

「…ああそうだったな。お前の主…ワイルドのところに誰か来るそ

うだが、心当たりあるか？」

「誰か？………んゝ…ああ。何となく。」

「ふん、ならばそいつはどこまでの実力者だ？」

「結構強いはず。………って。何でそんなこと聞くさ？」

「いや、学園結界を通った奴がいてな…なかなか強い力を持っているし、学園長ジンから聞いているのもそいつかと思っただけな。」

「へえ………ま、なんとかなるだろ。ワイルドだから女難には合うと思うけどな。」

「うむ、合いそうだな。」

「アイウ運命ホシノ元二生マレテキテルンダヨナ、アイツ。」

「そうそう。」

「おお、もう一個言う事があった。ちょうどいい酒を見つけてな。一杯やらんか？」

「いいねえ よし、飲もう飲もう！」

……… 今回の事を後で知った時に、失敗したと思った事はいくつがある。

一つは、悪魔が力を押さえて侵入したので、結界を見ると強い人間レベルの力でしかなかったこと。



もう一つは…あいつが来る日だけでなく、時間も分かっていれば…  
ということだ。

ま、今は何も分からないので、チャチャゼロとエヴァとで宴会をして楽しむのだった…まる。

ワイルド      s i d e

「あいつら、オレ狙い？」

「ああ、多分そうや。でも、あんたら誘き出す為にはネギとかを利用した方がええとか、ネギとも戦いたいとか聞いてしもたから、慌ててこの学園に来たんや。」

「ガウウ…!!」

バトルジャンキーっぽいな…見た目鳴海のおやつさんのダンディのくせに、中身は浅倉かよ…。

「あいつらを封じるための《封魔の瓶》ってやつをあいつらからかすめ取ったんやけど、それから狙われてしもてな…。」

…ああいう魔族からしたら、確かに天敵だしな…《封魔の瓶》。

アンデットにラウズカード、魔化魍に音撃のような感じで。

「…あとな。まさかやと思うんやけど兄ちゃんの仲間も、捕まえる

「気かもしれん…。」

「……………」

自然、ハンドルを握る手に力を込めてしまう。

「……………もし、それだったら、許さない…！」

オレは、ハンドルから片手を放し、音叉を持ち、ハンドルを叩く。

…キイイイイイイ…ン……

「ヒビキ……!!」

「お、おおっ?!」

額に音叉をかざす…と、オレの体が炎に包まれ、小太郎が大慌てる。

「に、兄ちゃん燃えよる!なんやこれ?!」

「……………はアツ!!」

そして、炎を振り払うと…その姿は、鬼へと…響鬼へと、変身していた。

「に、兄ちゃん……………?」

「ちょっと変身しただけ。じゃ、少年…飛ばすぞ?」



「何なのよ！このエロジジイ　　ッ！！」

「死に晒せ。」

「ろもっ！！」

…ちょうどいま雨が流れ落ちてようやく気が付いた神楽坂。

イロイロあった別荘での一件を終え、寮の自分の部屋に帰ったはずだろくに、今は野外で、しかも何故かセクシーランジェリーに身を包んでいればそれは驚きもするだろう。

しかもそれだけではなく、両の腕を拘束されているのだ。

そんな姿にされた張本人である、黒帽子に黒マント、黒服と黒い靴という上下黒尽くめの見るからに怪しい老人に朗らかに微笑まれたら、そりゃ蹴りの一つも入れたくもなるだろう。

……………というか、私自身も同じ格好で、同じ目に合っている訳だが。

すかさずマキシマムドライブを叩きこ見たいのは山々だが…武器も、バクティオー仮契約カードも取られているので、何もできない。

で、蹴りを入れられたその老人であるが……

「いやはや…ネギ君や竜人君のお仲間は生きがいのが多くて嬉しいね」

やっぱり楽しげに、ハハハと笑っていた。

……鼻血を流しながらではあるが……

「鼻血流しながらナニ取ったのよ！！おろしなさいよっ！！」

「その通りだ。この変態紳士。「解剖したい……！」とか言い出す気がする。」

……神楽坂はやたらネギ先生の魔法暴走に巻き込まれて服を飛ばされたり、ノーパンで戦わされたりしていたが……多分、好きでやっている訳ではないし別に彼女は露出狂ではないのだろう。

下着姿にされている上、触手っポイ何か両腕を拘束されて喜ぶようなマニアックな趣味は持ち合わせていないはず。

まあ、私にもそんな趣味は毛頭ないし、ワイルド兄イにも見せた事はないのに、こんな老人……いや、爺に見せているというのが許せん……！！！！！！

しかし、彼女の怒りも、私の怒りも長続きはしなかった。

「！？今、ネギの仲間って言った？」

「確かに言ったよ。……それに、竜人とは……ワイルド兄イの事だね。」

老人のセリフに聞き捨てならないものが混じっていた事に気付いたのだから。

「真名……！！」

「アスナさん!!」

老人が答えるまでもなかった。

その問い掛けに答えるように、見知っている級友の声が私達の耳に飛び込んできたのだから。

どうやら私達が起きた事に気付いて声を掛けたのだろう。

「彼女達は観客だ。」

老人の視線と、級友の少女らの声に導かれてその声にする方向に目を向けると……

「アスナ大丈夫ー!?!」

「コラ　っ!!　エロ男爵!!」

「なんで真名も捕まってるアルかー!!」

「みんな!?!」

透明なドーム状の“何か”に捉えられたネギに關係している少女らの姿。

「ネギ君と竜人君の仲間と思われた9名は全て招待させてもらった。」

「刹那さん!?!」

古達が入れられたドームの隣に、また同じようなドームがある。そこには…気絶した刹那の姿があった。

「さあ……………私も仕事だ。せいぜい、役に立ってくれたまえ…。」

そう言うと、その老人は、ニヤリと口角を釣り上げて笑う…………

第五十七話：ブチ切れたなら、手加減するな。(前書き)

今回、あるライダーのオリジナルフォームが出ます…。

嫌いな人がいるかもしれないけど……ごめんなさいっ！



第五十七話：プチ切れたなら、手加減するな。

真名      side

「…なあ。気になっていたんだが、そちらの皆はなんですっ裸なんだ？」

「風呂場で襲われたんです！」

今、ランジェリー姿の私と神楽坂、そして近衛は兎も角、他のメンツ……宮崎、綾瀬、朝倉、古、さよはスッポンポン……まあ、平たく言えば全裸なのだ。

襲撃を掛けて来たのが水系のモンスター……というか、スライムだった所為か、彼女らが風呂に入って緩み切っていたところを一網打尽にしたのである。

だったら全裸なものも当然だろう。

その姿のまんまなのは趣味が悪いと言わざるをえないが。

…まあ、私もパジャマを着て寝ようとしたところを狙われた訳だが…そこを思うと、パジャマよりはこのランジェリーもまともな服装に感じてくる…。

「文句はそっちのオッサンに言うアル！」

「…ま、正論だね。」

「あなた、なんでこんなことするのよ！」

「なに、大したことはない…単なる仕事だよ。」

「仕事？」

ヘルマンの言葉に明日菜が戸惑う。

彼女の戸惑いが手に取るように分かっている…という顔ヘルマンは説明を続ける。

「学園内の調査が主な目的だが…：…それだけではない。『ネギ・スプリングフィールド』『カグラザカアスナ』が、今後どの程度の脅威となるかの調査。そして…」

そこで、心底楽しそうな顔で笑う。

「フフフ…。『ワイルド』シユタイナー、モーラ』シユタイナーがどれだけの脅威になるか。』だ。ネギ君にも私的な興味はあるが…残念だよ。」

「っ!？」

「…やはりか。」

ネギ先生の『英雄の息子』に襲い掛かる脅威を知ったばかりという訳でもないので、納得はできる。

しかしワイルド兄いとモーラの力を探ろうとしている。

そんな人物など、私は、そして多分神楽坂も一人しか心当たりが無い。

「アンタに依頼したヤツって、京都での白髪のがキ?!」

「確か…名前はフェイト・アーウェルンクスとか言ったね。」

「クライアントの正体は明かさないのでお約束でね、黙秘させてもらっよ」

私達の言葉をスルーし、ヘルマンは何か気付いたように空を見上げる。

「来たようだね。私もネギ君に対しては、思い入れがあつてね。あの時から、どの程度少年が『使える』ように成長したのか…そして竜人君とも戦ってみたかったのだよ。」

「えっ?」

ヘルマンの意味深な言葉にさらに戸惑う神楽坂。

しかし、老人の表情は楽しげに笑っていた。

そして………遠くからバイクの音が聞こえる。

それと同時に、誰かの声の様な物も……!

「はっあああああああっ!!」

「オラララアアアアッ!!」

その声が聞こえたと思うと、まるでアマゾンの様な意匠のバイクに乗った響鬼と、京都で会った狗族の少年がこちらに向かってくる。

「ワイルド兄イっ!!」

「来たかね、竜人<sup>リザード</sup>!」

そのままワイルド兄イはバイクで走り、目の前で止まる。

「よっ。待たせたなあ…。」

「さっきの借り、返させてもらっで!!」

「フッフ…なかなか強そうだね、君は。私の名前はヴィルヘルム・ヨーゼフ・フォン・ヘルマン。しがない没落貴族だよ。」

「俺はそう言うのはどうでもいいんだけどね…さっさと、教え子たちを返してもらおうか。」

そう言うが早く、ワイルド兄イは老人に向かって走り出す…!

ワイルド side

「烈火弾!!」

デモ―ニツシエア・シユラク  
「悪魔パンチ!!!」

「犬上流、空牙!」

「ぬっつ!」

オレが烈火弾を放つと、ヘルマンの拳がそれを相殺し、更に小太郎の気弾をも消し飛ばす。

「鬼爪ツ!」

「んなろあつ!」

「甘いよ!」

更に、オレが爪を伸ばし、それに合わせて小太郎が殴りかかるが…それをひよいつと避け、ヘルマンは攻撃してくる。

「……………なあ、リザード竜人君…いや、オーガ鬼神君よ。本気を出さないかね?」

「…なんだと?」

体勢を立て直し、ヘルマンを睨みつける…と、そこでヘルマンがため息をつく。

「…君は、なぜだか本気を出していないではないか。これでは、私もつまらない。」

そう、オレを一瞥すると…ヘルマンは、先ほどのパンチを真名達に

向かって放つ。

「くっ…?!」

「きゃああああああつ!」

「教え子達っ!」

そのパンチが命中し、朝倉達はドームのおかげでまだ無事だったが、真名には直撃する…!!

「がっ…!!」

「龍宮!」

真名は血を吐き、首を垂れる。それを見たヘルマンは、にっこりとオレを見る。

「ほら、鬼神君<sup>オーガ</sup>。早く本気を出さないと、仲間が死ぬよ。」

そして、もう一発とヘルマンが手を振り上げる……

そこで オレの意識は 視界は 紅色<sup>アカイロ</sup>に 染まった。

真名 side

目の前で、老人が拳を握り、私に狙いをつけているのが分かる。

その光景がなんだかスローモーションに見える。

先ほど受けた攻撃のおかげで、骨が折れ、内臓も傷ついているはずだ。

腕に絡みついた触手の様な物のおかげで、かろうじて立っている。そんな体での攻撃を受けたならば、確実に死ぬだろう。

「やめてー！ー！ー！」

綾瀬や本屋、さよがそう叫ぶ……が、その言葉を全く気にした風も無く、その拳を老人は放つ……

はず、だった。

「……な……！？」

「……………」

「ワイルド、兄ィ……………」

目の前には、響鬼が立ち、老人の拳をしっかりと握り、防いでいる。

「やっと、本気を出したかね。さあ、戦りあ「黙れ。」……ッな?!」

響鬼は、握った拳を握りつぶし、そのまま投げ飛ばす。

「……………つがー！」

「……………」





「お、怒ってる……………」？

「せ、先生……………」。

「…少し、まずいかもね。」

そして 惨劇が 始まった。

第五十七話：ブチ切れたなら、手加減するな。（後書き）

（仮面ライダーシン激情態）

パンチ力：110t

キック力：270t

シンの体内に流れるX - 素子とバッテリーゲンが過剰な量になり、それに適応した身体が全身を更に<sup>インナーチェンジ</sup>変身させた姿。

激情態とは仮の名称。正式名称は<sup>サイボーグ・ソルジャー</sup>改造兵士レベル。

従来のハイバンプ・ネイル、スパイン・カッター、ブレイク・トゥーサー等の威力も強化され、並の相手では倒すのは至難の業。

第三の目はテレパシーを増幅するためだけの器官と化し、自我を保つための力は無くなっている。

背中の羽で、マツハ18での飛行が可能。

高速で動かし、衝撃波を生み出すこともできる。

唯一の弱点である高熱も克服し、まさに無敵とっていいライダー。

ある世界で、シンの理論上の最大進化、65535倍まで進化した可能性として、生れた。



「……………」

「お、おのれ……………」

私は懐から、封魔の瓶を取り出し、それを掲げる。

「君もなかなか化け物の様だ…ならば、私も化け物を呼ばせてもらおう！」

「……………」

「へん！それでなににするっちゅうねん！！その瓶は、お前を封印するためのもんや！」

「残念ながら違うよ。ウエアウルフ狼男の少年。」

瓶を掲げたまま、私は語りだす。

「君は勘違いしていたようだが、この瓶にはもうすでに先客が入っていてね…その先客さえ出せば、もう君達など…羽虫程度だ。」

「なんやと!？」

「昔々、吸血鬼にも負けず劣らずの勢力であった、ファンガイアという種族に滅ぼされかけた、十三魔族という者たちの一人…ギガント族の一人だ。いでよ!!！」

私がその小瓶を握り、地面に投げつける…と、瓶は割れ、中から冷気の風が吹き荒れる。



…今ボクは、魔法を使用した直後とは思えないほど魔力が高まっていた。

いくらつらかったとはいえ…一応、マスター師匠のシゴキが効いているみたいだ。

けど…今打った魔法の射手もサキタ・マギカ聞いてないようだ。

なかなか強い相手…そう思って、ボクは手の中の春稻妻をしっかりと握りなおす。

「ネギ!!」

地に足が着いた時には既に戦闘体制に入る。

鍛錬のみとは言え、身体が既に戦い慣れている証拠だ。

モーラお姉ちゃんの修行では、どんな時でも即座に戦闘態勢に入らなければ死ぬ。

もう、トラウマレベルで体に染みついている動きだ。

ボクを見たアスナさん。その顔に浮かぶのは助けに来た事に対する喜びでなく、ただ心配という表情。

そして、人質にされているアスナさん達を目にするけど……………

「あ、アスナさ……あつ!？」

……………まさか。

「アスナさんがまたエツチな事に!？ああつ、龍宮さんも!！?？」

そうとしか思えなかった。

「違ーうっ!! 違わないけどっつーか、“また”ってナニよ!  
!“また”って!！」

どうしても…関西呪術協会本山での一件の疑いが晴れない。

「ネギくーんっ!」

「ネギ先生ー!」

他の皆さんは嬉しいのか素直に喜んでいる。

「……………ネギ先生、か。」

見ると、龍宮さんの体は、傷だらけになっていて、口からも血が垂れている。

「あなたの一体誰なんです?!皆さんを人質に取ってまで、何がしたいんですか!？」

「いや、手荒なマネをしてすまなかったね。私は君達の力を知りた

くてね。人質を取らないと、全力で戦ってくれないと思ってね。」

「全力で……？」

「ああそうだ。…ひとまず、君の力を見せてもらおうか。」

「うわっ！」

ボクの脚に何かがからみついたと思うと、後ろから何かが迫ってくる。

それをガードこそするが、衝撃を受け流しきれずにステージの正面に飛ばされる。

「『戦いの歌』！！」

自身への魔力供給の完全版『戦いの歌』を唱え、飛び掛ってくるなにかを迎え打つ。

中国拳法と槍術で、その女の子の形をした物の隙を突いて吹き飛ばす。

「兄貴、あれはスライムってやつだぜ！！」

「スライム……？」

……なんだか、イメージとは全然違う。

と、ボクがそう思っていると、さらに後ろから何かが迫ってきて……



「兄貴、後ろだ!！」

「わ、あわわっ!！」

慌てて迎撃しようとするけど、間に合わない!！」

「…犬上流・空牙!！」

「…えっ?」

攻めて防御の足しに、と春稲妻を後ろ手に構えた…が、衝撃は全く来なかった。

そして、声の主を確認するために、後ろを向くと……………

「こ、コタロー君!？」

「さっさと構えい、ネギ。こいつら、やばい奴らやで…?」

そこには、京都で戦った狗族の男の子…………コタロー君が、いた。

第五十八話：怒っていると、周りが見えなくなる。（後書き）

…えー。どうも。ヴィランズです。

今まで、いろいろとこの小説、魔化魍とかいろいろ出てきたんですが…ちょっと、この小説内の世界について説明を。

~~~~~

この世界は、ネギま世界をベースとしていますが、ライダーの怪人も少なからずいます。

いるのは、魔化魍、ワーム、ファンガイア、オルフェノクです。

魔化魍：条件がそろえば自然的に発生するので、この世界ではごくまれに発生する大妖として恐れられていた。

夏には発生する確率が高くなるので、そこを狙って式として扱われている魔化魍も少なくない。

童子と姫は存在しない。

ワーム：魔法世界にしかないが、普通の人間として生活しているワームがほとんど。

拳闘士として生計を立てているものが多く、獣人の中の種類の一つ、と扱われている。

擬態した人を殺す本能に関しては、我慢すればいい程度の物。

ファンガイア：古代から、吸血鬼とその名を並べて存在していた魔族。

キバの世界でいた、キバツト族、ドラン族、サガーク族、ウルフェン族、マーマン族、フランケン族、ギガント族等の十三魔族も存在していたが、魔女狩りの最盛期にほとんどが人間の前から姿を消した。  
ネギ達の時代にいるファンガイアは、封魔の瓶に封印されているのが大半。

オルフェノク：ワームと同じように、魔法世界で獣人の中の一種類として存在している。

体が崩れていくことも無く、普通に人間の姿で生きている物がほとんど。  
拳闘士をやっている者が多い。

…という感じです。

穴だらけなので、なにかおかしい処があったら、是非突っ込んで下さい…それでは、ヴィランズでした。

第五十九話・同じような展開だと、飽きるよね。

ネギ           s i d e

「な、なんで小太郎くんがここに?!」

「ちよつといろいろあつてな…今は味方や。」

「そ、そうなの…?」

見ると、確かに小太郎くんの姿はぼろぼろで、戦っていたのがすぐ分かる。

「それと……あいつ、強いぞ。ワイルドの兄ちゃんよか弱いけど……」

「…ワイルド先生を何で知ってるのかは置いておいて…とりあえず、それは慰めにもならないよ。」

…今でも、全く歯が立たないモーラお姉ちゃんを一騎打ちして、魔法無しで普通に倒したという…しかも、京都のスクナをも倒したというのがワイルド先生…それより強い人を探す方が難しい。

そして…そんな会話をしながらも、ボクはしっかりと攻撃の準備をしていた。

「……ネギ君、初めまして。私の名はヴィルヘルム・ヨーゼフ・フオン・ヘルマン伯爵……まあ、今はしがたい没落貴族だけだね。」

「貴方は、なんでこんな事をするんですか?!」

「仕事だよ。ただ、それだけだ。……さあ、戦おうではないか。ネギ君。」

「……っ!!魔法の射手!!光の一矢!!」  
サギタ・マギカ ウチ・ルークス

「ぬ……。」

老人……ヘルマンが動き出す直前、無詠唱での魔法の射手を放つ。  
サギタ・マギカ

ヘルマンは若干驚いた顔をながらも、手を前に出し……魔法を掻き消す。

その時は気付かなかったが……アスナさんのペンダントが、一瞬光る。その防ぎ方に疑問を持つ……が、目くらましの役には立っているのです。その際に背後に回る。

「来たれ虚空の雷、討ち払え……雷の斧!!」

「オララララッ!!!!」

ボクの魔法と、コタロー君の気弾で、ヘルマンは倒せる……はずだった。

「ふん。」

先ほどの様に、ヘルマンが手を前に出すと、その二つは瞬時に消え去る…そして。

「きゃあああああっ！！！」

「えっ…ひゃあああああ！？」

「あ、アスナさんっ?!」

「な、何あれっ!?!」

「魔法が…消えてる…?!」

またアスナさんのペンダントが光り、苦痛というよりは、不思議そうな声を上げる。

そして魔法と気弾が両方かき消される。

これには驚き、ボクとコタロー君だけでなく、ドームの中の朝倉さん達も驚愕の声を出す。

「っ…?!」

デモニツシエア・シユラーク  
「悪魔パンチ!!!」

そして、驚いた所を魔法拳で迎撃される…!

「なんやこいつ…呪文も無しに、魔法みたいなの?!」

「どうやって、ボクの魔法をかき消したんですか?! それにアスナさんは!?!」

コタロー君の質問やボクの問いなど、応える必要など無かったのだろうがヘルマンは髭を撫でながら頷く。

「当然の質問だ。その問いにもお答えしよう。魔法無効化能力というヤツだよ」

「『魔法無効化能力』?! あれはかなり希少な能力のはずだ! なんで一般人の姐さんが?!?!」

「その通りだよ、妖精君。レアスキルであり尤も危険な能力を、一般人であるカグラザカアスナ嬢が何故か持っている。」

そこまで言うと、ヘルマンはフウとため息をつく。

「…正直言うと、半信半疑だったのだがね。今回は、その力を我々が利用させてもらった。」

「それで、兄貴とコタローとやらの魔法を防いだというわけか…。」

カモ君はヘルマンの言葉に驚愕し、ボクはレアスキルなどモーラお姉ちゃんと師匠マスターや書物から知っていたが…事実だったなんて…。

そこから、ヘルマンの言葉は続く。

「さて、ネギ君。こちらからも聞かせてもらおう。君は 何の為に戦うのかね?」

…今、全力で戦っていたと言うのに、手も足も出ない状況。

その途中で疲れたように手を止め、いきなり語り出したヘルマン。

今畳みかければ、優勢に勝てるはずなのに…。

「そんなの……みんなを、助けるためです!!」

「ふむ。実に下らない返答をありがとう、ネギ君。」

「なっ……?!!」

ヘルマンは、そこできりと笑い、話し続ける。

「例えば、そこウエアウルフの狼男の少年…小太郎君を見たまえ。実に楽しそうに戦う。君が戦うのは仲間の為かね？」

そこで、一度言葉を切り、失望した、と言わんばかりの目でボクを見ってくる。

「くだらない実にくくだらないぞネギ君。期待はずれだ…。」

表情のわからない顔で淡々と諭すように言い続ける。

今とは無関係なはずなのに、

皆を助けたいと言う気持ちは本物なのに、

何故かヘルマンの言葉が心に突き刺さってゆく。



「戦う理由は常に自分だけのものだよ。そうでなければいけない。」

「『怒り』『憎しみ』『復讐心』等は特にいい。誰もが全霊で戦える。或いはもう少し健全に言って『強くなる喜び』でもいいね。」

そこで言葉を切ると、本当に楽しそうな顔で、ヘルマンはこちらを見据える。

「そうでなくては戦いは面白くない。」

「な……何を……?」

そこですこりりと笑うと、ヘルマンは帽子をとり、顔を隠しながらゆっくりと胸の前に移動させる。

その姿は、今までの人間の姿とは、まったく違っていた。

顔はのっぺりとした卵形。両目は爛々と光っている。その下には裂けたような口が開いており、そして頭からは2本の捻れた角が左右に伸びていた。

「あ………あ………?!」

「………ふふふ、ネギ君は驚いているようだね。私はあのネギ君が6年前に住んでいた村を壊滅させた悪魔だね。彼のおじさんを始

め、村人たちを石化させたのもこの私だよ。」

ヘルマンは再び、人間の姿を取る。そして、こちらを睨んで構えを取る。

…だけど、それはどうでもよかった……

眼前に、あのスタンお爺ちゃんを相打ちで石化させた　　それどころか、ボクに優しくしてくれた、村の人達までもを石化させて村を壊滅させた悪魔がいるのだ。

そして、なにかがブチリと切れる音がした。

真名　　s i d e

…ヘルマンが構えを取った瞬間、爆発的な魔力がネギ先生から吹き出す。

その魔力が噴き出すと同時に、ネギ先生の周りに、なにかが現れる。

「……………風……………?」

ヘルマンがそう呟いた時…ネギ先生の体の周りを風・炎・雷が吹き荒れ、ネギ先生の体を包んでいく…

「なっ……………?!」

魔力・風・炎・雷…全てがネギ先生を包み込み、輝く。

「な、なんだ、こりゃあつ?!」

「…鬼の力の暴走…?」

そう、綾瀬が呟いたのが聞こえる…そして、ネギ先生の輝きが晴れると……

「……………」

二つの巨大な角、隈取りの様な顔。

体は紅色と深い緑に彩られ、手には春稻妻をもっている。

体こそ等身大の大きさだが、そこから感じる魔力は人とは思えないほど。

「……………何だ…あれは…?」

私が魔眼で見ると、それは人と魔物…二つが、完全に融合したように視えた。

モーラと、ワイルド兄いから、話だけは聞いた事がある。

鬼になった者が、その力を制御できなくなり、魔化魍となった姿…  
……………その名は。

「…牛鬼……………!?!」

第六十話：ミラーライダーって、ある意味チートだよな。

朝倉      s i d e

「うっわ……………やばくない、これ？」

私は、水のドームに包まれたまま、そう言う。

「はい…ワイルド先生だけでも大変なのに、まさかネギ先生まで…」

「ど、どうでしょう……………」

他の皆も、不安そうに外を見ながら言う。

ドームの前にいるスライム（と言っていただけでどうも信用できない見た目）も動かないし…どうしようもない。

と、私が思っていると…………隣のさよちゃんが、ポカンと口を開けてこちらを指差しているのに気付く。

「……………どうかした？」

「あの、あの…後ろ……………」

「後ろ？」

そう言われて、指差す方を振り向くと水面が鏡の様になって…そこには、さっきの変身したワイルド先生の姿があった。

「……………え？」

ドームの外にいる訳ではなく、まるで水面の景色の中にだけ入り込んだ様に立っている。

『端二寄し。ソコカラ、出シテアゲル。』

「う、うん…みんな、端っこに寄って！」

「え？え？」

何が何だか分かっていない皆を何とか誘導して、端っこに寄らせる。

『頼ンダゾ。』

『まかせてや』

そんな声がワイルド先生が写っている所から聞こえる。

そしてワイルド先生が、右手に装着された竜の顔の様な物で、パンチをする…と、その竜の口から火炎弾が放たれ…！

「え、ちょ、ええ?!」

ドームの中に、火炎が生まれ、ボゴボゴと音を立ててドームは…爆発する。

…今、何が起こった？

目前にいたはずの魔法使いの少年…ネギ君は今、牛の様な鬼の様な魔物の姿となっている。

ネギ君本人の魔力は感じられるが…感じられるだけだ。ネギ君の面影は全くない。

そう思っていると、目の前のネギ君の姿が消える。

いや、消えたと思った瞬間、その身体は私の直前に出現し、腹部を雑刀で殴りつけその身体を突き上げた。

「ぐおツツ!？」

流石に驚いたが…それでもまだネギ君だったものの動きは止まらない。

放った矢を追って駆ける…という与太話を実践するかのようになり、突き上げた私を追う。

そして、なにかが私の体に張り付き、動きを封じる。

「…ああ……………」

そのまま張り付いた何か目掛けて、ネギ君だったものが薙刀を構え  
……

ラッシュ。

薙刀が、私の腹部を、顔を、全身を乱打する。

まるで、踊りの様な、音楽の様なリズムでネギ君だったものは私を  
殴り続け…そして、動きが止まると、大きなモーションで薙刀を構  
える。

「……………！！！！！」

「ぐむ…っ!？」

その薙刀がぶつかると…私の意識はゆっくりと消えていく。

どうやら、退魔の術の様なもので攻撃されていたようだ……ダメー  
ジが大きすぎて、還ることもできない。ただ、完全に滅されるだけ  
だ。

流石の私でも、ここまで完璧にやられ、攻撃を受ければ終わりだ。

ふと周りを見ると、スライムが驚いた顔になり、こちらを見ている。  
その後ろでは、水牢がはじけ、人質も解放されている。

…まあいい。私が消えれば、もうあのスライム達も自由で、捕まえ  
ている理由は無くなるのだから。

……………ただ一つ残念だったのは、悪魔としての全力を出す前に、

滅されていくことだ。

「ああ……………もつと…戦いたかったナア…」

そう呟き…私の体は、木の葉となって…………滅する。

ワイルド      s i d e

「昇竜突破…!!」

オレが手にはめたドラグクローからの火炎弾で、水牢が弾ける。

「ヨシ…!!」

「やった、出れた!!」

そう言つと、朝倉はそのままアスナのところへ走り、首飾りを引きちぎる。

「やりました!!」

「ええ!……………それにしても、ワイルド先生、どうしたんですか?」

ユエがそう聞いてくる。

多分、「どうやって正気に戻ったのか」と「なんで水面から現れたのか」という二つの事を聞いているのだろう。



「手伝ツテモラッタ。」

「…誰にですか？」

首をかしげて聞いてくるユエ。

「コイツダ。」

オレが指を指した水面から、一人の女が出てくる。

「や。嬢ちゃん達、久々やな。」

「……………え…ええっ?!」

顔を見た事があるアスナと何とか気を取り戻したセツナはは驚いている…。

ま、仕方ないだろう。

なんていったつて…京都で戦った敵なのだから。

「お前…天ヶ崎千草?!」

「なんでここに居るのよ!?!」

「協会の命令やよ。」

飄々と千草は答える。

「協会が…?!」

「そ。」「天ヶ崎千草は、京都の土地を二度と踏むことまかりならぬ。そして、関東魔術教会に属する魔法使いの監視下に置かれること」  
「…つてな。」

…ま、そのおかげで助かったんだけどな…。

あれは、数分前……………。

「GYAAAAAAAAAAAAAAAA!!」

ブアアアアアアアアアアアア!!

目の前のデカブツを殴り飛ばしながら オレは吠える。

…許さない赦さないユルサナイ許さない赦さないユルサナイ許さない  
赦さないユルサナイ許さない赦さないユルサナイ許さないユルサナイ許  
さないユルサナイ許さない赦さないユルサナイ許さないユルサナイ許  
さないユルサナイ許さないユルサナイ…

何を許さないノかは 忘れた ただ今は…………… 目の前の物を コワ  
シタイ。

「AAAAAAAAAAAAAAAAAAAAAAAAAAAAAAAA!!」



「AAAAAAAAAAAAAAAAAAAAAAAA……!!」

と 歩きだした その時

【FREEZEVENT】

「GA………?!」

体が 凍りつく

音が聞こえた方を見る が そこにいたのは

「………何や事態は分かりまへんが…とりあえず、止めさせてもらいますえ？」

装飾のついた 茶色の杖を持った 女がいた

第六十一話：頭冷やして来い（物理的に）

ワイルド side

「AAAAAAAAAAAAAAAAA!!!!」

なんだ こいつ 邪魔だ

こいつ 首を 落としてやる

オレは 走り出し 女の首を 狙う

「女性相手に、そんなにがつつくもんじゃないえ…?」

【ADVENT】

【ADVENT】

また その音がすると 目の前に 巨大な サメと 人みタイな牛  
が出てくる

「追加やで」

【STRIKEVENT】

更に その女の腕に サメの様な手甲がつく



「AAA!!!」

全ての砲弾が オレに 命中する……………

「…デ、正気二戻ツタ。」

「いやー。うち知らん間にワイルドはん助けとったんやなあ」

「アア。フリーズベントトアビスノストライクベントデ頭ガ冷エタ。」

「……………もう、突っ込みどころ多すぎるけど……………ちょっと、今はそれどころじゃないからやめとこつ。」

「…テメーら、俺達も無視してんじゃネーヨ!!!」

全く…人がせつかく話しているというのに…空気を読まないスライムだ。

「千草。」

「はい」

オレがいうと、千草は一枚のカードを持ち、スライムに向けて掲げる…と。

「エツ?!」

「な、ナンデスカー?!」

「ウワァー!!」

そのカードの中に、スライム達が吸い込まれ……カードには、人魚の様なモンスターの絵が浮かぶ。

「…よっし。契約完了やで」

「ナラ、サツサトネギヲ正気ニ戻スゾ。」

話している間に先ほどから戦っていた小太郎を片手に、こちらにゆつくりと歩いてくるネギに向かい、数発居合い拳の応用でライダーパンチを放つ。

「誰カ、小太郎ヲ保護シテヤツテクレ。」

「あ…りょーかい。」

朝倉はうなずくと、オレのマスターカードを使い、アーティファクトであるエクストリームメモリを呼びだして小太郎を回収する。(フィリップみたいにデータにして)

だが、人質を取られたはずのネギは無反応のまま、ゆつくりと歩き続ける。

「オレ、一回ヤツテミタカッタ技ガアルカラ、ソレヲヤツテミル。」



「…ってちょっと待った！私達どうにかして…って、ネギ元に戻るの?!」

「質問ハーツニシテクレ…才前達ノコトナラ、ユエデ十分ダ。オレハ回復ハトント駄目デナ…」

「分かったです。」

《RECOVER》 《BALEET》 《HEALING・BALEET》

ユエの掌から出た弾丸が真名に命中し…真名の体が回復していく。

「ヨシ、行くゾ。」

「でも…どうやってですか?」

聞いてくるさよをふり向くと…一瞬、ビクツとされる。

………シン、やっぱり顔怖いだね………。

「…ネギニ軽く音撃ヲ当てテ魔化魍ニナツテイル肉体ダケヲ浄化スレバイイ。ソノ後、強イ衝撃ヲ与エナイト駄目ダガ…」

「…あの、ごめんなさい。」

半泣きな声で言うオレにさよがぺこりと頭を下げる。

別に…泣いてなんか、無いんだからねっ?!

「音撃って…私、行く?」

「頼ムゾ。」

「あいあいさ……!」

そう言う朝倉は、バイラスのメモリを取り出し、フロッグポッドに差し込む。

《VIRUS! Maximum Drive!!》

「バイラスサウンド…!!」

そのフロッグポッドをネギに向けて構える…と、こちらに走ってくる足を止め、ネギは苦しみ出す。

「…?!…………ア!!……!!」

「音撃、効いてるね」

ネギは悶えながら、地面に倒れ、ゴロゴロと転がりながら苦しむ。

「…ネギ、せんせー…………」

「…ノドカ。コレガ、ネギガヤッタコトノ責任ノ重サダ。ヨク見テオケ……」

そう言うが早く、オレはネギのところまで走り、角と足をつかんでバーベルの様に持ち上げる。

「ライダー…キリモミシユート!!」

オレはそのままネギの体を持ち上げながら何回も何回も回転させ、竜巻を起こす。

そして、そのままネギを竜巻の勢いに乗せて、上空へと投げ飛ばす。

「…トウアツ!!」

オレも竜巻の勢いに乗り、羽も補助に入れて跳び、体を回転させながら、ネギに足を向ける。

「激真…!!…!!ライダー穿孔キック!!」

そして、その回転のままに、まさに穴を穿つドリルの様に回転し…ネギにキックを決める。

「  
ツ!!…!!…!!」

声にならない悲鳴をあげ…ネギは、空中で爆発する。

「ね、ネギーッ?!」

「……………心配スルナ。」

叫び声をあげるアスナをしり目に、オレはキックの勢いで飛んでい

た体を立て直し、なんとか飛行する。

「……………ホラ、ナ。」

爆風と煙が収まると…そこから、全裸になり、全身傷だらけとなつたネギが落ちてくる。

「わ、まずくない、それ?!」

「ね、ネギ坊主?!」

「…カナリ危ナイ状態ダナ。治療術師ガイナイトナ…」

朝倉と古が驚いた声を出す…当然だ。ネギの体は無理に鬼の力を使った反動か、全身に裂傷や擦り傷がある。大半は塞がりかけているが、塞がる前に相当出血したのか、ネギの顔色は悪い。

「千草、真名二服ヲ。サヨハ幽霊列車デタカミチニ連絡。治療術師ノ手配ヲ頼メ。」

「分かつたえ。」

「分かりました!アデアット!」

そして、全員があわただしく動き始める…と、その時、ネギの口はかすかに動いていた。

「…皆…ん……………ごめん……………ごめんな、さい……………!」

第六十二話・強すぎると、リスクがでかい。(前書き)

アーティファクト設定、追加しました。

第六十二話：強すぎると、リスクがでかい。

ワイルド      side

…昨日、ヘルマンとの戦いのあと……………オレは今、自宅でぐったりしている。

シンの変身は、変身するときに激痛が走るのだが…

激情態になった後は、ゆっくりとゆっくりと体中に、痛みと正座の後の足のしびれの様な感覚がくるので、一度学校を休んで療養している。

「ガアアアアウ……………!!」

激情態の制御は、あの一度でよかったらしいが…正直、全身が…微妙な痛みと痺れでひどい事に…

指を動かすのも痺れる…ああ、何この拷問。

と、その時。寝室の扉が開いて、雑炊入りの土鍋を持った、エプロン姿のさよが入ってくる。

「…せんせー。卵雑炊作って来ましたよー。」

「サヨ……………ありがとう。」

さよは、オレの看病のために学校を休んでくれる……ええ子  
や。

もう、かわいすぎる……駄目な夫と、献身的な嫁って感じた。

「本当……無理しないでくださいね？はい、あーん。」

「ガウ……。ごめん。」

さよは蓮華を使って土鍋の卵雑炊をオレの口まで運んでくれる。

「でも……大変でしたねー。あの後、千草さんの事とか、エヴァさ  
んの事とか……。」

「ガル。まさか、オレのところにくる、思わなかった。」

あの時の笑いはこれだったのか……詠春……！

「それに……エヴァは。」

「あれは、ひどかったですからねー。」

苦笑しながら、またあーんと雑炊を口に運んでくれるさよ。

「宴会で、月詠も一緒に遊びで戦ってる……。」

「とりあえず、フルチャージで攻撃したのは悪くないです。」

「ガウガウ。」

…エヴァの別荘に行ったら、モーラと月詠がガチバトルして、それを肴にエヴァとチャチャゼロガ晩酌してるんだからな…

ムカついたので、ワイルドショット・スカルバニッシュ・ライダーシュテイングを喰らわせてから、千草に頼んでゾルダ&ファムのファイナルベントを叩きこんでもらった。

…それでも、生きてたから驚いたけど…（全員、不死のエヴァを盾にして無傷。）

「なんだと思ってる…!」

「職務怠慢、ってやつですね。」

詠春も詠春で伝えといてもらえればよかったのに……………今度、一発殴っておこう。

「…あ、もう食べ終わりましたね?じゃ、片付けてきまーす。」

「ガウ…。」

腹も一杯になったので、急に眠気が襲ってくる。

「ガウウウウウ……………」

「わ…?!」

ぼーっとしているときに何かつかんだが……………気にせず、そのまま眠りに落ちる……………



「せ、せんせい…?」

先生が、雑炊を食べてからゆっくり布団で眠ろうとしたら…いきなり、私の手首を掴んで、そのまま眠っちゃいました。

「…ガウ…ガル……」

「……………あぁ…」

完全に熟睡し始めて、どうにも手を放してくれそうにありません…。

「…はぁ。」

その手を握り返して隣で座りました。

「…「じうい」ところ、子供っばいんですけど…」

昨日の様に、私達のために本気で怒る所や、今の様にお腹いっぱいになると眠くなるようなところは、子供にしか見えない。

…でも、それがワイルド先生の長所だと思う。

「せんせい……………ずっと、一緒にいますよ?」

幽霊だった私を人間の姿にしてくれた先生。

私のためだけに、本気で怒ってくれる先生。

そこが…私が先生を好きになった理由だと思う。

「…愛しています。」

そのまま、先生に口づけをして、私も一緒に眠り始めました…。

ワイルド      s i d e

…なんだか、昨日はいろいろフラグが建った気がしたが、そんなことはなかったぜ！

そして今は学園長室。

「……………で、言う事、ある？」

「ごめんなさい…………。」

…オレの目の前では、学園長が頭を下げている。

昨日の、ヘルマンの事を O H A N A S H I をしにいったのだが…

真っ先に普通に謝られた。

「いやあ…エヴァがあればほど放任主義だとは思わんので…。」

「…あれは、宴会してたから……」

治癒のためにエヴァの別荘に言ったら…一杯、やってるんだもん  
なあ…モーラと月詠も一緒になってるし。

「という訳での…そのお詫びとかもろもろで、君は教師職に復帰し  
てもらおうかと。」

「……………ガウ？」

今…なんだった？

「いや。タカミチ君が魔法世界（ムントウス・マギクス）に出張するので、その間副担任  
に戻ってもらおうと思ったんじゃないもん。」

「もん、って……………」

年考えるよ、ジジ…学園ちよ…も、学園爺でいいや。

「学園爺、オレ、マジで、やる？」

「ちよ、学園爺ってなんじゃー!」

「気にしない。」

「……………全く腑に落ちないんじゃないが…まあ、マジじゃ。頼ん  
だぞ。」

「…ガウ。」

……オレ、流されてるよなあ……。

「あ、後天ヶ崎千草は君の家に住ませるからの。」

「……だ・か・ら、そーいごと、早く言っ……

！」

学園爺が……！一度、後頭部だけ切りとってやるつか。

「もう決定じゃからな！後よろしくの！」

「……あとで、燃やす……！」

……という訳で、オレは学園爺に飛鳥文化アタックで攻撃した後、  
3 Aの教室の前にいる。

……のだが。なんだか中が騒がしい……

新田先生は何か向こうへ追いやったが……

「……なに、やってるー？」

ガラリと扉を開けると……

「あ………」

「あ……………」

……………ネギが、上半身裸でブラジャー着用&ズボンも脱げかけ、そして涙目でした。

「……………」

「……………」

後ろで朝倉が写真を撮ったのを確認してから、一度扉を閉める。

「…ニッタセンセイー！ちょっとー！」

後ろで何か聞こえるが、きにしない。

「ちょっとよ！！先生、タンマ！」

「冗談だつてばー！！！」

何処から何処までが冗談なのか後で聞かせてもらおうとして。

「ニッタセンセイー。ニッタセンセイー！」

「待ってってばー！！！」

ちよつとぐらいは、説教してもらおう。

第六十三話・学園祭とか、テンションが妙に上がるよね。(前書き)

PV五十万、ユニークアクセス五万突破、ありがとうございます！！

第六十三話・学園祭とか、テンションが妙に上がるよね。

ワイルド      s i d e

……さて。昨日は3 - Aメンバーを新田先生にド叱ってもらったりして、平和に終わった。

というか……そろそろ学園祭、という事を全く忘れてた。

最近の登校風景がおかしくなってたのも納得だ。

……魔法使いがいる時点で十分異世界だが、今の時期では登校風景一つにしても、異次元の光景。

スクーターに乗りながら、日本一と書かれた旗を背中にさし鎧に身を包んだ姿の者やら、どこぞのイカでビールな老人のコスプレやら、「イーツ!!」と声をあげていそうな全身タイツの集団やら、セーラー服の少年と、執事服のガタイのいいオールバックの大男がいたり……

その多くは大学部の連中であるのだが、見ている側である高等部以下の学生達も影響されていずれば真似か、もしくはそれ以上の出来を目指すのだろう。

そんなスパイラルでここの学園祭はエスカレートしていったと思わ

れる。

なんて、カオスな…と思ったのはオレだけではないと思う。特に某眼鏡のコスプレイヤーとか。

しかも、活気はあるのだがどこか落ち着いており、着々としつつも淡々と整えられてゆく…という様になっているので、その雰囲気はちよつと異様。

規模はそこらのテーマパーク以上であり、開催時の来園者数も半端ではない。5、6ケタの人数は来ている気がする。

…にも拘らず、高等部以上になると、慣れてると言わんばかりにスムーズに進められてゆくのだからやはりここはおかしいのだろう。

「…で、3-A、なにする？」

「さ、さあ…?!ノーパンキツサ、とかオンナダラケ、とか言ってみましたけど…!!」

「あー、言ってたね、そんなことー。」

「……昭和っぽい。」

「私が生きてた頃、大人がよく「まだ早い」って言ってましたねー。」

「ガウガウ。」



「…って、何のんきにくつちゃべってるのよー!」

…今アスナ達、というかネギはいろいろと遅刻しそうなので走っているのだ。

ま、オレはジャングラー（後ろにさよと朝倉を乗せている）でのんびり走っているのだが。走れば充分間に合うし。

「遅刻、遅刻ー!!職員会議に遅れちゃうー!!」

「アンタが二度寝するからでしょー!!」

アスナは、ネギを見て軽く呆れ顔だ。

「修行や教師の仕事を頑張るのはいいけど、行き過ぎちゃ駄目じゃない!」

「そーそー。肩の力抜いたらー?」

「まーまー……ネギ君も一生懸命なんやから、アスナもそんなに怒らんでもええやろ?」

ローラーブレードで走りながら、やんわりとアスナを窘めるコノ力。さよと同じオーラを感じるんだけどな…なんというか、良妻賢母なオーラ?

「でも、ネギ君も注意せなアカンでー身体を壊したら、皆心配するんやから」

「は、はい。すみません」

しっかりとネギにも注意するコノカ……うん、さよと同じオーラ、絶対あるね。オルフェノクとかになっても、絶対猫とか蝶とか、メルヘンな生き物だと思う。

古との朝練もあつただろうから、結構ハードなんだろう、ネギの生活は…。

「先、行ってるー。」

「レッツゴー」

「あ、ちょっと待って下さいー!」

「…頑張ってくださいーい。」

さよが可愛らしく手を振り、そのままジャンプラーのスピードを上げる…

…後ろで、千鶴に捕まっている小太郎が見えたのは…気のせいだと思う。

「た、大変でした…。」

「ガウ、お疲れ。」

あの後、余裕で間に合ったオレとは違い、なんとか遅刻寸前で来たネギだったが…肩で息をして、汗びっしょりだったので他の先生の同情を買い、遅刻寸前で来たことは許してもらえた。

今は、二人で3 - Aの教室に向かっている。

「あ、そういえば…学園祭、3 - A、催し物、決まった?」

「あ、まだです…一度それぞれアイデアを考えてくださって、知らせたんですけど…」

「ガル…今日、聞く?」

「そうですね…」

「…あ、体、大丈夫?」

「はい、なんとか大丈夫です…あの後、鬼の力も増えて変身もできるようになりました!」

「ガウ、おめでとう!」

「ありがとうございます!名前も決まって、春鬼シユンキになったんです!」

「ガル!別荘で修業した、よかった!」

「はい!」

…と、鬼の話に移るが早々に切り上げ、ちょうど教室に着いたので扉を開く。

「おはよーいませーすー！」

「ガウウー。」

それぞれ挨拶をし、教室の中に入ると・・・

「『コッコッ』いらっしやいませー！ようこそ 3-A・メイドカフェ  
『アルビオーニス』へー！』『』『』『』」

「な……な、何ですか、これはー?!」

「……………ガウ。」

それぞれ微妙に違うデザインのメイド服を着たアヤカ達……というか、  
3-Aメンバーに出迎えられてしまった。

ネギは単純に驚き、オレはポカーンとした。

……も、これ学園祭の催し物以外の何かでしょ？

「ネギ先生、ワイルド先生、これは3-Aの出し物ですね。メイド  
カフェというものらしいです。」

アヤカはなんとなくキラキラした感じで語る。

「私、そのメイドカフェというものは良く分かりませんが……皆さん  
たつての願いで衣装を用意させてもらいました。」

内容も知らずに協力しているって…後ろで、「馬鹿と金持ちは使えよう」といつている生徒もいるし。

良い人で済む話なのか、それともチャレンジャーなのか、迷うところだ……多分、世間知らず、でもあっている気がするけども。

…初期のフィリップを思い出したね。持ちで激太りしたりした時の。

「麻帆良じゃ、お金稼ぎも出来るからね。お小遣いの為にはこれくらいしないと!」

「目的、それか。」

ユウナが軽く事情を説明するが、もうこれはただの商売だ。

「それより、ネギ先生とワイルド先生がお客様第一号と第二号!練習に付き合ってよ!」

「ワイルド先生…どうしましょう?」

「ここまで用意した、軽く、付き合っ。」

「さすがワイルド先生 それじゃ…二名様、ご案内ー」

「「はい」」

「わっ…ちよっ…」

「ガウ?」

ネギは迷うが…頷く前に朝倉の号令により席へ案内される。

しかも何故かネギとオレは別のテーブルに案内される。

しかし………もう、どこから突っ込んでいいのか。

「まあまあ、ネギ君。どうぞどうぞ」

「ほらほら、ミルクもいつとく？」

「えっと……」

…今の部屋の中は暗く、さらに流れている音楽は若干怪しい雰囲気  
を醸し出している。

さらに奥のカウンター席の様などころではカエデとサツキがバーテ  
ンダーのような衣装で、何かをシェイクしている。

ネギはマキエとミサに挟まれつつ飲み物を渡され、困惑している。

…こういうのって、見てる分には楽しいんだけどなあ…。

「ネギ君、私、このカクテル飲みたい…」

「は、はあ…どうぞ。」

「社長、太っ腹ー!!」

「あぁ〜ん…胸の谷間に栓抜きが入っちゃったー…ネギ君、取って

「？」

「ぶっ?!」

さらにユウナが何故かカクテルをおねだりし、サクラコの大膽な行動に噴出すネギ。

不参加で制服のままのアスナはコケていた。

…もう、これは怪しいオミセだろう。

「絶対、代金、高い…。」

「ワイルド先生は、そう言う事を考えなくてもよろしいですよ?」

「ガウ…ありがとう。」

茶々丸のお酌で一杯飲む……あ、これ美味い。

オレの相手はザジと茶々丸だが…なんだろ、この二人メイド服似合  
う。

「……………」

「ザジ…そう言うの、大人になってから。」

「……………」

「それも、駄目。」

「…それ、会話成立してるんですかー？」

オレの膝の上に乗っているザジと普通に「……………」。「で会話しているオレを見て、カウンター席で調理しているさよが不思議そうに聞いてくる。

…この前、オレが教師に復帰してから、なんだか懐かれるようになった…よく話すし。（「……………」。「での会話だが。」）

「ガウ。普通に、成立してる。」

「……………」。

「めっ！！それ、大人の世界だから、駄目！」

「……………」。

「…ガウ…そういうこと言われても…」

「大変ですね、ワイルド先生。」

「ホントに、会話の内容教えてくださいーい！！」

「もうちょっと、大人になってから。」

「そうですね…あと数年はまたないと、この会話は早すぎます。」

「誰か、ザジさんの言葉解読できる人いませんかー?!」

さよも混乱しているが…ネギの方では、なぜかコスプレ大会が始ま



っている……

……そろそろ、来るだろうな……。

「……………?……………」

「ちょっと、危ないから、行く。」

「この騒ぎには気付くかと思われます。」

…ま、面倒だが…仕方ないか。

と思いつつ、オレは廊下に向かう。

「……………。」

「ガウガウ。」

応援の言葉をかけてくれるザジに手を振りながら…オレは、教室に近づいているである。ニッタセンセイにどつやっといういい訳するかを考へながら、廊下に出た。

はあ……………オレって、貧乏くじ引いてるよな……。

第六十四話：マッドサイエンティストって、マッドの時点で危ないヒトだよな。

ワイルド      s i d e

…何とか新田先生を説得して、別の教室へと追いやり、3 - Aにもどると……………カオスでした。

アコにナース、真名が巫女、ミソラにはシスターの格好だが…全員ミニスカなのだ。

コーディネートした朝倉とユウナの表情が引き攣っている…多少反省したらしい。自重してほしいな、切実に…。

この後、ハルナがコーディネートしたシンプルなウエイトレス姿のノドカをネギにお披露目した。

そしてさらに跳ね上がったお会計に真っ白になったネギに、さすがにアスナが突っ込んでいた。

現在…ネギ、支払の合計二万九千円である。

ちなみにオレは八千円。

……………やっぱり、新田先生は連れてきた方がよかったな、と思ったね、うん。

「……………」

「ガウ…………。」

「どうぞ、一杯。」

…今、オレは猫耳をつけたザジに肩を揉まれ、犬耳をつけた茶々丸にソーダ水をお酌してもらっている。

「…これ、本気で、お金払う？」

「今日は私のおごりです、社長。」

「何処で習った…………。」

「……………………。」

「ガウ、とりあえずそれは駄目。」

「……………………。」

「…そういつても、駄目。」

「ザジさん…積極的ですね。」

…と、こんな風に会話をしたあと…………いい加減教師として、コスプレをやめて制服に着替えてもらい、「アルビオーニス」を普通の喫茶店としてやることで採用した。

「えー。正直、物足りないよー。」

「なら、お前が、コスプレ、する。」

「いやいや…私は、それを撮るほうが専門だから。」

「……………修行量、増やす?。」

「ごめん、許して下さい。もう文句言わないから。」

…などという話が朝倉とあったのは、余談である。

ちなみに、朝倉の修行は、ぶつちやけ鬼の修行よりもハードに設定しているということも、余談である。

「ガウウウ……………」

あの後、一度新田先生に説教してもらおうか悩んだが…ザジとかさよとか茶々丸とか真名とかいい子がいるのでやめておいた。

今は夕暮れ時。家に帰ろうかとも思ったが…偶には外食もしたいので、<sup>チャオバオス</sup>超包子に来ていた。

「あ…ワイルド先生、どうも。」

「ガウ。…とりあえず、<sup>シューマイ</sup>焼売、<sup>ホイコーロー</sup>回鍋肉、<sup>マーボー豆腐</sup>麻婆豆腐、肉まんを5人前、デザートは杏仁豆腐。」

「かしこまりました。」

こういう店来て開口一番注文って、結構外道だよなあ…。

と、オレが思ったたりしていると…近くから、なんだか五月蠅い声が出てくる。

「テメエ…睦月さんに向かってなんて口聞いてんだ、アア?!」

「うるせーよ…お前らが東條さんに文句言っから悪いんだろおが!」

…喧嘩の様だ。名前が聞いた事ある気がするのは多分気のせい。

見ると、合気道部と薙刀部が喧嘩しているようだ…薙刀部がある学校って、多分麻帆良くらい。

両方、部長を先頭に出して、後ろに取り巻きが五人ほどいる。

「まあ待ってよ…こういうのは、力でねじ伏せないと分からないから。」

「さすがツス、睦月さん!」

「……………僕も行く。英雄とは、無益な争いを止めるものだ…。」

「パネエツス、東條さああん!!」

…ウザいね、うん。

「お待たせいたしました。……………どうしました、ワイルド先生？」

「ちょっと、トラブル、解決してくる。」

「ここはもめ事厳禁ですので、別のところに連れだして下さい。」

「ガウ。」

オレは席から立ち上がり、その二人の元へと近づく。

「ア？なんだデメエ…？」

「ここで、面倒、起こす、やめる。」

「なんだこいつ、片言で喋りやがって…！」

「おい…こいつ、広域指導員の野獣ビーストじゃねえか?!」

取り巻きの一人の…モブが慌てたように言う。

「げ?!野獣ビーストって、あのデスメガネより強いつて言う…?!」

デスメガネ…ああ、タカミチか。

「…そ、そのくらいでビビったりはしないよ…！」

「…え、英雄を舐めてもらっては困る…！」

ムッキーとタイガ、両方強がっていてもガクブルだ。



キイイン…と耳鳴りがして、鏡の奥に虎が見えたのはきつと気のせいだと信じてる。

ま、今はそんなことより……

「……美味しい。」

「恐縮です。」

食事しよう、食事。肉まんUMEEEEEEEE!!

「……いやー、助かたネ、ワイルド老師。」

「ガル…一応、オレ、広域指導員。」

ガツガツと食べていると…後ろから、<sup>チャオ</sup>超がやってきた。

「ああいつのやめさせる、オレの仕事。」

「教師の鏡アルねー…あ、そうそう、お礼をしたいから、後で工学部の方にも来てくれないか？」

「ガウ、分かった。」

………なんだか、嫌な予感もするけど………ああ、面倒くさい。そして美味しい。



「……………で、話、なに？」

あの後、食べ終わったので工学部まで行くと…超が出迎えてくれて、地下への階段を下りている。

「少し、見てもらいたいものがアルネ。」

「ガウ……………？」

そのまま歩いていくと、部屋にたどり着く……………

そしてそこには、グリップ部分を無くした拳銃の様な物が、無数に壁に掛けられ、鎮座されていた。

「これ……………なに？」

「ああ……………今の老師は知らなかつたネ。これは、T2ガイアメモリ・タイプ……………ただの、兵器ね。」

「ッ……………?!」

……………ガイアメモリ……………?!

「……………鈴音<sup>リンネン</sup>、作った？」

「おお、理解が早いネ……………その通り。長いから、ガンマメモリでもOKヨ。」

オレは一瞬で変身し、おちゃらけたようにそついつ超の首筋に、ハ

イブネル・クロウを添える。

「ナニガ目的ダ？」

「…世界平和ネ」

そういうと……超はいつのまにかに持っていたファイズエッジで俺の腕を払う。

「ファイズエッジ…！」

「別に、ファイズ、ブレイド、カブト、響鬼…この系統のライダーの武器であれば金と研究者がいれば作れるネ？」

一度距離をとり、オレは激情態に変化する。

「フザケテルナラ、今スグヤメテモラオウカ…。」

「…今、貴方と戦う気はないヨ。」

そして、超がパチンと指を鳴らすと…後ろから、サングラスをかけた大男と、茶々丸にも似たアンドロイドが現れる。

その二人はゆっくりと、近くに置いてあるガンマメモリを手取る。

「ちょっと、実力を見ただけネ…。」

《KINTAROS!》

《SCISSORS!》

二人は、ガンマメモリのスイッチを押し、そのまま自分の首筋へと、そのメモリを差し込む。

「AAA…AAAAA!!」

「NU、GAAAAA!!」

二人から、そんな声が聞こえると…二人の姿が変わっていく。

大男には、金色の一本角と襟巻の様な毛が生え、全体的に金色の熊を模した姿に変化する。

そして最後に左腕が、先端が斧の様なになった巨大な銃に変化する。

「…NAKERU、DE!」

茶々丸に似た方は、全身がオレンジ色に変化し、頭から触角の様な物が二本生える。

全身にコウラの様な武装がつき、右腕がハサミの様な銃剣に変化する。

「AH…!!!」

「…ロボットニメモリガ効クダト…?!」

「ガンマメモリは、無機物にでも効く事と、腕が銃になる事が特徴  
ネ」

そう超が言い終わる前に、変身した二人が、こちらに襲いかかつてくる。

「…激真・ライダーパンチ。」

オレが、一発ライダーパンチを叩きこむ……が、当たったにもかかわらず、二人は少ししかダメージを受けていない。

「…ナンダト？」

「二人とも、防御力に自信があるメモリネ。そのくらいでは、効かないヨ。」

「AAAAAAAA!!」

その超の言葉が言い終わるか終わらないかの時に、シザーズメモリの方のロボットがオレに跳びかかり、腕を鋏で引きちぎろうとしてくる。

「チツ…!!」

「NA…KERUDEEEEE!!」

そして、その隙についてキンタロスメモリの方が斧を振りかぶり…腕をぶった切る。

「…ッ…!!ガッアアアアアア!!」

「NUUUUUU…… AAAAAAAAAA!!!!!!」

「CAAAAAAAAAAAAAAAAAAAAAAAAA!!!!!!」

オレは、すぐさま千切れた腕を生やし、体を回転させ、その勢いで二人にライダーチョップとライダーキックを叩きこみ、爆散させる。

「…おお、さすが、ネ…。」

「オマエノ目的ハナンダ？ ショッカーノヨウナコトデモナイダロウ  
二…。」

「…私は、未来から来た火星だからネ… どちらかというイメージ  
ンネ。」

「……………フン。」

オレは変身を解除し、踵を返して歩き出す。

「…鈴音。お前、悪いことするなら、オレ、止める。」

「どんぞ、自由ニ…。」

ニヤニヤと笑う超をしり目に、俺はそのまま帰路へとつく……

超 side

「…あつさりとやられるとは…改良が必要ネ。」

私は、足元に落ちているシンの腕と二つのガンマメモリを拾い上げる。

「やっと手に入れたネ…X・a因子と、バッテリーゲンのつまった、シンの体の一部を……」

…これで、やっと…アレができる……

「さっそく、ハカセにも教えてあげないとネ」

そのまま楽しくスキップを踏んで、私は奥へと歩き出す……

…

第六十五話・最近、アークに変身してないな…

ワイルド      s i d e

…現在、自宅のリビング。そこにあるソファの上でオレはぐったりしていた…。

「ガアアアアア……。」

「…ワイルドはん、どうしたんや?」

「ちょっと、いろいろあった……。」

いやー…超の前ではクールっぽくやってたけど、腕ものすごく痛いね、うん。

激状態の反動も来て、腕中心に「オデノカラダハボドボド」状態になっている……

学園祭もそろそろだし、大丈夫かな…?

隣の千草も心配してくれてる……普通にいい子だよな、千草。

「全く…無理したらあきまへんえ?」

「ガウ…ごめん。」

千草は痛む方の腕をさすって心配そうな顔でこちらを見る。

「……………せんせー。今帰ったよー。」

「ただいま戻りましたー。」

「ガル、お疲れー。」

…と、その時玄関から朝倉とさよの声が聞こえてくる。

学園祭中の世界樹の効果について聞いてきてもらった。体痛いオレは出歩きたくないしな…。

「いやー…世界樹伝説、あんな裏があつたとはねー。」

「私が生きてた時も、伝説自体はありましたよー。」

「何十年か毎、光る。多分、さよでも生まれる前から。」

「へー……………」

なんだか、尊敬した目で見つめられる…話聞いてきたらうに、なんでだ？

「告白生徒の妨害とか、面倒くさそうだし…適当にネットと新聞使って、告白しない方がいい、って広めておくれ。」

「ありがと、カズミ…。」



「お安い御用だつて あ、学園祭の時にデートしてね？」

「……………分かった。」

なんだか、絶対デートとかの甘いものじゃなくて、普通に奢らされる絵しか浮かばない…………。

「ゴチになりまーす」

「やっぱりか……………」

オレの財布がまた寂しくなっていく…………。

家も買つて、月詠とか千草とか朝倉とか…………今、七人で暮らしてるから、家計がきついんだよ…………

昔、いろいろやって金はためてただけだなあ…………家買つたりして半分以上消えた気がする。

「じゃ…………じゃあ、私もデートしたいですー!!」

「ガウ？」

意外な立候補。………………………………オレの出費がかさむ。

「じゃ、うちもうちも」

「じゃ、うちもやりたいどすなあ……………」

さよに続けて、何処からか出てきた月詠と、千草が立候補する。

「オレ、そんなに、時間と金、無い……。」

「……って。お前警備の仕事も真名に任せてるし、特に何にもねーだ  
る。」

台所から、冷蔵庫の中身を漁って真昼間から飲んでいたモーラが言  
う。

片手には昨日の残りの焼き鳥、片手には冷奴。口で瓢箪の紐を啜え、  
日本酒を楽しもうとしている……。

「ザジに、チケット、もらった。」

「ああ、ナイトメアサーカスだったけか？お前もいろいろ大変だな  
……」

「ガル……。」

本当に大変だ。ハイパークロックアップが欲しい……もしくはデリラ  
イナー（NEWでもネガでもガオウライナーでも可）。

しかも………個人的に危ないのもそろそろだし。

「それについていきますっ！」

「もらったチケット一枚だけ。VIP席。」

「………そんなあ。」

あ、たれさよになった。グデーンとしている。

「いけずやなあ……。」

「あ、それとお前、そろそろあの時期だから気をつけるよ？」

「ガウ……分かってる。」

…美味そうに焼き鳥食べて、グビグビ酒を飲んでいる姿からは、全く心配しているように見えない。

「あの時期って？」

ちよつどその時、二階から降りてきた真名が聞いてくる。先ほどから二階でスカルマグナムを磨いていたのだ。

「ああ……発情期だよ。」

「……。」

「……。」

「……。」

「……。」

「……。」

「……なんだよ、その間は。」

「発情期って……マジ？」

「マジだ。ワイルドは5年に一度、ケダモノになる。」

「……よく、苦労してる……。」

啞然とした声が聞こえ、モーラがあっさりと答える。あっさりとはライブートを……。

「そ……それ、大丈夫なん？」

「ああ……二、三回、あたしが相手してたな。一回あってない時にサイクルなつてたから、心配してたぞ。」

「ガウ、あれは…………。」

と、そこまで言ったところで真名が顔を背け、頬を少し赤くする。

「…………おい、まさか………？」

「……ハイクロ……！」

モーラが変身音叉を構えたのを見て、オレは即座にHyperCIockUpを使って真名を確保。

そして逃げる。

「あ、追いかける……アデアット……！」

「もちろんや……アデアット……！」

「アデアット!!」

後ろからは、何やらいろいろと不吉な事が起こりそうだが…無視して逃げる。

「ちょ、ちょっとワイルド兄ィ…?」

「捕まったら、死ぬ。(オレが)」

「……………これも、愛の逃避行?」

真名が何やらいつているが…それどころではないオレは、走り続ける。

…学園祭、生き残れるかなあ……………?

…ちなみにその後、途中から加わった夕映にロックのカードで捕まり、朝倉のライターメモリとさよの涙目により、なぜか土下座する羽目になった。

更にその後は、アルにもものすごい勢いでいじられる羽目になり(笑顔で延々と今までの話をしたり、そのころ真名は子供だったので?など)、なんとか本能を抑えるための呪文が書かれた帯を渡された。

……………尚、外すと一気に歯止めがきかなくなるとも言われたのだが……………アルが何か狙っている気がして仕方がない。

オマケ

↳ ザジからチケットをもらった時の話

「……………ワイルド先生。」

「ガウ？」

オレがテクテクと廊下を歩いていると…後ろから、声をかけられる。  
後ろを見ると……………そこには、ザジがいた。

……………でも、今、喋らなかったか？

「よければ……………これ……………どうぞ。」

「……………チケット？」

ザジが珍しく普通の音量で喋ったのに驚きながら受け取ると…それは、ザジが入っている曲芸手品部とかいったところの学園祭でのチケットだ。

「これ……………高くない？」

「部長に…言ったら…くれた。」

「ガウ……………。」

まあまあ高かったはずだけど……よくもらったな。しかもVIP席。

「大切な人にあげる……って。」

「ガ……………」。

それは……………渡すだろうな。普通の音量で頼まれたら、絶対。

「よかつたら……………来て、ください。」

「ガウ、絶対、行く！」

これで行かなかったら……ひどい。

「……………よかつた。」

そついうと、ザジが……笑う。

……………またまた珍しい……。営業スマイルでもないし。

「それでは……………」。

「ガウ、また明日。」

すぐに今までどおりの音量になり、ザジはそのまま歩いていく。

「……………はあ。」

ザジの笑顔が見れたのはよかつたけど……………今の問題は、とりあえず後ろの方で写真を撮っていた朝倉をムッコロス。

第六十六話：ラブコメって、主人公は絶対ストレスがたまると思う。(前書き)

PV55万突破

ユニークアクセス55000突破ありがとうございます！



第六十六話：ラブコメって、主人公は絶対ストレスがたまると思う。

ワイルド      s i d e

さて。あと二日で、学園祭だ。

世界樹の発光やら何やらで、裏では様々な事情や暗躍はあるが、表側では麻帆良祭の準備期間。

それぞれ忙しく駆けずり回り、それには3 - Aも例外ではない。

催し物が決まってからは準備に余念がない。

メイド喫茶というのも影響して、内装や衣装などの準備に忙しいのだ。

「昼休み返上して学園祭の準備なんて、私達も殊勝だねー」

コスプレなのか、ネコミミを付けつつ自分たちを褒めるユウナ。

「そうしないと間に合えへんだけやん。」

「決めるのに時間が掛かったから、急がないとねー。」

同じネコミミをしたアコとアキラに突っ込まれている。

その近くでは、さよ、サツキ、超、マナ等の料理ができるもの、いろいろと仕込みをしている。

でも、先生はメイド喫茶に肉まんはどうかと思うんだよね。

他にもそれぞれ準備しつつ、独自のメイクを披露し驚かせている者もいる。

ちなみにオレはなぜかおやつスカルさんの服。

モーラも手伝いに来て、音撃棒で釘をうっている。(一発で終わっている)

ちなみに恰好はキンタロス憑依の良太郎と同じ。

…と、そんな中、慌しく教室に入ってきたマキエにより一時中断される。

「ねーねー！！これ見た！？麻帆良スポーツに載ってるコレ！！」

ユウナがマキエから渡された新聞を広げ、近くにいた者や興味がある者が後ろから覗き込む。

そこには『ホントに効果あり?! 世界樹伝説』と見出しがあり、嘘か真か様々な内容が書かれていた。

こういうのは、朝倉が好物だが……世界樹の真相を知っているの、若干困り顔だ。

ちなみに記事の内容は『麻帆良祭の最終日、世界樹の下で告白すれ

ば即成立!』や『成功率86%!』などなど…

「えーっ?本当かなー…」

「あ…でも、私のセンパイもそれで成功したって言ったよ?」

「なんですと?!」

ミソラが言った一言にユウナ達が喰いつく。

言っておくと、元々この麻帆良スポーツ…通称まほスポは、週刊雑誌よろしくガセネタが多い。

妖怪みたいな外見の宇宙人が出た、とか図書館島の地下にはシャンデリアの様な形をし、ステンドグラスの様な色の怪物がいる…等。

というか、ぶっちゃけ魔化魍とサバトだ。

公に出る前にオレとモーラ、それとアルで完全に退治しておいたが。

まあ、そんな訳でユウナが疑うのは無理はないが、ミソラが二つ年上のセンパイから聞いたという実験を話す。

さらにマドカやサクラコが聞いた話や噂も伝え、一気に信憑性が増していく。

周りが盛り上がり、ノドカやコノカ達も興味を示す。

「カップル成功率86%…」

「なーなー、せつちゃん。ウチ等もチャレンジしてみよか？」

「で、ですが、その日は大事な日なのでは？」

「ああ、せやったなー。大事な日やったわ。」

ユウナ達と同じくネコミミをつけた格好をしたコノカが自分たちもやってみようとセツナを誘うが、その日は、それ以上に大事なことがあるのか知らないが、残念そうに諦める。

そこで、隣でオレの服の採寸をやっている朝倉に耳打ちする。

「…告白、何回かされてる？」

「みたいだねー……魔法使いって言っても案外あつけないかも？」

「ガル。」

「ちなみに……記録に残ってるのだけでも、今まで告白して成功したのは30組くらい？」

「……………」

学園長……………この、脳なし。

…コノカとセツナが話していたのを聞いていたのか、そこでなぜか某借金執事が登場する漫画を読んでいたエヴァンゲリ…違う、もう長く言つのやめよう……エヴァが顔をあげ、二人の方を向く。

「盛り上がっている所悪いが、少なくとも今回は上手くないかないと

明言しておこう。いや、告白そのものが出来ないだろうな…」

「え？」

「それは後で話してやるとして…」

その言葉にコノカとセツナ、さらに側にいたアスナとエヴァの背後に控えていた茶々丸は首を傾げる。

説明してないらしい…しかも茶々丸にさえ。

活性化する世界樹の影響とそのフォローに周る魔法使い達の話はせずに、エヴァはニヤツと笑う。

「で、お前はどうか？告白までとは言わんが、タカミチを学園祭に誘う程度はしたのだろうな？」

「え、エヴァちゃん?!」

いきなりイジワルな質問をぶつけられたアスナは狼狽し、両手をパタパタ扇いでいる。

「エヴァ……………性格、悪い。」

「私は悪だ、と何度も言っているだろう？」

朝倉情報では、アスナも毎年想い人であるタカミチを誘おうとするのだが……………尻ごみしてしまい声すらかけられなかったという。

それは……………色々可哀想だろう。

けっこうナイスタイミングな現状なので、必要以上に慌てている。

「ほれほれ、玉砕覚悟で誘ってみたらどうだ？」

「砕けちゃったら意味ないでしょー!!」

「罅割れで、我慢する。」

「大体同じでしょーが!!」

「まーまー。」

「落ちついてください……」

「チャチャマルも、止めて。」

「わかりました。…マスター、お止めください。」

「いいではないか、楽しいぞ?」

さらにからかうエヴァに、アスナが突っ込みつつ絶叫する。

コノカとセツナ、そしてオレはアスナを。茶々丸はエヴァを宥めつつ昼休みは過ぎていった……

「ガウ……………オレに、なんの用？」

「なに、ちょっとした用ネ…。」

今は放課後。

オレは超に呼び出され、今は麻帆良大学の工学部にいる。

「あ、超さんやつとききましたかー？」

「……………ハカセ？」

「わざわざ来てもらってありがとうございます、ワイルド先生。」

「チャチャマルも…。」

そこには、カリーメイトを齧りながらパソコンに何か打ち込んでいるハカセと、何故だか分からないが…メイド服をきた茶々丸がいた。

「何、してる？」

「いろいろありまして…………。」

茶々丸が目をそらしてそう言う…と、その時超が唐突に話し始める。

「今日の内事、それハ…………。」

「それは？」

と、そこで一度間をとり……………

「行くネ、茶々丸！」

「はい。」

「ガル！？」

グツとサムズアップし、それを合図に茶々丸がオレに抱きついてくる。

タツクルの勢いなので、正直痛い……………！！

……………つて。あれ……………？

「……………柔らかい？」

「そう！茶々丸に頼まれて、体を人工皮膚で覆い、まさに人間と言っても過言ではない体を作ったのだヨ！」

「それで呼んだ?!」

吃驚した……………シリアスにはまだ早いと思っていたら、コメディ路線だったとは!!

「もちろんネ。ハカセにも協力してもらって、一週間かけてこれを作ったのだヨ？」

「妥当だ!!」



麻帆良なら、一週間あつたら余裕で作れる。

「先生……どうですか？」

「どづつて……。」

な、なんだこの修羅場は?! ころいつの、薬味小僧<sup>ネキ</sup>の役目だろ!!

「ちゃんと仮契約<sup>バクティオー</sup>する時も、唇は柔らかいかラ」

「どづいつ心配?!」

駄目だ、コメディ路線に本格的に突入する!

「さ、魔方陣シートも用意しました! レッツ、仮契約<sup>バクティオー</sup>!」

ハカセが、魔方陣シートを持ってきて、笑顔でサムズアップ。

「私は……嫌じゃありません。」

「ガ……ガウ……!!」

冷や汗が、止まらない。必死にじりじりと後退しているが、茶々丸が抱きついてきているので、どうにも離れにくい。

「先生……。」

「「仮契約<sup>バクティオー</sup>!! 仮契約<sup>バクティオー</sup>」」

「ガ、ガル……ウ!」



第六十六話・ラブコメって、主人公は絶対ストレスがたまると思う。(後書き)

さあ、次から学園祭編……………。

第六十七話・茶々丸がお茶淹れる茶道部って…ダジャレ的な何かか？

ワイルド      s i d e

今日から学園祭。

なのでいろいろと遊び回ろうとしていたオレである。……………が。

「とりあえず、学園祭中の広域指導員としての仕事はこちらの書類に書いておきましたので…目を通しておいて下さいね。」

「ガウ…了解。」

「では、私はこれで。」

そういつて、その金髪の少女…高音・D・グッドマンは立ち去ろうとする。

「はい、書けた。」

「あ、ありがとうございますっ…！」

「…メイ、行きますよ。」

「あ、はいお姉さま…！」

タカネについていく少女…佐倉愛衣に頼まれたサインを渡すと、嬉しそうな顔をしたメイと気難しそうな顔をしたタカネの二人は立ち去る。

「……………ガウ……………」

「乙ですなあ……………」

「本当に……………」

二人が帰ってから落ち込むオレを、後ろの月詠が肩を叩いて慰めてくれる。

「……………遊べると、思ったのに。」

「そこは仕方ないですよ……………本当に、ドンマイどすなあ?」

……………先程タカネから渡されたものは、学園祭中のオレの予定表だ。

びっしりと警備の予定などが書かれ……………遊べる時間は少した。

「ま、諦めて……………元気に修行しまひよ?」

「……………それは、却下。」

オレは月詠の頭をポンポンと叩いてからゆっくりと立ち上がり、そのまま家を出る……………。

「あ〜ん、いけず〜。」

「……エヴァに修行してもらおう。」

「あ、それもいいですね。」

…チョロイな。

「じゃ、オレ、行く…。」

「はい」 ……千草はんに、ゴールドサンダー用意してもらおかなあ

…ふふっ

…後半の言葉は、不吉だから聞かなかった事にしよう…。

「ガウー。」

「あ…ワイルド先生、どうも。」

オレは、一番最初に茶々丸とエヴァの茶道部が主催している、野点に参加することにした。

え、警備の仕事？千草に頼んでTRICK VENTおいしいです。

オレが使つと、仮面ライダーが増えるから…しかも、変身解いたら消えるし。

一人多かったから、月詠の修行の相手させた。

ちなみに変身させたのはシンの激情態。

死ななければいいけど…。

一方そのころ別荘内の月詠は……

「ざんがんけ〜ん！」

「激真…ライダーチョップ！」

「いや〜ん…相殺ですか〜？」

「ライダージャンプ！」

「……って……！」

「激真…ライダー電光キック！」

「きゃあああ〜〜〜！！！」

………地獄を見ていた、とだけ言うておこつ。

ちなみに、それを見た千草・エヴァ・モーラは…

「正直、あれは拷問でいいと思ったわ。」

「まだぬるいな…10秒で殺せただろうに。」

「激情態…。あれはチートだ、チート。」

…と言っていたのは、秘密である。

「どうかしましたか、ワイルド先生？」

「…ちょっと、電波がきた…。」

「?…特には感じられませんが。」

茶々丸は実際に感じられたよな…そう言えば。

「気にしない。」

「そうですか?なら、こちらへどうぞ。」

着物姿の茶々丸の案内で、毛氈を引いてある野点会場へと連れてこられる。

「どうぞ、お座り下さい。」

「ガウ。」



オレが座ると、それを見て茶々丸も座る。

そして横に置いてあつた鍋釜から湯を茶碗に入れ、抹茶の粉を入れる。

その茶碗を片手で押さえ、ゆっくりシャカシャカと音を立てて茶筌で茶を点てる。

「……………」

「……………」

少しの間、お互いに会話が無いので、少しさびしかったりする。

…しかし、正座してても足がしびれないのは何でだ…？響鬼系なら、確かに正座慣れてそうだけでも。

「……………ぶじぞ。」

「ガル。」

そう考えていると、茶々丸が茶碗を出してくるので、それを一口。

「…結構な、お手前で。」

「恐縮です。」

アマゾン口調で、たどたどしくそう言うと…茶々丸はにっこり笑ってお茶菓子を出してくる。

「苦い物は、好きではないでしょう?」

「……………助かる。」

茶々丸……………いい娘だね。

そう思いながら、オレは出された茶菓子を食べる。

……………正直、こういう普通にに苦い物は無理。おかずみたいな苦さなら兎も角……………。

なんだか、苦い味が舌に絡みつくというか……………なんというか。

そう思っている間に菓子は無くなる。

……………じゃ、行くか。

「……………オレ、仕事あるから、行く。」

「分かりました……………お気をつけて。」

魔法関連の事と世界樹の事を知っているからか、結構真剣に心配しているようだ。

「ガウ……………大丈夫。」

「……………それでは。」

「ウウ。」

オレは、そのまま会場から立ち去る……………。

「……………さて。」

はい、野点を終わってからオレは今、不良どもをなぎ倒したりしながら警備の仕事をしていまーす。

例えば、こんなやつらがいました。

「私はただの気まぐれな風…ナンパなど、そんなつもりはゴブツ！」

「ナンパ師は、黙ってる。」

小さい女の子を連れたナンパ男に実力行使（小さい女の子が「もつともつとー！」と追加を求めていた）したり。

「お前…俺の子孫を産メギャツ！」

「セクハラ、逮捕。」

狼っばいダンディなセクハラおっさんを捕まえたり。

変態の巣窟なのか、麻帆良。

「大変…ガウ。」

ついでにコスプレ自由な学園祭なので……顔だけ変身解除して、  
装甲響鬼アイムドで歩いてたり。

「……………ん？」

と、世界樹の周りを歩いていると……なんだか騒がしい声が聞こえる。

「なんだ、あれ……？」

とりあえず、行ってみることにする。

……………そして、世界樹の根もとあたりにつくと……………

「フフフフ……………チユー、しましろう……？」

「だからっ……！正気に戻れや、この馬鹿……！」

「……………何やってんだ……これ。」

そこでは、なぜか春鬼シュンキに変身したネギと、それを必死に止めている  
(ように見える)モーラがいた。

「……なあ少女。これ、いったい何やってるんだ？」

「え？……って、誰よア……貴方は。」

近くにいたアスナに聞くと、なぜか頬を赤らめさせて応えられる。

……………ああ、ダンディな顔だからか？

「なに、少し気になってな…というか、あれは止めなくていいのか？」

「あ……ちょっと止めたいんですけど……。」

「ふうん…ちょっと待ってな。」

オレは変身しているネギに早足で近づき…腹を思いっきり殴る。

「ガハツ！！？？」

「……………なんだ、お前か……………。」

殴った衝撃でネギは吹き飛び、それを見たモーラが呆れた顔に変わる……。

「…まず、状況説明頼める？」

「ああ。でも……………」

「ん？？」

面倒くさそうに、モーラはネギが吹っ飛んだ方向を見る。

「せ、せんせー?!」

「うう…ん…。」

「ちょ、なんで裸?!」

「……………あれ、なんとかできるか？」

「……………服、買ってこようか？」

裸でノドカの上に倒れ込むネギと、それをどげようとしているアスナや驚いているハルナ達をみて、ため息をこぼすオレ達だった……………。

第六十八話：シンって、手加減できなさそうだよね。

ワイルド      s i d e

「なるほど。それであんな事になってたのかあ…。」

「ああ。全く面倒くさかったぜ?」

「お疲れさん。」

「おう…。」

…ネギの暴走から数分。

ネギの服をダッシュで買ってきた後、オレはモーラから世界樹の魔力でネギがおかしくなった事を聞いていた。

「本当に、すみません…。」

「こ、これからはちゃんとお願いしますよ?!」

「は、はい!?!」

隣では、涙目のネギをタカネが叱っている。

「…な、お前はこの魔力の暗示平気なのか?」

「ん？ああ、バッチグーだよ。若干ムラツとするだけだし。」

「ならいい。」

…なんでオレはそういうところ信用がないんだろうか…

昔から、テオドラとかセラスとか…オレ、そこまでケダモノじゃないぞ、発情期以外。

アルに本能を抑える帯ももらったし、今のオレはスーパー賢者タイムだ。

「おまえさ…無駄にモテるから嫌なんだよ。」

「…イヤミだろ、それ。」

今まで、彼女の一人も出来ていないオレになにを言うか。

「…ねえ。」

「ん？」

「…本当にワイルド先生なの？」

「ああ。もちろんそうだが？」

「……………顔が違いすぎるー！！！！」

アスナが、なんだかじたばたしている。



「…何でこの子はこんな事になってるんだ？」

「あ、こいつダンディ大好きだから、その顔がストライクなんだろ。」

「…なるほどな。」

確かに、ヒビキさんはダンディ！

「…というか、モーラも止めなよ。」

「ハン。なんであたしがそんなことするんさ？」

「……………生徒がいるから、ちゃんと守ってほしかったんだけどなー。」

…モーラ、自由人だもんなあ…。

「あ…あの…ワイルド先生。」

「ん？」

後ろを振り向くと、そこには申し訳なさそうな顔をしたネギが立っていた。

「す…すいませんでした。」

「はは…なに、気にするなよ少年。間違いは誰にでもある。」

「あ……」

少しだけ嬉しそうな顔をするネギ。

「いい子なんだよな……もう、薬味小僧とは呼ばないでおこうかな。」

「……んじゃ、オレはちょっと行く所あるから。」

「付き合うか？」

「別にいいよ……それじゃね。」

オレはそのまま立ち上がり、こっそりとTRICK VENTの力を使って三人になりつつ、歩いていく……

「え……へええ?!」

後ろで何か驚いた声が聞こえるが……キニシナイ。

一人はサーカス、もう一人は武道会。

もう一人は……

……よし、ド

クタ・フーのDVD見てよう。

ダーレクとかマジかっこいいぜ!

〈2時間後〉

「さあ、やってきたぞ、まほら武道会！」

はい、あっさりと時間がたって今は武道会予選5分前でーす！

分身の一人は、今ザジのサーカスを見て、もう一人の分身は、ドク

ー・フーを見終わって荒川アンダーブリッジを見てるぜ！

二ノさあああつあああんっ！！

ドクタアアアあああ！！

…よしっ、心のシャウト終了！

「さて……暴れるか。」

…と、その前に偽装偽装…。

モブ side

「うっ…うわあああああああ！！！」

俺は、この武道会で腕試しをするつもりでいた…

だが…なんだ、こいつは！？

「本気デ、コイ。」

「こっ…このおおおオオオお！！！！！」

「…遅イ。」

「ギャバアツ?!」

一人、また一人とフードの男によって殴り飛ばされていく…

「次ハ…オ前ガ、コイ。」

そいつは、次に俺を指差しそうやってきた。

「ち…………チツくしよおおおおお!!!!」

俺はそいつに殴りかかる……………けど…。

「…残念ダ。」

「ガッ…………!!」

そいつは、一瞬のうちに俺の背後に回り、俺の首筋にチョップを叩きこむ…………!

「ちく…しよお…!!」

俺は、そのまま意識を手放す…

ワイルド side

「…ナンダカ、オレ、悪役…。」

今現在、俺は激情態になり、認識疎外の魔法がかかったマントを着

て出場している。

…身体能力チートなので、正直いじめをしている気分だ…あ、今田中蹴り飛ばしちゃった。

「……………モウ、イイカ？」

と、そこで周りを見渡す。

今、このブロックで立っているのは……

「あつううう……………!!」

「……………。」

半泣きで、がくがくブルブルと震えている愛衣だけだった。

「……………モウ、手八出サナイゾ。」

「…ほ、本当ですかあ……………?!」

…泣きそうだよ、この子…

「ホントホント。」

コクコクと頷く俺。

「……………ジャ、ソウイウコトデ。」

俺はゆっくりと座り込む。

正直、このブロックでは、俺と愛衣だけが残った様だし…

「……………」。

〔青年休憩中〕

…ちと。

ちよつと終わって、今はトーナメント発表だ。

「……………」フム。」

俺の相手は……………高音らしい。

「フフフ……………正義の魔法使いの力、見せてあげますよ……………?!」

「……………」。

……………痛いカルト信者的な感じだな……………。

「マア……………怪我させナイ様ニスルカ。」

第六十九話：ヌツゲール・ゴットマン。やっぱり脱げたね！

ワイルド      s i d e

さて……………早速、一回戦な訳だが。

……………どうしようか？

相手の……………あれ？名前は……………あ、高音・ゴッドマンだっけ。

あ、この、倒すとなぜか全裸になるからなあ……………マギルテル・マギというより、ヌギステル・マギというか……………。

まあ、手加減するか……………。

「さあ、早速始めました、一回戦！対戦は、華麗な美少女、高音・D・グッドマン選手と、謎のローブ男、ゲンガー選手です！！」

……………え？何でゲンガーだって？

あいや、ポケモンじゃないよ。

……………実は、こっそりとアレを使っただけですよ……………

「フフフ……………この、高音・D・グッドマンがお相手します！そのロブ、脱いだらどうです？！」

よっし、フラグ建った。なら……………

「いいだろっ。。。」

「え？」

《COPY VENT》

《HOLD VENT》

《SPIN VENT》

俺は、そう言っつてローブを外す…

そしてそこにあつたのは！！

「フフフ…。」

「わ…私？」

おおっとー！？これはびっくり、高音選手が二人いるうう？！けれど、装備は違っている！どちらが本物なのかー！？

実況の朝倉も吃驚しているが…演技だろ、それ。

はい、ベルデのコピーベント使いましたよ、ええ。

これで、見た目はそっくり、だけど装備はいろいろと違うドッペルゲンガー大戦！

だから、ドッペル！…ま、強い相手が出たら変身するけどね。



龍騎VSリユウガっぽくていいなあ…あ、武装はベルデとインペラ  
ーので、しかもガゼルスタップはドリルだから…刃物じゃない、セ  
ーフ。

「さあ…やり合いましょうか！」

「くっ…！この私は、偽物などに屈しませんよ…！」

そういうと、高音は影から何かを出し…っておい！？

おおっと、高音選手、影からスタップばい物を出してきたあ？

！

あれは…<sup>スタンド</sup>守嘆<sup>守嘆</sup>！！

知っているのか、豪徳寺。

あれは古代より伝わっている精神と自分の才能が混ざり合って生  
まれて超次元的存在。まさか実在するとは…

はい、解説の豪徳寺さん、茶々丸さん、雷電ごっこありがとうございます  
ございましたー！

…雷電、乙。

まあ、操影術の使い魔はスタンドっばいよなあ。

「行きなさい…！」

「はアツ!！」

高音が影の使い魔を数体俺に襲わせてくるが…正直言って、このくらいだったら、軽い。

「ガアアツ!！」

G Y A …!!

G I U !

B Y A …! ?

「なっ…!! ?」

「…フン。」

一体はバイオウィンダーで頭を潰し、もう一体はガゼルスタップで胸を貫く。

最後の一体は首を両足で挟んでゴキリと折って潰した。

この間、わずか2秒!!チート身体能力、便利!!

……… スカートめくれて、パンツも見えただろうけど…そこらへん、コピーベントでコピーしてんのかな?

おおっと…!武装高音選手、一瞬で三体のスタン を倒してしまつたあ!強い、強いぞオ!!



「うん……………」

「……………あっちゃ……………」

……………うん。高音の服……………影で出来てるから、こいつが気絶すると……………マッパになるんだった。

俺は……………コピーだからセーフだったけど。

……………。

うわー。朝倉と真名の視線を感じる……………あれ、茶々丸の視線も感じる。

「……………」

と、とりあえず俺が来ていたローブをかけてやり、そのまま担ぎあげる。

ついでに、朝倉にアイコンタクトで「もう終わった」と伝える。

……………っと。勝者、ゲンガー選手！見事な格闘技で、高音選手を圧倒しましたあ！！

ワアアアアアアアアアアアアアアアアアア！！！！！！

「……………ガウ。」

俺は、聞こえる歓声に振り返らずサムズアップをし……………そのまま、歩

いていく。

……… パラダイス・ロスト思い出したなあ……

さて次は…ネギとだ。

頑張るかあ……。

第七十話：タカミチ、かっこいいなあ。

ワイルド      side

さて…俺の試合は終わったので、次はネギの試合だ。

鬼の技術もあるし…だいぶ強化されてるだろうから、なんとかかなるよな。

真名の試合も滞りなく終わったし…お見舞いに行ったらなんだか嬉しそうだったが。

……………Mじゃないよね？

アルの試合も見た。……………名前が、南信彦って名前だったけど…チートだったりするのか？アルよ。

お待たせしました！！只今より、一回戦・第六試合！！たった一人で幾多の抗争やバカ騒ぎを鎮圧し、不良達から恐れられ付けられたアダ名は『デスマガネ死の眼鏡』！！タカミチ・T・高畑！！

と、そこで朝倉が実況を始める。

対するは、見た目に騙されたら敗退確定！昨年度から麻帆中に赴任してきた噂の子供先生、ネギ・スプリングフィールド！！教え子達のみならず、お姉さんまで応援に駆けつけているぞ！！ -

「マナ、来た。」

「…フン、ぼーやはどれだけできるのか…楽しみだな。」

俺が観客席でポップコーンをモシモシと喰らっていると、その隣のエヴァが近づいてきて座る。

「…エヴァ、なんで、こっち来る?」

「なんだ、お前は不満か?」

「なんか、いろいろ、言われそう。」

うん、これ本心。なんだか、年取った人って説教多いじゃん?だからねえ…。

「ケケケ、ゴ主人モモウ年寄りダカラナ。」

と、そこで隣にいたチャチャゼロも茶々をいれてくる。

……………あ、ダジャレだな、これ。

「ネギ、強いから、大丈夫。」

「クク…タカミチも強いぞ?それでもぼーやが勝つと思うか?」

「ガウ、大丈夫。」

……………ま、なんとかなるだろう…頑張れよ、ネギ。

ネギ      side

ついにボクの試合が始まる。

そして舞台へ向かう中、ボクとタカミチの反応は別だった。

「ハハハ…盛り上がってるねえ。」

「う、うん…。」

周りの歓声に苦笑するタカミチとは対照的に、コチコチに固まりながら歩くボク。

解説者には、予選の最後にボクと戦った豪徳寺さんと解説者の茶々丸さんがボクの事をスピーチしている。

いたサポート役のカモ君も、ボクがこの武道会では助けは要らないと言ったので刹那さんの頭の上に乗っている。

「さあ、やろつか？ネギ君」

「……………うん…！」

ボクが深呼吸していると、タカミチが気迫と威圧を込めて問いかけてくる。

Ready……Fight…!!



そして朝倉さんの宣言により、第六試合が始まった。

「『カントゥス・ベラーグス  
戦いの歌!!』」

昨日、別荘でマスター師匠からはボクはワイルド先生や、モーラお姉ちゃん  
の様な戦い方は向いてないと言われた…けどつい先ほど小太郎君か  
らタカミチ対策のアドバイスをもらった。

元々勝てる見込みはほとんどない。だったら、初めから全力で掛か  
るだけだ!!

「おおっ…!!」

小太郎君から言われたとおり、手前で『デフレクシオ風楯』を出して顎をガード  
しつつ瞬動で突っ込む。

タカミチのポケットに手を入れているが、居合いのように一瞬で繰  
り出される拳圧をガードし後ろを取る事が出来る!

「ハアアアッ!!」

「…シッ!」

魔法とモーラお姉ちゃんから学んだ鬼の技術、それを交えながら離  
れず確実に追い込む。

「雷華鬼拳!!」

「ッ………!!」

そこへ、ボクのオリジナル技…『雷の矢』三発分を収束に全力を込め、さらに鬼鬪術の雷撃拳を混ぜ合わせた最大の技を叩きこむ！！  
そして、その技を喰らったタカミチは、腕をクロスした体制のまま、後ろに吹っ飛んでいく。

「ハアツ…！ハアツ…！！」

タカミチが場外に飛ばされたので朝倉さんがカウントをとる中、ボクは息を整えようとしていた。

離れずに常に全力で動き回り、さらに先程の技の使用で体力が著しく減り身体の負担も多い。

ボクはタカミチを吹き飛ばし煙に包まれた箇所を見据えて構える。

隙を突いたつもりでも、二本レジストされてしまった。

もし、三本全て当たったとしても………倒せるかどうかは難しい。

そうボクが思った時…煙の向こうに、人影が見えた。

タカミチ      s i d e

…おおーつと！?!高畑選手、無事です！

「ふむ…すごいよ、ネギ君。」

僕は、朝倉君の実況を聞きながら、素直にそう感心する。

僕にとってはこの程度など『仕事』では日常茶飯事。

全くノーダメージというわけではないが、余裕で水面の上に立てるほどだ。

「いや、本当に素晴らしいよ。正直言って、ここまでとは思わなかった。」

そう言って、ボクはポケットから手を出し、音叉を取り出す。

「僕もまだ見る目が甘いな。でも……」

「ッ……！」

と、そこでその言葉を遮るかのように、ネギ君は再び距離を詰めようと飛び掛る。

その一瞬でも、僕にとっては十分。ネギ君へジャンプしお互いにつかり合う。

それだけを見れば、ネギ君の狙い通りだろう。しかし……

「クッ……！」

さらに僕のスピードが上がり、弾き飛ばされては数と勢が増えた拳弾で防ぐ事すらも危うくなっている。

ネギ君は瞬動で対応しようにも直進でしか移動できない弱点を付かれ、しかも僕自身も使えるのではや意味が無い。

追い込まれる彼の姿に明日菜君達は状況を整理しつつ見守り、宮崎さんは腕を組んでただ祈るのが見える。

「ッ……!!ハッ……!ハッ……!!」

以前のワイルドさんから聞いた試験のような抜け道などあるはずもなく、手詰まりに焦っているのが分かる。

「…ネギ君、君は本当に強くなった。君の成長速度、その気迫に決して諦めない心。」

そんなネギ君に語りかけながら、僕は手に取っていた音叉を鳴らす。

「本当に僕もヤキが回ったかもしれない。君はもう、立派に一人前の『男の子』だ。後は経験を積み、『子』も取れるだろう。教えて言わせてもらおうよ。さすが僕が憧れたナギの息子だ。」

「タカミチ……!!」

話を聞きながら、しっかりと息を整えるネギ君を見ながら、僕は続ける。

「さっきの技もナギの仲間の一人…僕の師匠にあたる人から学んだ技なんだ。ホラ、詠春さんからもらった写真の右端にいる人さ。」

「父さんの仲間……」

この時、僕はもう戻らない時間を複雑な感情で思い出していた。

「良い人だったよ。…っと。話が逸れたね。だからこそ、僕も本当の本気を少しだけ見せよう。男同士の戦いはそうでないと失礼だからね」

そう言うと、僕は鳴らした音叉を額の前に持っていき…そして、その四肢が青い炎に包まれる。

「ッ?!」

ネギ君も驚いているようだ。観客席にいるだろうワイルドさんも少しは驚いているかな？

長年、ワイルドさんと会っていない間ずっと修行してきた。

独学だったからか、まだ完全ではないけれど…今は、それでもいい。

「これが…今の僕の力さ。ちゃんと相手してあげるよ、ネギ君。一人の男としてね？」

…炎が収まると、ボクの腕と脚はまるで鎧の様に変化している。

…鬼への部分変身…それが、今の僕の力だ。

第七十一話：一部だけ変身できるって、逆にカッコよくない？

ワイルド           side

「…ガウ。」

……………タカミチ、変身できたんだ…四肢だけだけ。

「おい！！貴様、タカミチのあれはどういうことだ!？」

と、そこでエヴァがオレに掴みかかって聞いてくる…痛い。

「オレ、あれ、知らない。多分、タカミチ、頑張った。」

「…あれは、独学で出来るものなのか？」

「確か、出来た。」

元々、鬼の修行って言うのは人がものすごい勢いで自分を苛めぬけば仮面ライダーになれる…って言うある意味男の子にとっては夢の仮面ライダーだからなあ…。

まあ、戦国時代にすら変身できる技術があるくらいだし…今の技術で、しかも魔法や気の力もあればなんとかなるだろ、うん。

けど……

「…なんで、腕と足だけ、変身する？」

「私を知るかつ！」

エヴァの言うことは正論…うん、なんであんなった？

「…ナアワイルド。」

「ガウ？」

と、そこでチャチャゼロがいきなり声をかけてくる。

「アノ鬼ノカツテノ八魔力トカ気トカニ八関係アンノカ？」

「ガウ…確か、少し関係、あつた。」

俺の切り札…と言うより、奥の手であるギガガギやガギガ、ギガガギガとかは鬼の力と魔皇力で始めてできる奴だし…

面倒くさいし、整理すると鬼の力⇨異質で独自の気の力…で、魔皇力⇨魔力+闇と夜の力…みたいなもんだからあ。

「ケケケ、ダツタラ話八簡単ダナ…」

「…フン、そう言う事か。」

「ガウ？」

……なんか、エヴァとチャチャゼロは分かっているみたいだけど…俺、何も分からない。

「…つまり、だ。タカミチは魔法こそ使えないが、感卦法によって魔皇力と鬼の力は使える。」

「ソレデ、イツモ感卦法デ使イ慣レテイル両手足ガ特ニ反応シテ、アアナツタンダロ。」

「……………ガウ。」

…なるほど。そう言う事なら納得はいく…。

「手足、力慣れてたから、ああなった？」

「多分そう言うことだろうな。全くお前の力は訳が分からんな…。」

「…ガウウ。」

……………とりあえず納得できた。まあ、それより今思ったのは…。

「…今度、全身変身できる様に、鍛える…ガウ。」

「……………それがいいだろうな。」

エヴァの別荘借りるか。タカミチの名前は…ケンキ拳鬼で。

ネギ      s i d e

慌てて距離をとり油断せず構えるボクにタカミチは満足げに頷く。



そして、タカミチはそれぞれの掌に精神を集中させる。

「左手に魔力、右手に気…そして、両腕に鬼の力を…。」

「…な…何あれ…?」

宣言どおりタカミチの右手には気、左手には魔力が、そして両腕には鬼の力が集まる。

その鬼の力は、春鬼でもあるネギにとつては、身近な物ではあったが…比べ物にならないほどの力だった。

タカミチがなにをしようとしているのか…その答えはすぐには分る。

「…合成!」

「うわっ!?!」

その両手を胸の前にあわせ、彼の周りから風圧や衝撃が生まれる。

その両腕は、不規則にまるでマグマの様に…フツフツと紅色に光ったり、元の鉛色になったりしている。

「一撃目はサービスだよ、ネギ君。避けてくれ…」

「ッ!」

背筋に直接冷水を流し込まれた様な確かな悪寒を感じたボクは、言

われるまでもなく回避行動を取る。

そして、とっさに音叉を懐から取り出し、鳴らす。そのまま鳴らした音叉を額に持っていき…春鬼へ変身する。

だからこそ、タカミチは溜められた力を叩き付ける。

……DOOOOON!!!!!!

「……クッ！」

タカミチがその手を振り下ろすと、強力な…いや、圧倒的なまでの力が先程までボクがいた箇所を石畳ごと破壊する。

ギリギリ避けることが出来たボクや、周りの観客は余りな威力に言葉も出さず静まる。

夕映 side

「あれが気と魔力の混合の力…発想としては単純ですが、確かにあの制御はぶつつけ本番では無理ですね。」

「…あの時の俺はバカを言ったんだなあ…」

「アレをどうにかしないと、ネギ坊主に勝ち目は無いアル。このままじゃ…」

「…まだや!!あの技は威力がデカイ分、隙も大きい!!予備動作が丸分かりやし、接近戦では使えん!!」

観客席では、私や小太郎さん達がネギ先生の戦いを見て話している。

「しかも、観客を気にして常に打ち下ろしてる！！少なくともさっきまでの拳打より避けやすいから、むしろチャンスや！！」

いまのネギ先生は、鬼への変身以外にも魔法と組み合わせた必殺技があるようだ。

「でも…タカミチ先生もお馬鹿さんじゃありませんし、先程の見えないパンチを併用して、その弱点を消していると思いますよ？」

「ネギ……！！」

私以外にも、桜咲さんが技の原理とコントロールの難しさに気付き、オコジヨも京都の一件で提案した案が無謀だったと思い知らされた。

古菲さんはこのままでは一方的な展開となると懸念し、小太郎さんも希望を見出すがさよさんに駄目だしされる。

明日菜さんは……は避けるというより、高畑先生の攻撃から逃げ戸惑うネギ先生の姿を見てられない様です。

ネギ      s i d e

「ゲホツ！！ハアツ…ハアツ…！！」

「常に動き回り、カスリこそすれ直撃は避け続ける…か。さらに君が使える風障壁なら防ぐ事も出来るが、一瞬しか効果はなく立ち止

まってしまうデメリットも理解してる。」

春鬼に変身しても、タカミチの圧倒的な力に、ボクは防御して逃げ回ることしかできなかった…。

「僕も瞬動を使えることを見越しての行動だが、それじゃあギリ貧。今だって蹲る君を攻撃して終わりだよ？」

「ハア…ハア…!!」

『風花・風障壁』では防ぐ事は出来ても立ち止まってしまう欠点を、エヴァからの当初の修行で痛感していた。

今のボクには、簡易な『デフレクショ風楯』で刹那の時間で避けるのが精一杯。

限界以上に動き回り、ネギは両肘両膝を床に付け咽ている。

その隙だらけのボクだったけど…そこで、タカミチは攻撃を中止し問いかける。

「君の覚悟、想いはそんなものかい？」

「…ううん、そんなことはないよ。ボクは誓ったんだ。アスナさん達を守る力を付けて立派な魔法使いになるって。この誓いは、例えタカミチでも破らせない!!」

タカミチの問いにボクは再び立ち上がり宣言する。

「…ネギ君、君は本当に強くなった。僕がまだできていない、鬼への完全変身ができる…でも意気込むのは良いけど、今のままでは勝

てないよ?」

「分かってる。だからこそ、そろそろ決着を付けたいんだ。」

「ほう…?それじゃ、受けて立とうじゃないか。」

……よし!

僕は、心の中でそう呟き…予想通り、ボクが勝負に出たことにタカミチも了承する。

しかし、その返答こそボクが予想し望んでいたもの。

多分、この戦いはタカミチにとってはボクの腕試しに近く、ある意味ワイルド先生の試験と似ていると気付いた。

ならば、状況を利用するのみにと、ボクは……賭けに出る。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n4260m/>

---

魔法先生ネギま！ ～野生の力を持つ仮面の戦士～

2010年11月24日22時03分発行